図書室クラブ！

ヒカルーム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

図書室クラブ！

【Ｎコード】

Ｎ７３３１Ｖ

【作者名】

ヒカルーム

【あらすじ】

『図書室クラブ』、それは学校から認可を受けていない、『存在しないはず』のクラブである。杉下　桂、斎藤　一輝、山本　沙羅、高坂　美優の四名で構成されたそのクラブの活動内容とは、ただ集まって本を読み、お喋りをするだけ。今日もただ集まって本を読む、それだけのはずだったのだが……。桂のことなどお構いなしについに迎えた文化際当日。ただでさえ面倒臭いことは嫌いなのにひょんなことから話はまたまたおかしな方向へ。だらけることは許されない！　図書室クラブの明日はどこだ！

プロローグ

ジリリリリリリ――！！

「もう朝か……」

目蓋が重い……。気がつくとカーテンの外は、もう明るくなっている。

「あーもう、さっきからジリジリうるさいんだよ！」

――ガツン！

未だに鳴り続けている目覚まし時計に、起こされた恨みとまた新たに始まる今日への憂鬱感を思いきりぶつけてやったＰＭ８：００過ぎ。昔から変わらない殺風景な部屋には自分の趣味で集めた大量の本が積まれたりして雑に置かれている。起きるまでは辛いが、起きてしまえば楽なものだ。

「ち……っ！　そろそろ起きないと遅刻しちまうな……」

窓際に引っかかっている制服にさっと腕を通し準備を整え、部屋のドアを開け一階のリビングへと降りていく。

「あら？　もう起きたの？」

台所では我が母がゆったりとご飯を作っている。焦る様子が全く見られないのはいつものことである。

「もうって……もう八時だよ、むしろ遅いからね」

「あらあら、そんな時間だったの？　母さんまだ七時ぐらいだと思ってたわ。」

「そうですか……とりあえずもうそろそろ行かないと遅刻しちゃうし、まだご飯も完成しないっぽいんで、これ持ってくよ」

テーブルの上に唯一置いてあるパンを取り玄関へと向かう。我が家は、朝はパン派なのでこのような時はとても便利なのである。俺は味のしないパンを齧りながらいつものように家を出た。

学校は、歩きでざっと二十分ほどで着くなんとも良いのか悪いのか分からない位置にある。しかし、昔このことをある友人に言う

と、
「はぁー？　歩きで二十分だと！？　楽じゃねぇか！　俺なんてなぁー自転車でなぁー……」
と、しばらくの距離で愚痴が続いてしまうので条件はなかなか良いのだろう。
俺が住んでいるこの町、セントラルシティーはなかなか都会らしいところである。建物もそのほとんどが、新しく出来たものばかりで交通の便がとても良く、町の中にはコンビニや遊べるような施設が沢山ある。しかしセントラルシティーも開発が始まったばかりでまだまだ田舎っぽいところもあるのだ。そんなこんなで一人トボトボ歩いていたらもう直ぐ学校につく距離に来ていた。
「うむ……」
腕に付けたデジタル腕時計を見る。ちなみにうちの学校は八時三十五分からホームルームである。
「八時二十五分……よし、余裕だな」
そうして腕時計を確認しながら校門の前に来た時、奴に会った。栗毛に長めの髪、整った顔つき、スラリとして背の高めで白い制服が良く似合う一般的に美少女で言われるで、あろう彼女――。しばらく、お互い無言でいたが、耐え切れなくなったかのように少女が口を開いた。
「何よ、無言で人の顔見てボォーと見ちゃって。おはよう、の一言くらいにあっても良いんじゃない？」
少女は明らかに不機嫌な様子だった。ここは普通に通ろう、うん。
「やぁおはよう！　山本沙羅さん！　今日もいい天気ですね！それじゃ！」
なるべく爽やかに通り過ぎてみる。しかし彼女は俺の後にぴったりとくっついてきた。これは誤算だ……。
「おはよう、ちゃんと言えるじゃない。でも何でフルネームなのよ？」

「いや、何となくとしか言えないな……」
「まぁ、別に良いわ。しかし桂、アンタ相変わらず登校するの、遅いわねー」
ハァーとか呆れた感じを出しながらそんな事を言っていた。しかしだ、この発言には異議がある。
「アレ？　そうは言っても沙羅だって今居るんだから十分遅いと思うけど？」
フッと今度は少しバカにした感を出しながら言ってみる。バカにしたのに気付いたのか沙羅は強めに言ってきた。
「何よ、桂みたいにいつもじゃないわよ。今日だって少し髪の手入れに手間取っただけよ、アンタなんかと一緒にしないでほしいわ！」
「はいはい、そうですか……っと」
これ以上言ったら本当に怒りそうなのでこの辺で止めておこう。
「ちょっと、何なのそのやる気の無さは！」
この返事に不満を持ったのか沙羅は食い下がったが放置！　俺は学校に入っていく。隣でブツブツ言う沙羅を適当にあしらいながら進んでいく。そうやって学校に入り廊下を進んで行くと、沙羅が外を指差して言った。
「あ、アレってカッちゃんじゃない？」
さっきまで俺と沙羅がいた所に見覚えのある長身の短髪眼鏡の男が必死になり自転車をこいでいるのが見えていた。奴の名前は斉藤一輝……。よく“かずき”と間違われがちだが“いつき”と言うのが正しい呼び名だ。しかし沙羅は間違えて覚え、“かずき”から取ったカッちゃんと呼んでいる。ちなみに俺たち三人は昔からの馴染みで今でも良く遊ぶ仲である。
チラリと腕時計を見る。時刻は現在八時三十三分――。どう考えても間に合いそうにはない。
「俺達は間に合うだろうがアイツは遅刻だなー」
「いくら速くてもあそこからは無理だろうね……」

二人で哀れな斉藤に合掌をしておいた。
「さて行こうか」
「えぇ、そうね」
このままでは俺達も斉藤と同じになりかねないので急ぐとしよう。許せ、斉藤……。
教室に入り席に着くと同時にチャイムと担任が入って来た。斉藤と沙羅とはクラスメイトであり、斉藤はこの時点で終わっている事が確定していたりする。四分ほど経った後に来た斉藤はしっかり遅刻となり担任に怒られクラスに笑われていた。
半分の授業が過ぎ昼休みになり、俺は購買で買ったパンをかじり教室で沙羅、斉藤と話をしていた。ちなみに退屈な授業は大抵寝ていたか大好きな読書でやり過ごしてやった。
「なぁーおかしいと思わないか？」
そんな事を突然斉藤が言い出した。しかし話の内容は想像が付くので俺は即座に言い捨てる。
「思わない」
「おいおい、まだ何も言って無いだろ？」
斉藤が続けようとしてくる。しかし毎日のように言われている事だ。言われなくても分かってしまう。
「何で俺の家はセンターシティーのど田舎で学校がこんなに遠いんだ……でしょ？」
俺が言いたい事を沙羅が言ってくれた。更に続けて呆れたように、
「もうそれ、何回も聞いたよ？　カッちゃんそろそろ諦めたら？」
「だな。聞き飽きましたよ、斉藤君」
俺は沙羅の言葉に上乗せしておく。
「でもさぁー……」
納得行かない様子の斉藤を沙羅と二人でしばらくいじった後、今度は沙羅が話し出した。
「ところで、二人とも今日は終わった後は暇なの？」

おっと、これも分かるぞ。こちらも俺たちにとっては日課のようなものだ。
「うむ、俺は今日は暇だな。行くのか？」
沙羅に聞き返す。すると沙羅はウインクしながら答えた。
「うん、私も暇なんで行こうかと思うの。カッちゃんは？」
沙羅が机にうつ伏せに落ち込む斉藤に尋ねる。やつはそのままの体勢で答えた。
「うーん、行こうかなぁー……って、俺らは何時でも暇だろ？」
そう言って動かなくなった。いつになったらこいつは諦めるのだろうか。
「じゃあ決まりね！　放課後忘れずに来るのよ？」
沙羅が言い終わると同時にチャイムが鳴り、休み時間の終わりを告げた。たった今まで死んでいた斉藤がゾンビのように起き上がり俺に言う。
「今日も楽しみだな、ケイ……」
「だと、いいんだけどねえ……」
俺はいつまでも寝ている斉藤を追っ払いつつ、あの名前を思い出していた。
“図書室クラブ”――。
今日もまた、忘れられない時間が始まろうとしていた。

ガンジーと掃除用具入れ（1）

この学校は学生棟と職員棟に分かれていて図書室は職員棟にある。もちろん俺達が普段居るのは学生棟である。今俺は、山本沙羅、斉藤一輝と共に学生棟と職員棟を繋ぎ図書室へと続く渡り廊下を歩いている。沙羅と斉藤は飽きもせずお喋りを続けていた。

俺達の通う学校には普通の学校よりも部活動が多く、野球部、サッカー部、美術部、吹奏楽部などポピュラーなものを始めとしてサイクリング部、将棋部、ＵＭＡ研究部等……。だが、しかし！この学校のどこをいくら探そうとも図書室クラブなんて言う何の活動をするのか全く分からないクラブなんて見つけることは不可能だろう。そもそも図書室クラブなんて物は存在しないのだ。大体、部ではなくクラブなのだ！　クラブなんてものが成立するのは精々小学校くらいまでだろう。

学校に登録もされていない、知っている人間も皆無に等しい正体不明の謎のクラブ――図書室クラブ。その実態は会員俺こと杉下桂。自称図書クラブのアイドル件会長、山本沙羅。図書室クラブの雑用件いじられ役、斉藤一輝の合計三名で構成される、図書室と読書をこよなく愛する暇人共が放課後集まり読書したり図書室の平和を護ったりするヘンテコクラブなのである。

「ちよっと、桂！　聞いてるの！？　それとも私なんかとは話も出来ない、と言う無言の抵抗かしら？」

「ダメだよ沙羅、ケイ完全に放心してるよ」

むっ……周りから何か聞こえるような……。

「ちっ、こうなったらー！」

右を見ればやけにニヤけた気持ち悪い斉藤の顔があった。その直後に頭が左に傾き左耳に激痛が……！？

「痛ってぇぇぇぇー！」

一瞬何が起きているのか分からなかった。
「あら？　やっと気付いたのね、てっきり死んでいるのかと思ってしまったわ」
顔が完全に笑っている。しかもまだ俺の耳を掴んだ手を離していない。
「気付いてる、気付いてる！　気付いてるから止めてくれ！　耳が千切れるから！」
俺の必死の願いに沙羅の手は三秒ほど後に離してもらうことが出来た。
「全く何なんだよ……沙羅は突然」
俺は沙羅に引っ張られ赤くなった耳を押さえながら先ほどからの疑問を訊ねる。
「で、俺に何の用なんだよ？」
少し不機嫌そうな沙羅に尋ねる。コイツは何時も呆れているか不機嫌そうだ。
「さっきからカッちゃんと話してるじゃない、この間二人に貸した本の感想聞いてんのよ」
そんな話していたのだろうか……全く気付かなかった様だ。
「あぁーアレねーうーん……面白かったよ」
実際は俺の趣味ではないジャンルなので適当にパラパラと読んで余り物語を記憶していないというのが本当の所であったのだった。その事には長年の付き合いである沙羅は気付かれており……。
「やっぱり桂は読んでないか……」
と、呆れている。
「いや、一応一通り読んだのだが……」
読んでいないと言うのは少しシャクに触るので言い返してみるが……。
「ストーリーを少しも覚えていないようじゃ一応でも読んだとは言えないわ」
と、あっけ無く撃沈。さらに。

「カッちゃんはちゃんと読んでくれたのにねー」
と、追い込みを賭けてくる。
「うっ！」
俺が斉藤以下だと……そんな事あって良いのか？
「おいケイ、今俺の事バカにしただろ？」
斉藤が俺の心を読んで何かほざいているのだがどうでも良い事だ。
「沙羅……」
俺の多少真剣に言おうと思ったのが沙羅に伝わったらしく。
「何かしら？　桂君、カッちゃん以下がやっぱり嫌なのかしら？」
君付けで呼び、俺の心を読んできた。
「あぁ、今度あの本もう一度読み直してくるよ！」
力強く言い放つ。
「えぇ、良い努力ね」
沙羅も笑っている。
「おい、二人とも俺の事見下しすぎだろ……」
向かい合う俺と沙羅の遥か後方で斉藤の悲しげな声が鳴り響いていた。
そんなこんなで三人でガヤガヤ歩いているうちに図書室へと着いていた。
「失礼しますと」
恐らく誰も聞いていないであろう入室の挨拶を終え沙羅に続き斉藤、俺と入室して行く。俺達の学校の図書室は流石に新しい学校で図書室もかなり広く、大量の書物に加え調べ物用のパソコンなどによりかなりの快適空間となっているのだ。俺としても嬉しい限りである。しかしそんな素敵空間である図書室には、ほとんど人影は無くチラホラと勉強する生徒や調べ物をする生徒がほんの数人居るだけである。それは俺達にとって嬉しい事である。人が居すぎる図書室なら俺達は、来なかっただろうしこのクラブも本当に存在しなかっただろう。

「アレ？　先生居ないな……」
普段なら係員の机であるカウンターに座っているで、あろうはずの図書室の先生を見つける事が出来ない斉藤がそんな事を呟いていて、そんな斉藤に沙羅が。
「まぁ、ここに居ないならどうせあそこでしょ」
と、言う沙羅に続き俺も。
「どうせね、いつものしてんだろうよ」
と、言っておいた。この図書室にはカウンターの横にも本棚が有るのだがその後ろには壁は無く、申し訳無さそうに薄汚れた扉が有るのだが、その扉がこの図書室の管理人室なのである。
「先生入りますよ」
別に合う必要は無いのだが沙羅は管理人室の扉を開けて行くので続いて入って行く事にした。
管理人室には読まれなくなった古い本や今度図書室に新たに入ってくる真新しい本達、他にも管理人専用の作業机などが置かれている物であり図書室の為の部屋であり決して私物を持ちこんで良い所ではないはずであるのだが、この図書室は少し、いや、かなりおかしな事に、なっている……。まず扉を開けた瞬間に気付くのが煙である。煙……煙の正体は煙草であり、煙草の煙が鼻に付き、次に管理人机の上に山のように積み上げられた煙草の吸殻が目に信じられない驚きと共に入ってくるであろう。次に部屋の奥に数本転がる空き缶にノンアルコールビールの文字に気付いたらその人は絶望に打ちのめされるだろう。そんな大人な異空間に成り下がった部屋にはこの部屋を生んだ魔王が居た……髪は綺麗な黒髪で長さは肩に少しかかる長さのセミロングで整った横顔からはスタイリッシュな眼鏡をかけ一応スーツを着た背の高めな女性が机の椅子に座り現在進行形で、煙草を吹かしていた。
「先生……またですか？　いい加減この部屋勝手に使うの、止めたらどうですか？」
と、椅子に踏ん反り返る女性に返事が分かりきっている質問を

してみる俺。
「なーに、別に私以外使わないんだし良いだろって、またお前らか。ここは管理人である私の部屋だぞ？　お前らこそ一般生徒のなんだから入って来てもらっては困るな。大体杉下は一々うるさいんだよ」
と、なんともふざけた事を言っているこの女性こそこの学校の図書室の管理人の星野麗子さんである。
「何言ってるんですか先生？　私達は一般生徒ではなく図書室クラブですよ？　図書室クラブは図書室の平和を護るのも仕事なんですから、汚れている管理人室を綺麗にしようとするのは当たり前ですよ」
俺の横に居て先ほど机の上の煙草の吸殻を捨て終えた沙羅が真顔でそんな先生にも負けない素っ頓狂な事を言った。
「おいおい、毎度言うがそんなクラブは無いんだぞ？　てっ、聞いてないな、山本さん杉下君よ……」
確かに俺も沙羅もそんな事聞いてはおらず二人で黙々と掃除を始める。
「あれ？　杉下、斉藤はどうした？　一緒じゃないのか？　それともついに外したか？」
ふとそんな事に気付いたのか今も煙草を吹かすだけで何もしていない星野先生が俺に聞いてきたが俺が答える前に沙羅が……
「そんな訳無いじゃないですか先生、カッちゃんは煙草ダメなんですよ。今まで気付きませんでした？　大体カッちゃんは大切なクラブの仲間なんですから外す訳無いんですからね？　変な事言ってると怒っちゃいまよ？」
と、奴が聞いたら号泣して喜びそうな台詞を吐いていたが、こんな台詞は斉藤本人の前では絶対聞けないだろうな。斉藤は昔から煙草などの匂いに敏感でこの部屋には余り入りたがらないため俺らがこうしている間は外に避難してある新しい本の整理やカウンター受付などの作業をしているのだ。これも奴が雑用とされる由縁であ

る。
「まぁ、ざっとこんなもんねー」
と、手をパンパンと叩き満足げな沙羅。
「うーん、まだまだな気もするがこの位で良いかな」
と、まだまだ行けそうな気がする俺。
「やはり綺麗になるのは良い事だな、二人ともお疲れ」
と、結局何一つ仕事をしなかった星野先生。
「ちょっと、先生何掃除した瞬間から汚してるんですか？」
俺と沙羅が掃除し終えた傍から汚しに入る星野先生に突っ込む。
「良いじゃないか汚れたってまた不思議と綺麗になるんだから」
と、先生はすっ呆けた声でふざけた台詞を吐いた。
「全然ちっとも不思議じゃありません！　せっかく掃除した部屋なんだから少しの間くらい大切に使って下さいよ！」
と、結果は分かっているのだが諦められない俺。
「全く感謝されて無いわね……」
先生の言葉に残念がる沙羅。
「いや、感謝ならしているさ」
なんて突然言い出す星野先生に。
「本当ですかそれ？」
と、バリバリ怪しがる沙羅に対して。
「あぁ、私だって汚い部屋は嫌だからな、君たちが掃除してくれて助かるんだよ、今まで自分でやっていたから面倒だったが、君たちのおかげで心置きなく使えるよ」
そう言いながら微笑む魔王に。
「確信犯ですか！？　この野郎！」
俺は全力で突っ込んだ。確かにこの部屋の汚れ具合に気付き掃除を始めた頃より汚れは回を増すごとに増していた。
「あ……」
可愛そうに沙羅は言葉を無くしている様子……
「ハッハッハ！　まぁこれからもよろしく頼むよ、少年少女達よ」

俺はこの高らかで透き通る声を聞きながらあぁ、もうダメなんだな……俺はそう心の中で覚悟を決めたのだった。その後もガヤガヤと文句を言ったり、スルスル逃げ回ったりしたのだった。

「さて、掃除も終わりましたし出ましょうか？」

口論も大分落ち着き疲れた俺が提案してみる。

「えぇ、賛成よ、こんな部屋早く出ましょう」

沙羅はそんな風に同意してくれたが星野先生は……

「私はもう一本ほど煙草吸ったら行くよ」

何て言うのだがこの人をこの部屋で一人にしてはいけないのだ。

「何言ってるんですか？　先生も直ぐ出るんですよ」

俺が扉を開き。

「さぁ、出ましょうね、先生！」

沙羅が煙草とライターを奪い星野先生を外に押し出す。

「ちっょ……山本！？　煙草返しなさい！　押すなよ！」

「返しません。さぁ、出ますよ」

沙羅の勝ち。しぶしぶと煙草を諦め沙羅に大人しく外に出される落ち込んだ様子の魔王、これで少しは治まると良いのだが……いや、治らないだろうな……

「あっ……忘れてた……」

外に出ると目の前のカウンターに座り黙々と本来星野先生がやるべき仕事なのだがサボって溜まっていた仕事を悲しげな顔でしていた。

「よ　よう、お疲れ様斉藤君」

若干引き気味な俺。

「頑張ってるわね、カッちゃん！」

明るい口調の沙羅だが口が引きつっている様子が横目で伺える

「おぉー偉いな、斉藤」

斉藤の仕事振りを見て感心する星野先生。しかし悲しげな斉藤には気付いていないようだ。

「良いよなーお前らは皆でワイワイ楽しそうにしてさ、俺なんか

一人でずっと事務なのにさ……羨ましいよなー皆俺の事なんて居ないかのような感じで……」
斉藤の呟きは放課後の夕日に染まる綺麗な図書室に一つ寂しく吸い込まれていった。

さて、掃除も終わり斉藤もある程度慰めたのでいよいよ図書室クラブの活動開始である。いや、管理人室の掃除も活動に入るのだがあっちはサブ活動的なものでありメインの活動ではないのだ。図書室クラブの本来の活動は図書室で自分達各々が好きな本を読み時には感想を言い合ったりするのんびりとしたクラブである。時には掃除も……他にも図書室の平和を護るなんて活動もあるのだが、今のところ管理人室の掃除位であまり動いていない。
そんなのんびりとしたクラブなのでとても地味である。実際に活動しているところを見たら、単なる読書好きが集まって話しているだけにしか見えないだろうな。そんな地味幽霊クラブはまたいつものように地味に活動していた。
「ねぇカッちゃん、その本面白いの？　神宮寺の新作で新しいジャンルに挑戦してる奴だって聞いたんだけどどうなのよ？」
「うーん、まだ始まったところだから分んないけど面白いかなぁー。沙羅気になるの？」
「そうね、前読んだのが面白かったのよねー。もう少し情報が欲しいかも……」
「そう言えばケイも読んでなかった？」
「ケイ、おーい」
また何か聞こえる。
「またかよ……ちょっとケイ！」
呼ばれたような……。
「ん？　俺か？　何かしたか？」
呼ばれた事に気付きとっさに聞き返す。
「本当に聞いていないのね」

また沙羅が呆れて居るがどうやら斉藤と沙羅が何か話していた模様。聞いていなかった……最近疲れているのか？

「他に誰が居るのよ」

さらに沙羅の追撃。

「桂、この本前読んでたの？　面白かったの？」

目の前に沙羅が見覚えのある本を突き出している。どうやら感想を聞かれているようだ。

「うん、俺は嫌いじゃないよ、そこそこ面白かったしね。だけどまだ変なとこがあるかも。まぁ、このジャンルは初めてだから仕方ない気もするけどね」

俺は淡々と素直に読んだ感想を言ってみた。しかし沙羅、斉藤は共にしんっとしている、何か変な事言ったか？

「すごい、桂がきちんと感想言ってるかも……」

何故か感心する沙羅。

「やっぱり興味が有ると違うのかねぇー」

何故か考え込む斉藤。

俺がしっかりした感想を言うがそんなに珍しいのか？　ん？何か違和感が……。自分がいつも真面目に感想を言わないと認めた気が……。

その後、各自自分の読書に戻って行きそのまま時間が近づきそろそろ終わるって時に斉藤が沙羅に例の本を渡していた。

「はい、沙羅読みたかったら読んで良いよ。俺まだ読まなきゃいけない本あるし、沙羅が良かったら読まない？」

そんな事を言っているが実際は飽きたのだろう、あの本は斉藤の趣味ではなのだ。まぁ斉藤が言っている事も本当なのだろうが。

「あら、本当に！？　いいの？」

斉藤の提案に沙羅は嬉しそうに差し出された本を受け取った。

「良かったな、だけど沙羅も今読んでる本あるんじゃないか？」

ふと訊ねてみる。そしたらこんな返事が待っていた。

「心配ありがとうね、でも大丈夫よ。貴方たちと違って私は本の

二、三冊同時に読んでいくのなんて余裕よ」
少しテンションの上がった沙羅であった。しかし俺だって二、三冊くらい同時に読めるわ……。
「はいはい、分りましたよ。じゃ、頑張ってください。さて、帰るか斉藤」
そう言って席を立つ俺。
「だねー帰ろうか、沙羅置いて……」
同じく席を立つ斉藤。
「ちょ！　待て！　置いてくな！」
後ろから慌てて本をしまって付いていてくる沙羅。
帰る最後に少し離れたカウンターに居る星野先生に出口に向かいながら挨拶をしながら帰る。
「また来ますから綺麗にして汚さないでくださいね。それではさようなら」
と、初めに淡い期待を込めた俺。
「先生あんまり吸っちゃダメですよー最近また増えたでしょーさよならー」
次に適当に煙草を注意する斉藤。そして最後に……。
「一応先生なんですよ！　さよなら！」
と、置いて行かれそうになり焦って斉藤より適当な沙羅。そんな俺たちに言われている本人は。
「はいはい、じゃあ気を付けて帰れよー」
こっちも適当だった……。
まぁ、俺達の普段の生活なんてこんな感じで何処にでも居る普通の暇な学生の生活だったのだ。この日までは……。

ガンジーと掃除用具入れ（2）

ジリリリリリリリ――！
眠い……いつもより眠い……。
ジリリリリリリリ――！
「うるさい！！」
いつもよりうるさく感じる……。
「くそ！」
昨日は読んでいた本がクライマックスに入り夢中で読んでいたところかなり遅くになってしまったのだ。
「畜生……アイツが犯人だとはずるいだろ……。それにあのトリックは……」
生憎その本は俺の想像を覆す終わりだったのだがかなり面白く起きても読み終えた時のままだった。
「後であいつらにも勧めようかな」
斉藤はダメだろうが沙羅なら行けるかな。
そんな事を考えながらさっさと着替えを済ませリビングへと降りていく。ちなみにただ今の時間は余裕の七時半である。
「おはよう、母さん父さん」
キッチンでご飯を作る母とリビングで朝のニュースを見る父に軽く挨拶をする。
「おはよう桂」
まったりとした声の母と、朝には強い父が返してくる。
「今日は仕事で遅くなるからご飯は食べていて良いぞ。じゃ行くからな」
と、話もせずに出勤して行く。
「行ってらっしゃい」
母が送り出して行く。

「俺も行くかな……」
テーブルの上のパンやスープなどを食べながらニュースを見て家を出て行く。まぁ、いつもの事だ。家から出るとまだ普通の登校の時間であるため結構学生が歩いている。俺もそんな日常に入っていく……。
しばらく歩くともう学校に着いていた。今日は静かだが何故だろう……？　教室に入るとクラスメイトたちと挨拶を交わし席に着いた。ふとそう言えば今日はまだ斉藤にも沙羅にも会っていない事に気付いた。
「アイツらに合わないとスッキリしないんだな、俺は……」
なんて甘い事を思っていたんだ、この時は……。
その後斉藤が遅刻になり驚いた事に沙羅も今日は遅刻していた。沙羅の顔には見て直ぐに疲れが溜まっているのが見て取れた。そして沙羅が遅刻した事に俺は何か底知れぬ恐怖を感じていた……。
その後の沙羅は大体の授業は寝て過ごし昼も特に何をするでもなくぼぉーっとしていたので話を聞く事も出来なかった。それが一日続いた。
そんなこんなで時間は過ぎて行き退屈な授業も終わり学校での唯一？　の楽しみであるクラブ活動の時間になりついにその時になった。しかし、その頃には朝の出来事なんか俺も斉藤もこの時には忘れついにその時が来たのだった。
俺と斉藤が何時からか指定席となった席に座り話している時だった。斉藤が今もぼぉーっとしていている沙羅にあの話を振ってしまったのだ。
「沙羅、昨日貸した本読んだ？」
奴なりにこのおかしな空気をどうにかしたかったのだろう、沙羅に昨日帰りに貸した本の話題を振ったのだ。すると突然寝ていた沙羅が起き上がり。
「えっ！　あの本って神宮寺の新作の事！？」
テンションが異常に高い……。そのテンションに訊ねた本人の

斉藤はキョトンとしていた。
「あのね！　昨日全部読んだんだけど、すごく面白かったのよ！　カちゃんは読んでないのか！　じゃあ教えてあげるわ！」
先ほどのぼぉーっとしたのとは大違いである。そしてその言葉を聴いて俺は立ち上がっていた。
「ちょっと待て！　あの本を一日で読んだだと！？」
あの本は文庫本なんかとは違いきちんとしたハードカバーでその中に文字がビッシリと書かれている様な本であり、人からすれば読むのが早いであろう俺でも普通に読んだら四日ほど掛かった本である。あのジャンルの本にしては異様な多さであった。それを一日だと？　どれだけ読んだんだ……。そして。
「そうよ、借りた帰りに少し読んだらとても面白くてお風呂以外ずっと読んでたのよ。そしたら読み終えた頃には外が明るくなってて、そのまま来たものだから一日もう本当に眠くて、眠くて大変だったのよ。遅刻もしちゃうしね。あら？　何か文句でも？」
無いです……。
「で、私思ったのよ！　私もあぁゆうの、してみたいなって！」
未だにテンションが高い……。今なら何しても怒らなそうだ……いや！　そんな事考えている場合ではないのだ！　今発言は場合によっては大分危険である。
「あぁゆうのってどうゆうの？」
恐る恐る聞いてみる。
「どうゆうのってそんなのもちろん……」
沙羅の声を聞きながら、あぁ……終わったって思ったんだ……。
斉藤は理解できていないし沙羅は言うのを止める気配は無い……。
「肝試しに決まってるじゃない！」
沙羅の声が図書室に轟いていた。
やっぱり、その言葉を聴いてしまった……。
「しかし、何故だ？」

理解出来ていない斉藤が質問する。
「そんなの、本で書いてあって楽しそうだからじゃない！」
「なんじゃそりゃ！？」
沙羅の意味不明な回答に笑いながら突っ込む斉藤。
沙羅が突如言い出した「肝試しをしよう」発言には、斉藤が貸した本が大きく関わっているのだ。今回ちょくちょく出てくる神宮時と言う作家の新しいジャンルに進出した新作本であるが、これは何を隠そうサスペンスホラーなのである！　サスペンスホラー……人が死んだり推理をしたり幽霊が出たりと色々詰め込まれていて急がしそうで聞くと面白いのか疑いたくなるが、読むと全てバランス良く整えられていて引きつけられる作品になっているのである。この物語の始まりは主人公達が廃校に肝試しに行くところから始まるのだが沙羅はどうやらその肝試しがしたくなったようである。文章を読むと決して楽しそうには見えないのだが……。
さて、このようなバカな事な早めに考え直させた方が良いだろう。
「何変な事言ってるんだよ、寝言は寝て言え」
そんな変な事俺はしたくないのだ。しかしこの後斉藤が……。
「へぇー何処でやるの？」
えっ……。お前今なんて言った？
「ちょ、ちょっと何言ってるんだ、斉藤？」
もしかして乗る気なのか？
「えっ？　何ってやる場所だけど？」
不思議そうに聞き返してきやがった……。
「さすがカッちゃん！　桂と違ってノリ良いね！　場所はね、この学校が良いと思うのよ」
何故か俺以外は乗り気のようだ……。
「まぁ、ケイよりはね」
俺と違ってってなんだよ……何で斉藤は俺を見下しているんだよ……。

「でも日時はどうするの？」
まぁ、そうなるよな。
「うーん、今すぐにでもやりたいけど、時間はなるべく遅くにしてね」
やはり思いつきなのだろう。
「じゃあ今日でいいんじゃない？」
斉藤までもがノリで考えだした。
「そんなポンポン決めてるけど大丈夫なのかよ」
そんな当たり前の事を聞いてみる。返事は何となく想像は付くけど……。
「私は問題ないわよ、今から楽しみだわ」
と完全に今日行く気の沙羅。
「俺も特にすることないし付き合うよ」
こちらも完全に行く気である。
「じゃあお前ら二人で行って来い」
二人なら本当に行きそうだが俺は遠慮させてもらおう。肝試しなんて面倒だしな。
「えぇー桂来ないの？　つまんないでしょ」
残念がる沙羅、だがこのまま無しになってくれると嬉しいのだが……。
「行かないよ」
ここはきっぱり言おう。そんな時俺後ろから忍び寄る人影があった。
「ほう、杉下は何に行かないんだ？」
俺のちょうど真後ろに星野先生が居た。
「先生こそ何しているんですか？　仕事はどうしたんですか？」
本来先生はカウンターに居るべき人である。
「いや、さっきからお前達が話してるんで暇だし聞いてみようと思ってな」
見れば図書室には俺達と少女が一人になっていた。確かにこれ

では暇だろう。
「あっ先生、聞いてくださいよ……」
沙羅がこれまでの事を話してしまった。
「成程杉下は怖くて行けないのか……」
話を聞き終えた先生はそんな事を言った。
「別に怖くなんてありませんよ」
何でそうなるんだろうか？
「じゃあ行けよ」
先生は笑っている。がそんな古典的な手には掛からないのだ。
「じゃあ怖くて良いので行きません」
これで良い。
「帰って読みたい本もあるので」
買ったのは良いがまだ読んでいない本がまだ俺にはあるのだ。
しかしこの発言が仇となった……。
「新しい本か……」
先生が何か考えだした。
「そういえば杉下、お前この前リクエストボックスに九冊位リクエスト入れただろ？」
嫌な予感がした。
「えぇ、そうですよ。それが何か？」
俺の声は少し震えている……。一方、先生の口は微妙に笑っていた。
「その本どれもマイナーな作家だし、どうせ来ても杉下くらいしか読まないだろうし……。入れるの止めるか」
嫌な予感的中！
「ちょっと待ってください！　それは幾らなんでもずる過ぎます！　どこ探しても無いからリクエストしたのに！　幾らなんでも！」
リクエストした本はどれも珍しく俺が探しても見つからないものだし、金銭的にも学生には難しいのだ。そこを突くとは卑怯なり！
「ほう、見つからないのか。何かなおさら入れたくなくなったな。

皆もそうだろ？」
　ここに来てさらに斉藤沙羅の同意を求める星野先生。そんなの分りきっているじゃないか……。
「えぇ、全く先生の言う通りですわね。一人しか読まない本をわざわざ何冊も買う必要はありませんわ。そんなの無駄でしかありませんものね」
　なんだその口調は！　お前はお嬢様か！
「そうですわね、こんなチキンの為に買う本なんてこの地球上にはありませんわ」
　何故か斉藤まで沙羅と同じ口調で言ってくる。かなりウザイな……殴りたいよ。
「じゃあ満場一致で買わないでいいな？」
　最後の意志を求める星野先生。
「はーい！」
「了解！」
　それに元気よく返事をする沙羅斉藤。
「ど……」
　俺の口が動いていく。
「お？　どうした杉下？　何か言いたい事でもあるのか？
　わざとらしく聞いてくる星野先生。
「ど、どうすれば良いんですか……」
　俺はついに聞いてしまった。
「そんなの……」
　斉藤の声。
「分っているんじゃないか？」
　星野先生の声。
「杉下君！」
　最後に沙羅の声。
「分ったよ……。行こう……行けばいいんだろ」
　俺はこの瞬間悪魔達に魂を売ってしまった……。

「おっしゃー！」
喜ぶ斉藤。
「先生ナイス！」
喜び親玉に感謝する沙羅。
「まぁ、杉下なんてこんなもんよ。ふははは！」
沙羅に答えて高笑いする星野先生。
今この図書室と言う空間には俺の敵しか居ないのだろか？　何時までも三人が笑う声は図書室になり響いていた。というか今更だが、先生はこれでよかったんだろうか。俺たちは学校で肝試しをするのに……。その疑問はそっと胸の内にしまっておくことにした。

その後、あっと言う間に時は過ぎその日の夜になっていた。皆は一度解散したのだが、家があまりにも遠い斉藤は家に連絡だけして俺と行動していた。沙羅はと言えばあの後一人楽しそうに「遅れんじゃぁないわよー！」と帰って行った。時刻はもう十一時になろうかと言う時間である。斉藤は俺の家で食事を済ませ今は肝試しの会場である学校に二人並んで寒空の下歩いている。
「斉藤よ、本当にするのだな」
もう観念しているが、再度確認する。
「杉下よ、本当にするんだよ。」
斉藤は微かに笑いながら改めて現実を再確認させる。家を出てからしばらくそんな会話しか出来ていない。
「しかし斉藤。何故沙羅の完全な思いつきの肝試しなんかに乗ったんだ？」
ずっと考えていた疑問をぶつける。斉藤は。
「何でかね？　楽しそうだったからじゃない？」
斉藤はそれが当たり前の様に言う。
「はぁー、やっぱりそれだけか」
まぁ、想像はしていたんだけどね。
「でもこんなの初めてだよね。単純に楽しみだよ」

そう言って微笑む斉藤。
「そうか？　俺は全く楽しみじゃないのだが」
内心ここまで来れば少し楽しみになっているがそれは黙っている。
「本当に？　まぁケイがどう思おうが良いけど」
俺の考えているのが分るのか斉藤はニヤついていて一発小突いてやりたいが抑えておこう。
「まぁ、沙羅の思いつきも程々にして欲しいものだよ」
ため息交じりの俺に斉藤は。
「そうだね」
と静かに同意してくれた。そんな風に斉藤とキモイ会話をするうちにもう直ぐ学校に着く頃になっていた。
「ふぅーこれからは始まるのか」
校門の前になり俺が呟き。次に斉藤が。
「よっし！　行くか！」
と気合を入れた。そしてそれとほぼ同時に暗くなった校庭のちょうど中央あたりから。
「二人とも遅いわよ！　全く何してんのよ。早く来なさい！」
と夜になっても元気の良い沙羅が俺達二人を呼んでいる。
「あらら、俺らのお姫様はお待ちかねのようだね」
斉藤のふざけた冗談と共に歩き出した。
「お姫様じゃなくてただのじゃじゃ馬娘だろ？」
歩きながら俺の苦笑い気味の突っ込み。
「ははは、確かにその方が似合うかもだね」
そこそこ星の綺麗な寒空を歩きながら斉藤は静かに笑った。
「じゃあ全員揃ったか？」
暗くなった校庭で沙羅と合流し俺が全員いるか確かめる。
「えぇそうね。　全員居るわ」
俺の問いに答える沙羅。

「じゃあさっさと初めてさっさと帰るか」
確認を済ませて俺が言って歩きだす。
「ってちょっと何でさっきから何で桂が仕切るのよ！　仕切るのは私の仕事よ！」
なんて言いながら元気良く付いてくる沙羅。
「レッツゴー！」
テンションの上がってきている斉藤も付いてくる。
「おい、お前たち、私を置いて行ってくれるなよ」
その時聞こえないはずの人間の声が校舎に向かう俺達の背後からした。
「えっ……？」
突然の声に驚く沙羅。
「さっそく出たか」
と笑いながら振り向く斉藤。
「何で貴方が居るのですかね？」
暗く姿の見えない声の主に尋ねる俺。
「なんだ、驚いたのは山本だけか」
と少し残念がる声の主。
「そんなの驚きませんよ。よく聞く声ですから」
なんて言う斉藤。
「えっ誰？」
未だにパニックで分らないのか素で分らないのか取り敢えず理解出来ていない沙羅が呟いた。
「いい加減そんな暗いところに居ないで出てきてくださいよ、星野先生」
と何時までも見えない所に居る声の主に言い放つ俺。
「杉下と斉藤はつまらないな。山本は良いぞ」
なんて言いながら出てきた星野先生。
「星野先生居たんですか！？」
沙羅の驚きの声本当に気付いていなかったようだ。

「居たんですかってまぁ、一応な。可愛い生徒たちを学校で肝試しするんだから安全面に関して一応大人が居た方が良いと思っていな。それに私が居た方が何かあった時直ぐにどうにか出来るからな」
先生は少しダルそうにそんな事を言っている。しかし俺はこの先生が始めてカッコイイと思った。先生はその後にも言葉を続ける。
「それに何かあった時私の責任になっても困るのでな、見える所に居たいのだよ」
先生の言う責任とは最終的に肝試しを成立させた事について言っているのだろう。
「しかしせっかくの肝試しに大人が居てはつまらないだろうから私は図書室にでも居る事にするよ」
先生はそう言って図書室の方へ歩き始めたが直ぐに止まって後ろを振り向いた。
「あぁそうそうコレ貸してやるよ。ほれ」
そう言って星野先生は暗闇の中沙羅に何かを投げた。
「きゃ！」
それを戸惑いながらなんとかキャッチする沙羅。
「何コレ？」
不思議がる沙羅の手の中には何かの鍵が入っていた。
「先生コレは？」
俺の質問。
「それはな、この学校の鍵だ。ところでお前らどうやって入るつもりだったんだ？」
質問の答えとその後の言葉を聞いて俺達三人はほぼ同時に。
「あっ……」
と間抜けな声を上げていた。特に沙羅は。
「はぁ……やっぱりどうしようも無い奴らだな……」
星野先生は手を頭に当てて完全に呆れられている。
「じゃぁ私は本当に行くからな」
そう言って星野先生はまた歩き出していた。

「先生！」
俺が後ろから歩いていく先生を呼び止める。先生は何も言わずに立ち止まった。
「ありがとうございます」
そう俺が言うと先生はただ右手を軽く上げてまた歩き出した。自然と俺の口は笑っている。そして何故か先生はもう一度振り返り。
「山本は怪我させるなよ。無茶はするな。じゃ。」
先生の顔は暗闇で良く見えなかったけどいつもより真剣に言っている気がした。そして聞いた後、後ろで驚いた様子の沙羅と斉藤の声。
「あ、あれって何？」
何かを見つけて先生と同様理解できていない様子の沙羅。
「おかしいね……」
斉藤の考えこむ声。
「何かあったか二人とも？」
気になって聞いてみる。
「桂、あそこ見て変だよ」
そう言って指を指しているのはここからでも見える学生棟の三階にかすかに見える薄ぼんやりとした光だった。
「何だ、アレは……」
明らかにおかしかった一つだけ明かりがついている。
俺はその時何故か星野先生の言い残した言葉が引っ掛かり直ぐに先生が居た所を振り向くがそこにはもう誰の姿も無かった。
「ちっ……気付いていたな」
三人しか居ない広い暗くなった校庭で軽く舌打ちした。
「さて、行こうか沙羅斉藤」
俺がまだ光を見つめる二人に問いかける。
「あ、あぁそうだな」
と光からこちらに意識を戻す斉藤。
「えぇ行きましょう」

と完全にやる気に入った沙羅。さすが沙羅だ、顔が「面白くなってきたわ」って顔をしている。俺達は無言で会場である学校に入って行った。

ガチャリ――。

俺達は先生から貸してもらった鍵を使い先生の向かった職員棟ではなく学生棟から入って行く事にした。校内に入ると流石に夜遅いだけあって真っ暗だった。

「さて、どこから行こうかね？」

玄関でリーダーである沙羅に尋ねる。

「ちょっと待って」

突然沙羅が俺の言葉を遮る。

「どうしたんだ？」

「あのね、どうせ暗くて良く見えないだろうからコレ持ってきたの」

そう言うと沙羅は唯一腰から掛けていたポーチから三本の小型懐中電灯を取り出した。

「はいコレ」

そしてそれを俺と斉藤に投げ渡す。俺は余裕でキャッチ。斉藤は一回落としてから再度拾っている。

「ありがとよ」

沙羅の思わぬ配慮に感謝する。

「サンキュー」

続いて斉藤も礼を言う。

「さて、改めてどこから行こうか？」

俺が二回目の質問をする。

「そうねぇ……」

沙羅は少し考えた後。

「やっぱり明かりが点いてた教室じゃない？」

暗い廊下でも分るくらい明るい表情で言ってきた。

「あれ？　いきなりボスでいいの？」
と不思議がる斉藤。
「沙羅は何か調べてないのか？　怪談みたいなことは」
あの教室は俺的にも気になるがいきなり本命とは飛びすぎかと思う。
「そうなんだけどね、気になるじゃない。あの教室」
まぁそうだな。心の中で同意する。
「まぁいいじゃない、調べたのは歩きながらでも話すわよ」
と急にだるそうになる。面倒なんだな……。
「分った、歩きながらで」
そう言うと満足したのか。
「じゃあ、こんな所で立ち止まってないで行くわよ」
そう言って暗く静まり返った学校をスタスタと歩き出して行く。
歩きながら沙羅が言うにはこの学校には最近出来たと言うことで残念ながら七不思議なんてベタなモノは無かったらしい。しかしそんな事ではつまらないので沙羅は頑張っていくつか探したのだと言う。ところがそれは妖怪だのなんだのとゆうモノで胡散臭いものでどれも沙羅の期待に沿えるモノは無かったらしい。そして最後に沙羅が少しそれっぽかったと言う話をし始めたところだった。
「でね、最後に聞いたんだけど、何か夜にどっかの教室から女の子の泣く声が聞こえるんだってさー」
何でそんな事を知っている人間が居るのか気になるがそれが噂と言うものだろう。
「でも何かそれだけ内容薄いね」
聞き終えてから斉藤が俺も思った観想を言った。
「まぁ確かにね。でも何か薄すぎてありそうじゃない？」
なんて言うが謎の明かりを見つけたのでどうでもよさげである。
「まぁ取り敢えず教室に行くか。でもあれどこのだ？」
俺は情け無いがそんなに見ていなかったため薄ぼんやりとしか見ていなかった。

「えぇーと確か三年の教室だったのは覚えてるわ」
気になっているくせにうろ覚えの沙羅。全くなんだコイツは……。
「じゃあ三階だな」
今回何故かいつもよりも冷静な斉藤が言う。
「あぁそうだな」
二人の回答で理解し終えた俺が言う。
「分かてるんならさっさと行くわよ！」
またも機嫌が悪くなった沙羅が少しペースを上げて歩いていく。その後を俺と斉藤が追って行った。
しばらく歩き今は二階から三階へと続く階段へ来ていた。
「ついに来たなこの上にさっきの部屋があるのか」
ここに来て俺は声が小さくなっている。
「そうだな、何かあるといいけど」
斉藤も声が小さくなっている。
「いや、絶対何かあるわ」
沙羅は声が小さくてもわかる気合に満ちていた。
「じゃ、ついに行くぞ」
何時しか俺が仕切っても沙羅はなにも言わなくなっていた。
「えぇ」
「おっし」
沙羅斉藤が気合を入れて俺達は三階へと続く階段を上って行った。階段を上り終えると端の教室から光が漏れていた。そしてこの頃から俺達の中で少しの疑問も出始めていた……。
最初に気付いたのは斉藤だった。
「う……っ」
斉藤が顔を歪めて突然不思議な声を上げる。
「どうした斉藤？　怖気付いたか？」
俺が冗談交じりで半笑いに聞く。
「いや、ちょっとね……。二人とも変な匂いしない？」

斉藤が俺と沙羅に変な事を聞いてくる。
「ちょっと何言ってんのよ。変な事言わないでよね」
沙羅が斉藤を睨みながら急に不安な表情を見せる。コイツさっきまで楽しそうにしてたのにな……。
「そうだぞ斉藤、変な事言うと沙羅が怖がっちまうだろ？」
「べ、べつに怖がってなんて無いわよ！　何でそうなるのよ！」
俺の言葉に動揺しながらも平気なふりをしようとして怒ってくる沙羅。
「はいはい、分りましたよ」
笑いながらあくまでも沙羅をからかう。こんな所に連れて来た仕返しをしてやろう。
「何が分かったのよ！　分ってないでしょ！？」
なんて予想どおり反発してくる沙羅。
「分ってるさ。沙羅は怖がってないんだろ？」
するりと抜けるように逃げる。
「キィー！　コイツむかつくー！　ぶっ飛ばしてやろうかしら！」
ふ……っ！　勝ったな。
「沙羅うるさいぞ、静かにしろ」
「う、うるさいわねー分ってるわよ……。ふん！」
更に追い討ちをかけると少し落ち込む沙羅。だけど沙羅はこの位では挫けないだろう。
「ところで斉藤、さっきの話は本当か？」
ある程度沙羅をいじくり本題に戻る。
「ちょっと！　逃げるな杉下！」
隣からまたブイブイ訴えてくる沙羅。コレでこそ沙羅だ。しかしそれは今は放って置く。
「いや、本当だよ。多分あの教室からだと思う。何の匂いか分んないけどあんまり好きじゃないな……」
斉藤はバツが悪そうな顔をしながら例の教室を見つめている。
「斉藤しか分らない匂いか……。うーん、なんだろうな……」

斉藤は嘘を付いてないようだ。俺は何も感じなかったが……。
「カッちゃんの気のせいよ、そんなのする訳ないじゃない。おかしなカッちゃんだ事！　おほほ！」
あからさまに怖がっているのを隠そうとする沙羅。ダメだ、コイツはしばらく放置だな……。
「まぁ、行けば分るだろ」
考えても分らないので先に進む事にした。
「うん、そうだな。乗り気しないけど……」
斉藤は相当その匂いが嫌いらしい。
「お化け退治の開始だ」
そう言って暗いくここから一番離れた教室へと斉藤と歩きだす。
「ちょっと置いてかないでよぉー……」
その後を情けない声を上げながら沙羅が付いてきた。
教室に近づくにつれ斉藤の感じる匂いも強くなり、ついには俺と沙羅にも分るくらいになっていた。
「もう直ぐだな……」
声を潜めて教室に近づいて行く。
「やっぱり臭いなーコレ……」
未だに匂いを気にしてグダグダと付いて来る斉藤。コイツはもう明かりよりも匂いの方が嫌らしいな……。
斉藤はまだマシで問題は斉藤と俺の間に居る沙羅である。さっきから俺と斉藤の手を取って顔真っ青にしながら付いて来ていてい る。それで手をかなり強く掴んでくるため歩きにくいったらありゃしないのだった。
「沙羅ー歩き難いよー。離してくれない？」
斉藤も歩きにくくなったのか沙羅を離そうとする。
「何言ってんのよ、私はあんた達の為を思って繋いであげているんじゃない」
沙羅は相変わらずに青い顔である。良くその状態で強がれるものだな……逆に感心するよ。

「斉藤、離したら沙羅が死ぬだろが」
ここに来ても少し沙羅をからかう。
「杉下後で殺す……」
沙羅はもう怒る元気は無いようで地味に怖い事を言ってきた。
これ以上は止めよう本当にやられそうだ……。
「二人ともふざけてないで行くよ。ケイもあんまりからかうなよ。大体なケイは……」
「わはははは」
斉藤が何か言おうとすると教室から大声で笑う男の声が聞こえてきた。俺達三人はあまりにも突然だったので初めにビクリとして、そのまま三人揃って機能停止まってしまった。
「それマジでー？　ありえなーい」
男のそれに続いて女のそんな声が聞こえて、それからまた何も聞こえなくなった。
「な……何だ、さっきの声は……」
謎の二つの声を聞いて少した経った後あまりにも状況が飲み込めずに俺はガラにも無く動揺している。しかし今の声は……。
「か、かなり人間らしい声だったね……」
俺が思ったことを斎藤が代弁してくれた。
「あぁ、アレはお世辞にも幽霊とは言えない気がする……」
あの声は確実に人間だろう。いや、幽霊は結構ラフなのか……？　そんな事無いだろう……。
「あ！　ちょ、ちょっと沙羅しっかり！」
俺がそんな事を考えていると横で斉藤が小声だが強く沙羅の名前を呼んでいる。
「うぁ！　沙羅大丈夫か！？」
俺もかなり驚いたが何とか小声にする事が出来た。横を見ると廊下にヘタリと女の子座りをしながら死んだような目をして斉藤に肩を揺さぶられながら放心している沙羅が居た。見ただけでも大丈夫でない事が分る。

「沙羅しっかりしろ！　アレは幽霊じゃないだろう。人間だからしっかりしろ！　起きろ！」
俺も斉藤を手伝う。なんだか怖さは無くなり笑えてくる空気になっていた。しばらく声を掛けると沙羅はハッとように意識を取り戻した。
「沙羅大丈夫か？」
もう心配しながら笑っている俺。
「アレは……？」
沙羅がオドオドしながらそんな事を聞いてくる。
「人間だろうよ。幽霊じゃあ無いだろうな」
簡潔に答える。
「人間……？」
まだボケている沙羅。
「あぁ、多分そうだよ」
今度は斉藤が答える。
「多分って何よ……。じゃあ私はあの教室に居る変な奴らに驚かされたって事！？」
おぉ沙羅が調子を取り戻して来たな。しかし『驚かされた』か……。怖がらせられたとは言わないんだな。さすが。
「そう言う事になるな」
「許せないわねぇ……！　大体何でこんな夜に学校に来てる奴が居んのよ！　バカなの！？」
沙羅がついに大声で自分はバカです発言をした。すごいな……相当混乱してるのかな？
「沙羅！　声でかいよ！」
俺がそんな事を思っていると斉藤が慌てている。そうだ！沙羅は大声を出したんだ！
「おい！　声がしたぞ！」
沙羅の声に気が付いたのか教室が騒がしくなる。
「あぁー！　気付かれた！　このバカ沙羅！」

俺はヘタリ込みながら拳を握り閉め闘志に燃える沙羅の頭をペチっとたたく。
沙羅は叩かれて頭を傾けたが、直ぐに立ち上がりそのまま騒ぐ教室へと猛スピードで駆け行く。さっきまでヘタリ込んでいた人間とは思えない立ち直りだ。
「沙羅！どこ行くのさ！」
駆けて行く沙羅を斉藤がすかさず追いかける。
「お、おい！」
それを見て俺も数テンポ遅れて必死で後を追う。最も早く駆け出した沙羅が教室の前へと到着するのが見える。沙羅はそのまま教室のドアを勢い良く開け放った。その後ろから斉藤が教室に到着。すると教室を見て斉藤の顔が変わる。どうやら沙羅に帰るように説得し始めたようだ。
直ぐに俺も二人に駆けつけようとする。沙羅は斉藤を振り切った様子だ。
「貴方たちこんな夜中に何してんのよ！　バカなの！？　死ぬの！？　こっちはあんたらのせいで散々だったんだから！　どうしてくれんのよ！　桂に馬鹿にされるし他にもとんだ恥かいたわよ！　もう謝っても許さないんだからね！」
沙羅は開け放つとそのままそう言い放った。うぁー信じらんねぇ……普通言えねぇよ。てか俺の事なんて分んないだろ。
沙羅が言い終える時には俺も追いついていた。教室の中を覗くと五人ほどの制服を着た男女が呆然としていた。制服を見ればどうやらウチの生徒らしい。しかしそのほとんどが髪を染めピアスをしたりしている言わば不良と言う部類の者だった。その不良達は先ほどの沙羅の言葉を喰らってまだ止まっているらしい。
結構ヤバイな……。不良達は段々と平静を取り戻し徐々にその表情が強張っていく。今にも殴りかかってきそうだ。
「ちっ！　斉藤、沙羅！　逃げんぞ！」
こう言う時は逃げるに限る。

「お、おう！」
「何でこんな奴らから私が逃げなきゃいけないのよ！」
しかしそう言って沙羅が逃げようとしなかった。どんだけ怒ってんだコイツは……。そこまで怖かったと言う事か……。
「くそ、ダメだ！　斉藤、沙羅持って逃げるぞ！」
俺は沙羅の右腕をしっかりと掴む。
「分った！」
斉藤も続けて左腕を掴む。
「おっし！　さっさと行くぞ！」
俺達は声を上げると同時に来た道を全力で駆け戻る。
「てめぇら逃げてんじゃねぇぞ！　こらぁ！」
こちらが逃げた事で完全に動きを取り戻した不良達が一斉に追いかけて来る。
「ちょっとアンタ達、放しなさいよ！　何で逃げんのよ！？」
俺と斉藤に両腕を掴まれて状態としては進行方向とは逆を向いて宙に浮くような形で運ばれている沙羅が文句を言ってくる。
「バカが！　冷静に考えろ！　あんな事言って何もしない連中な訳無いだろ！」
俺は走りながら未だにキーキーうるさい沙羅に言い放つ。
「何よ！　やってみないと分んないでしょうが！」
それでも暴れる沙羅。俺達の後ろには今も罵声を飛ばしながら追いかけて来る不良が居る。それがまた沙羅の闘志を掻き立てるのだろう。
「ぶべ！」
暴れる沙羅の足が斉藤の足を蹴飛ばした。斉藤は変な声を上げる。
「沙羅分った、あいつらをやっつければ良いんだな！？」
こうなったらひとまず沙羅を落ち着かせる事を考えよう。
「そうよ！　だから早く降ろしなさいよ！」
沙羅はやれば勝てると思っているようだが、斉藤と俺なまだし

もこちらには沙羅が居る。今はこんなに元気が良いが、いざとなれば沙羅が一番危険だ。しかも沙羅を掴んだままじゃろくに行動できやしない。

「沙羅も何とかしたいなら今は静かにして自分で走ってくれ！」

「わ、分ったわよ……。でも絶対だからね！」

俺の気合に負けたのか沙羅は少し冷静を取り戻し自分の足で走りだしてくれた。

「取り敢えずどこかの教室に隠れよう。」

そのためには後ろの奴らを何とかしなければ……。

ガンジーと掃除用具入れ（3）

初めに二階への階段を下りる。この学校の階段は二階から三階へだけではなく更に二階に降りてから直ぐ隣に一階へと続く階段がある。しかも階段は下りる途中で一回曲がる構造である。三階から降りる時点で不良達の視界から一瞬消える事が出来る。二階に付いたらそのまま直ぐ横にあるゴミ箱を一階の階段へと蹴り落とす。

ガコーン――！　ガコガコ――！

ゴミ箱が勢い良く落ちて行く。そうしたら音にまぎれて近くの教室へと身を隠すのだ。ここは二年の教室になる訳だが、やはり自分達以外の教室は違和感があるな……。

教室の様子は薄暗く全体は分らなかった。来る時は出ていた星達も曇り空へと変わり果てて消えついには雨がぽつぽつと降り始めている。

「下に行ったぞ！」

「おう！」

と降りてきた不良達が威勢よくゴミ箱に釣られて更に一階へと降りて行く。

「ふぅー、一応まいたか……」

「シクシク……」

足音が消えるのを待ち、一息ついてから話し出す。

「な、何とかなったね」

「グスン……」

「これからどうするのよ？」

ガタガタ――。

「沙羅はもう落ち着いたか？」

コイツが落ち着かなきゃ話にならん。

「そうね、大分落ち着いたわ……って、ずっと冷静だったけどね」

「シクシク……」

沙羅は自分で言うように大分落ち着きを取り戻した様子だった。
「じゃあこの後どうすれば良いか分るか？」
「うぇーん」
沙羅に確かめる事も含めて訊ねる。
「そうねぇ、図書室の星野先生の所まで行けば良いんじゃない？」
きちんと考える事が出来ているようだ。これで少しはマシか。
「そうだな、取り敢えず星野先生の所まで行こう。何とかなるだろう」
次の予定も決まった。直ぐに移動を開始しようと言う事で立ち上がる。
「じゃあ二人とも行くか」
俺は教室から出ようとする。しかし斉藤が動こうとしない。
「おい斉藤、どうした？」
見れば斉藤の顔は放心した沙羅と同じかそれ以上の青さだった。
「カっちゃん大丈夫？」
沙羅も心配している。
「なぁ、アレ何だ……？」
顔を青くした斉藤が教室の端を指差す。
「アレってただの掃除用具入れだろ……」
俺達は後ろの扉から入ったので外側に掃除用具入れが暗闇の中薄ぼんやりと見える。
「さっきから泣き声聞こえない？　多分あそこからなんだけど……」
斉藤がまたおかしな事を言い始めたな……。なんだコイツ霊能力でもあんのか？　しかしそう言われれば俺にも聞こえた気がした。さっきから逃げる事しか考えてなかったから気にならなかったが。
「あぁー、気のせいじゃないのかー……！　実は私も聞こえてた……」
また沙羅の顔から元気が無くなっている。沙羅は右手を頭に当ててヤレヤレと頭を振った。さっきよりも冷静だ、大分耐性が付い

たようだ。
「シクシク……」
ギク――！
俺達の動きが止まる。一度意識してしまうと無視は出来ない。
今日は良く動けなくなる日だな……・。
「……そこに誰か居るの？」
掃除用具入れから女と思われる声がした。その声は泣いて少し
霞んでいる。
「うおぅ！？」
「うあ！？」
「ひっ！？」
その声にほぼ同時に三人とも驚きの声を上げた。コレはかなり
怖い……。
「何でこんな事するの……！？　早くここから出してよ！」
ドンドン――！
鉄製の用具入れが大きく音を立てる。俺達は何もしていません！
「はは、は、早く出ましょう……」
沙羅が後ずさりながら提案する。
「あ、あぁそうだな……」
俺も一歩後退する。本物なんてまっぴらだ。
「あいつ等どこだぁー！　ゆるさねぇぞ！　出て来い！」
その時直ぐ近くから不良の声がした。コレは近いな……。そん
なに怒る事したかな？　まあ、したんだろうな。
「くそ、これじゃあ出られねぇぞ……！」
小声で悪態をついた。なんて間の悪い……。
「貴方達由香里さん達じゃないの？」
俺達がどうしようか考えていると、後ろの掃除用具入れから嗚
咽と共に女性の声が訊ねてきた。由香里さんって誰だぁぁぁー！
「うおぉー……！」
俺は話しかけられて恐怖で言葉を失う。どうなってんだ？　俺

以外も呆然としている。
「ここから出して！　出られないの！　閉じ込められてるの！」
ドンドン――！
女の声はさっきの不良達と比べると随分幽霊らしいが、それでも冷静に聞けば人間らしい物だと思う。
「あ、見てアレ！　ロープで縛られてる！」
斉藤が掃除用具入れを指差している。そう言われてもう一度良く見ると、掃除用具入れはロープでグルグルと縛られ開かないようにされていた。幽霊ならこんな事、しないよな……多分。ここも普通は使われてる教室だし一日中こんなのが入っていたら授業にならないだろうな……。
「君は生きてるのか？」
声の主に恐る恐る訊ねてみる。実際かなり頑張っていると思う。
「勝手に殺さないで……」
声の主にはさっきの元気は無い、生きているなら元々気が強くないのだろう。
「うえぇーん」
声はまた泣き始めた。大分子供っぽい泣き方だな。
「何か可愛そうね……」
沙羅の表情からはもう不安の色は消えて心配の色が見える。
「そうだね。出してあげようよ」
斉藤も沙羅に賛成する。別に良いけどお前らいい奴過ぎないか？
幽霊だったらどうする気なんだ。
「出してくれるの？」
女の声は泣きながら聞いてくる。
「しょうがない、出してやるよ。その代わり暴れたりするなよ」
そう言いながら俺は人が入っているので、あろう掃除用具入れへと近づいていく。沙羅と斉藤も俺に続く。
「くぅー！　コレ硬いわね……」
沙羅が愚痴る。縛ってあるロープは頑丈で簡単には解けない。

しかも一本で無く三本という何とも俺達用のやり方だ……。仕込んでんのか？
「早く出してよぉ」
中から急かしてくる声はまだ泣いている。
「少し黙っていろ、今出してやるから……」
「よし！　解けた！」
斉藤のロープが解ける。
「やった！　解けた！」
続いて沙羅も。こうして俺が一番遅くなった。いや、勝負じゃないんだけどね……。
「おら、解除ぉー！　さっさと出な！」
俺は閉ざされた扉を勢い良く開け放った。次の瞬間！
ドサ――！
「うげ！」
ガツン――！
開けると突然視界が勢い良く回転し、気付くと俺は床に仰向けに倒れている。しかも倒れる時に後ろの椅子に頭を思いっきりぶつけた。激痛で意識が飛びそうになる。悶えたいのだが身体が何故か動かない。
「うあーん！　怖かったよー！」
かなり近くから声が聞こえた。どうなったんだ……？
「うわ。大胆」
斉藤の声が聞こえるがどう言う意味か理解できない。
「ちょ、ちょっとアンタ！　離れなさいよ！」
沙羅も声を上げている。俺は何とか痛みに耐え、立ち上がるのはキツイので、頭を上げた。
「うえぇーん」
なんだコレは？　見れば奇妙な光景が存在した。仰向けで倒れる俺の身体の上になにやら少女が抱きついて泣いているではないか。それもかなり強く掴まれているため身動きが取れなかったのである。

少女はその後沙羅の頑張りにより俺から剥がされた。
「……で、君は誰なんだ？」
俺は頭をぶつけた椅子に腰を下ろしぶつけた所を押さえて座りながら訊ねる。当たった所は瘤になっている。まだ痛みが引かない。コレは当分続く……。
「えっと、私は高坂美優です……」
高坂美優と名乗った少女は今は沙羅の横に立ち俺と斉藤に向き合っている。
改めてその姿を見ると背は沙羅よりも少し低いくらいで、まぁ女にしては背の高い沙羅より少し低いのだから平均だろう。髪は長くウェーブしていて驚いた事に色は金だった。整った顔つきや色などからして染めたのではなく地毛だろう。とするとハーフかな？名前はモロ日本だけど……。
「高坂さんねぇ……」
聞きたい事はまだあるが頭が痛くて手を抜いてしまう。
「あ、あの……」
高坂さんは俺のほうを申し訳無さそうに見つめてくる。
「先ほどは取り乱して抱きついたりしてすいませんでした……」
高坂さんは顔を赤くしながら本当に申し訳なそうに謝って来た。
「あぁ大丈夫だ、この位。気にすんな」
まだ痛みはかなりあるが初めより収まったしな。
「何となく分るんだけどさ、美優ちゃんは何で掃除用具入れに？」
俺の後ろで窓に寄りかかる斉藤が痛みで怠ける俺に代わって質問を続ける。っていきなり『美優ちゃん』か……。
「実は私、由香里さん達に閉じ込められてたんです。由香里さんって言うのは今あなた達を追いかけてる人の事です」
と高坂さんは説明してくれた。
「閉じ込めるなんて酷い！　何でそんな事すんのよ！　やっぱりあいつ等許せないわ！」
沙羅が怒りに拳を握り振るわせる。驚かされた恨みもあって怒

りは大きいのだろう。
「私の髪の色が気に入らないからだって言われました……。昔からなんです……」
高坂さんは俯いてそう呟いた。
「何よそれ、そんなのとんだ言いがかりだわ！　高坂さんが綺麗だから嫉妬でもしてんじゃないの！？」
「そんな事無いですよ……」
高坂さんは沙羅に綺麗と言われて顔を赤くした。
「そんな事あるの、高坂さんはもっと自分に自信を持つべきだわ」
熱くなった沙羅がまだ褒める。こんな時に何してんだか……。
「取り敢えず俺達はこれから図書室に移動するけど、高坂さんも来るか？　一人より安全だと思うし、あいつらに見つかったら何されるか分からんしな」
本心から高坂さんを誘う。やましい意味はない。くれぐれも。
「良いんですか？　私迷惑じゃ……」
高坂さんは少し驚いた様子だ。迷惑ならもうかけられているので、気にしないのだが。
「当たり前じゃない。一緒に行きましょ」
沙羅が後押しする。俺も無言で小さく頷いた。
「あ、ありがとうございます！」
「うん、普通もいいけど笑った方がやっぱり可愛いわ」
沙羅が微笑みながら言う。高坂さんはまた恥ずかしそうに下を向いた。全く女子どもはコレだから困る、面倒な奴らだ。
「何時までも話してないで行くぞ」
椅子から立ち上がる。その時……。
「そこに居るのは分ってんのよー！　早く出てきなさい！」
廊下からこちらに向かう足音と女の声が聞こえた。
「しまった！」
俺達はさっきから大声で話し過ぎたのだ。不良達に居場所がばれるのは当たり前の結果と言えるだろう。

「出ないんだったらこっちから行くわね……！」
廊下の声がそう言い終えると、いきなり教室の扉がバン！　と音を立てて開けられた。
「よくも逃げてくれたわね。それに美優まで逃がしちゃって……どうしてくれようかしら？」
多分由香里さんであろう人が教室へと入って来る。その後ろには三人の男子生徒と一人の女子生徒が不気味な笑みを浮かべて立っている。
「由香里さん……」
後ろに沙羅と共に非難した高坂さんが呟く。やっぱり由香里さんか……。ああ、確かに由香里さんっぽいな……。由香里さんって感じだ。
「このまま帰してくれないかな？　あんたらの事は黙っておくからさ」
無理だと分っているけど一応聞いてみる。
「そんなのダメに決まってんじゃない。私達さっきそこの女に馬鹿にされて気が立ってんのよ。あんた達がどう言おうが少し痛い目にあってもらうわよ。もちろん美優、あんたもね」
由香里さんは笑顔でそう言った。その女と言うのは沙羅だろう。馬鹿にしてたね、確かに……。
「そんな……」
高坂さんはそう言って黙りこんでしまった。
「あんた達ね！　高坂さんをこんな所に閉じこめたのは！」
沙羅が由香里さんを指差し声を上げる。
「そうよ、だってウザいんだもん。あはははは！」
沙羅の問いに悪びれも無く笑いながら答える由香里さん。俺は広げていた手を拳へと変えた。高坂さんはさっきから一言も俯いたまま話さない。
「あんた達本当に許せない……！　最低ね！」
「許せないからなによ、アンタ達にこの状況で何が出来るの？」

沙羅が怒りに震えながら呟くが、由香里さんは余裕の表情だ。
「あんた達、やりな！」
由香里さんが後ろに居る男子生徒へと顎で合図する。すると三人の男子生徒達が一斉に俺達の方へ動きだした。なんだ、お前ら子分なのか……？
「桂！　カちゃん！」
後ろで沙羅が叫ぶ。
「大丈夫だ！　斉藤行くぞ、二人に怪我させんなよ！」
俺は沙羅に返事をして隣で俺と同じく拳を作っていた斉藤に声をかける。
「分った！　こいつら許せねぇ！」
斉藤はそう言って俺ともに相手へと歩き出す。
「二人とも止めないと危ないですよ、沙羅さん！」
後ろから高坂さんの声がする。
「高坂さん大丈夫だよ。二人とも強いんだから……！」
その声は少し震えている。気のせいか……？
「そんな……」
高坂さんが何を言ったのかもう聞こえなかった。まず一人目が俺に向かって来る。
「おら！」
相手は攻撃範囲内に来るといきなり殴りつけて来た。しかしその拳はあまりに大振りで見切りやすい。その拳を完全に見切り左へと避ける。
「甘い！」
俺は避けた相手の手首を右手で掴み取り手前に一気に引く。相手の身体は引っ張られて俺の方へ抵抗無く引き寄せられる。
「墜ちろ！」
そしてそのまま引いた勢いをつけたまま空いている左手で相手の右頬をカウンターで本気で殴り抜ける。
「ぐえ！」

殴られた相手はそのまま俺の腕から離れ来た方へと飛んで戻って行き、倒れて動かなくなった。
「斉藤、そっちにも行ったぞ！」
二人目が斉藤の方へと向かっている。
「分っている！」
斉藤が返事をする。
「桂危ない！」
「避けてください！」
斉藤の方を見ていると後ろから沙羅と高坂さんの声がした。そう言って右を見た瞬間、こちらに来ていた三人目に左頬を殴られた。
「ぐっ！」
体勢が崩れるが何とか踏みとどまる。次に俺の腹へと拳が入る。
「がっ！」
可笑しな声が漏れる。だがコレも踏ん張ってやる。こんなんじゃ倒れられねぇよ！
「畜生！」
俺は余裕の表情になった相手に体勢を整え、腹に重たいフックをお見舞いする。
「うっぐ！」
相手も変な声を上げるが倒れるには遠い。
「まだまだ！」
腹を押さえる相手の頭を持って無理やり体勢を立て直させてそのまま後ろへと押し返し、ここで体勢を崩させる。
「どうりゃぁぁー！」
バランスが治らずにバックする相手に俺は開いた距離を最大限に利用してこれまた本気で肋骨あたりにドロップキックを叩き込んだ。
「ぶぅえ！」
くらった相手は先ほど同様来た方向へと戻って止まった。
「おら！」

声がして斉藤の方を見ればちょうど背負い投げでフィニッシュを決めている所だった。
斉藤の相手は受身を取れずに地面に叩きつけられて動けなくなっている。その後斉藤に抱えて投げられて無事入り口へと戻って行った。無事全員帰宅。
「ちょっとあんた達、何やられてんのよ！　早く立ちなさいよ！」
由香里さんは足元で蹲ってうめき声を上げる男子生徒達を立たせるが、このまま続けられそうな奴は居ないだろう。
「くそぉ……いてぇ……」
俺にドロップキックをくらった奴がうめき声と共に言う。
「まだやんのか？　来るなら来いよ」
なるべくドスを利かせて言う。こちらもいっぱいいっぱいだが、こういうのは言ったもん勝ちだ。
「ひぃ！」
そいつは一瞬怯えた表情を見せた後、悪態をついてから立ち上がり教室から出て行った。
「おい待て！」
「一人で逃げんな！」
と最初の奴をきっかけとして残りの二人も逃げて行った。由香里さんじゃない方の女子生徒は男子が逃げる前から消えていた……と言う事で、残りは由香里さんだけである。
「さぁ、アンタはどうするんだ？」
「畜生！　覚えてろよ！」
なんて少し前の時代の悪者みたいな台詞を吐いて帰って行った。ずっと思ってたんだが、古くないか？
「ふぅー……。くそぉー、マジでいてぇ……」
一段落付いて一気に力が抜ける。
「桂！　大丈夫！？」
「あぁ何とかな」
駆け寄ってきた沙羅に俺は殴られた腹を押さえながら答える。

「何で喧嘩してる時に余所見するんだか……。はぁー」
と斉藤もため息を付きながら近寄って来た。
「うるせぇ……」
本当にその通りだと自分でも思う。やはり慣れない事はするもんじゃないな。
「お二人とも怪我はありませんか……？」
最後に高坂さんが斉藤と俺を心配そうに見つめて来る。
「全然平気だよ、ノーダメージさ！」
斉藤は爽やかに答える。
「別にないよ」
俺も所処痛いが特に問題が無いのでそう答えた。
「そうですか、良かった……。でもお二人とも強いんですね。その……失礼ですが、良くやるんですか？」
高坂さんはよほど驚いたのだろう、そんな事を聞いてきた。
「あはは！　そんな事無いよ、二人ともほぼ初めてだよ」
斉藤が笑いながら答える。
「でも出来るとは思ったけどあんなに上手くいくなんて思わなかったわね。始まった時はどうなるかと思って心配したんだから。本当やっぱり何でも読んでみるのもね」
隣で沙羅も微笑みながら言う。
「えっ？　やった事ないのにあんなに強いんですか？　それに読むって……？」
高坂さんは俺達の会話に着いていけず混乱している。そこへ沙羅が笑顔で簡潔に説明してくれた。
「あのね、少し前に暇な時があって、その時桂とカッちゃん二人でずうっと格闘技の本読んでたのよ。実際にやったりしながら……。結構使えるのね、驚いちゃった」
「へぇー、すごいんですね！」
さっきから高坂さんは明るい。だけど……。
「高坂さん、そんな事より……すいませんでした」

「はぁ？　あんた何言ってんのよ？」
沙羅が不思議そうに聞いてくる。だがやはり高坂さんの顔からはさっきまでの元気は無くなり、暗い表情になっていた。
「沙羅、考えてみなよ。あの人達は何もしていない高坂さんを閉じ込めるような人たちだよ？　さっきみたいにやられて何もしてこない訳ないでしょ。しかも仕返しをするなら俺達じゃなくて確実に高坂さんに行くだろうね……。それを分ってて俺達は喧嘩したんだ、謝らないと……」
斉藤も分っているようだ。俺の代わりに説明してくれる。斉藤の説明を聞いて沙羅もようやく理解したようだ。
「良いんですよ、別に……。あの時はあするしかありませんでしたし……私なら大丈夫です。慣れてますし……」
「でも……」
高坂さんは暗い顔で言った。沙羅は何か言おうとするが言葉が無いらしい。
「もし俺達に何か出来る事があったら何でも言って下さい」
なんとしてもこの責任は果たそう。そう思った。
「ありがとう……」
高坂さんは少し笑ってそう言った。何だかその笑顔が逆にきつかった。
「へぇー、きちんと責任取りますなんて偉くなったもんだなあ……杉下よ」
「星野先生！？」
聞きなれた声に驚いて振り向くと、入り口の壁に寄りかかり煙草を吹かしている星野先生がいた。
「杉下の気持ちは立派な事だが、その心配は無いよ」
ふぅーっと煙を出しながら良く分からない事を先生は言う。俺の隣では斉藤が嫌そうに服の袖で鼻を覆っていた。
「どういう意味でしょうか？」
「こんな暗い場所じゃ話す気にならん。図書室に行くぞ」

そう言って星野先生は図書室の方向へと歩き出す。俺達も先生の言葉が気になり付いて行く事にした。

図書室に着くと星野先生はカウンターに座り、俺達もその近くである普段の定位置に付いていた。今は先生が『あった事を全部話せ』と言うので説明を終えたところである。全てを聞き終えると先生は……。

「高坂が居たのは予想外だが、大丈夫だぞ。杉下の心配は直ぐになくなる」

先生は落ち着いて煙草を吹かす。

「先生、さっきから気になってるんですが、何で大丈夫なんですか？」

「そうだな……」

斉藤が今の最大の疑問を尋ね、先生が何か話しだそうとしたその時、突然先生の携帯が鳴った。

「全く、遅いぞ……」

そう呟いてから先生は電話に出た。

「私だ、連絡するのが遅いぞ。仕事はしたのか？」

電話の相手となにやら話し込む先生。

「分かった、助かったよ。お仕事ご苦労さん」

先生はそう言うと携帯を切った。一体何がどうなってるんだ？

「先生さっきから何なんですか！？　突然電話し始めるし、話す気あるんですか！？」

沙羅が少しイラつきながら訊ねる。

「答える気ならあるさ。電話もそれに必要な事だ。まぁ、初めに外を見てくれ」

そう言いながら先生は窓際に行きカーテンを開く。

俺達は言われた通り窓際に来た。空を見ると雨は止み、来た時

よりも綺麗な星空が広がっている。そうすると先生が下を指差しているので一同視線を下へ。すると下には六つの人影が見えた。その中の五人にはしっかりとした見覚えがある。後の一人は思い出せない。

「何であいつらが……？」

見覚えのある五人組は先ほどで逃げて行った由香里さん達だった。しかしどうも様子がおかしい。皆なんか暗くないか？　そしてうろ覚えしかない人影がこちらに向かって手を振っている。見た目からして男らしいが、背はかなり低い。髪は無くてスキンヘッドと言う奴だ。ぶっちゃけ怖いオッサンにしか見えんぞ……。

「あれってもしかして……」

沙羅が何か気付いたようだが俺は全く分からない。

「あぁそうだ。ガンジーだ」

先生は当たり前のように謎の言葉を発する。何だ、坊主か？

「はぁ？　誰だ、そりゃ？」

「えっ！？　ガンジーってあの？」

斉藤が意味不明な事を発する。この学園では常識なのか、ガンジー……？　そんな俺の疑問にクスリと笑いながら高坂さんが答えてくれた。

「あのですね……。ガンジーと言うのはお坊さんではなくて、この学校の用務技師さんのあだ名ですよ。『身体がムキムキでとても頑丈なジジイだから』ってガンジーなんですって。変ですよね」

「ガンジーね……。でもどうしてそんな人が居るんだ？」

「ガンジーとは先生考えましたね……。確かにあの人なら大丈夫かもしれませんね……」

沙羅は少しニヤけながら頑丈すぎるジジイことガンジーを見下ろす。

「まぁ腐れ縁で、こんな事もあろうかと呼んでおいたのさ」

「全くわからんぞ……誰か説明しろ」

俺以外分かっているようだが皆俺を無視してくる。頑丈なジジ

イがどうしたってんだ。
「あ、ああ……そうね。桂聞いて、あそこに居るガンジーにはもう一つ呼び名があるの」
沙羅が話を始めてくれる。もう一つの呼び名だと？　もう既にヘンテコあだ名が有るのにまだあるのか……。
「ガンジー、又の名を仏の剛田と言って、彼に掛かればどんな札付きの悪でも直ぐに更生させると言われる不良達から恐れられる男よ。あいつらも仏に捕まったからには数日後には頭丸くして念仏とか唱え始めるんじゃないかしら……」
沙羅が恐ろしそうに説明してくれる。それはそれで大丈夫なのか？　別に何も恐れなくとも普通にいい人のようだが……剛田って本名なのか？
「なるほど、だからあんなにあいつ等表情暗いのか」
やっと理解した俺が呟く。
「そう言う事だ。だからこの後の事は心配するな」
後ろで腕組をしながら俺達の方を見る星野先生。そんな星野先生にお礼を言う。
「そうですか、ありがとうございます」
「なに、どうって事無いさ」
俺の言葉を聴いて煙草を吹かしながらそれだけ呟いた。
「あ、そうだ。私気になってた事があるんだけど」
一息つく間も無く沙羅が何か言い出した。まだ何かあるのか。
「気になってる事ってなんですか？」
沙羅の隣で先ほどまでの不安な表情が消えている高坂さんが逆に沙羅に聞き返す。
「あ、高坂さんは居なかったんだけど……。あいつ等に会う前に私達が感じた匂いって何だったのかな？　って思って」
「ああ～、アレは煙草の匂いでしょ」
斉藤が沙羅の疑問に答える。
「俺もそう思うな、俺と沙羅は普段から先生の煙草の匂いを嗅い

でいるから慣れていて分からなかったんだろうよ。だから煙草の匂いに敏感な斉藤だけが感じたって事だろ」
斉藤よりも少し詳しく説明すると、沙羅は納得した様子で手を叩いた。
「なるほどー、そう言う事……」
「沙羅に続き、俺も実は気になってる事があるんだけど……」
一つ疑問が解決したので、次は俺が話しだす。
「まだなんか有ったっけ？」
「いや、もう終わった事だから良いんだが……ちょっとな」
「ふぅーん、そうなんだ。何でも良いけど早くしてね」
沙羅はとても興味無さげに口を押さえて、ふあぁーと欠伸をする。お前は自分の疑問が解決したらそれで良いのか！？　そんな沙羅は無視して話を切り出した。
「俺が気になっているのは先生、貴方の事です」
俺が本題へと入る。俺の言葉を聴いた先生はピクリと肩を動かした。
「何だ、私が何かしたか？」
「どうしたんですか？　先生はすごく良くしてくれましたよ？」
高坂さんが不安そうに尋ねてくる。
「あ、別に星野先生が悪者だって話じゃないから心配しないでくれ」
俺がそう言うと高坂さんは、『そうですか』と言って静かにしてくれた。その会話を聞いていた星野先生はクッっと小さく笑った。
「えっと、だな……。さっき高坂さんが言った通り先生は良くしてくれた。先生のおかげで助かった部分も多いと思う。でも何だか準備が良すぎると思わないか？　先生は今回俺達だけで肝試しをするのは危険だからって事で来ただけなのに、普通にしていたら必要の無い剛田を呼んでいたり、さっき『高坂が居たのは予想外だ』って言ったりして……まるで不良が居るのは分かってたみたいな言い方ですよね？　後考えてみれば、そもそもこんなバカみたいな肝試

しに先生が来るとは思えないんですよ」
疑問に思ったことを全部一気に言ってみる。
「ちょっとバカみたいって何よ！」
沙羅が文句を言ってくるが無視だ。
「うーん、確かにそう言われればそうですね……」
「って事で俺が言いたい事は、先生は最初から高坂さん以外の事を知っていたんじゃないですか？　って事です。あくまで俺の想像ですけど」
「……私がそうした動機は何だ？」
俺が言いたい事を言い終えると、先生は少し黙ってからそう言った。
「動機ですか……。コレも俺の想像ですけど、多分単なる先生の暇つぶしじゃないですかね。何故かは分からないけど先生は前から夜中の学校で不良の生徒達が屯しているのを知っていた。そしてある時図書室で屯している三人の生徒が夜中の学校で肝試しをしようとしているのを知った先生は、何を思ったかその生徒達と不良の生徒達をぶつけてみようと考えた。面白半分に。ただぶつけるだけじゃ何が起きるか分からないので予め何が起きても良い様に、事を止められる剛田を呼んでいた。そんな所じゃないですかね？」
俺が長台詞を言い切ると先生の顔は明らかに笑っていた。星野先生を初め皆俺が話している間は静かにしてくれていた。ところで斉藤、さっきからお前椅子に座ってうつ伏せになっているけど寝てないだろうな？
「くっくっく……」
「先生、どうでしょうか？　外れてると俺、かなり恥ずかしいんですけど……」
多分当たってると思う……。済ました顔してるけど結構緊張してるんだぞ。
「いや合ってるよ。正解だ、驚いたよ。さすがに推理小説ばかり読んでいるだけはあるな」

先生はそう言って笑った。良かった、これで間違っていたらひどい事になっていた所だ。
「こんなの全然推理だなんて言えませんよ。ただの想像でしかありません」
確かに多少考えはしたが、こんなの推理なんて言えない……とはいえ、肩に入っていた力が一気に抜ける。ふぅー、緊張した……。
「杉下の言う通り、確かに私は前から不良がいるのを知っていたよ。こんな事をしている理由も大体当たってる」
先生が当たっていると言ってくれて良かった。この人は当たっていても白を切ってきそうで怖かったからな。
「えぇー！　本当なんですかー！？」
沙羅が驚きの声を上げる。
「本当だ」
先生がそう言いながら煙草を吹かし笑った。
「でも何で？　言ってくれれば良いのに」
「悪かったな、山本。でも言っちゃたら覚悟してるからつまらないだろ？　こうゆうのは自然なのが良いんだよ」
『悪かった』なんて言ってるけどその表情には悪びれている様子は無い。
「でもどうして先生は夜に不良が居るなんて知ってたんですか？　図書の先生なんて普通の先生より帰るの早いですし、良く分かりましたね」
何時の間にか起き上がっていた斉藤が急に動き出す。
「あ、カっちゃん起きてたんだ」
沙羅が軽くそのことに触れた。俺も寝ていたと思ったが……。
「あぁそれについては単なる偶然で知ったんだよ」
先生が斉藤の問いに答える。偶然って何だ？
「数日前に夜家で図書管理人室に書類を忘れたのに気付いて取りに行ったんだ。その時今日と同じように三階に明かりがついていてな、気になったんで書類を取った帰りに寄ったんだよ。そしたらあ

いつ等の声がしたんでな、それで分かったんだよ」
先生は不良が居た理由を簡単に説明してくれた。
「ちょっと待ってください、先生気付いた後どうしたんですか？」
ふと聞いてみる。嫌な予感がした。
「そうだな、面倒なんでそのまま何もせず帰った」
先生は豪快に笑いながらそう言った。まぁ俺の予感が当たった訳だ……。
「そんなの先生だったら止めるのが普通でしょう！？　てか先生じゃなくても止めるべきですよ！」
沙羅がダメ人間に突っ込む。はぁー、聞かなきゃ良かった……。
「いや、どうせ私だけじゃ何も出来ないし、その内言おうとは思ってたのだが……これまた面倒でな。杉下達が肝試しするって言うもんだから、ついでに片付けようと思ったのさ」
先生はまたしてもダメぶりを見せてくる。星野先生らしいと言えばらしいけどさ……。
「じゃあ何ですか？　今日の事は全部星野先生の掌の上だったって事ですか？」
斉藤が結局の結論を口にすると、さらっと先生はそれを肯定した。
「まあそういう事になるな。ご苦労さん」
「うぁーひでぇー！　そんなのありかよ……。何か一気に疲れた……」
斉藤がそう言ってまたも机に伏せて撃沈してしまった。
「私も何だか疲れちゃったわ……」
今回は沙羅も撃沈する。
「はぁー本当だよ……」
そしてこの俺も肩を落として撃沈する。先生には敵わん……。
「ふふふ……！」
その時、沙羅の隣に居てずっと静かにしていた高坂さんが明るい笑顔で笑っていた。

「え……？　どうした？」
楽しそうに笑う高坂さんに尋ねる。
「いえ、皆さんとても楽しそうなので……つい。皆さん仲が良いんですね。羨ましいくらいですよ」
そう高坂さんは言った。嘘を言っている様には見えないな……。楽しそうか？
「そうかな？　なんか恥ずかしいわね……」
沙羅が照れ臭そうにしている。
「私には皆さんのような一緒に色んな事をする友人は居ませんので、羨ましいです」
高坂さんは少し寂しそうに微笑みながらそう言った。
「暗い……暗すぎる……」
先ほどの高坂さんの言葉を聴いて沙羅が下を向いて小さくそう呟いた。まぁ俺もそう思っていた所だ。どこまで不幸オーラを漂わせれば気が済むのか。
「高坂さん……」
続けて沙羅が高坂さんに話しかけた。
「な、なんでしょう？」
高坂さんはトーンの下がった沙羅に気付いて少し緊張している様子。そのままのトーンで話を続ける今の沙羅が、一番幽霊らしいかも……。
「高坂さん……本好き？」
「ほ、本ですか……？　はい好きですよ……結構」
沙羅に怯えながらも質問に答えていく高坂さん。俺は二人のやり取りを見て笑いそうになるのを我慢する。斉藤と星野先生の二人も会話に笑わずに静かに耳を傾けている。
「良かった！　じゃあ高坂さん！」
「なんでしょう……？」
沙羅の上がり下がりに着いて行けずさっきよりも表情が硬い。
「いえ！　高坂さん改め美優！　貴方図書室クラブに入りなさい

！　その歪んだ考えを叩き直して上げるわ！　コレは命令です！」
沙羅は大声で歪んだ笑顔を見せる高坂さん改め美優にそう命令した。
「くっくっく……」
まずい笑いが……。
「と、図書室クラブですか？」
押されっぱなしの高坂さん。がおどおど訊ねる。
「そう、図書室クラブよ！　読書好きなんでしょ！？　だったら入りなさい！」
完全に沙羅のペースだ。それにしてもうるさいな……気合入りすぎだろ。
「えっと図書室クラブってなんでしょう……？」
戸惑いながらも何とか把握しようと努力する高坂さん。まぁ気になるよね。何なんだよ、図書室クラブって。
「うるさい、そんな事はどうでも良いのよ！　ハイかイイエで答えなさい！」
どうでもよくは無いだろ！　そこ一番大事な所だろうが！　無茶苦茶だろ……。
「え……え……っ？」
高坂さんが目をグルグルさせながらフリーズした。可愛そうに……。
「え、じゃない！　どっち！？」
そんな高坂さんに沙羅が追い討ちをかける。
「は……はい……」
ついに高坂さんがフリーズしながら言ってしまった。コレって脅迫なのかな？
「そう来なくちゃ！　期待通りの答えよ！」
沙羅、アレは誰も断れないと思うんだが。というか結局脅迫だよな？
「あ、あの一体図書室クラブって言うのは何なのでしょうか？

そんなの聞いた事無いんですが……」
フリーズを終えて高坂さんが当たり前の質問をしてくる。
「桂！　言ってあげなさい！」
突然の沙羅からのご氏名だ。予想もしなかった飛び火だ！
「はぁ？　何故俺なのだ？　斉藤でもいいじゃん」
「うるさい！　口答えするな！」
反論したら沙羅に怒られた……。こいつは何をどうしたいんだ。しょうが無いな……。
「はいはい、えーとだね。図書室クラブって言うのは、ここ図書室で俺達クラブ会員が好きな本を読んだり話したりしてるクラブの事。実際はそんなクラブ無いから。ただ屯してるだけ」
適当に説明する。『そんなクラブ無い』って言った時から沙羅がすごく睨んで来てるけど気付かない振りをする。視線が痛い！
「要するに、本を読めば良いんですか？」
「うーん大体合ってるね。それもだけどもっと簡単に言うと、結論は『俺達とお友達になりましょう』って事だよ」
一言で言い切る。考えてみると薄っぺらいクラブだな……。なんか悲しいな……何故だろう？　俺は気付くと自然に上を向いていた
「友達に……」
高坂さんが何か言っていたな。聞いてなかった……なんて言った？
「まぁさっきは沙羅に無理矢理だったけど高坂さんが嫌なら入らなくても問題無いから」
気持ちを立て直してさらっと言い放つ。
「ちょと、桂！　アンタ何言ってんのよ！　せっかく私が……！」
沙羅が俺の発言に反発しまくるが適当に無視する。
「高坂さんの好きにして良いよ」
俺が高坂さんから目をそらさずに言う。どうなるんだろう……結構不安だったりする。
「私なんかが入って良いんですか？」

高坂さんが小さい声でそう呟いた。
「俺は良いと思うぞ、沙羅に賛成だ」
呆然とする高坂さんにぶっきらぼうに言う。
「俺も賛成だなー入ってくれたら嬉しいなー」
机でくたばる斉藤も同意してくれる。
「勝手にしろ、今更三人だろうと四人だろうと変わらん」
腕組みする星野先生はだるそうにそう言った。ははは……この人らしいな。
「もちろん私は入って欲しいわ。て言うか入りなさい！」
沙羅も改めて入る事を勧める。
「皆さん……」
何故か高坂さんは涙目になっていた。可笑しな人だ。
「私……私！」
高坂さんが今までに無い大きな声と泣きそうな笑顔で叫んだ。

薄暗い道を歩いている。隣には斉藤が眠そうに両腕を頭に組んでいる。斉藤の反対側にはニコニコとしながら楽しそうに歩く高坂さんが。ちなみにこのメンバーの中に沙羅は居ない。なぜかと言うと俺達は俺の家がある方向に歩いているため、家の方向が違う沙羅とは学校を出た後しばらくしたら別れてしまったのだった。斉藤は眠そうに、高坂さんは楽しそうにそして俺はいつも通りボーっとしながら歩いていた。
「高坂さん、あのさぁ……」
「あっ！」
俺が隣で楽しそうに歩く高坂さんに話かける。すると高坂さんが急に声を上げた。
「ど、どうした？」
「その高坂さんって言うの、止めません？　何か他人みたいです

し。私の事は美優とかで良いですよ、桂君」
高坂さんは歩きながらこちらを向いて笑顔のまま言ってきた。
「う、うむー……。じゃあ、美優で……」
沙羅と違ってなんか言いづらいな……。俺らしくも無いし。
「よし！　おっけー」
なんて益々楽しそうな高坂さん改め美優。俺の話は……？
「そう言えば桂君、何か言いたい事が有ったのでは？」
と美優は俺に聞いてきた。分かってやったのか……。何か調子狂うんだよな……。
「あぁ。美優さ、本当に良かったのか？」
「良かったって何が、ですか？」
分かっているだろうに。はぁーっと溜息をつきながら続ける。
「図書室クラブの事だよ」
「そうですねー。良かったんですよ、アレで」
本当に楽しそうだ。
「じゃあ良いけど」
なんて言いながら前を向く。疲れる、何故か。
「ところでもう直ぐ美優ちゃんの家じゃない？」
今までただ眠そうな斉藤が突然動き出して話出す。
「あ、そうですね。もうそろそろ曲がらないとです」
気付いたように美優は曲がり角で止まった。
「じゃあこの辺でさよならです」
美優は止まったまま言う。
「いや暗いし遅いから家まで送るぞ」
時間を見ればもう三時を過ぎたところである。女の子が一人で出歩く時間じゃあ無い。
「いえ、大丈夫です。家は直ぐそこですから。三分かかりませんよ」
美優はそう自慢げに胸を張った。いや自慢じゃないぞ？　斉藤くらいしか悔しがらないぞ？

「そう言う事なら良いか。ま、気を付けろよ」
「はい！」
俺の心配に元気良く答える美優。何か逆に不安だなー。
「じゃあねー」
「またな」
隣で斉藤が眠そうに手を振った。俺も手は振らないが別れの挨拶を済ませる。
「はい！　さよならです！」
こいつはアレからずっと元気が良いな。
「明日からよろしくお願いしますね、先輩！　じゃ！」
金色の髪の少女は元気良くそう言って俺達に一礼してから駆け足で帰って行った。
「あれ？　美優って後輩だっけ？」
斉藤が少ししてからそう呟いた。
「図書室クラブの先輩だろ。学年は俺達より上だぞ、同学年にあんなハーフいないだろ？　だからやりづらいんだろうが。大体俺達に後輩は居ないだろ、一年だぞ」
はぁーっとまた自然とため息が出る。実際はそれだけでは無いが。
「そうか、確かに居ないよね。どうしよか？　まぁ俺はあんな綺麗な子が図書室クラブに入ってくれて嬉しいから良いけど」
斉藤はどうでもよさそうである。コイツらしい……。
「まぁ取り敢えず俺らも帰るぞ」
俺はそう言ってまた歩き出す。
「了解」
斎藤も俺の後を着いて来た。
「じゃあな」
俺の家に着き斎藤とも別れる。
「おう、また明日」
斎藤は自転車に跨り直ぐに遠く消えていった。

「さて今日は本当に疲れたな……」
俺は一回大きな欠伸をしてから家に入って行った。

ジリリリリリ――！
「うるさい！」
俺は耳元で激しく鳴り響く目覚まし時計を止める。また朝が始まった。昨日はあの後直ぐに寝たのだが疲れが取れている様子はあまり無い。いくらなんでも遅くなりすぎたんだろう。
「うぅー……。眠い……」
時間を見れば7時半で余裕だが、しかしそんなことも言っていられない。さっさと起きて着替えを済ませる。
「おはよー」
キッチンで料理を作る母に挨拶をする。どうやらおかずを作っている様子。
「あら、おはよう」
相変わらず母はのんびりしているなーなんて思いながらいつものようにパンを食べながらテレビを見た。
「さて時間だな」
家を出る時間になり準備を済ませる。
「行って来ます」
なんて簡単に言って家を出た。外に出れば昨日と同じく人がたくさん歩いていた。俺もその中に入って行く。
しばらく歩くと前のほうに遠くからでも直ぐに分かる人物が歩いていた。俺は特に迷いも無く近づいて行く。
「おはよう美優」
俺は後ろから話しかける。話しかけられた方は一瞬ビクリとしてからこちらを振り返り、俺を確認した。
「あ、桂君。おはようございます」

美優は直ぐに明るい表情になり挨拶を返してきた。
「昨日は帰れたみたいだな」
何事も無いようなので一安心する。
「えぇおかげ様で無事ですよ」
美優はニコリと笑って答えた。
「じゃあ行くか」
「はいそうですね」
いつまでも立ち止まっていては遅刻してしまうので歩き出す。
美優も後を着いて来る。
「おーい！　ケイに美優―！」
歩き出すと直ぐに後ろからこれまた聞き覚えのある声がする。
「斎藤お前、今日はやけに早いな。何かあったか？」
自転車で直ぐに追いついた斎藤に対して俺が問いかける。
「おう、今日は殆ど寝ていないから早いのだ！」
そう言われて斉藤を見ると目の下に隈らしき物が……。まあ……時間が時間だったからな。
「そうか……。お前、大変なんだな」
コイツ今日は授業中ずっと寝てるだろう……なんて思いながら歩いていく。
「この調子だとまだ来るのかな？」
俺は話しをしている二人の横で小さく呟いた。
「もうそろそろだね」
斎藤が学校の近くに来てからそう言った。出てくるならこの辺だな……あ、いた。
「あれ？　みんなお揃いとは偶然ね。さすが図書室クラブ」
校門に着く頃になり前に沙羅が歩いていた。
「おはよう美優」
俺達は一度立ち止まった。沙羅は美優に挨拶をする。
「おはようございます、沙羅ちゃん」
美優も笑顔で返す。

「あれ？　美優だけなの？」
斎藤が美優にだけ挨拶をした沙羅に聞く。
「分かってるわよ。二人ともおはよう」
沙羅がヤレヤレと言った風に挨拶する。
「そうそう！　おはよう沙羅！」
「……おっす」
俺も斉藤に続けて適当に済ませる。
「桂あんたやる気無いわねー……」
「ほっとけ」
沙羅がため息をつきながら言う。それに対して適当に返した。
俺だって斎藤ほどじゃないが眠いんだ。
「まぁ良いわ。そんな事よりあんた達！」
「な、なんだよ……」
沙羅が唐突に大声を上げた。無防備すぎた俺の頭はその声を聞いてキーンとしてしまう。
「今日は来るんでしょうね？」
沙羅は普通の声の大きさに戻ってそう言った。
「どこかに行くんですか？」
美優が不思議そうに俺に聞いてくる。
「図書室の事だよ。こう言うのは大体図書室だから」
俺は沙羅に聞こえないように美優に言った。
「その事ですか。じゃあ」
美優は俺の話しを聞き終えると沙羅の方に向き直し、元気良く言った。
「はい！　もちろんです！」
「俺も行くよー」
「俺も大丈夫だ」
続けて斎藤と俺もＯＫの返事をする。ま、これで全員ってわけだ。
「まあ、当然ね！」

沙羅は気分が良さそうだ。その後もしばらく話しは続いたのだが……。そんな時俺達の耳に恐ろしい音が聞こえてきた。冷静に考えるに、学校のチャイムの音だ。

「え！　桂、今何時？」

沙羅が時間を聞いてくる。俺も見てる所だよ！

「今は八時二十分だ！　ヤバイ、話しすぎた！　遅刻するぞ！」

俺はそれだけ言うと学校へダッシュを開始した。

「ちょっと、待ちなさいよ、桂！」

沙羅が俺の後を追ってくる。

「待って下さいよー……！」

その後ろから美優が走ってくる。あの子足遅いな……。

「ちくしょー！」

斎藤は自転車に乗って追ってくる。自転車は流石に速いなおい！

こうしてそんな風に、いつもと同じでしかしいつもとは少し違う日が始まるのであった――。

星野先生とデラックス（1）

学校の授業も既に終わり今は放課後の部活動などの時間になっていた。そんな時間に全く人気が無い図書室のその奥である図書管理人室と言う狭い部屋に俺達図書室クラブ会員達が集まっていた。一体何をしているのか、と言えば……変な儀式だった。

「お、おい、コレ本当に大丈夫なんだろうな？」

沙羅が先ほど図書管理人室の床に書いた謎の図形を見ながら斉藤は余りにも不安になったのか妙な馬鹿でかい本を持つ沙羅に訊ねていた。

「何言ってんのよ、カッちゃん、こうしなさいってこの本にも書いてあるじゃないの。だから平気に決まってんじゃない。それとも今更になって怖気ついたのかしら？」

奇妙な図形を描き終えた沙羅が今回はツッコミになっている斎藤を少し睨むように見つめている。今回は斎藤がツッコミなので俺は随分楽である。

「この状況を見れば誰だって不安になるわ！　なんだこの部屋は！　カーテン閉め切って電気消してロウソクつけて床にはよく分らない図形と来た！　もう何かの儀式にしか見えんでしょうが！　大体、そんな胡散臭い本に書いてある事が信用できる訳がないだろ！」

斎藤は沙羅が持つ奇妙な本を指しながらこの状況に思いっきりツッコミを入れている。沙羅の馬鹿にしたような目線に少し熱くなっているんだろうか？

「まぁ、まぁ、一輝君落ち着いて下さい。結構楽しそうですよ、コレはコレで」

熱くなっている斎藤を後ろに居た美優が止めに入る。しかし止めるのは斎藤なんだ……。美優は楽しければそれで良いのか？

「そうよ、美優の言うとおり少し大人しくしてなさいよね。大体コレは儀式みたいじゃなくて儀式なんだからね。分ってないと呪う

わよ？」
沙羅が斎藤にさらっと笑顔で怖い事を言った。こいつは本気でこんな事信じているのだろうか？　馬鹿馬鹿しい。と言うか何の儀式なんだ？　呪いの儀式なのか？
「美優まで……。少しは止める人増やしてよー」
斎藤が疲れきった顔で悲痛の叫びを上げた。沙羅を俺らがそう簡単に止められる訳無いだろうが。
「ほらほら、カっちゃん分ったらそこどいてくれない？　じゃまよ。美優、そこのロウソク消えちゃたから点けておいてくれない？」
疲れた顔の斎藤を沙羅がシッシっと俺のほうへと追いやり、美優を助手のように使っていた。
「はぁー……」
沙羅に完敗して疲れ果てた様子の斎藤がトボトボ歩いて来た。
「お疲れ斎藤。止められなくて残念だな」
俺の隣で腕組みをして机に寄りかかる星野先生が斎藤をねぎらった。
「先生―あいつ等ほって置いて良いんですか？」
斎藤は今回の事が始まってから殆ど動かずに俺の隣に居た星野先生に意見を求めた。動いてないんだから分るだろ。
「別にいいんじゃないか？　面白いし私も良い暇潰しになるからな」
星野先生はさも当然かの用にそう言い放った。この人こそ本当に面白ければそれで良い人なのだろうな。
「はぁーそうですか」
斎藤はまたしても惨敗して大人しく星野先生の隣にパイプ椅子を用意してそこに座り一人でなにやらブツブツと愚痴らしき物を呟きだした。しかし何だ、本当に今回は楽だな……俺必要か……？
「さて準備も出来たし早速始めましょうかね」
沙羅がチョークを使いなにやら最後の模様を書き終えて手に付いたチョークの粉を落としながらこちらを見てニヤリと笑った。

「さて一体誰が消されるのかな？」
俺の隣に居た星野先生が突然物騒な事を言った。
「えぇー！　そう言うタイプの儀式なんですか！？　アイツ絶対俺消しますよ！」
先生の発言後ぐったりしていた斎藤がいきなり立ち上がった。俺でもお前を消すな。
「そんな事無いわよ、どんな事が起こるかなんて私も良く分らないんだから」
興奮する斎藤に沙羅が落ち着かせるためなのだろうが逆にそれはそれで怖い事を言った。それは斎藤も同じようで。
「何にも分んないのにやってんのかよ！？　計画性無さ過ぎでしょ！？」
「そんな事無いわよ！　何が起こるか分らないから面白いんじゃない！」
「いや、それが計画性ないんだってば……」
斎藤と沙羅の小さな討論は良く分らない形で終わった。
「さて本当に始めるわよー」
沙羅は気を取り直し古びた本を開きなにやら良く分らない言葉を発し始めた。呪文ってヤツなのだろうか？
「キェェェェ！」
呪文らしき言葉を一通り言い切ったのか最後に沙羅が奇声を上げた。
その瞬間床の謎の図形が光出し薄暗い図書管理人室を青白い光が包み込んだ。
「こ、コレは……！？」
「沙羅ちゃん成功ですかね！？」
「すごいじゃないか山本」
「……」
奇声を発した本人と俺はだまっているが他の皆は次々に驚きを口にした。しかし驚いたのもつかの間で直ぐに光は消えていた。

「……ん？　何か起きたか？」
光が消えてもしばらくしても何かが起こる気配は無い。不自然なほど静まりかえっている。星野先生は一言そう呟いた。
「結局何も起きなかったって事なのか？」
痺れを切らしたのか斎藤がそんな事を口にした。
「まぁそんなもんよ。さて片付けましょうかしらね」
斎藤の発言などどうでも良いかの様に沙羅はカーテンを開け道具を片付け始める。全く未練が無いようだ。歴史に残るかしれないような現象を目の当たりにしても沙羅にとってはどうでも良い事の様だ。
「えぇーコイツ何がしたかったんだよ……。はぁー」
片付けを始める沙羅と美優を横目に斎藤は深い溜息をついた。
しばらくするといつも通りの図書管理人室に戻っていた。
「もう大分片付いたしそろそろ帰りましょうかね？」
煙草の吸殻や空きカンなどが消えて来た時よりも綺麗になった部屋で沙羅が帰宅を提案した。もう大分始めたときから時間がたっていた。
「そうですね、そろそろ帰りますかね」
美優は沙羅の提案に鞄を持ち上げながら答えた。もう特にすることも無いし今日はこの位で俺もいいと思う。
「はいはい、もう何でも良いですよ。今日は疲れた！　帰って寝るわ」
斎藤は何か吹っ切れた様子である。
「やっと帰るのか、まぁ気をつけてな」
星野先生は俺達が帰る話しになるのと同時にスーツの内ポケットから煙草を取り出した。
「もう、先生いきなりですか？　まぁ今回はカっちゃんが居るからやってる時は吸わないでいてくれたから良いですけど、あんまりココで吸っちゃ駄目ですからね」
沙羅が今にもライターで火をつけそうな星野先生に向かって注

意した。
「分ってるさ、それより早く帰らなくていいのか？」
この人は絶対に分って無いだろうな。
「帰りますよ、でもそんな急ぎじゃないですよ」
沙羅はそんな事を言いながらも確実に帰る準備をし始めた。
「それじゃ皆行きましょう」
沙羅はそう言うと図書管理人室から斎藤と美優を連れて出て行った。
「桂も直ぐ来なさいよ、校門で待てるからね」
最後に沙羅はドアから頭だけ出すようにしてそう言ってまた消えていった。俺ももう帰ろうかな。
「杉下、今日は楽しかったか？」
横で煙草を吸い始めた先生がボーっとする俺に対して煙を吐きながら訊ねて来た。
「……まぁ楽しかったですよ。ただ……」
ギシギシ――
俺は身動きの取れない身体でもう一度動こうと努力してみる。
「この手と足の縄が無ければもっと楽しめたでしょうね……」
俺の手足には沙羅が結んだ縄がきつくしてあって身動き取れないでいた。
「仕方無いんじゃないか？　そうしないと杉下帰るんじゃないか？　山本もそう思ったから縛ったんだろ？」
星野先生はタバコをふかしながら何やら机に背を向けたまま引き出し開け中をあさり始めた。
「確かにそうですけど、終わったんだから解いてくれても良いだろうに……」
まだ解けない縄を俺は必死に解こうとする。くそ！　なんて硬さだ！
「ほれコレ貸してやるよ」
星野先生は机から取り出したカッターを俺の前にほうり投げた。

目の前にあるけれど上手く動けないので取りに行くのも大変だろう。
「先生……貴方も中々酷いですね…」
まぁ無いよりまだマシだがそれでも酷いな。
「しかし今日は縛られているからとは言え杉下はなにもしてないな」
俺が必死カッターを拾おうとしている時に先生がポツリと言った。
「……そうですね」
少し俺は動きが鈍くなる。
「杉下がいなくても結構ちゃんと回ってたな」
先生は更に追い討ちをかけるように呟く。
「だから何ですか？　たまには良いんじゃないですか？」
そうだ、いいのだ、たまには俺が何もしない日が有ったって。
あれ？　おかしいな？　手に汗が滲んでカッターを上手く握れないな……。
「そんな事より早く帰らないと、しかし切れんな、この縄」
俺は先生に投げ与えられたカッターを使用し縄の切断を必死に試みる。なんだか漫画みたいだな。
「これからは杉下不要になるかもしれんな。高坂も入った事だし」
先生は未だに俺の隣で煙草を吹かしながら訳の分らない事を言っていた。早く帰りたい……。星野先生の戯言を適当に聞き流し以外に悪戦苦闘しながらも何とか縄を解く事に成功した。
「よし！　切れたぞ！　やっと帰れる！　待ってろよーアイツら！　それでは先生さようなら！」
俺は縄を解くと隣で結局動く事の無かった先生に軽く挨拶して図書管理人室を急いで後にした。先生はただ一言“あぁ”と呟いて送りだしてくれた。はっはっは！　待っていろ、皆！　俺の力を見せてやる！　俺は嬉々とした足音と共に図書室を後にして沙羅や斎藤たちの待つ校門へと向かった。
校門に着くとそこには頑丈そうな用務技師さんが一人リアカー

を引く姿が見えるだけで他に人影は見当たらなかった。俺は無言で空を見上げたんだ……。そう夕焼けに染まる黄昏時の空を……。

ジリリリリ――！

頭の横に存在する青色の騒音発生器が朝七時になるのと同時にいつも通りに容赦無く安眠中の俺を叩き起こすように大声を上げた。ちなみにこの時起きないと八時になるとまた騒音を発生させる。しかし貴女も相変わらず仕事熱心すね……。

「うぅ……」

ジリリリリ――！

「う、うるせぇ！」

俺は意識がボンヤリとしているがそのまま耳元の目覚まし時計と言う名の騒音発生器を思いっきり叩いて黙らせる。そこで大人しくしとけバカが！

「くそ……もう時間か……」

叩き起こされて中々に不機嫌だがこのまま二度寝なんてしたら俺は次に鳴ったとしても昼まで起きないだろうな。

「さて、そろそろ起きなくては」

ヨロヨロとフラつきながらではあるが壁の制服までの道を行きサッサッと着替えを済ませてしまう。着替えを済ませたら一階へと階段を下りて行く。

「あら、おはよう桂。しっかり起きて偉いわねー」

一階に下りるとキッチンで朝食を作る母の姿があった。

「はいはい、有難うございます」

いつでもノンビリとしている母と軽く朝の挨拶を済ませる。テーブルの上には既に朝食であるトーストとスープなどが並んでいる。俺はそのトースト達をテレビのニュースを見ながら黙々と食べ身支度を済ませた。

「それじゃあ行って来ます」

玄関に立ち後ろで送りだしてくれている母に挨拶をして家を出

て行く。空に輝く太陽の眩しさに一瞬目を細める。
外に出ると登校時間の真最中と言う事もあり家の前には沢山の学生やサラリーマンが歩いているのが見える。自転車だったり歩きだったりとまぁ、いつもの風景である。俺もそんなどこにでもあるような風景へと身をゆだねて行く。
俺の住む町セントラルシティーは数十年前から開拓が始まり俺達の時代にはもう立派なものとなっていた。学校や巨大デパートなどなどそのほかにも遊ぶためのレジャー施設なども充実しておりなかなかに発展している町であるのだ。しかし俺には生まれた時からすんでいる街なのでこの街がどの位すごいのかなんて分らないのだが。逆に不満なんかもあるくらいである。そして俺なんかよりも強い不満を持つ奴も居るだろう。
なんて事を考えていると何やら前方に知った後ろ姿を発見した。相変わらずアイツは目立つなー。気付くようになったのは知り合ってからだけど。
「おーい美優―」
俺は朝の登校風景に少しばかり浮いた雰囲気を持つ金髪でウェーブした髪を持ち俺より一学年上の少女に後ろから声をかける。少女は一瞬ビクリとした後こちらを振り返り何故かホっとした様子を見せた。
「あぁ桂君ですか、あんまり驚かさないで下さいよー」
一体なんだと思ったのかは全く持って不明だがとりあえず俺は美優から危険視されていないようで安心したよ。
「おはよう美優、最近は良く会うな」
知り合ってから登校経路がほぼ同じという事もあり俺と美優は登校の時は良く合うのだ。
「おはようございます桂君、そうですねー良く会いますね。運命か何かでしょうか？」
美優は微笑みながら冗談らしくそう言った。
「運命とは言いすぎだな、時間が同じ位なんだから会ったって何

もおかしくないさ」
俺は美優の冗談に軽く返事をする。
「ところで桂君、昨日はちゃんと帰れましたか？　少し心配で……」
美優は申し訳無さそうな顔で昨日の事を聞いて来た。この子は心配してくれてたんだな……。
「あぁ大丈夫だ、あの後ちゃんと縄から脱出して帰れたさ。美優こそ俺がいなくてあいつらに付き合うの、大変じゃなかった？」
美優に心配させるのも気が引けるのできちんと答える。勿論悲しみの底で帰ったことは口が裂けても言わないが。
「そっか、それは良かったです。私は平気でしたよ、沙羅ちゃんも一輝君も良い子ですから桂君の心配には及びませんよ」
美優は俺に心配かけないように答えたのだろうがそれは俺が期待していた答えではなかった。美優も悪気は無いんだよね……。俺の発言が分りづらいか……。
「そっか、あいつ等成長したなー」
やっぱり何となく悲しかった。美優はと言えば隣でニコニコしていた。この子はいつも元気だなー……。
「まぁこんな所で立ち話もなんだ、行こうか？」
「そうですねまた前回のように皆とは行きませんが話しをしていて遅刻と言うのは嫌ですもんね」
そんな会話をした後俺と美優はまたノタノタと歩き出した。
美優とは基本的に学校の事についてなどに関して話合っていた。人と話しながら歩くと大分時間が早く感じるものであっという間に学校へとついていた時間もちょうど良く、美優と歩いて来たので頭もかなりスッキリしている。俺達は校門を通りすぎ入り口へと続く石畳の道を歩いている。
「今日は沙羅ちゃんと一輝君とは会えませんでしたね」
「あぁそうだな、まぁ直ぐに合えるさ」
「直ぐに合えるのは桂君だけですよ？　私は放課後まで待ちです

から……はぁー」
美優は皆に会えないのを残念そうに言って溜息をついた。そこまでだろうか？
「少しの辛抱だな、ずっと一緒にいるとそれはそれで疲れるんだぞ」
一体あいつ等とつるんで俺がどんな目にあって来たか……。
「そうなんですか？　桂君は付き合い長いですもんね、色々知ってますよね。私も頑張らなくては！」
美優はどこから来るか全く分らない気合で更に元気を増した。この子は本当に明るいな……。俺は美優にばれない程度の溜息をついた。なとんと言うか疲れるんだよな……嫌いなわけじゃないけど。そんなこんなで歩いていると校舎内に入っていて階段の前に来ていた。
「それじゃここまでですね、また放課後会いましょうね。沙羅ちゃん達にもよろしくです」
「分った、美優もじゃあな」
分かれの挨拶を済ませると美優は駆け足で階段を上がって行った。
「俺も行こうかなー」
美優を見送り自分の教室へと歩いていく。
「あら桂おはよう、美優はもう居ないのかしら？」
教室へ歩きだすと同時に後ろから聞き慣れた声が俺の名前を呼んだ。
「おはようさん。何だ、見てたのか？　話しかけてくれれば良かったのに」
呼ばれてから後ろを振り返るとそこには美優までとは言わないが長く綺麗な栗毛で整った顔つきの学校の白い制服が良く似合う少女がハンカチで手を拭きながら立っていた。
「別にいいでしょ何だって話しかけるも話しかけないも私の自由よ」

良く見ると少女の服装が少し乱れているのが分る。少女の現れた方向には女子トイレが見える。
「なんだ、トイレに行ってたんだったらもう少しゆっくりして服装位整えたらどうなんだ？　一応女の子なんだしトイレ行って汚い格好じゃ駄目だろ？」
俺がそう言っていると同時に沙羅の顔が少しずつ赤くなって行き言い終えると何やらプルプルと下を向いて振るえ出した。
「ん？　どうした？　まだ痛むのか？」
下を向く沙羅に心配して声をかける。しかし沙羅は突然顔を上げ赤い顔で俺をギッリっと睨みつけた。
「どうしたそんなに痛いのか！？」
俺は更に心配してしまう。
しかし俺の心配とは裏腹に沙羅からいきなりグーが飛んできた。
「うぉ！」
そのパンチを俺は間一髪で首を傾けたためなんとか避けることに成功したがもう少しで本当に当たるところだった。しかし沙羅は一発では止まらずに続けて二撃目を繰り出してきた。
「うがぁぁ！」
思いも寄らぬ沙羅の奇声と第二撃に反応仕切れずに俺は沙羅の拳を思いっきり顔面で受け止める格好となりそのまま後ろに吹き飛ばされた。
「どうぁぁぁぁ！」
俺は数メートル飛ばされて仰向けなり停止した。
「いってぇな！　何すんだ！？」
俺は倒れながらも上半身を持ち上げて沙羅の方を睨みつける。
「何でかって？　そんなの女の子がトイレに行ってたなんて人が沢山居るようなところで言うのが悪いのよ」
沙羅は俺を吹き飛ばしてスッキリしたのかもう顔は赤くなくいつもの沙羅に戻っており本当にトイレの事だけだったのか考えさせられる様子であった。大体沙羅はその程度で怒るような奴だったっ

け？
「たく痛てぇな……。そんで気は済んだか？」
倒れた時に打ち付けてしまった右肩を摩りながら訊ねる。
「えぇたいぶスッキリしたわね、最近疲れが溜まってるわ」
やっぱり他の事でのストレス発散か……どうせ無理な読書でもしたんだろう。俺は心の中で呟きつつ横で気持ち良さそうに伸びをする沙羅を少しだけ力の抜けた目で睨んだ。全くコイツは俺と斎藤にだけは本当に容赦ないな……。
「しかし何も美優に会いたいからってそんなに急がなくても良いだろ、放課後にでも会えるんだし」
俺が隣の沙羅に呟く。
「何言ってるのかしらこの桂は……」
沙羅は、はぁーと溜息混じりに呆れた。呆れと不機嫌は沙羅の専売特許だな……。
「会いたいに決まってんでしょ？　学年違うんだから最悪放課後まで会えないのよ？　朝見かけたら挨拶位したいわ。まぁそう言う事を分らないのは桂らしいけど」
そんな自分勝手な事を言いたいだけ言った沙羅は。
「さて私はもう一回トイレにでも行ってアホ桂の言う通り身だしなみでも整えましょうかね」
そう言って来た方向へと戻って行った。ほらな？　アイツ自分で言ってるよ。何だかかなり切ないんですけど。と言うかアイツ昨日俺を置いて行った事全く気にしてないな。いや別に良いよ、うん。気にしてなんかいないんだから……。
「さて教室に早く行こう……」
俺は沙羅としばしの別れをしてその場を後にした。
教室にはクラスメイトが数人居り皆好き勝手にやっている。そいつらと軽く挨拶を交わし俺は自分の机に歩いて行く。机につくと荷物を下ろし席に着いた。席に着いたら特にすることも無いので持って来ている本を読み始めることにでもしようかな。少しするとト

イレで身だしなみを整えるのを終えた沙羅が帰って来て俺の前の席へと腰を下ろした。
「あら桂まだその本読んでたの？」
表紙をしたから覗き込むようにして物を確認すると沙羅はそんな事を聞いて来た。
「まぁな、コレは基本的に暇な時用の奴だからな。頻繁には読んでないんだ」
「へーそうなの、読み終わったら感想聞かせてね、面白そうだったら借りるから」
「良いけど沙羅の趣味から少し外れているかもしれんな」
「まぁ良いわ、適当にさっさと読んじゃいなさい」
沙羅としばらくそんな会話をしていると沙羅がある事に気付いた。
「あ、もうこんな時間じゃない、まだカッちゃん来てないけど平気かしら？」
時間を見ればもう八時半である。ホームルームが八時三十五分なのでもうそろそろ来ないと遅刻になってしまう。もうこの時点でかなり危険な時間帯ではあるが斎藤ならこれは遅刻ルートであろう。
「そう言えば来てないな、どうせまた寝坊でもしたんだろうよ」
俺はどうでもいい事なので軽く流す。
「確かにカッちゃんって遅刻の理由寝坊が多いけどそれでも起きる時間私達より早いわよね」
沙羅は少し笑いながらそんな事を言った。確かに斎藤は早起きだ、俺はともかく沙羅がビックリするほどに……。それでも遅刻する事が多いのだから相当遠い事が分る。俺も親に送ってもらう事でもしなければアイツの家にはなるべく行きたくない。
「斎藤が休むって事は無いだろうから遅刻でもその内ひょっこり来るだろうよ。おっと時間だ」
俺は腕に付いているデジタル時計を見る。時刻はちょうど三十四分から三十五分になった瞬間だった。その後数秒のタイムラグを

置いて学校のチャイムも三十五分の合図を鳴らした。この瞬間斎藤は遅刻が確定したのだ。
「また斎藤は遅刻か？」
「そうでーす」
「まったく今日もか……」
チャイムの後教室に入ってきた担任が教室を見渡してからそう呟きそれにお調子者の奴が返事をした。斎藤の遅刻は結構頻繁に起きるのでもう誰も気にしていない。斎藤遅刻と、担任はそう呟きながら出席簿に何かを書き始めた。
その後斎藤が登場したのは五分ほど後でホームルームも終盤の時であった。廊下からドタドタと音が聞こえ始め勢い良く扉が開いて長身で短髪の眼鏡をかけた男が息を切らせて教室に入って来た。この変な奴が斎藤である。
「セーフ！？」
コレが遅刻した奴の第一発言である。斎藤は俺とは違い普段時計を持ち歩かずなおかつ驚くほどの機械オンチなので携帯も持っていない人間なのでこの時点で自分が遅刻しているかどうか分らないのである。ちなみにこの発言後遅刻している事を教えられてかなりガッカリしていた。そして今回も理由は寝坊だった。
「くそーこの学校始まるの、早すぎなんだよ！」
斎藤はホームルームの終了後に俺の席の前でいつものようにぼやいていた。
「大体俺の家は何であんなセントラルティーのド田舎であんなにも遠いんだ？　普通に死ねるわ！」
既に斎藤の決め台詞になっている、何で俺の家は……が発動した。本当にコイツはコレに関する愚痴が多すぎだ。まぁそうは言っても本当に驚くほど遠いのでこいつには同情するしかないがそれでも面倒だった。しかし同情はしても俺と沙羅はもう面倒くさい方が強くなっているのでコレは適当に流すかからかう事にしている。
「はいはい、良かったな、遠くて」

「そうね、遅行はカッちゃんにお似合いよ」
「お前らもう少し聞いてくれても良いのに……」
こんな感じで流れていく。その後もなんだかんだで、斎藤をいじりつつ今日の朝が終わって行った。
当然ここは学校なので話しをするだけではなくきちんとした授業が存在する。普通ならばしっかりと聞くべきなのだが俺は大体の授業は寝て過ごすか大好きな読書をして過ごすのが基本の学校生活となっていた。そうすると時間の経過が途轍も無く早く感じるのであっという間に半分が過ぎ昼休みになっていた。

「斎藤それは美味いのか？」
沙羅と斎藤と共に俺は昼飯を食べている。斎藤は俺の前で何やら良く分らないものを食べていた。何だ、これは？　初めて見る食べ物だ。
「コレか？　美味いぞ、これはな、斎藤デラックスと言ってだな、昨日俺がついに完成させたスペシャルな食べ物なのだ！」
斎藤がぶっ飛んだ何やら良く分らないことを言っているが、どうやら斎藤が作ったらしい。見た目はなんとも美味しそうとは言えない容姿で黒かった……俺は食いたくない。
「そうか……完成おめでとう」
俺は精一杯な優しさを込めて斎藤を祝福した。
「おぉ有難う、ケイも食うか？」
「全力で遠慮する」
「そ、そうか……」
斎藤は優しく勧めてくれたが俺は斎藤に悪いので大人しく遠慮した。斎藤、それは君だけの物だよ。
「あんた達そんな奇怪な食べ物のことはどうでも良いけど今日は終わったら暇なんでしょうね？」
俺と斎藤が話していると隣で弁当を食べていた沙羅がそんな事を言い出した。コレは俺達共通で毎日のようにしている決まった会

話なので。どういったものか直ぐに分る。
「今日か？　俺は当然暇になっているぞ」
「俺も暇じゃー」
斎藤と俺は沙羅に暇である事を知らせる。暇じゃないときなど滅多に無いんだよな……俺ら。
「そ、勿論私は行くわ。それじゃ昼休みもそろそろ終わるし次の授業の準備でもしようかしら」
沙羅はそう言うと手早く片付けを済ませ席から離れて行った。斎藤は未だに斎藤デラックスを俺の前でほお張っている。コイツはどうしてこんな物を作ろうと思ったのか……。
さてさてそんなこんなで今日の授業も終わりとなり。俺達のお楽しみ時間へと向かっていた。

星野先生とデラックス（2）

「さて行くとしようか……」

俺は沙羅と斎藤と共に図書室への道を歩き始めた。

俺達が教室棟から職員棟への道を通りこしてついに図書室の前へと辿りついた。

「失礼します」

一番最初に先頭を歩いていた沙羅が軽く挨拶を済ませてそれに続けて俺と斎藤も挨拶を済ませ図書室へと足を踏み入れていく。俺が入ったその時一番は初めに入った沙羅が何かに気付いた。

「あら美優じゃないの、なんだ、先に来てたのねー」

ふと沙羅が見ていた方向に目をやるとそこには椅子に座って読書をしている美優の姿があった。何というか、その、結構絵になりますね……。美優もこちらの登場に気付いたらしく読むのを中断してこちらに挨拶してくる。

「皆さんこんにちは。一輝君と沙羅ちゃんは今日会うのは始めてですね」

美優は立ちこそしなかったがなんとも上品に挨拶してきた。別にどうでも良い事なんだが……。しかし沙羅はまんざらでもない様子で、うんうんっと言った様子で眺めていた。こいつも何なのだろうな、美優の姉御にでもなったつもりなのだろうか？

「おっす……。しかし美優は早いなーしかもしっかり読書してるし……偉いな」

俺達は美優と同じ用に自分達の指定席へと付いて行く。美優もすっかり今の席が指定席となったな。

「しかしいつもの事だがカウンターに人影が無いね……。また本借りたそうな奴がどうしていいか分らずにオロオロしてるよ……」

今度は斉藤が何かに気付いたらしく力の抜けた声を上げた。見

れば俺達が席に着いたとほぼ同時に一人の男子生徒が誰も居ないカウンターの前でオロオロし始めていた。しかたないよな、誰も居ないんだから……。全く毎度の事ながら頭が痛くなる……。俺は一人深い溜息を付いた。

「斎藤、俺達は連れてくるからそれまでカウンター頼む。汚れてるようなら……戦闘も仕方無いだろう……」

「はいはい、こう言う事は俺に任せなさい、でも早めにな？」

「仕方ないわねー……行くわよ！　美優、コレも私達図書室クラブの宿命よ！」

「はい分りました！」

俺達図書クラブ会員は一斉に立ち上がる。そのままカウンターまで全員で行き斎藤は困っている生徒さんの相手に入る。

「はいはい、すいませんねーこの本で良いですか？」

斎藤は手際良く作業を進めていく。もう立派な従業員ですな。そんな感じでカウンターは斎藤に任せ俺達はカウンター横にポツンと存在する薄汚い扉へと俺沙羅美優が入っていく。

「先生！　また仕事サボってこんな所で煙草ですか！？」

扉を開くと同時に俺が部屋に居る人物に激を飛ばす。

「そうですよ、一応先生なんですから必要最低限の仕事くらいして下さいよ、借りる人居ましたよ！」

沙羅も俺に続き剣幕な表情で畳み掛けるように言い放つ。いいぞ、沙羅！　ガンガン行くぞ！

「皆さん慣れてますねー……私付いて行くのが精一杯ですー」

最後尾から付いて来た美優は感心そうな顔をしながらそう言って俺と沙羅の間から図書管理人室を覗き込んだ。

図書館管理人室にはいつも道理の風景、つまり普通の図書管理人室ではなくここでしか見れないであろう光景が広がっていた。それはここの管理者である人物によりほぼ私物化した部屋である。入ると直ぐに分るのが煙草の匂いでありこの学校は校内禁煙なので普通ならば煙草の匂いがする部屋などあってはいけないのだがここだけ

はその匂いがそこそこな狭さの部屋にかなりキツク漂っていた。部屋の壁や天井は煙で茶色く煤けているのが見れば分るだろう。そんな学校とは思えない不思議空間となっている部屋には本来ならば表のカウンターに居るべき人間がいつもサボって座っている椅子に座っていなかった……。

「……あ？」

「……はて？」

「……どうしたんでしょう？」

居なかった。そのまんまだが居なかった。目の前に広がるのはいつもと特に変わらない薄暗く綺麗とは言えない部屋があるだけでそこに俺達の拍子抜けした声が広がった。ただ違うのがいつもならば作業机で煙草を吹かしているはずの図書管理人が居るはずであった。しかし居るはずの椅子は何故か床にだらしなく倒れており余計に異様な空気をかもし出していた。

「先生がここに居ないなんて初めてか？」

いつもとは少し様子の違う状況に俺は戸惑っていた。いつも先生はずっとここに居たから居ないことには驚いたな。

「うん、初めてだわ、少なくても私が知る限りでは」

沙羅は俺の疑問の声に直ぐに反応して返事をしてくれる。沙羅も驚いているようだ。

「ここに居ないと先生は一体何処に居るのでしょうね？」

驚く俺と沙羅を尻目に美優は居ないことには驚いた様子は無く冷静な反応を見せた。美優は入って間もないからいつも先生がここに居るとは思っていいなかったのだろう。

「考えてみれば先生はあの性格なのによくサボったりせずに毎日毎日来れてたな。あの人なら普通にサボりそうなのに」

一瞬驚いてはいたが直ぐに持ち直して俺はふとした疑問を口に出した。

「あー確かにそうねー良く来てたわよねー。仕事はバリバリ、サボってたけど」

「それじゃあ来ている意味が無いのではないのではないでしょうか？」
沙羅も俺に同意してくれた。美優は苦笑いをしながらツッコミを入れる。そして俺も沙羅と美優に激しく同意する。来てはいたが仕事はしていなかったな、あの人は……。そんな事で三人して立ち止まって話しをしていると俺はある事に気付いた。管理人室の奥にあるゴミの山の中に何やらいつもなら存在しない変なものがはみ出ていた。沙羅と美優も俺の様子からそれに気付いたのか三人して目を凝らしそれを見つめた。そして三人同時に気付いてしまった。
「うぉう！？」
「何よこれ！？」
「キャー！」
俺達三人が一同に物凄い驚きの声を上げる。それもそのはずだろう、なんでたってそこで見たのはだらしなく転がる先生の椅子とその少し離れた所でうつ伏せになりぐったりとゴミにうずもれて動く気配の無い図書管理人である星野先生が倒れていたのだから……。
微かに見える顔には一切の血の気が無くなっているし先生の傍には俺が昨日使ったカッターナイフが刃を出したままゴミ袋に突き刺さっており広がった穴からは先生の吸ってきた煙草の吸殻が散乱していた。一体これはどう言う状況なんだよ！
「コレってまさか死んでるの……？」
そんな時沙羅が途轍も無く不吉な事を口にした。この発言で場の空気が今までとは一遍して重く暗い空気に変わった。
「そんな先生が……うそ……」
沙羅の発言を聞いた美優が急激に顔から血の気が引いていきそのまま床に座り込んでしまった。力が抜けてしまったようだ。
「ごめん美優、大丈夫？　先生もきっと無事よ。きっと寝てるだけよ」
すぐさま座り込んだ美優に沙羅が美優のカバーに入る。口には出さないが俺も死んでいるのではないかと微かに思ってしまってい

る。
「そんな馬鹿な事があってたまるか……」
しかしそんな筈は無いと自分に言い聞かせる。俺はゆっくりと倒れている先生に近づいて行く。
「皆どうしたの？　でかい声出して、何かあったの？　うわ！先生どうしたんですか！？　け、ケイ大丈夫なのかよコレ！？」
騒ぎを聞きつけたのか斉藤が管理人室に慌てた様子で入って来た。斎藤も予想外の展開に混乱しているようだ。大丈夫か分らないから確認しに行くんだろうが……。
「斎藤はそこに居て二人を見ててくれ」
倒れこむ先生に少しずつ近寄って行く。先生の横についてみると俺はすかさず先生を取り巻く空き缶やゴミ袋などのゴミをどかして行くそうして掘り出した先生を横にしてみると嬉しい事に何やら小さくうめき声が聞こえた。フッ……そんな事だろうと思っていたさ。
「皆どうやら死んではいないみたいだぞ、息もしてるし何かうなってる」
俺は一度大きく溜息をついてから後ろでこちらの様子を伺う三人に向かって状況を報告する。
「本当に？　美優聞いた？　大丈夫よ、先生は無事よ」
「良かった……良かったよぉー」
「何がどうなってんのか全く分らんが良かったな」
沙羅は美優と共に喜びをあらわにして喜んでいた。斎藤は二人の隣に立って不思議そうにしていた。
美優もその後直ぐに落ち着き三人とも先生の傍に寄ってきた。
「先生！　先生！　大丈夫ですか！？」
未だに横になる先生に俺が何度か必死に呼びかける。先生からはコレと言った反応は見れなかったが何度呼びかけをすると先生が小さく何か呟き始めた。
「ねぇ先生何か言ってるわよ」

それに気付いたのは沙羅が最初でそれを聞いた俺は直ぐに先生の口元に耳を近づけた。一体この人に何が起きたのだろうか……。俺は唾をゴクリと飲み込んだ。

耳を傾けると先生は微かにだが確実に言葉を発した。それは信じられない言葉だった。

「た……たば……煙草……」

煙草……先生は確実にそう言った。

「煙草って煙草がどうしたんですか！？　先生！」

ただ一言煙草と言われても意味が分らない、もっと聞かなければ……。

「煙草が……煙草が無い……」

しかし先生は何度聞いてもただただ煙草と繰り返すだけで一向に情報が増えなかった。その内皆なんだか冷静になってきたのか取り敢えず先生をこんな薄暗くて息が詰まったような空間から外に運び出そうと言う事になった。

先生を俺と斎藤が肩を貸しながらカウンターではなく普通の席に座らせる。先生は今でもぐったりとしてはいるが先ほどよりは意識もはっきりしてきた様子だ。

「先生大丈夫ですか？　一体何があったんですか？　皆心配したんですよ」

先生が落ち着いた頃を見計らい沙羅が先生に問いかける。先生は落ち着いたと言っても未だにダラリと力が抜け気っている。こんな先生初めてだ……。

「あ……あぁ……山本か……どうしたもこうしたもないよ……私のたぁー」

先生は誰が自分に話しかけたのかと言う事すら理解するのにも時間が掛かるようだ。そんな先生は「た」と言った瞬間に机にプシューと音を立てて倒れこんだ。またか、一体この人はどうしたと言うのだろうか？　いつもはもっとカッチリした人なのに。

「先生何があったか話してくれませんかね？　話してくれないと

何もできませんよ」
俺は机に倒れこむ先生にそう問いかけた。俺達に何か出来る事があるならやった方が良いだろう、図書室のためにも俺達のためにも。
「うぅーそれが話すと少し長くなるんだがないいか？」
先生の口調はいつもと大して変わりは無いがその声はかなり震えていていつもの先生がキッリっとした大人の女性なら今の先生は普通の女の子と言ったところだろうか。うーん調子狂うな。でもコレはかなり珍しい……。
「っく……どうぞ話してください」
なんだか力が抜けるが早くどうにかしてもらいたいので進めてもらうことにしよう。
「あれは私がこの学校に来たときに始まったんだ……今思い出すだけでも恐ろしい……」
先生は震える肩を押さえながら事件の事を話し始めた。なんだかよくあるパターンだな……。
「私は朝ここに真っ先に来るのだよ、図書の先生だから特にここでしか用事無いし……。そうしたら毎回管理人室で一服するのが日課なのだが今回はいつでも持っているはずの……私の命よりも大切な煙草が一つも無かったんだよー！」
「……はぁ？」
先生は一通り話し終えるとそのまま泣きながら机に伏してしまった。俺達は驚きの余り呆然と固まっていた。なんだと……煙草だけでこれなのか……？」
「あぁー！　あんた達一瞬たかが煙草とか思ってんでしょー！ふざけんじゃないわよーあんた達煙草が私達喫煙者にとってどれほど大切なものか分ってんの！？　特に私のようなヘビースモカーにおっては本当に大切なんだからねー！　はぐぅ……！」
先生は先ほどとは違いかなり高いテンションでの物言いで今回は口調もかなり変わっている本当に先生か疑うほどにだ。しかし先生

はそれほど長い時間テンションを上げていられないらしく数秒でまたプシュゥーと煙と音を立てて沈んでしまった。本当に珍しい……。
「先生何とかならないのかな？　このままじゃ色々と面倒だし不便だし気持ち悪いし良い事無いわよ」
しかし沙羅は俺のように珍しいとだけ考えておらず当然の事ながらこれからのことを話し始めた。確かに色々面倒だな。どうにかなるならどうにかして欲しいものだ。
「良いんじゃないのかな、このままで。煙草が吸わなくなれば部屋も綺麗になるし匂いもなくなるしいい事だらけじゃ無いか。このまま禁煙を始めてもらおうよ」
そんな中斎藤が中々良いアイディアを出した。それは良いかもしれんな、部屋が綺麗になれば俺達の苦労も一つ減ると言うものよ。
「うーんいい考えじゃないカちゃんにしては頭を働かせたわね、褒めてあげるわ」
沙羅もその意見に大いに賛成らしく隣の斎藤の頭をポンポンと叩きながら褒めていた。
「やめいやめい痛いから」
「お二人とも仲が本当によろしいですよねー」
「まぁねーカっちゃん？」
「はいはい、そうですねー」
美優は二人の様子をキラキラとした顔で見ていた。しかしされている方の斎藤はたまったものではないようでダルそうに沙羅の手を払っていた。沙羅は俺らにどんな事でも手加減無いからああ言うのも痛いんだよな。
「そんな事で先生、禁煙してみませんか？」
そんな沙羅と斎藤を眺めつつ俺は机に突っ伏す先生に禁煙を勧めてみる。これで治れば苦労しないのだが……。
「禁煙……？　はぁ？　禁煙なんてするくらいなら……煙草が吸えないくらいなら……そんなの死んだ方がマシだ！」
先生は突っ伏した姿勢のままいきなり顔だけこちらを向いても

のすごくギラギラとした目で俺のほうを凝視した。こ、こえぇぇぇぇぇ！　俺は生まれて初めて人の目だけで恐怖を感じた。

「そ、そうですか……分りました……では他の方法を考えましょう……」

俺はそう言うとそのまま席を立ち窓際に立ち涼しい風に当たった。その間も先生の目がこちらを向いているのが見なくても激しく分った。沙羅たちと言えば俺の状況なんてお構い無しにワイワイやっていた。なんて幸せな奴らなんだ……。とそれはともかくこれからどうするか……考えると言った手前何か良い方法を考えなければ……。

「あぁーなんかケイが考え始めたよ」

「あら本当ね、今回は何考えてんだか……」

「どうしたんでしょう桂くん……」

「美優、ああ言うときの桂は放っておくのが一番よ、聞いても耳に入らないんだから」

「そうなんですか……うーん良く分りませんが成功すると良いですね、ファイトです桂くん！」

さてこの後どうするかなー買えには行けないし……どうしたものか……。うむ……。しかしそうだなー少し危険だが俺達が出来る事ってこのくらいかな。まぁやってみるか……。さて戻るとするかな。

「お、ケイが帰ってきたー」

「何か考えついたんでしょうね？」

「お帰りなさい、桂くん成功しましたか？」

「杉下、早く助けてくれー……」

机に帰るとなにやらみんなして良く分らない迎え方をしてくれた。そう言うところは気にせずにいこうかな。

「えー役割分担をします」

俺はみんなの前に立ち話し始める。みんなは何故か分っていた様子で、こちらを見ている。

「まず初めに斎藤はここに居なきゃ仕事する人間が居なくなってしまうのでここで留守番だ、これは斎藤にしか頼めないから宜しく頼む」
「おうよ！」
俺が斎藤にそう言うと斉藤は心良くガッツポーズをして了解した。斎藤らしい応答だな。次！
「美優は先生の様子をここで見ていてくれないか？　斎藤は仕事でここにいるし、まぁ二人で先生の様子見ていれば何がおきても大丈夫だろう」
「はい分りました！　頑張らせていただきます！」
美優も斎藤と同じように元気良く返事を返してくれる。こちらは斎藤と同じかそれ以上の気合が入っていそうな返事でビックリだ。この子はこう言うのが好きなんだろうな……。
「くれぐれもさっきみたいに煙草の吸殻なんて掘り出さないように見張っておく事」
俺は続けて美優に先生が先ほどのようなゴミに埋もれるような事態にならないよう見張ってもらわなくては。
「げ、ばれていたか……鋭い奴めでももうそんな事は出来んよ、大体綺麗に全部吸うから探しても吸えるのは無かったよ」
先生はちぇっと言いながら続けてあったら吸ってたのに……と呟いて口を尖らせた。ちなみに先生の髪に煙草の中身が少し付いているのでゴミに頭から突っ込んで行ったのだろうしかしゴミと言っても基本的には九割方煙草であるのでそこまで変な物は入っていない。安心してくれて良い。空の缶ビールなんかは入ってるけど……。
「先生がゴミの中に居たのってその為だったんですか……」
「汚いわね……」
「そこまでとは……ニコチン怖いな」
先生の言葉を聴いた俺以外の三人は一同さっと先生の傍から数センチ離れた。先生は気にしてないみたいだけど。
「で、最後に沙羅……」

「何溜めてんのよ、何でも良いわよ？　ドンと来なさい」
俺は沙羅のときだけ多少の溜めを作った。こんな時だが少し沙羅をからかうとしよう、少しだけ、やりすぎるとこちらの身が危ぶまれるのでこう言うのは程々にしておくのが俺や斎藤の中での鉄則である。
「沙羅は特に仕事は無いから帰ってよし！　むしろ帰るのが仕事」
「なっ！　ちょっと桂なに言ってんの！？」
俺がお決まりの冗談を言うと沙羅は半端じゃない驚きを見せた。沙羅は少し冗談が通じない所があるのでいきなりだと素の反応を見せるのだ。これだから面白い。
「と言うのは冗談で沙羅は俺と一緒に付いて来てもらうからな、すまん」
沙羅が驚きから怒りに感情が変換される前に俺はネタをばらしてしまう。今のところ順調だな。
「な！　……そう、ならいいわ……あんまりふざけた事言うとぶっ飛ばすわよ？」
沙羅はまたしても驚きの声を上げたが直ぐに謝ってしまったので沙羅はどうしようも無くなり怒られること無くからかう事に成功だ、こんな時に俺は最高の快感を得られるのだ。フッフッフ……。
「ところケイでこんな役割分担したのは良いけど一体何が始まるの？」
「私も気になりますーこれからどうするんですか？」
「そうだぞー早く助けろー……」
「どこに行くのよー早くしなさいよ」
周りからは耳障りな雑音が聞こえるせいでこの清々しい気持ちが台無しじゃないか。仕方ない奴らよ……。全く。
「はいはい、分ったよと言うかやることなんて決まってんだろうが」
俺はせっかくの気分が台無しになったせいで半ばやる気が失せているので適当に話す。

「やることって先生の禁煙か？」
斎藤が思いも寄らない恐ろしい発言をした。俺の予想道理俺の方を星野先生が恐ろしいほどに目をどす黒く光らせて俺の様子を伺っているではないか。斎藤お前は少し黙ってろよ！
「そ、そんなわけ無いだろうが！　先生には引き続き喫煙してもらいます！　ねぇ先生！？」
「あぁそうしてくれると助かる」
は、はぁー助かった……。本当に斎藤は余計な事を……これ以上俺の危険を増やしてくれるなよな。先生は元の力が抜けた状態に戻っていた。
「何か桂がかなり焦ってるわね、何かあったんでしょう……よっぽどの事が私達の知らない所で……」
「そうみたいですね……可愛そうに……」
そんな会話が耳の端からしたがよく聞き取れなかった。
「言うのは良いがまだ上手く行くか分らんから今は言わん。期待せずに待っておけ、だから皆も出来る事が無いか考えておいてくれ」
俺は勿体つけるようにそう言った。本当に上手く行くか分らんし本来ならば沙羅は置いて行った方がいいのかもしれないがそこは沙羅だ、待ってろなんて言ったら怒るだろうし何より沙羅が居た方が俺もやりやすいからな。すこし我が儘だろうか？
「了解行って来い、失敗しても俺がいい案出して待っててやるから安心しとけ」
「私もいいのを考えて待ってますから頑張ってきてください」
斎藤が格好をつけながら何やら言っているがそれはそれでムカつくな。ありがたいのかもしれんが。美優も同じように入ってくれた。こっちは素直にありがたい。
「まぁいいわ、どんな事になっても入ってやるんだから、多少の危険なんてどうって事無いんだから」
こちらも機動隊と言う事で張り切っている沙羅であった。よかったこれなら多少ならば行けるだろう。

「じゃあそれぞれ持ち場に着くように」
「はい！」
「ラジャー」
「行くわよー」
「早めに帰還プリーズ……」
皆それぞれ気合を入れたら持ち場について仕事を始めた。俺と沙羅も斎藤達に別れを告げて図書室を後にした。

廊下を沙羅と二人で歩いている、特に会話も無くただコツコツと廊下を歩く音だけがテンポよく二つ、静かな廊下に響いていた。
「ところで桂のその意外と思い切ったところってどうなってるの？　いつもはずっとダルそうにしてるのにたまにあんたは思い切った事をやらかすんだから不思議だわ」
歩いていると隣に居た沙羅が不思議そうな顔をして当然そんな事を聞いて来た。
「確かに自分でも不思議に思うけどな、もしかしたら俺も沙羅と同じで好奇心とかテンションが高い奴なのかもしれんな」
沙羅に言われてふとそんな事を考えた、俺は自分でもおかしいと思ってしまうようなことを時たましてしまう事がしばしばあるのでもしかしたらそうなのかもしれない。
「なんか褒められてる気がしないんだけど、それってどうなのよ？　まぁ桂がそんな人間だったら私は苦労しないんだけどねーそれに桂は時々なるから面白いし、やる気のあるハツラツとした桂なんて気持ち悪いわ」
沙羅は自分で聞いておいて微妙な反応で終わらせてしまった。なんだか俺も褒められてる気がしないがお互いさまなのでスルーしておく。目的地まであと少しある。
「それより今回の作戦って一体何をするのかしら？　楽しめるんでしょうね？」
お互い無言のまま歩いていると沙羅が目的地手前でそう訊ねて

きた。そんなの……。
「わからん変な事をすることだけは確かなんだが、沙羅さんの期待に答えられるかどうか……。　まぁ行ってみてのお楽しみってやつだ。取り敢えず先生を治す事だと言う事だけは確かだな」
「そんな事だろうと思ってたわよ、まぁどうにでもなるでしょうけど、駄目だったら駄目で良いんじゃない？　なにより楽しければそれで良いのよ」
沙羅はへんな期待をしているようだが多分それには答えることが出来るだろう、しかしそれは沙羅のやり方次第だが沙羅なら問題ないと思われる。
「沙羅、それよりもう目的地に着いたぞ」
図書室を出発してから程なくして俺達は目的地へと到着した。職員棟なので元々遠くは無いのだ。ほんの数分かな？
「ここって……職員室じゃないのよ！？　……あぁなるほどそう言う事なのね」
沙羅は職員室の標識を見て一瞬驚きの表情を見せたが直ぐに俺の考えを理解したのかやるじゃないと言って俺の肩を叩いた。そう、これもそれなりに痛い。
「そう言う事だよ、沙羅も分ったようだが今回の目的は煙草の採取、煙草なんてあるところは限られているけど俺達未成年じゃ買って来ることはセキュリティーとか法律云々で不可能だ、ならば」
「既に購入されている物を貰ってしまおうってことね？」
俺がそこまで言うと最後は沙羅が変わりに言ってしまった、少し最後まで言わせて欲しかった。話しの続きをしよう。
「……そう言うこと。で校内で煙草なんかがある場所と言えば」
「職員室になるわけね」
またしても沙羅は最後だけ持って行ってしまった。またしても、またしても……！
「それじゃ目的もハッキリと見えたことだしこのまま突入と行きましょうか？」

「フッ……そうだな、行くとするか」
俺と沙羅は突入の前にお互い気合を入れた。
「君達入り口の前で何をしているんだ、用事が無いなら退きなさい」
後ろから声がした、振り向くとそこには何かの名簿を持った男性教師が立っていた。どこかで見たことがあると思ったら俺達の担任教師じゃないか。確か名前は清水……担当は英語だったかな？ヤバイ記憶が薄すぎる、先生の名前なんて星野麗子しかわかんねぇよ！
「あ、すいません」
「今退きますので……」
俺達は清水先生に直ぐに入り口を開けて職員室への道を開けた。
「有難う、君達もやることが無いなら早めに帰りなさい。部活があるなら早く行きなさい」
数学教師はそう言って職員室へと入っていった。全くいい所だったのに……。
「あ……」
俺と沙羅の二つの声がタイミングよく重なった。しまった！さっきの先生に聞けばよかった！　沙羅も同じ事に気付たようだ。俺も沙羅も根が真面目だからこう言う事には本当は向かないのかもしれない……。
「ちょ！　先生！　待ってください！」
「私達用事ならあるんですよ！」
俺と沙羅は二人して先ほどの清水先生を追って職員室へと駆け込んだ。
「こら！　君達入ってくるならもっと静かにしなさい！」
「はい、やり直し」
「すいませんでした！」
「やり直してきますぅ！」
「うるさい！」

「すいません！」
俺達が急いで職員室に入ると中に居た先生陣に激を飛ばされた。焦っていたため全力で答えてしまった。はずかし……。その後俺と沙羅は職員室の外からやり直しを終え職員室へ侵入に成功した。……成功か？　失敗な気が……。

「で、用事ってなんなんだ？　あんなに急いで大事な事なのか？」
俺達は今先ほどの清水先生の前に二人並んで立っている。清水先生は俺達に少し呆れた様子でそう訊ねてきた。
「君達一年生よね？　こんなに元気な子も珍しいですよね？」
「そうですね、三年生の守下須美程ではありませんが騒がしい子ですな」
「いやいや最近の子供は静かすぎますよ、少しくらい騒がしい方がいいと思いますけどね」
そして俺達の周りには先ほどの騒ぎのせいで職員室に居て暇でもしていた教師達が取り囲むように立って話していた。こんな状況予想外だ。……沙羅が楽しそうな表情なのが少し気になる……沙羅どうだいこれで君は楽しめてるのかい？　俺は早くも帰りたくなってきたよ……。小学生の時沙羅達とガラスを割った時以来だよ、教師数人に囲まれるのは……。あの時も沙羅は必死に説明する俺と斎藤を一人で笑ってたよね。
「そうですね、単刀直入に言いますと先生方誰か私達に煙草を数本譲ってくれませんか？」
沙羅が途轍も無く話しをハッショって途轍もなくヤバイ言い方をした、顔が笑ってるぞ！　分ってやってんだろ！　沙羅は満面の笑みだった。それは見方によれば更に状況を悪化させる笑みだ。そして先生陣は数秒固まったのち予想道理の反応を示した。
「すいませんが忍先生、謹慎者用のファイルを持って来てくれませんか？」
「分りました、この子達のことしっかり指導お願いしますね」

「岸先生は学年主任あと生活指導の先生にも連絡してくれますか？」
「了解、お前ら一体何がしたかったんだ？　まぁ別にいいけどハッハッハ」
「私はこいつらと話がありますので……田野辺先生は保護者に連絡をお願いします」
「はい、あれ？　連絡網はどこだー？」
先生達は驚きの連携プレーでテキパキと仕事を分担している。すごいなーちゃんと仕事が出来る人ってやっぱりかっこ良いよな……。星野先生にも見習って欲しいよ。
「こら桂！　この状況を早くどうにかしなさい、現実逃避してる暇は無いのよ、早くしないと私喫煙する不良生徒になっちゃうわよ？」
パラレルワールドへエスケープしそうになっていた俺を沙羅がリアルワールドへ呼び戻す。そんなことこの状況を作った張本人が言う言葉じゃないと思うのだが……。しかしそんな事考えてる時間は無い早くしなければ俺の人生が……！
「先生違うんです！　俺達が吸うのではなくてこれには深い理由がありまして！　話しを聞いてください！」
俺は必死に先生達を呼び止めた、しかしこの間も沙羅は震えながら笑いをこらえていて俺は先生を止めることよりもまず初めに沙羅を殴りたかった。

「で、深い理由とはなんだ？　不良にパシリでもあってんのか？」
多分それであってるんだと思います先生……。清水先生は冗談らしくそう言った。ちなみに他の先生も何とか途中参加した沙羅と共に引き戻す事に成功した。
「それがですね、図書管理人の星野先生のニコチンが切れて倒れまして、それで治すために煙草が必要なんですが俺達未成年ですし先生に頼めばくれるんじゃないかと思いましてね、それでこうして

来たわけですよ、だから本当に俺達が吸う訳じゃないんですよ」
　こんなふうに俺は先生たちに説明をした。そこまで変な説明では無いと思う。ところが星野先生の名前を出したあたりから先生達の様子に変化がみられた担任は机に肘を立てて顔を手で隠してしまった。他の先生も先ほどとは違い暗い表情になっている一体どうしたと言うのだろうか？　これには沙羅も不思議そうな顔をしている。
「そうか、お前らは星野先生の使いか……どうしましょうかね？」
「そうですなーどうしようも無いんじゃないですか？」
「今度は生徒を使うとはあの人は……」
　先生達が何やら深刻な顔をして話し始めた。
「先生どうしたんですか？　何か問題でも？」
　俺はどうにも理解できないので聞いてみる事にした。一体星野先生とは何者なのか……。
「うーんそうだなーあの人ってものすごいヘビースモーカーなのはお前らなら知っているか？」
　清水先生は先生同士の会話を止め俺の問いを聞いてこちらを振り返ってそう訊ねてきた。
「えぇそのくらいは知っていますよ、よく図書管理人室にあるタバコとかの掃除とかもするんですよ」
　この問いには沙羅が答える、沙羅もこのことについては気になるようだ。
「星野先生はそんな事までさせているのか……」
　清水先生ははぁーと溜息をついた。
「先生話しが見えません結局なんなんですか？」
　沙羅が痺れを切らしたのかストレートに先生を問い詰める。ちょっと行き過ぎ感があるな。
「分ったよ、あの人は煙草を吸っているけど吸いすぎて本人が持っている分だけじゃ足りなくなる事がとても良く起きていたんだよ」
　先生は今ですら大量の煙草を吸っている人だ、今以上に吸っているとなると……駄目だ、想像できん。清水先生は話しを続ける。

「それで星野先生は煙草が切れたときどうしたかと言うと俺達の煙草を狩に来るんだよ、大量に……最近は無かったんだけどなー」
清水先生は何かを思い出すように懐かしむようにそう言った。懐かしむ……？
「あぁー最近来てくれませんよね……」
「あのすがり付く時の表情とか態度とか……最近見てないなー」
「ちょっと先生方生徒が居る前で何言ってるんですか！？」
あれ？　だんだん雲行きがおかしい方向に行ってないか？　男性教員の態度が……。
「最近煙草値上がりしたけどあの人綺麗だからな……あげちゃおうかな……」
ついに清水先生までもが狂い始めた。目が虚ろだ……。
「な、なんなのこいつ等……」
隣に居た沙羅が男性教員の様子を見ながら怯えたように呟いた。沙羅の言葉には俺も激しく共感するぞ、なんだ、こいつ等？
「ほら俺の煙草を持って行きなさい、ちゃんと清水先生がくれたって言うんだぞ？」
清水先生が何やらゴソゴソとバックの中を探り始めたと思ったら未開封の煙草を取り出して俺達の前に差し出した。
「あ、先生それはズルイじゃあありませんか！？　おい君達俺の煙草も持って行くんだ清水先生なんかよりもいい煙草だぞ？　俺の持って行けそして俺のだって言うんだぞ？」
清水先生の後ろに居た岸と呼ばれてた先生がスーツの内ポケットから真新しい煙草を差し出した。
「そんなこと言ったら俺の持って行って行くんだ今ちょうど買いに行った所だから大量にあるぞ、二つなんかじゃ星野先生は足りないだろうからなーハッハッハ」
何故か清水先生を皮切りに次々と職員室中の先生達からの大量煙草カンパが始まり我先へと渡してくる。こいつ等やばいぞ！　俺と沙羅はただ驚異的なスペードで集まっていく煙草達を呆然と眺め

ていた。
「こんなに集まるとは……なぁ沙羅一体何者なのだろうか星野先生って……」
「そんなこと私に言われても分んないわよ、ただの図書の先生ではなさそうね」
これは星野先生だけじゃなくてこいつ等にも大分問題があるようだな。こんな連中が教師でこの学校大丈夫か？　結局集まった煙草は手では持ちきれないほどに集まりビニール袋で持って行くことになった。職員室を出るときには男性教員総出で星野先生によろしくーととても暖かい見送りを貰った。
「はぁー想像以上だったわ、まさかこんな事になるとは……疲れたわ」
「本当だよな、あんなに壮絶な戦いになるとは思いもしなかった」
俺と沙羅は二人して職員室から図書室への帰り道を歩いている。来たときと違い二つのテンポよくなる廊下を歩く音に詰り煙草の詰まった袋を運ぶためガサガサと言う音が増えて静かな廊下に響いていた。
「これだけあれば当分は煙草で困る事は無いわね……足りるかしら？」
「足りないと思う数日分だな」
「先生って月々煙草代でどれくらい掛かってるのかしら？」
「相当な金が掛かってるだろうな、何冊本が買えるか……」
そんな話しをしながら俺達は歩いていた。そうして廊下を歩いていると俺は廊下に張ってある手作り感溢れるチラシを見つけた。
「なんだ、これ？」
そのチラシの前で俺は一度立ち止まる。
「なぁ沙羅これって近いうちにあるのか？」
そのチラシについて沙羅に聞いてみる。これは面倒だなー。
「ええそうね、近いうちに……もう直ぐね、直ぐそこに迫ってるわね」

「激しく面倒だ」
「そんなこと言わないものよ、楽しみにしている人たちも沢山いるんだから」
沙羅は苦笑いをしながらそう言って直ぐに行くわよと言って歩き出す。俺も沙羅の背中を煙草がぎっしり入ったビニール袋をガサガサ言わせながら追いかけた。

星野先生とデラックス（3）

沙羅と俺は職員室と言う名の狩場から煙草を持って今は図書室の前におり図書室に今入ろうとしているところであった。

「ただいまー帰ったわよーちゃんと留守番できた？」

初めにやはり沙羅が先頭で入っていく。沙羅は冗談を言いながら持っていたビニール袋を頭の上で斎藤たちに見せ付けるように持ち上げた。

「あ、沙羅ちゃん桂君帰りなさい。収穫は……沢山あったみたいですね……えっとそれは何でしょうか？」

美優はこちらに気付くと振り返って迎えてくれた。俺達が何を持っているか分らないようで大量のビニール袋を見て不思議そうにしている。

「これ？　やっぱ気になるかしら？　これはね……って先生とカツちゃん何してるんですか？　せっかく人が苦労してきたって言うのに……先生何か食べてません？」

沙羅は不思議そうにする美優に対して上機嫌で答えようとするが何かに気付いたようで話すのを止めた。俺は入った時から気付いていたが呆然と見ている事しか出来なかった。それは美優の奥で斎藤と星野先生が向かい合ってただ座っているように見えるがよく見ると先生の口元が何やらモゴモゴと動いているのが分る。何かの見間違えだと良いのだが、アレがまだあったのか？

「え？　あー沙羅にケイお帰り、待ってたぞー」

「ボバベバボブバベッババ」

斎藤は今まで俺達に気付いていなかったようだが気付いても反応が薄く何かがあった事は明白であった。て言うか先生何言ってるか分んねぇぞ……。それにきったねぇ。

「お前ら良く帰ったな。だそうです。本当に良く帰ってくれましたね」

俺と沙羅が謎の言葉を発した先生にキョトンとした状態で居ると美優が翻訳してくれた。何で美優は今のが、理解できたんだ？　俺は何一つ聞き取れなかったんだけど……。

「あ、そうなの？　通訳ありがとう……」

沙羅は翻訳してくれた美優に対して釈然としまいまま感謝の言葉を述べた。本当にアレであってるのかは先生が訳した時に数回頷いていたので間違っては居ないのだろうけど……なんなんだろうあの繋がりは……。

「それはそうと先生！　人が苦労してきたって言うのに一体なにを食べてるんですか？」

沙羅は少し不機嫌そうにして今もモグモグと口を動かす先生を鋭い目で見つめた。

「先生がさ、腹が減ったー！　とか言うものだから俺が持ってたメシをあげたのだ」

斎藤は口を動かすのを止めない先生の変わりに少し自慢げに沙羅に説明した。だからってよりにもよって変な物食わせるなよな……。

「先生そんな物はいくらお腹が空いていたからって食べたら身体に毒ですよ？　煙草なんかよりもよっぽど止めたほうがいいです。その……多分斎藤スペシャル……」

俺は先ほど図書室に入って来たときに先生が最後の一口をほお張るところを目撃していたのだ。流石に色々と驚いて言葉が出なかった。なんと言うかまた不思議な物体を見てしまったことに後悔するよ……

「え？　斎藤スペシャルってなに……？」

沙羅は頭を傾げながら一層不思議そうな顔をした。

「お前今日の昼の事を忘れたのか？　沙羅も奇怪な食べ物とか言ってたやつだろうが……」

「あーアレね。先生あんなもの人間が食べる物じゃありませんよ？　多分猛獣を仕留める用の罠か毒です」

俺が説明すると沙羅はやっと理解したようで真面目な顔で先生に注意した。勿論俺は沙羅の反応が正しいと思う。アレは未だになんだったのか分らないんだ。ご飯ものなのかパンなのか見ただけじゃ理解できない容姿だったしな。とりあえず地球の食べ物じゃない。

「ちょっとさっきから斎藤スペシャルって言ってるけどそれは斉藤デラックスだからな！　と言うか沙羅もケイもそんな風に思ってたのかよ！　ずっと食べたいだろうなぁーって思ってたのに！」

先ほどからムスッとしていた斎藤が口を開いて何か言っているがアレの名前についてはどうでも良いので適当に聞き流す。そしてお前は俺と沙羅の反応を見て食べたそうにしてるように見えてたのかよ……。斎藤の頭のおめでたさに呆れを通り越して感動さえ覚えるな。

「それで先生体は大丈夫ですか？　吐き気は？　目眩は？　四十度くらいの熱は！？」

「おい！　俺だって食ってるんだけど！？　人が丹精込めて開発したものを腐ったごみ見たいに言うんじゃないよ！」

沙羅はこの辺りから斎藤イジリに走ってしまった少し続く。心配してるのも本当なんだろうけど。斎藤は沙羅に反論するが全く相手にしてもらえなかった。斎藤はチクショウ……と呟いて涙を流した。

「ん……ゴクリ……はぁーそんなに心配しなくても大丈夫だぞ、これ見た目は酷いし食感も凄まじいものがあるが味はなかなか行ける。味だけは」

先ほどから俺達の方を見ながらモグモグと口を動かしていたが口の中のそれをゴクリと音を立てて飲み込むと斎藤デラックスへ予想外の評価をつけた。そんなバカな……アレが美味いだと……？

「そ……そんな別に無理し無くったって良いんですよ……？」

先生の言葉を聴いた沙羅は一気に顔が引きつり額に少量の汗が見え始めた。ちなみに俺はこの時ただ先生の味覚のおかしさに呆然と立ち尽くしてしまっていた。

「私が斎藤の為になんか気を使うなんて思うのか？」
先生の言葉に沙羅は苦虫を噛み潰したような顔をして下を向いた。この会話を聞いていた製作者である斉藤は先生のコメントが嬉しいのかガッツポーズをしたが直ぐにお前らってやつはそんなに俺が信用無いのか……と言って悲しそうな顔をした。いや、信用の問題じゃなくて見た目の問題だと思う……確かに斎藤に信用は無いけど。
「まぁまぁその話しはそのくらいにしておいて沙羅ちゃんそろそろ話を戻しませんか？」
斎藤のせいで殺伐としてしまった空気を美優の透き通った声が一気に変える。確かに少し脱線しすぎたかもしれんな。
「それもそうだね。沙羅、収穫の程は？」
美優の発言を聞いた斉藤は気分を持ち直したのか沙羅に素の表情で訊ねた。
「え……？　あぁそうね……えっと！　なんと私達は……ジャーン！　なんと大量の煙草です！　どうだ！？　恐れいったか！？」
沙羅は少しだけもたついたが驚きの切り替えの速さでテンションを右手に持っていたビニール袋を天に突き立てるように掲げた。皆切り替え早いっすよね。そう言えば。
「な、な、なにぃぃぃ！　山本それは本当か！？　は、早く見せるんだ！」
「せ、先生ちょっと何してるんで……ぐえ！　力つよ！　見せます！　見せます！　だからちょっと落ち着いて下さい！　きゃぁー！　桂、桂見てないで助けてー！」
「先生沙羅が死にます！」
「沙羅ちゃん！？　先生早くどいてあげて下さい！」
「しまった！　アドレナリンを発生させる食品が効きすぎたか！？　仕方ない沙羅耐えるんだ！　今のお前じゃ無理だ！」
「何でそんな無意味に危険なことをするのよ！？　このバカっちゃん！」

「ぐはぁ！」
沙羅の発言を聞いた先生が突如テーブルを挟んでいるにも関わらずそれを乗り越えて沙羅に掴みかかったのだ。正確には沙羅が持っている煙草が入ったビニール袋へと……。沙羅は驚いたのか腕を掴まれてそのままバランスを崩して先生は沙羅を巻き込み床へと倒れこんだ。なんて大胆な事をするんだ、先生は……直ぐに手に入るって言うのに……。俺達は暴走気味の先生を止めに入るのだが先生の勢いは止まらない。
ちなみに斉藤は沙羅が倒れた所の近くの本棚から投げた分厚くでかい辞書が顔面にヒットしたことにより撃沈していた。倒れながらの状況でよく当てたな……。
「ぐ、重い……なんなのよーなんでこんな事に……」
「山本それか！？　それに煙草が入ってるんだな！？　よこすんだ！」
先生は今まさに沙羅の持つビニール袋に手を掛けようとした。その時沙羅の目が一瞬キラリと光った……。沙羅がヤバイ！
「もう嫌！　うおりゃー！　そこだー！」
沙羅は先生の隙を付いて先生と沙羅の僅かな隙間、上から見ただけでは良く把握できないが先生の腹部、多分みぞを、空いていた左手で突き上げた。
「ぐは！」
ドスっと言う鈍い音と共に先生の体が数センチ浮いた。そして先生の苦痛に歪んだ顔を俺達に見せつけた後ドロのように沙羅の上で活動を停止した。沙羅、やりすぎ……。
「キャータバコータバコーあぁーこんなに沢山あるなんて……幸せ……」
先生がテーブルの上に俺と沙羅が持ってきた煙草を全て広げてそれに抱きつくような形が今の先生の状態であった。本当に幸せそうな顔してるよ……。

「この腐れニコ中……なんて顔してるのかしら？」
「まぁまぁ沙羅ちゃんそうイラつかないで下さいよ、先生だって感謝してますよ。だからね？」
沙羅は先生の様子を見てかなり不機嫌そうにして悪態を突いている。美優はそんな沙羅を気遣うように話していた。
「だからってなんで私があんな目にあわなくちゃいけないのよ……」
先生は沙羅の一撃を受けた後テーブルに戻されてタバコを見せると嬉しそうに今の状態へ移行した。沙羅はテーブルに頬杖を突いて溜息をついた。とんだ災難だったな、沙羅。
「先生さっきから煙草ばっかりに集中してないで私と桂に感謝の言葉の一つくらい言っても良いのではないでしょうか！？」
沙羅は煙草しか見ていない先生に対して睨みつけるように言葉をぶつける。いい加減報われたいのだろうなー……。俺も！
「さて部屋にでも行って早速吸って来ようかなーイエィ！」
沙羅なんて眼中に無いかの様に先生は抱きつくのを止めて煙草を抱きかかえたまま管理人室へとスキップしながら消えて行った。本当に先生か？　中身違うんじゃない？　エイリアンに改造されたとか。あの変わりようは無いよなー……。
「ぐっふ！　そ、それより気になってたんだけどあの煙草どこで取ってきたんだい？　まさか買ってきたんじゃないだろうね？　俺達未成年な事を忘れたのか？」
沙羅の投げた本により撃沈したはずの斎藤がテーブルに這い上がってきた。リアクションまだ続けていたのか……。
「しぶとい！」
這い上がってきたはいいが沙羅のなんとも素早いチョップによりまたしても斎藤はギャフンと言いながら床に帰還していった。しょうが無いよ、斎藤変なもの作るお前が悪い。
「沙羅ちゃんと教えてよーケイでも良いや」
「私も気になります、一体どこからあんなに沢山の？」

斎藤はめげずに床で倒れたまま聞いてくる。テーブルの上で待ち構えていた沙羅は舌打ちをして席に座った。何回叩くつもりだったんだろう。少し見てみたい。

「分ったわよ、美優が気になるんだったら……ついでにバカっちゃんでも分るように説明して上げるわよ。えーっと……」

沙羅は美優の言葉が効いたのか考えながら話し始めた。

「へーそんな事があったのかーこの学校大丈夫なのか？」

「やっぱり星野先生は人気なんですねーあんなに綺麗なんですから当然ですよね」

「美優綺麗なのは姿だけよ、中身はただのニコチン中毒者よ。全くあんな人のどこが良いのか……あいつら教師には理解に苦しむわ」

「それよりやっと平和な日常に戻ったなーこれで苦労して狩ってきた甲斐があったって言うものよ」

「そうねーそれじゃやっとだけど図書室クラブの活動開始よ！みんな今日も頑張りましょう！」

「はい沙羅ちゃん！」

「了解した……」

「おいおい気合入り過ぎじゃないか？　たかが図書室クラブの活動くらいで……」

「バカっちゃんは黙りなさい！　せっかくいい空気何だから！」

「へいへい……」

沙羅の開始の合図が出た所で大分先生のせいで削られてしまったがやっと本来の図書室クラブの活動が開始された。

今回色々な事があったが図書室クラブ会員と図書室クラブ顧問（？）が全員勢ぞろいし、またいつもの様に皆大好き楽しいクラブ活動が始まった。

クラブ活動と言っても活動内容はただ集まって読書をするだけと言ういたってシンプルなもので傍目から見ればただの読書中の学生にしか思わずまさかコレがクラブ活動などとは思いもしないだろう。行ってもせいぜい図書委員くらいだろうよ。ちなみに図書委員は昼

休み中などの受付で放課後は活動していないし一般生徒は星野先生に苦手意識がある物らしく意味も無く訪れる物好きは俺達位だろう。
ふとそんな事を考えていると隣で突然美優が斎藤の読んでいる本に対して騒ぎ始めた。
「うぁー一輝君その本読んでるんですか？　私趣味じゃなさそうだったのでパスしたんですけど……面白いのですか？」
美優は斎藤が読んでいる本を指さしていた。この本でこのパターンは激しくデジャブなのだが相手が美優なのでほって置く。勝手に話してくれたまえ。
「あぁこれ？　そうだなー俺も趣味じゃないんだけど今は面白くなってきた所だから面白いよ」
なんて斎藤は美優の質問に対してどうかと思われる答えを返した。もう少し言い方があるのではないだろうか？　……やっぱ俺も適当に言うかもしれん……。
「なになに美優その本興味あるの？」
当たり前だがそんな会話に沙羅が乱入していく。なんせ斎藤が今読んでいる本は肝試しのきっかけとなった本で沙羅のお気に入りの本なのだから……。
「その本私はすごく面白いと思ったわ。ストーリーなんてたいしたもんよ？　美優も一度読んでみると良いわよ。カッちゃんは今読んでなかったから私が読ませてるところ。カっちゃんたら自分で買っておいて私だけに読ませて自分は読まないんですもん」
沙羅は一人で愚痴を言いながら斉藤からほとんど奪うような形で本を取り美優に渡していた。斎藤は枝折りも挟めないまま取られてしまったので小さく「あっ……」と呟いて本を掴んだままの形で停止した。斎藤も可愛そうに、読めと言われたり奪われたりと……。
「あ、ありがとうございます。でもすいませんが私同時に何冊かの本を読むのは苦手なので今読んでる本が終わったら読ませてもらっても良いでしょうか？」
美優は自由すぎる沙羅に一瞬引きながら丁寧に断った。確かに

美優は読書ペースは見ている限りゆっくり、なので同時に読むのは苦手と言うのは納得がいく。
「沙羅もそんな強引に読ませなくても良いだろ？　大体斎藤が哀れだろうが、やっと面白くなって来たって言ってるのにさ」
少し引き気味の斎藤と美優の間に残念そうにたたずむ沙羅に俺が止めに入る。
「うーんそれもそうねー私とした事が少し暴走してしまったようね。美優ごめんなさい」
「いえ、気にしないで下さい。私も今読んでいるのが終わったら読んでみたいと思います」
「そうしてくれると嬉しいわ」
沙羅が暴走気味なのは今に始まった事ではないがそこには敢えて騒ぎを起こさないように触れずに流しておく事にしよう。持っていた本を持ち主に目も向けずに雑に差し出すようにして返した。その後は美優と適当に会話を始めた。
「ありがとうございます」
斎藤は見向きもしない沙羅に嫌味たらしく丁寧な口調と顔では馬鹿にしたような表情をしていた。
「どういたしまして斎藤君。別に気にしなくて良いのよ？」
斎藤の態度に沙羅は分ってやっているのだろう、沙羅は満面の笑みで嫌味を返した。斎藤、沙羅にお前が勝てる訳ないだろ？　俺だって勝てない。
「ははは……」
斎藤は苦笑いに笑ってそのまま俯いて撃沈した。バカな奴だよ、お前も沙羅も……。
「おーまだ居たかーさっきはご苦労さんだったな。感謝するよ」
沙羅と斎藤がバカしていると俺の後ろから先生が突如出現した。
「うぉう！　せ、先生なんで背後に……。」
この人はいつも背後に立っているんだよなー。
「先生……？　直ったのデスカ……？」

沙羅は先生の状態を見て考えぶかそうに首をかしげた。カトコトになるほどか。
「そんなに不思議そうにしなくても良かろう？　ニコチン充填してきたからもう問題ない」
先生は首をかしげた沙羅を見て小さく笑った。様子を見る限り完全に本調子と言う訳ではないようだ。
「お？　先生復活ですか？　もう平気ですか？」
「あぁさっきは悪かったな、まさかあそこまで取り乱すとは……」
「私も先生が元通りになって嬉しいです」
「心配掛けて悪かった。さっきは世話になったな」
「もうあんな事はごめんですからね？　煙草は忘れないようにしてください」
「以後気をつけるよ。杉下も調達ご苦労」
停止した沙羅を放置して俺達は先生と思い思い言葉を交わしていく。本調子じゃないとは言え先生はこっちの方がいいな。
「ところでお前らに頼みたい事があるんだ。今回の事を評価しての頼みなんだが」
先生が突然いつもよりも真面目な顔をして話し始めた。一体どうしたというのだろか？
「話しだけなら聞いてあげても良いです！」
ぐっ……またしても後ろから……ビックリするから止めて欲しいものだ。沙羅と言えばフリーズが解けたのか会話に混じりたかったのか勢い良く乱入した。
「うむ、会長がこう言ってるし、とりあえず話しを……」
先生は沙羅の反応、俺達の反応を見渡してから話し始めた。
「短刀直入に言うとこれからも私のために煙草を調達してきてくれないか？　頼む！」
先生はいきなり意味不明な言葉を発して頭を下げた。
「はぁ？」
「そうきたかー」

「せ、先生それはあんまりですよ……」
「さっきの俺との会話を忘れたんですか？」
呆れた……この人はまださっきの人格が残っているようだ……。会員全員がドン引きですよ？　もう少しニコチン吸収したほうが良いんじゃないのか？
「はぁー皆帰りましょう……」
「沙羅ちゃん賛成です！　少し先生は反省した方が良いですよ」
「ははは、そう言う事で先生また今度」
「俺も帰らせてもらいます……」
沙羅の掛け声で会員全員が起立して帰り支度を始めた
「ちょっと！　おまえら待つんだ！　人助けだと思って！　煙草高いんだよ！　頼むよなぁ！」
先生は俺達の後ろから必死に引きとめようとしてくるが誰一人振り返らない。誰が振り返ろうか？
そうして図書室にニコ中一人を残して俺達の今日のクラブ活動が終了を告げた。

「はぁー疲れたわ、色々ありすぎて小腹空いちゃった、ねぇどっかよって行かない？」
校門を出ると沙羅がそんな事を言い出した。そう言われるとそうだな……。
「俺は別に問題ない。でどこに行く？」
「買い食いってやつですね？　わー楽しみです！」
俺と美優が沙羅の誘いを承諾する。この辺だと……幾つか飲食店もあるな。
「え？　皆腹減ったの？　だったら早く言ってくれればよかったのに……えっと……あった！　はい」
俺と美優が行く事を伝えたときに何やら斎藤が自分のバックの中をあさり始めてそして笑顔でそれを取り出してキッチリ人数分取り出した。このバカ何個作ったんだ！？

「出たわね、斎藤スペシャル……」
「一輝君よりにもよってそれなんですか？」
「斎藤デラックス！　それに先生も言ってたろ？　美味しいって。いいから食べてみろよーほら」
斎藤は手に持った斎藤でラックスを沙羅に近づけた。あえて沙羅に……。斎藤お前今回色々選択間違ってるよ……。
「近づけるな！」
案の定沙羅に激を飛ばされた。
「いいからーそんな食っちまえば平気だってー」
斎藤はめげずに渡そうとしてきた。
「沙羅、美優行こう。どこに行こうか」
「そうね……そうそう近くに新しくカフェが出来たらしいわよー」
「あーそれ知ってます。結構綺麗で良さそうですよ？」
俺は沙羅と美優だけ誘って歩きだした。斎藤なんぞに付き合っておられれん。
「ちょっと待ってよー少し！　少しだけ食べてみてよ！」
太陽が沈みかけて夕日になってきた町に俺達の後ろから斎藤が駆けてくる足音が人気が減った道に少し響いた。

ガンマンと愉快な仲間達（1）

「はぁーやっぱりここは落ち着くな……」

放課後の図書室、今はまだ明るく青い空に幾つかの白い雲がゆっくり流れている。窓から射す光が当たらないところからそんな空を特に何も考えず読書を中断して眺めていた。時間がゆっくり流れると言うのはこう言うのを言うのだろう。最近は面倒な事が多い、たまには息抜きが必要だよな……。

今の図書室には俺しか居ない。正確には図書管理人室に星野麗子と言うニコチン中ど……管理人が居るのだがこちらに出てきて仕事をする気配は感じられない……。

いつもならこの図書室に俺が単体で出現する事などあまり無いのだが今日は珍しく一人であった。別に一人では来ないわけではない。

ガラガラ――

俺が空を眺めるのを止めて読書に戻っているとゆっくりと図書室の扉が開いた。誰か来たのだろう、全く不思議な事ではない。しかし妙な事で、開いたのはいいが誰かが入ってくる気配がない。扉の前には低い本棚があって座っている俺には入ってくる人間の上半身しか見えないので、もしかしたらものすごい背のっちさい奴が入り口の本棚に気になるものでもあったのかも知れない、そんな事を考えてはみたがなんにせよ俺には大して関係ないので読書に戻ることにしよう。

「しかしこの本期待していたよりつまらんな……返してしまおうかな……」

そんな事を呟きながら俺が席を立つと同時に何やらガサガサと音が立った。一瞬そちらに目を向けるが俺には関係無いので直ぐに本棚へと歩いていく。

「ちょっとバカっちゃんなにやってんのよ！　桂にバレたらどう

するのよ！」
「え！　俺なのかよ？　沙羅が一番慌ててたじゃんか！　頭本棚にぶつけるって馬鹿すぎだろ！」
「二人とも落ち着いてください、桂君にバレちゃいますよ」
「そうだった……全くこれだからカっちゃんは……バカなんだから」
「この野郎……」
本棚のあたりから聞き慣れた声がしたような気がするが、俺には関係ないし他人の会話に聞き耳立てるのもあまりよろしくないのでそのまま目的の本棚へと歩くのを止める事はしない。でもアイツら何してんのかねぇ……。斎藤はともかく沙羅や美優が遅刻とは珍しいかもしれんな。
「桂君まさか気付かなかったんですか……」
さてこの本返したらまた新しい本探さないと……。などと思っていると俺の進む方向にあるカウンターのあたりからガチャリと扉が開く音がした。これには俺も反応を示す。
「先生どうしたんですか？　仕事でもする気になりましたか？」
俺はカウンターの方を見ながらそう言い放つ。さっき言ったことは勿論冗談である。
「愚か者、私がそんな面倒な作業をすると本気で思っているのかお前は？」
そう言った声は明らかにダルそうで一見壁からスッと出てきたかの様に見える言った本人は思った通りダルそうだった。
壁に見える扉から出てきたのはいつも通りの背が高くスーツが似合いそこそこ長い綺麗な黒髪を一本に束ねスタイリッシュな眼鏡を掛けた見た目美人だが中身は仕事しない煙草大好き駄目人間の図書管理人の星野先生が前傾姿勢で現れた。
「まさか、先生がそんな事をしだした日には氷が降りますよ」
目的の本棚へと到着して本を片付ける。冗談交じりにそう言うと先生は「確かにな」と言ってこれまたダルそうにカウンターにド

スリと座った。
「ところで今日は杉下一人か？　他のやつらはどうした？　はぶられたか？」
本をしまって新しい本を近場から探していると先生がふとそんな事を言ってきた。
「さぁどうでしょう？　もう直ぐ来るんじゃないですか？　知らないですけど」
そう言いながら本を探すのは止めない。そうすると先生は……。
「ふん、つまらんな」
短くそう呟いて椅子により一層深く腰掛けた。毎度毎度先生の暇つぶしに付き合うつもりは無いのだ。先生はしばらく天を仰いでからふと何かを気付いたようでガタっと音を立ててこちらを向いた。
「そう言えばもうそろそろブン……」
もうそろそろブン？　なんだそりゃ？　気になって先生の方を向くと先生はこちらを向いて止まっていた。俺を見ている？　いや、少しズレてるか……。
「どうかしましたか？　なんか居ました？」
「あぁなんか居たなホレ後ろ」
先生に聞くと先生はアゴで俺の後ろを示した。後ろを振り返るのだが一見何の変哲も無い図書室の空間が広がるだけであった。
「これと言って……」
俺がそう言うと先生はおもむろに席を立ってこちらに近づいてきてホラっといいながら本棚を指差した。
「ただの本棚じゃ……あ」
「やっと気付いたか」
先生に指を指してもらいようやく気付くことが出来た。確かに変であった。本棚の上にいつもならば無いプラスチック製に見える黒い棒のようなものが飛び出していた。しかも揺れている。明らかに怪しい。
「何でしょうね、でも人でも居るんじゃないですか？　普通に」

俺は大して気にならないし多分あそこに人が居る事は知っていたので今さら反応するのも気まずいと言うものだ。
「そんな事はどうだってかまわん。私は今とても暇をしているからな、それにどうせ山本達だろう」
えっ？　と思った。あいつ等だったのか？　気付かなかった……。俺が半分くらい呆然としていると先生はスタスタと俺を通りこして例の棒に向かって行った。俺も先生の後を着いて行くことにした。
「え？　こっち来るの！？　どうするバレたかのか！　出るか！？」
「ちょっと落ち着きなさいよ！　こう言うときはアレよ！　えっと死んだフリ！」
「お前が落ち着けそれは熊だ！　どうにもならんから！」
「大人しく出た方が良いのではないでしょうか……」
「この状況で出たら寒いじゃない！」
「確かにな！　じゃ俺も死んだフリ！」
「だからそれは熊ですよー」
近づいていくとそんなバカな会話が聞こえてきた。確かに先生が言った通りあいつ等らしい。しかし何で隠れてるんだ？　俺と先生は本棚の前に着いて二人同時に本棚の影を覗いた。そこには死んだフリを一生懸命続けるガンマンと侍とその横で正座をするドレスを着た人間と言うなんともカオスな空間が広がっていた。
先生と俺は同時に機能停止を余儀なくされたのだった……。
「いやーやばかった、まさかバレるとは思わなかったなー」
「それもこれも全部カっちゃんがしくじるからよ。あれほどもう少し短い刀にしたらって言ったのに……」
「なんだよー沙羅だって長いほうがしっくりきてるって言ったじゃんかー」
「それとこれとは別よ」

「二人とも喧嘩はダメですよ」
「分ってるわよ」
「沙羅が怒られたー」
「っな！　アンタも怒られてんの！」
「そうかなー？」
「このバカっちゃん！」
「止めてくださいよー」
俺はいつもの指定席についている。先生も珍しくカウンター以外の席、俺の隣の席に座っている。そしてそんな二人の前にはガンマン、侍、ドレスかと思ったらウェイトレスの姿をした俺以外の図書室クラブの面々が立ったまま喧嘩していた。
「お前ら、喧嘩はどうだって良いけど、まず！　何が起きているのか説明しろ！　タイムスリップでもしてきたのか！？」
いつまでたっても話しを進めないこいつ等に少しイラッとした。それに気付いたのかガンマンがしぶしぶと言った顔で話しを始めた。
「そうねーこれはね演劇部借りてきた衣装なのよ。ほらクラスに居るじゃないアンタも知ってるでしょ？　山田涼香さん、彼女演劇部なのよ。それでたまたま見せてもらえることになったんだけど見てたらカッコ良かったから少し借りて桂をおどろかそーって思って皆拾って着てきたの」
沙羅の話しに出てきた山田涼香さん、残念ながら知らないな。それはともかくこうなった経緯は理解する事が出来た。
「なるほど、しかし隠れる事無かったのに、堂々と出てきても驚くぞ」
俺が腕組みしながらそう言うと沙羅も腕組みしながら。
「いきなり出てきた方が面白いじゃない」
そう言い切った。俺は遠い目で沙羅を見つめた。
「それよりその服良く出来ているんだな、特に山本のガンマンなんて良く出来てるじゃないか今年も演劇部は頑張ってるな」
隣に座っていた先生が机に突っ伏しながら言った。確かに改め

てみると作りが凝っている。今年もと言う事は毎年なかなかな劇でもするのだろう。
「そうなんですよーこれもすごくないっすか？　ザ・侍ですよー刀まで付いてます」
先生が作りを褒めると斎藤が嬉しそうにポーズを取りながら何か言ってきた。
ここらで少しこいつらの服装といつもの様子をちょっと比較しながら見てみよう。
デレデレッテレ――
まずガンマンから行こうか。
ガンマン……普通に昔の西部劇なんかのガンマンを想像であっていると思う。頭にカウボーイハット、腰にガンベルトと銃まで付いたこれまた本格的な衣装である。
それを着ているのは図書室クラブの会長件アイドルの山本沙羅である。コイツは女にしては背が高く俺と大して変わらないと言うなんとも嫌なやつである。見た目は栗毛のセミロングの髪をそのまま流して整った顔つきの世間一般では美少女のカテゴリに入るのであろう少女である。ただ俺の中では中身がかなり危険なことを知っているのでそう言う目では見ることが出来ない。油断したら死ぬと思っている。とにかく気の強い奴だ。そんな沙羅にはお世辞無しで締まったガンマンの格好は良く似合っていた。
続いて侍だ。
侍……こちらはそこまで手の込んだ様子は無いがそれなりにしっかりしているようだ。見た目は剣道着に見えるが時代劇なんかに出てくるお侍さんの格好だと言えばそう見える。
腰には侍らしくしっかりと長い刀を挿していた。と言うかこれが無ければただの剣道部……。ちなみにこの刀の鞘が先ほど出っ張っていた。
これを着ているのは図書室クラブの雑用件いじられ役の斎藤一輝である。ちなみに“かずき”ではなく“いつき”と読むのが正しい。

コイツは背が高い、男の中でも特に高い、沙羅と並ぶと沙羅の背が小さくなって普通に見えるような気がする。こいつもそれなりに良い体系で少しガッチリしている。頭は黒の短髪で上のフレームが無い眼鏡をしている。斎藤は元々運動できそうな見た目なのでそこそこ剣道部の格好は似合っていた。

続いてウェイトレス改めメイド服。先ほど沙羅にウェイトレスと言ったら本当に今時の高校生か？　と怒られてしまった。

メイド服……これに関しては何の知識も無いので省く。沙羅が言うには白と黒の色が可愛いメジャーなメイド服らしい。沙羅も詳しく無いようで斎藤が教えてやると言うので聞いてみたら何やら意味不明な専門用語を使い始めたので沙羅と早々に中断させた。

何故あえてそれを着ているのは聞く事が出来なかった。と言うか演劇にこんなの使うか？

とりあえず……これを着ているのは図書室クラブの……役職まだ考えてなかったな……俺と同じ一般会員でいいのかな？　沙羅と相談だ。えっと高坂美優だ。名前からするとバリバリ日本人だが見た目はバリバリハーフだ。この子背は高くない普通サイズと言ったところだろう。ハーフなのに。髪はなんともそれらしい綺麗な金髪で癖なのかウェーブがかかった髪を腰の辺りまで長く伸ばしている。顔つきはさすがハーフと言ったところだろうか、スッとしてかなり整っている。少し目がタレ目なのが印象に残る。ちなみに沙羅は少しつり目だ。なんとも分りやすいだろう？　と言う事で沙羅と違いおっとりとしていて気の弱そうな子である。が、この子はこの子でかなり曲者と言うイメージが強い。この服はやはりハーフで金髪と言う事からもこの中では一番にあっているのかもしれない。

ちなみに美優は図書室クラブの中で唯一の二年生である。先輩だ。しかしそんな威厳は全く感じられない。

こんなところかな？　戻ろうか。

「お前ら本当にバカなんだなー」

俺は改めてこいつらに感想を言った。本音だ。真顔だ。こいつ等

馬鹿だ。
「桂君そんな真剣に言わないで下さいよ、私だって少し恥ずかしいんですよ」
美優は白い目で見る俺に対して苦笑いしながら言ってきた。
「少しって……まさか美優気に入ってるのか……？」
「まぁ多少」
美優は多少と言いつつなんとも満足そうに笑った。
斎藤、沙羅はまだ分る、いや、俺の理解の範疇を軽く超えているがまだ分る、だが、美優は無理だ、もし俺が女だとしてその格好を学校でさせられたらそのまま窓を突き破り自殺を図るような格好だ。それとも美優はこいつらとこう言う事をするのが好きと言う意味なのか？
「美優ちゃん！　美優ちゃん！　ターン、ターンだ！　回るんだ！　お願いします！」
俺と美優の会話をしているとそれを見ていた斎藤が何やら変なテンションで美優にターンをお願いした。何がしたいんだ？　よく見ると斉藤は目がおかしい……。
「え？　た、ターンですか？　えっとこうですかね……」
美優はかなりいきなりの斎藤の注文をたじろぎながら言われた通りその場で一回くるりと綺麗なターンを決めた。しかしこれがどうしたと言うのだろうか？
「くぅー！　一輝感激！　美優ちゃん！　アレだ！　さっき教えた奴を頼む……これで最後だから……」
斎藤は何やら途轍も無く疲労しているようで、息を荒くし膝を着いていた。こいつの事は時々ヤバイと思うが今日ほど思ったことはない、沙羅もドン引きしている。
「は、はい……えっと何でしたっけ？」
美優がそう言うとおもむろに斉藤が美優に近づき何やら耳打ちをした。
「頼んだよ……」

「は……い……。じゃあ行きます！」
美優に耳打ちすると斎藤は元の位置へと戻っていった。美優は何やら意気込むとまたしてもくるりと一回ターンをしてピタリと止まってこう言った。
「お帰りなさいませ、ご主人様」
……アレだ……俺だってこのくらい知っている、メイドと言えばこれなのだろう。斎藤はこれを聞いた後数秒天を全身で仰ぎ一言小さく。
「我が人生に一遍の悔い無し……！」
と言って床に崩れ落ちた。美優は沙羅にこう言う事はもうしなくて良い、斎藤に付き合うな、としつこく言われていた。俺もそうした方が言いと思った。
少し時間が経った。こいつ等本当に馬鹿だよな……。
「はぁーしかし楽しむにしたって何も……」
俺はこいつ等を少しバカにしようと思い言葉を言おうとした。しかし何故か沙羅の目がキラリと光ると何やら沙羅の手がものすごい勢いで動いて行く。
「こんな……」
沙羅の動きは止まらない俺の口も止まる事はまだ無い。スローモーションのように時間が過ぎる。沙羅の手は腰へと向かった。俺ももう全てを言い終わる。
「コスプ……」
バシュン――！
俺が言い終わる寸前俺の髪を何かがかすった、それと同時に後ろから何やら可笑しな音がする。俺は衝撃で動かない体を何とか首だけ後ろに向けた。顔も血の気が引いて青ざめているだろう。
「さ、沙羅ちゃん！？　何してるんですか！？　危ないですよ！？」
「沙羅うめぇ……！」
「そんな事言ってる場合ですか！？」

「いやさっき試しに撃ってみたいって言ってたし、こうなるんじゃないかなーって思ってた」
「そ、そんな……」
俺の後ろにはこれまた本棚がある、それも小さい、これはちょうど椅子に座っている俺の頭と同じくらいの高さの奴だ、その上に図書委員がダンボールで作ったお勧めを告げるマスコットがあるのだがそのマスコットの額に何やらプラスチックの弾がめり込んでいた。
「こ、こ、これは……沙羅さん？」
ギチギチと音を立てて俺が首を戻すと沙羅は腰にあったはずの銃を抜いてその銃を俺に向けていた。
「グロッグ１７……アンタも名前ぐらい知ってるんじゃない？１９８５年にアメリカで販売装弾数１７発の自動式拳銃のモデルガン……余計な事言うと次は当てるわよ」
沙羅はそう言うと素早く銃を腰に戻した。勿論知っているさ、なんせそれを沙羅に教えたのは俺の様なものだ、何故かってこれは俺が好きな本の主人公が持っていた銃だから……まぁ途中で捨てちゃうけどね。じゃなくて！
「な、何してんだ！　何もそこまでしなくても良いじゃないか！　死ぬかと思ったぞ！　なんでこうなるんだよ！？　少し馬鹿にしようとしただけで！　ためし撃ちしたいってだけで！」
俺は椅子に腰かけたまま沙羅を指差して猛講義する。しかし沙羅は帽子を手で下げてポーズを決めてやがる。
「この野郎……大体何でグロッグなんだよ！　おかしいだろ、何で西部劇の人間がグロッグなんだ！　せめて回転式拳銃とかにしろよ！　自動式って……ミスマッチにも程があるわ！」
「すげぇ、ものすごい勢いでツッコミどころ間違ってる……」
「動揺してるんでしょうか……？　沙羅ちゃんやり過ぎです。それにしても桂君って物知りですね……」
ぐっ……斎藤たちにツッコまれるとは……ちくしょう、これも全部沙羅のせいだ！

「何とか言いやがれ！」
「止めたまえ！」
俺が立ち上がり沙羅に向かい言い放つとポーズを決めていた沙羅が当然しゃべりだした。
「それ以上口を開くとこの優しき保安官でも容赦はせんぞ！」
沙羅は真顔でそう言った。この場の全員が凍りついた。
「はぁ？　何？　え？　沙羅、お前……保安官って……」
静まり返った図書室で初めに口を開けたのは俺だった。沙羅に向けられた怒りは一瞬にして消えた。俺が言うと沙羅は顔が真っ赤になっていった。
「ごめん……謝るからこの空気止めて……いっそう私を殺して……」
沙羅はそれだけ言うとその場で蹲ってしまった。
「まぁあれだ、空気だ、あのときの空気が悪かったんだよ、気にするなって」
斎藤が必死にフォローを入れようとする。しかし雑だな……。空気って……。
「そうですよ、空気が悪いんですよ！　だからね？　元気出してください沙羅ちゃん」
美優まで斎藤の空気が悪い説に乗り始めた……。もうこれで押してくか……。
「確かにあの空気は悪かったよな、その格好だもんな、やりたくなるよ」
この場は全て狂った空気が悪い事になり、かなり雑だが適当に俺も慰めておいた。沙羅が立ち直るまでしばらく掛かった。
その後しばらく格好のことで話していると斎藤が何やら話しを切り出した。
「で、ケイどうだ？　カッコイイだろうー？　お前も着たいか？　ん？」

自分でも額に青筋が出るのが分った。こいつ……。まぁいいか、俺は落ち着いて机に頬杖をしながら。
「あぁそれなりに似合ってるよ。ガンマンにメイドに剣道部か……いいな、特に剣道部！」
「剣道じゃねぇ！　侍よ！？　侍！　ラスト侍でっせ！？」
斎藤は熱くゼスチャー入りでツッコミを入れてくるが軽くスルーして沙羅を見る。何か変な予感がしたが今……。
沙羅はただ一言微笑ながらこう言った。
「着る？」
沙羅はどこかからか紙袋を取り出して俺の前で掲げて見せた。この場合沙羅は「着る？」ではなく「着なさい」の意味になるだろう。
沙羅の状態を見ると着ないとは言えなかった。沙羅は笑いながら俺に空いている手で俺に向けて例のグロッグ17を向けていた。その姿はガンマンと言うよりマフィアに近かったような気がする……。
沙羅から渡された紙袋を持って俺はそのまま図書管理人室へと追いやられた。ここを更衣室にしろと言う事だ。俺は持ってきた紙袋から中身を取り出した。中に入っていたのは……制服？
俺はなんとも腑に落ちない気分のまま着替えを済ませると汚い図書管理人室の扉を開きコスプレ集団へと進んで行った。俺が出てくるのに気付くと斎藤はすぐさま笑い出し、沙羅も笑いそうになり顔を引きつらせて腕組みしながらこちらを見ていた。美優はと言えば手を胸の前で合わせてキラキラした目でこちらを見ていた。この格好だ、せっかくだからこのままこいつ等に果たし状でも叩きつけるか……。
「なぁお前らこれは何だ？　なんで俺だけこんなのなんだ？　斎藤交換しないか？」
「嫌だね、これはこれで気に入ってるんだ。それにそこまで似合

ってない事無いよ。ププッ……」
こいつら全員気に入ってるんじゃないか？　斎藤は後で殺す。
俺は渡された衣装を着て沙羅たちの前に立った。
「いいじゃないですか、とっても似合ってますよ。すごく強そうです」
美優が未だにとってもにこやかな顔でそんな事を言ってきた。
「いや、そんな事ないから、ふざけ感出すぎだから」
俺はキラキラした表情の美優にジト目でツッコンだ。
「いやいや美優の言うとおりよ、似合ってるわよ桂、その……番長……くっ……あはははは」
沙羅は最初のうちは真顔で最後の当たりは完全に笑っていた。
なんとも馬鹿にした連中だ！
「いやいや、私の知り合いにも居たよ、それ着た奴。親の時代には本当に本物が沢山居たらしいぞ。いやなかなかに懐かしいな」
なんて星野先生。
「先生の思い出話はどうでもいいんです！」
「どうでもいいとは失礼な……」
くそぅ……！　そう俺が沙羅から渡された衣装はなんとも懐かしいバンカラスタイルの服だ、簡単に言うと番長だ、ボロボロの学ランと学帽に黒いマント、ご丁寧に下駄までついた完全装備だ。演劇部！　作りが本格的過ぎだ！　見なくても分る、俺にこれは似合わない。
「そうだケイ、さっきともう一つ違うんだけど何か気付かない？」
俺を見ながら思い出したかのように言ってきた。俺は斎藤の発言に少し不機嫌になりつつ図書室をぐるりと見渡した。
「顔こわばらせるとケイでも迫力出るな」
「やっぱりかっこいいですねー　桂君脱いだら私も着させてもらおうかな……」
「美優ちゃん、止めときな……」
「どこも変わってないぞ」

一回見渡しても分らない。斎藤め、適当なこと言ってるな。斎藤を軽く睨みつける。

「いやいや変わってるって……。しっくりきすぎて気付かないのも無理ないけど、俺達もビックリしたんだから。あとその格好で睨まないでくれ……」

「確かに、似合いそうだとは皆思いましたけどここまでとは……桂君次は私に……」

斎藤が苦笑いしながらそう言うと美優までもが斎藤と同じような事を言い出した。斎藤はともかく美優は嘘はつかんだろう。

沙羅に目を向けると沙羅は無言である人物に目線を向けた。その目線の先を辿ると普通に椅子に座る星野先生が……俺は全て気付いた。

「まさか……先生……本職そっちでしたっけ？」

そこには白衣を着た星野先生が無言で立っていた。それはこの中で文句なしのぶっちぎりで似合っている事は見て直ぐに理解する事が出来た。と言うかその道の人にしか見えなかった……。

その後何故か沙羅が持っていたデジカメを使い全員で記念撮影をして今回のコスプレパーティーは幕を閉じた。撮影中に図書室に入って来た女子生徒が俺達を見た瞬間小さな悲鳴を上げて出て行ったのを俺は見なかったことにした。

俺と斎藤は図書管理人室で着替えを済ませ図書室へと戻ってきた。沙羅達女子勢は俺達の先に着替えを済ましている。

「ふー以外に楽しかったなー」

「んなこと無い、無駄に疲れただけだ……」

「ケイは本当に素直じゃないよねー結構楽しんでたくせに」

斎藤とそんな事を話しながら戻って行った。先ほどまできていた衣装は斎藤も含め皆紙袋に入れている。どうやら全員着替えは持って来ていたようだ。

「よいしょ……」

戻ってくると先生と沙羅が何やら話し合っていたので床の端に服の入った紙袋を寄せておいて少し話しを聞く事にした。聞いている限り演劇部の話のようだ。斎藤は沙羅の近くで本棚を物色していた美優と話しを始めていた。

「ところで山本この衣装、借りてきていいのか？　練習とかに使わんのか？」

「あぁ大丈夫ですよ、今日は練習が休みなんだそうです。この後部室に衣装返せるように鍵も預かってます。明日あれば問題ないらしいですよ」

「そうなのか。しかしこの時期になって練習なんぞ休んで本番は大丈夫なのだろうか……」

「私もそのあたり気になって聞いてみたんですけど。衣装作るのに張り切りすぎて部員の殆どが今はダウン状態らしいです。演技はずっと練習していた物みたいなんで少しくらい休んでも全く問題レベルらしいです」

「ほぉ、じゃあ今年の演劇は期待できそうだな」

「そうですね。私は見るなら初めてだから気になりますね」

気になった事があるので俺も会話に参加してみる。

「なぁ演劇部って近いうちに劇でもするのか？　いつやるんだ？授業の一つくらい潰してくれるんだろうな？」

劇があるとは知らなかった。俺は演劇部の劇とやらにはあまり興味ないがもし全校生徒が必ず見ないといけないものなら退屈な授業の変わりに行われることも期待できる。しかし沙羅の反応は俺の想像とは違っていた。

「はぁ？　桂何言ってんのよ、公演の日に授業なんてあるわけないじゃない、大体宣伝なんてしなくても皆知ってるわよ？」

沙羅は少し眉を寄せて不思議そうな顔をした。なんだって授業がない？

「ケイもしかしてその日が何の日か知らないんじゃない？　そんな訳ないか、ははは」

美優と話していると思っていた斎藤が突然会話に参加してきた。何の日？　何か特別な日でも有っただろうか？
「もしかして祝日か？　だから授業が無いとか？」
俺が真顔でそう言うと皆渋い顔をしてしまった。何か変な事を言っただろうか？
「ケイって時々かなり疎いよね、と言うより頭が自動的に面倒なことを削除して行ってるとしか思えないよ」
「確かに言えてるかも……桂の気付かないは意図的としか思えないわよね」
「何がそこまでさせるんでしょうか……」
皆口々に感想を言っていくが馬鹿にされてる気しかしない。
「む……一体何があるんだよ、俺だって重要な事なら覚えてるぞ。どうせどうでもいい頃なんだろ？」
みんなの反応が気に食わないので反論してみる。俺を何も聞いていないような人間と思われたくないからな。
「じゃあ桂、聞くけど良い？」
沙羅がゆっくりと子供に話しかけるように言ってきた。こいつナメてるな……。
「あぁもちろんだ、どんと来い」
売られた喧嘩は買ってやろうじゃないか。俺は気合を入れた。
「桂、文化祭って知ってる？」
俺は沙羅から発せられた言葉を聴いて拍子抜けしてしまった。文化祭？　そんなの知っているさ。高校生の夢や希望、友とはしゃぐも良し気になるあの子と過ごすも良し、空気に飲まれて参加者が好きに騒げる夢の期間、そして何より俺にとっては……。
「面倒なアレだろ？」
その一言で沙羅と斎藤の二人は全てを理解したようで。手を眉間に当てて左右に首を振った。ナイスシンクロ……。

ガンマンと愉快な仲間達（2）

「分ったお前らの言いたいことは大体分った、俺がバカと、俺がバカと言いたいんだな？　そうだな？　それで文化祭がなんだって言うんだ」

沙羅と斎藤のシンクロがカンに触る……。

「ここまで言っても理解できないの！？　アンタどんだけよ？」

「違うよ、沙羅、理解できないんじゃない、理解しないんだ。面倒だから」

「そうね……」

なんだか分らんがこいつらに失望されてしまったらしい。沙羅は普段から良く斎藤や俺に呆れてるけど。沙羅は一度深呼吸してから俺と対峙した。

「いい？　私達の通うこの学校で文化祭があるの、それももう直ぐそこまで迫ってるの、桂以外の全校生徒が認知してるの！　大体この間廊下で文化祭のポスター見てたじゃないの！　見っけたのアンタよ！？」

沙羅は徐々に声が大きくなって行って驚愕の発言をした。

「な、なんだと……文化祭が……開催されるのか……？」

信じられん、俺が文化祭を体験する日がこようとは……。

「本当よ、嘘言ってなんになるって言うのかしら。他にも使うでしょうけど文化祭があるから演劇部もこんな変に凝った衣装用意してるんじゃない。それにここで生活してて様子の変化に気付かない？　大分変わってきたわよ？　生活しづらいくらいよ、全く……」

沙羅は少し疲れたような表情で一度軽い溜息をついた。沙羅も文化祭を面倒だと思う人間だろう。つまり俺側。

「文化祭か……その日は近いんだよな？」

沙羅の言うように今思うと学校の様子も変わったような気がす

る。確認のため皆に問いかける。
「そうよ……」
「そうなんだぜ」
「そうですよ」
うむ、やはり終焉の日は近いようだ。……だるいな。
「あー休んじゃ駄目かなー」
椅子に深くもたれかかり一言呟く。
「私もそうしたいわ……」
すっかり面倒モードに入ってしまった沙羅もポツリと呟く。
「うぁ、君達二人は楽しもうとか思わないのか？　せっかく初めての文化祭だって言うのに、高校生として文化祭ではしゃぐのは義務だよ。もう少しやる気だしなよ」
俺と沙羅を近くで見ていた斎藤が苦笑をしながら説教たれてきた。斎藤は俺や沙羅と違いこう言うイベント物が好きな人間だったな。昔からコイツも祭りやらプールやらによく付き合わされたものだ。
「沙羅ちゃん達文化祭はお嫌いですか？」
斎藤の隣で話を聞いていた美優が何やら訊ねてきた。少し寂しそうに見えるのは気のせいか……。その様子に沙羅は気付く様子はない。
「そうね、私って文化祭とか人が沢山いるところ好きじゃないのよ、息苦しいったらありゃしないわ。図書室クラブ少人数ですることなら好きなんだけどねーだから肝試しなんかは楽しくてしょうが無かったんだけど」
目を閉じて少し考えながら美優の質問に答える沙羅、うーんと唸っている。沙羅のこの発言には俺もとても賛成だ。
「やっぱそだよなーせっかくだから文化祭の日は二人で駅の近くに新しく出来たって言う本屋にでも行くか？」
俺は笑いながら冗談を言った。軽い冗談だ。
「そうね、でも文化祭は二日間だから普通に町の図書館でも良い

と思うわ」
沙羅も軽く笑いながら冗談に乗ってきた。
「おいおい、それでも現役高……」
「駄目です！　沙羅ちゃんも桂君も文化祭出なくちゃ駄目です！」
ふざける俺と沙羅に斎藤がツッコミを入れようとした瞬間突然美優が大声を上げた。俺達は驚いて一斉に美優のほうを見る。先生も珍しく口を開けてポカンとしている。地雷でも踏んだか？
「ど、どうしたのよ美優突然……」
「なんかあったのか？」
「美優ちゃん大丈夫？」
みんな突然の事態に状況が飲み込めないもの美優に何か起きたことは確かだ。本当にビックリだ。
「私今年の文化祭はとても楽しみにしてたんです……」
美優が話しを始めた。その表情はとても切なげだ。今になって美優を真剣に見つめる。
「ただの文化祭よ……？」
ここで沙羅がポツリと呟いた。普通に考えればその通りだ。しかし相手は美優である事を忘れてはいけない。
「ただの文化祭じゃありません！　私にとっては友達と過ごせる初めての文化祭なんです！　だから……だから皆出なくちゃ駄目なんです！」
美優は目にうっすらと涙を浮かべていた。これは美優の本当の気持ちだろう。美優が何故こんなにも必死なのかは俺達と出会う前の美優の生活と美優の性格から考えれば当然かもしれない。そしてそれは俺だけではなく図書室クラブ全員が容易に考えられるだろう。まぁ誰にでも地雷は幾つか存在するものだ、特に気にする事じゃない。
「美優、分ってる。悪いが俺と沙羅の話は冗談だ。全員文化祭には参加するさ。だからそんなに気に病まないでくれ」
少し笑いを含めて俺は美優に事情を説明する。笑いを入れたの

はこの場を少しでも和やかなものにしたいと言う俺の不器用な配慮だ。
「そうよ、軽い冗談だわ。けど悪い冗談だったわね。ごめん美優だから元気出して」
沙羅も俺と続き美優を慰める。うーん少し空気が重いなーでも大丈夫だろう。
「二人の言うとおりだよ、元気出しなってせっかくの可愛い顔が台無しだよ？　ほら笑った笑った！」
斎藤の性格上こう言うのは斉藤が一番うまい。ただ軽いだけなんだけど。
「えぇそうですね……取り乱してすいませんでした！」
目の端の涙を指で拭った美優がニッコって背景が似合いそうな笑みを見せた。どうやら元気は出してくれたようだ。
「第一文化祭ごときのために欠席日数増やしたくないし……」
本音でポツリと呟く。
「そうね……」
沙羅もポツリ。
「えぇー沙羅ちゃん桂君また沈んじゃうんですかー！？　元気出しましょうよー楽しみましょうよー」
先ほどの俺達との立場が逆になってしまった……。
「てか俺達は何もしなくていいのか？　クラス展示とか」
ふと気になったので訊ねてみる。ことによっては面倒な事が沢山あると言う事だ。
「本当に先生とかの話し聞いてないんだね、まぁ文化祭あるとこ知らなかったし当然か」
斎藤に溜息をつかれてしまった。当然だがイラッとくる。
「それについても安心よ、この学校の発表は大体部活動だから、ほらこの学校無駄に部活多いじゃない。でも希望があればクラスでも出来るそうよ。したい？」
机に頬杖突いた沙羅がダルそうに答えてくれた。

「御免被る」
「でしょうね」
「そのやる気の無さ何とかなんねぇのか？　いいじゃん皆で出店とか回ろうぜ」
「そうです。皆で行けばきっと楽しいですよ」
いつまでもやる気の無い俺と沙羅に対象的な斎藤と美優、綺麗に2対2になったもんだ。
「なんか乗れないんだよなぁーなんか楽しみがあればいいんだけど……」
俺が発言すると沙羅ではなく珍しく美優の目が光った！　沙羅は今の状態で目を光らせるのは無理だろう。
「私こんな物持ってます！」
その声はやけに弾んでいる。嫌な予感しかしないんだけど……。まぁ良いや。
「鞄が…えっと……ここからだから……えい！　これです！」
美優がもたつきながら鞄から引っ張りだしたのは大量のプリント……？
俺は机に置かれたときに俺のほうに滑ってきた一枚の紙を手に取り始めの文を音読した。
「期末英語テスト、高坂美優１００点……」
「きゃぁぁぁ！　それは違うんです！　そっちじゃなくてこっちですこっちを見てください！　待ってみないで下さい！」
美優は顔を真っ赤にして半泣きで取り返しに来たが先ほどまでグッタリしていた人間とは思えない速さで素早く沙羅が止める。
「……」
「……」
斎藤が固まっていた。ついでに俺も夢なのか現実なのか疑っていた。沙羅は至って冷静で「なになにー美優１００点取ったの？」なんて言っていた。ゆっくりと斎藤が俺からプリントを奪い取りワナワナと震えながら見つめていた。

「う、うそだぁぁぁあああ！！！！！」
斎藤が現実を受け止めきれずに大声を上げて崩れ落ちていった。
斎藤が手放したプリントを次に沙羅が拾う。
「へーすごい美優って頭良いんだー。んーさすがに2年生のはよく分らないわ」
沙羅は全体を眺めてからホイっと言って美優に返した。
「そんな事無いですよー。たまたま山が当たったんです」
沙羅に褒められて嬉しそうな美優。山が当たってもそこまで取れないぞ……元が良いのか？
「でもこの学校で１００点なんて取れるもんなんだな。この前のテストも結構難しかったろ？　何個も赤点とって泣いてる奴いたし」
「俺の事か！」
斎藤が叫んだ。美優には素直に感心する。中学でも１００点は珍しかったなよな……。
「そう？　結構簡単よ、１００点なら私も取った事あるわよ？あんたらが勉強し無さ過ぎるだけじゃない？」
「ばかなぁ！」
崩れて固まりになっていた斎藤が跡形も無く爆散した……。俺にも衝撃が走る。
「な！　……それは本当か？」
額に汗をかく。
「本当よ、言わなかっただけで」
沙羅は真顔で言い返してきた。嘘じゃなさそうだ……。
「テストなら斎藤いじりのために大体見せ合ったはずじゃ！」
「おい！」
確かに沙羅は俺達の中じゃダントツトップだが１００点は見たことがない……。
「大体でしょ？　見せなかったのが全部１００点よ」
さらっと恐ろしい事を言ってきた。
「お前が見せなかったのって結構あるぞ……」

「俺は赤点取ったのかと思って密かに笑ってたのに……とんだピエロだ……」
俺と斎藤がさらに衝撃を受ける。
「あんた達が傷つくと思って黙ってあげてたのよ」
気遣いだと……！？　低レベルな戦いをする俺達に気を使っただと……！
「沙羅ちゃん優しいんですねー」
「そうよ、当たり前じゃない、大切な友達を傷つけるようなこと私がするわけないじゃない」
「そうですよねー」
自慢げな沙羅とそれをキラキラした目で見つめる美優。イラッ……。
「美優、気づけそいつは優しくなんて無いぞ」
「今言ってるんだから駄目だろ！　優しいなら墓まで持ってけよ！　こんな所で暴露すんな！」
俺と斎藤が猛反発するが沙羅は華麗にスルー。
「で、テストのことはどうでも良いけど美優は何を持ってきたの？　優しい沙羅ちゃんに見せてよ」
「ぐあ、沙羅ちゃんって似合ねー」
斎藤の発言にも沙羅はスルー……俺が何か言ってもスルーだろうな……。
「はい、沢山あるので好きなものをどうぞ」
机にある大量のプリントの半分くらいを美優が沙羅に近づける。テストはさっきの一枚きりらしい。俺達は思い思いに差し出された紙を手にとっていく。その隙に美優は慌ててテスト用紙を鞄にしまった。
そんな美優を横目で一瞬確認した後何となく手に取った紙に目を移す。
燃えろ青春！　文化祭恒例バレー部招待試合！　是非ごらん下さい！

と言う文字が火をモチーフにして力強くその下のバレーボールのイラストとともに書いてあった。どうやら文化祭の交流試合の宣伝らしい。

「何だこれは？　俺達にバレーをしろと言いたいのか？」

不思議に思った俺は美優にピラピラと紙の頭を摘んで先ほどの紙を見せた。

「あぁそれは毎年恒例の招待試合のビラですね、それにはバレーって書いてありますがバレーが毎年あるんじゃなくて運動系の部活が交代でやってるんですよ。ちなみに去年は野球部でボロ負けでした、それよりそれだけじゃないので幾つか見てくださいよ」

俺が摘んだビラを確認した美優が適当に説明してくれる。運動系の招待試合か……俺は全く興味ないな。あ、でもしばらく前に図書室でルールブック読んだ覚えが……

「俺のはクイズ研究部だってさ。こんな部活存在したっけ？」

斎藤も手に取った紙を見ながら不思議そうな声を上げた。

クイズ研なら知っていた、この間放課後一人で廊下を歩いていたら突如クイズ研と名乗る変な格好をした三人組みにクイズを仕掛けられた事がある。結構本格的な地理クイズだったがちょうど図書室で読んでいた地理の本に出てきた問題だったので即答する事が出来た。あの三人、特にリーダの悔しがりかたは面白かった。

「こっちは華道部の無料体験だわ、ちょっと面白そう……これは……」

斎藤と同じように紙をまじまじと見つめる沙羅。コイツは華道にも興味があるのか……。そういえば以前華道部らしき連中が薔薇とかユリを相手に投げたりしてバトルしてたな……人だけじゃなくて地面にまで刺さって驚いたものだ。

「沙羅ちゃんは華道に興味がおありですか？　私も一度やってみたいですねーどうですか？　一緒に行きません？　あ、茶道部さんの体験もありましたよ」

こっちも必死だな……。美優、グイグイ行くな……。沙羅も分

ってても少し顔引きつってるぞ。茶道部か……何時だったか何故か武将姿の先生が和服姿の部長に切腹命じてたな。

「そうね、考えておくわ……あ、違うのも見ようかしら！」

「はいどうぞ！　沢山ありますからじっくり見てくださいね」

美優から逃げるような形で沙羅は華道の紙を置き違う紙に手を伸ばした。美優は沙羅の態度など気付かずとてもにこやかだ。この子少し面倒なのが欠点だな……。

俺ももう一度近くのプリントを取ってみるそれには演劇部のチラシらしくその紙には「昨年の大好評につき今年も衣装新調でやります！　ガンマン、侍、メイド、番長に研究者が地球の存亡を掛けて謎の宇宙人と戦う超感動ストーリーです！　是非ご覧下さい！」

俺はその紙を無言で丸めてゴミ箱に投げ捨てた。感動じゃなくてコメディーだろ……。てか去年は成功したのか？

「しかし美優ちゃん良くこれだけのチラシを集めたもんだねー結構な量だよ」

しばらくチラシをあさっていると斎藤が数枚のチラシを両手に持ちながら独り言のように美優に話しかけた。

「そうですねー確かに大変な量ですよね。始めた見たとき驚いちゃいましたよー」

「そりゃそうでしょうね、この学校無駄な部活動多すぎなのよねーなによ五身合体ロボット研究部って無駄でしかないわ、なんで五体にこだわるのよ」

五身合体ロボット研究部か……そう言えば何時だったか校庭で巨大なロボットが怪獣と……。

「図書室クラブがそれを言えるの？」

「部活じゃないわ」

「認めた……」

沙羅は図書室クラブがクラブである事にそこまで不満が無い事が分った。斎藤もそう言うつもりで言ったわけじゃないと思うけど……。まぁ確かに無駄な部活も多いな。

「だがまぁこの資料の量に関しては俺も驚きだな」
溜息交じりで若干量の多さに呆れながら演劇部からの気分転換に新しくチラシの山から他とは形の違う一枚引っ張りだす。おっ今回は文化祭実行委員のパンフレットのようだ。読んでみるとどうやら当日の開催期間や学校の地図などを書いた案内のもののようだ。
なんてことないどこの文化祭でもありそうなパンフレットである、その全く興味の無い中身をほぼ全て飛ばして行き見開きの最後の所に執行部メンバーの名前が書かれているのを見つけた。
部長や書記、会計、観察などの役職の横に何人かの名前が書かれている。それの全て知らない人間だと言いたいが何故か一つだけ見覚えのある名前が見えた。委員長、書記、会計は全く記憶に無いが監察の覧に何名か書いてある一番最後にその名前を見つけた。
不思議に思っていたら自然と声が出てしまっていた。
「もしかして美優実行委員なのか？　監察のとこに名前出てるけど」
普通に聞いたと思う自分で思うけどもう少し驚きたまえよ。
「あれ、もうばれちゃいました？　そろそろ言おうと思ったんですけど、あっそれがあったのかー」
美優は全然残念そうじゃない、むしろ嬉しそう。声弾んでるぞ……なかなか面倒なんだよなー。
「あれ美優実行委員だったの？　なんでまたそんな面倒な役職やってんのよ」
沙羅も意外に落ち着いた様子、面倒な役職って……ストレートすぎだろう。
「そうなんですよ、別にしたかったわけじゃないんですけどね、私だって面倒とは思ってるんです、本当に……本当に……面倒な……役職で……私も……したくなんて……いえ！　今は今回のお役目は喜ぶべきものです！　私は運が良かったです！」
面倒な奴を押し付けられたんだろうな……一時はテンション落ちすぎてどうしようかと思ったけど何とか持ち直してくれてよかっ

た。その一瞬見えた涙は見なかったことにしよう。
「そうね……運がよかったわね」
「羨ましいくらいだよ」
「まったくだ」
「そうですよね！」
みんなの反応で少し笑いそうになった。これが噂に聞くカラ元気ってやつか……俺はしたくないなー。なんて、のんきに考えてた。
「これもその実行委員の権力であつめたのか？」
少し気になったので聞いてみた。これも全部管理しているのだろうか？
「権力って……まぁそうなりますかね、いい方変ですけど。基本的に委員長と先生方で相談して管理しているようですが一応私達も見ていますよ、今日は集まったチラシのサンプルを借りてきました、ちなみにまだ増えるみたいですよ」
美優は苦笑いして説明してくれる。まだ増えるのか……一体この学校いくつ部活があるんだ？　関係ないが予算とか本気で心配になる……。
斎藤がおもむろに俺からパンフレットを奪取する。別に用も無いので素直に取られる。
「委員長さんは大変そうだね、ところで美優ちゃんはどんな事するの？　えっとなんだっけ管理だっけ？　ケイどこ？　あっ監察か」
机に乗り出して広げて見ていた斎藤に尋ねられるがまま美優の名前が書かれた位置を指さす。監察の役目？
「なんだろう、警備みたいなことでもするのか？」
「いやいやなんで警備？　出し物の見回りとかじゃないの？」
沙羅のツッコミ、別に意識したわけじゃないので沙羅を黒い目で見て固まる。
「な、なによ……なんかした？」
「いや……」
「そうですね、沙羅ちゃんが正解ですかね。勿論桂君も間違いで

は無いですよ。不審者がいないかとか当日の会場見回りや展示者が変な事しないか監視するのも仕事です。勿論他のこともしますが。委員会では一番楽な役職なんですよ、他の役職はもっと忙しそうです」

俺と沙羅の様子を見てクスリと笑って美優はそう話してくれた。いっけねあんまり聞いてなかった。

「普通の監察委員の人はお友達なんかと回って行くそうです……このままだと私は一人で……いえわがままは言いませんよ？　私のために無理はさせられませんから……それに私は一人には」

「はいはいー！　ストーップ！　ストップ！　行くよ行こうか今すぐ行こうか！？　皆で回ろう！　なぁいいだろお前ら！？」

斎藤が必死になった……文句無いしいいフォローだと思うけど、美優まだ根が暗いな……。

「今すぐは無理だと思うけど……そうねー私はいいわよ。なんか監察の仕事手伝うの楽しそうだし美優と文化祭回るのも楽しそうだしね、桂は？」

何で文化祭じゃなくて監察の仕事に惹かれてるのかは謎だが俺も観察の仕事の方が楽しそうと思ってしまったので黙っておく。本当理由はわかんないんだけどね。

「俺か……そうだな……行ってもいいぞ、当日図書室から会場をボーっとって言うのも良かったけど。いい暇つぶしになるだろ。その辺は展示者に期待だがな」

沙羅に聞かれて一瞬本気で図書室で過ごすことを考えたがそこは合わせようじゃないか素晴らしき高校生活に……。

「そう言う事で……」

俺が言い終わると斎藤が立ち上がり溜めながら俺達を見渡す。おいおい面倒だからそう言うのはいいよ……。

「図書室クラブ全員出撃よ！」

「おー！」

二人とも勢い良く立ち上がり沙羅が察したらしくタイミングよ

く斎藤から引き継ぐ。本当にこいつ等無駄シンクロだな。美優も元気良く天に拳を突きたてた。
「桂君も！　はい！」
元気な奴らだと思っていたら俺も参加しなければいけないようだ……。沙羅と斎藤もこちらを見ている。しょうがないから立ち上がる。
「おぉー」
自分でも驚くくらいやる気の無い掛け声だと思った棒読みってこういうのかな、なんて思ったら皆も同じことを思ったらしくつめたい眼で俺を見ていた。
「何も美優ほどとまでとは言わないけどそれは……あまりにも酷すぎよ……」
と、呆れた沙羅。
「いや俺は嫌いじゃないね、ザ・ケイって感じ、でも普通に考えれば底辺の返事だね」
斎藤に褒めてもらっても全く嬉しくないしそもそも褒められてない。
「桂くん……やっぱり……」
美優にいたっては泣きそうになってる……えぇい！　俺が悪かったよ！
「もう一回だ！　テイク２！」
俺は俯いて目を瞑り繭をよせ半ば怒鳴るように言い放つ。
「はい、テイク２入りまーす！」
沙羅が手を二回叩いて誰に言っているのか分らないが手をメガホンにして宣言する。
「分りました、次は気をつけるように」
次は斎藤がありもしないヒゲを摩りやけに声を低くして偉そうにしていた。何んだこれとんだ茶番だな……。これあれだろ？　テレビとかの……俺が変にテイク２とか言うからボケ始めちゃったよ……。

「桂くん次は成功させましょう！　あんまり間違えちゃ監督にしかられますよ？」
美優も乗ってきた。すっかり図書室クラブのノリになれたようだ。喜ばしことだよ……。
「じゃあ、あ、おっほん！　……それじゃ……」
本日二回目の斎藤のため。俺も少しは気合入れるかな。
「図書室クラブ全員出撃よ！」
今回もタイミングよく斎藤を引き継ぐ。美優を横目で確認する。しっかり構えて準備万端と言ったところか……俺も沙羅に合わせて勢い良く立ち上がる。美優も動きだした。
しかし勢い良くしたのがまずかった……立つときに右足を捻った。
「おー！」
「おぉーっ痛！　ぐわぁぁ～」
美優と息をそろえて叫ぶはずの俺はなんとも情けない声を上げた。視界が傾いて床にしりもちついた。あー倒れながら美優が不思議そうにこっちを見ているのがわかった。沙羅と斎藤が覗きこんでくる。
「ちが……違う！　わざとじゃない！　足を捻ったんだ！」
数秒の沈黙を置いて俺は叫んだ本当にわざとじゃないんだ！
信じてくれよ！　沙羅達一度顔を見合わせてから俺に視線を返した。最初に口を開けたのは沙羅だった。
「わかってるわよ。そして分ったわ、桂はこう言う事は出来ないって事が……」
かなり深い溜息をついて沙羅は冷たい声で言った。
「そんなぁー」
俺の声は静かに図書室に消えていった。
「はぁー……もう帰ろうかな……」
あれから数日経ったある日俺は放課後一人渡り廊下に寄りかかり何となく下を見ていた。
あれからと言うもの俺の生活は変化していた。

文化祭が近いと認知してから学校中が文化祭色に変わっていくのが分ったからだ。テンションなど上がるわけがない。日に日に俺はゲッソリしていった。
「とりあえず顔だけでも出してくか……」
ひと時の休憩を終え俺はまた歩きだした。
「今日もハリッキってやるぞー！」
「急げ！　このままじゃ当日までに仕上がらんぞ！　気合入れろ！」
「オッス！」
「おい！　そんなんで大丈夫なのかよ！？」
「大丈夫だ！　問題ない！」
ガクっと一瞬膝が緩むが何とか持ちこたえる。今日も学校のあちらこちらから威勢の良い声が飛び交っている。
「ちょっとそこどいてもらえますかー！？」
「あぶないですよー！」
よたよたと歩いている俺の後ろから声がする。振り向くと何やらデカイ木板を持った数名の生徒が廊下を渡ろうとしていた。
「あーはいはい」
俺はそれを見てまたそさくさと先を急いだ。
「やっとついた……」
ようやく立ち止まった俺は図書室とプレートの横を通り扉へ入っていった。
「はぁ……が！」
やっと一息つけると思ったら入った瞬間足を何かに取られて俺は転倒する。
「いった！　誰だ！　こんな所に荷物置いた奴は！」
「なんだ杉下か」
「先生……？　先生ですか！？　こんな所に変なもの置いたのは！？」
俺が店頭して顔を上げると何故か目の前に先生のがいた。こん

な所に物を置くとは酷いぞ！
「いや私じゃないな。それよりもそれを運ぶの手伝ってくれんか？　一人では面倒だ」
先生は訳の分らないことを言いながら俺の後ろを指差した。
「……はっ！　さ、ささ、沙羅！」
俺は先生の指差す先を見て衝撃を受けた。俺が躓いたものそれは沙羅だったのだ！　沙羅はいつもの元気な姿の面影は微塵も無くゲッソリとした顔で体が白く脱色された状態で入り口に放置されていたのだ。
「さ、沙羅……誰がこんな惨いことを……沙羅ぁ……」
俺は直ぐに沙羅へよりだらしなく脱色された体を支える。うぅ……可愛そうに……首ブランブランしてる……。
「いやいや落ち着けよ死んでないから……」
先生が珍しくツッコンだ。

「いやーほんと疲れたわーやっぱり空気が合わないのよねー入ったのはいいけどそこで力つきたわ、あはははは」
結局先生は何もせず俺が席に運ぶと沙羅はなんとも無かったかのように元気で今も肩と首をグルグルと回している。人騒がせな奴だ。
「確かに空気があわねぇよ……なんかさずっと毒きりの中でＨＰ削られてる感じ……」
図書室の辺境からオランダの風景と言う本を持って来て読みながら沙羅と話していた。風に揺れるチューリップと風車の写真……はぁー癒される……。
「桂良くそのシリーズ見てるわよね……この間はスイスだっけ？」
癒されている俺に沙羅が水を差す。ん、これか……。
「そうだな、スイスもいいが俺はアラスカの自然写真集が一番お勧めだ」
俺は暇なとき、沙羅たちに付き合って精神が削れたとき世界の

風景シリーズを見ることにしている。アラスカはとってもお勧めだ。
「へーアラスカねーあれでしょクマとか鹿がいる寒い所」
「そうそう、大自然だ、すげぇ癒される」
「私も見てみようかしら……」
「おうそうしろあっちに沢山ある」
俺は本から眼を話さずに図書室の辺境を指差した。沙羅にも見てもらえるとは良かったな、世界の風景シリーズ……貸し出し履歴ゼロの世界の風景シリーズ……。ちなみに俺も借りる気は無い。
「あーなかなかいいわねー」
オランダの都市の写真を見ていると俺が言った通りアラスカの写真集を見ながら沙羅が歩いてきた。やっぱりそうだろ？

斎藤と美優が揃って図書室に入って来たのはあれから十分後くらいだった。俺と沙羅がそれぞれの写真で癒されバックにお花が出ていた時だった。ガラガラと扉が開く音と同時に聞き慣れた声が耳に入ってきた。
「そうそうそれでケイが無理して沙羅追いかけるもんだからバカみたいに転んでさー沙羅と二人で大爆笑だよ」
「うふふふ……沙羅ちゃんは昔からそんなんだったんですか？桂君も元気だったんですねー」
「ケイは捻くれたね。おー二人とも来てたの？　なんだ……花畑が見える……って良く来れたね、途中で行き倒れてるかと思ったよ」
うるせぇ……てか何の話しだよ。俺のどこがひねくれてるって？　お前らと過ごせば普通の人ならこうなるんだよ。おい美優笑ってるんじゃないぞ！
「うるさいわねー私達は今癒されるのに忙しいの！　それとそれは転んだんじゃなくて転ばせたの！　空き缶置いて踏ませたのは私よ！」
「へぇー沙羅ちゃん以外と策士なんですね」
「そのくらいちょろいわよ」

そうだ沙羅の言うとおり俺達は今癒されるのに忙しい……。
「えっ？　あれって沙羅がおいたの？」
俺は思わず凄いアホみたいな声を出した。いやあれはだって……。
「なに言ってるのよあんな所に普通カンなんて落ちてないわよ、あれは私が飲んでた奴じゃない」
一瞬考える記憶のそこを思い出す……あぁ確かに沙羅が飲んでた奴だ……。なんだか一気にテンション落ちた……。そうだよこうやって俺はこいつらに性格改造されたんだよ……。
「まぁいいわ、美優これ桂の勧めなんだけどなかなか面白いわ、一緒に見る？」
「はい！　喜んで！　どんなのですかー？　わー綺麗ですねー一度でいいから行ってみたいですね」
「そうねーカッちゃんと桂が連れて行ってくれないかしらねー」
「そうですねー」
「おいおい無茶言うなよ……」
そんな事を楽しそうに話していたが俺にはそんな余裕は無い。俺はただひたすらにオランダの風景を見ることだけに全神経を注いだ……。
「そう言えばついに明日からだねー文化祭」
「そうだったわ……」
「楽しみです、ところで来たばかりで悪いのですが私は委員会がありますのでそろそろ行かせてもらいますね。本番に備えて色々準備があるのですよ」
「へぇーがんばってねー」
「がんばりなさいよー」
「はい！　それではさようならー」
「「さようならー」」
オランダオランダオランダ……。わぁ風車綺麗だなぁー。
「ケイが怖いんだけど……目がキレイすぎる……」

「精神が崩壊したようね……」

「おいこら！　大丈夫か！　杉下！」

俺が眺めの良いテラス席でコーヒーを啜っているとどこかから先生の声が……。

「先生止めてくださいよ……俺は今アムステルダムの喫茶店で午後のひと時を……」

こんなに優雅な時に叫ぶなんて先生も無粋な人だなー。

「何言ってんだ！？　ここはオランダの首都じゃないぞ！　図書室だ！」

先生……図書室……？

「ここは……」

気がつくと俺は何故か図書室にいた。どう言う事だ……？

「やっと気がついたか……そろそろ締まる時間だぞ、それより何やってんだ、山本も斉藤ももう帰ったぞ」

先生が訳の分らないことを……。

「ここはアムステルダムじゃ……」

「ない」

そうなのか……じゃ俺がさっきまでいたところは……？　不思議に思っていると俺の目の前に紙が一枚置いてあった。それには沙羅の文字で「私達は帰るわ、一応声は掛けたわよ」とのこと……。俺はどうしたのろう……。

「気がついたのならさっさと帰れ、閉めるぞ」

「はぁ……」

俺は半分も状況が理解できないまま先生とともに図書室を出た。

「先生……ここは……」

「アムステルダムじゃない、なんど言ったら分るんだ！」

先生に怒られてしまった……。

「じゃあな、気をつけて帰れよ……」

図書室の前で先生がそんな事を言った。

「何を言っているんですか自分が生まれたこのオランダの地で危ない事なんて無いですよー目をつぶっても帰れます」
実際に俺はやってみせる。どうだすごいだろー。
「いて……」
何故か通いなれた道で俺は直ぐ壁に当たってしまった……。
「もういい……そのまま帰ったら間違いなく死ぬな……」
先生の心底呆れた表情と声。
「そんな事ないですよ。今回はたまたまです、そうだこの近くにゴッホの家があるんですよ、見に行きますか？」
「少し黙れ……」
俺が提案すると先生にものすごい形相で睨まれた。もうやになっちゃうなー。
「杉下ついて来い……」
先生は俺の首根っこをつかんでズカズカと歩きだした。どこに行く気ですか？　そっちにはロッテルダム湾ですよ？
「さぁ乗れ」
「はぁ……」
俺の目の前には黒い軽自動車があった。俺は先生にその黒い軽自動車の助手席に押し込まれる。
「杉下自分の家は分るか？」
運転席に乗り込んだ先生がシートベルトをしながら訊ねてきた。
「そりゃもちろん俺の家はドレンテ州にあります」
俺は胸を張って答える。どこの世界に自分の家の場所を忘れる人が居る？
「はぁ……杉下すまんが目をつぶって歯を食いしばれ……」
先生が溜息をついてそんなことを言った。なんだ？
「……こうですか？」
俺は先生に言われたとおり目をつぶって歯を食いしばった。これから何が始まるのだろぅ？
「すまん！」

「ぐぁあ！」
先生の突然の懺悔とともに右頬に強い衝撃が来た。目を開けると先生がなんとも気持ち良さそうな顔をしているのが目に入ったそして俺は少しずつ意識が消えて行った。
「どうだ？　治ったか？」
気付くと先生の顔が驚くほど近かった、一瞬心臓が止まりかける。
「うぅ……何で先生が？　俺図書室に居たはずなんですけど……車の中に……頭いたっ……」
駄目だ思い出せない……一体何があったんだ？　それよりも頭が痛いんだけど……。
「杉下体は大丈夫か？」
先生が俺のまぶたを指で開いて眉を寄せながら聞いて来た。いたた……痛いし近いです……。
「そうですねなんででしょう体中がだるいです、所どころ外国の風景見えるし……特に頭が痛いです」
俺は先生に目を開かれながら答える。
「……だろうな。ところでそのまま歩いて帰れそうか？　ここまで来たのはいいが面倒になってきた」
先生の目が一瞬遠くなった……。面倒って先生が何してんのか分らんのだが……。
「そうですね……大丈夫……」
です、と言いかけたら急に目眩がして先生の顔が歪む。
「な、なんだここは……なんで俺美術館なんて……ってあれ？先生……」
歪みが取れると何故か俺はクレラー・ミュラー美術館にいた。と思ったら元の車の中に戻っていた。一体俺はどうしたと言うのだろうか……？　先生は一度大きな溜息をついてから。
「もう一度聞こう、お前の家はどこだ？」
半分くらい睨みながら言ってきた。もう一度って俺聞かれた覚

えないぞ……。
「えっと……」
「ふむ、そうかそこならここからも近いな……」
俺が戸惑いながらも何とか答えると先生は黙って車を発進させた。えっ？　何してんの？　俺のことなどお構い無しに先生は車をセントラルシティーに走らせた。

家に帰ると俺はそのまま自分の部屋に引っ込んだ、俺の事情はあらかた先生から車で聞かされて、聞いている限り俺はだいぶ参っていたようだ。車の中で何度もオランダの風景画見えたときはどうなるかと思った。先生は帰り際「明日はがんばれ」なんて言ってたけどそんなのは頭痛とダルさでどうでも良かった。俺は着替えもままならぬままベッドに仰向けに横たわり晩御飯までしばし寝ることにした。
その後俺は何とかきちんと正気に戻ることも出来たので俺は満足してそのまま一日を終えることにした。

文化際とバックナンバー（1）

「おい……おき……はやく……ぶんか……ちこ……」
なんだろう、耳元でなにやらうるさい音がする。目覚まし時計じゃない、母さんでもない、でもどこか聞き覚えのある声……。
俺はただ暖かいまどろみの中でぼんやりとそんなことを考えていた。
「ったく何考えてるんだこいつは……」
声があきれた様子でつぶやく、一体何が起こっているのかわからない、わからないまま俺ははっきりとしない頭で返事をする。
「あと少し……少しでいいから……」
俺はまだ暖かい布団の中でゆっくりしたいのだ。
「何だこいつゴニョゴニョ言ってるけどなんだろう」
声はかすかに笑いながらつぶやいた。俺の言葉はそいつには届かなかったようだ。だがそんなことはどうでもいいのだ。俺はこのままもう一眠りさせてもらおう。俺はもう一度意識を深い闇に落としていく。
「だぁー寝るな！　おきろよ！」
近くで新たに奇声を上げる声の主。少し静かにしてもらえないだろうか？
「ちっ……いい加減にしろぉ！」
声がそう叫ぶと同時に俺の体から布団と言う最強の鎧が剥がされた……。俺は急激な温度の変化に身を縮めた。
「さぁ！　おきろケイ！」
声がうるさい、ゆさゆさと俺の体を揺さぶってくる。ふざけるな俺の眠りを妨げるものは誰だ！　俺の寝起きが鈍いと思ったら大間違いだ！
「うがぁ！　うるせぇ！　一体誰だこの野郎！」
俺は勢いよベットの上に立ち上がりまわりを見渡した。シンプル

で一見殺風景に見えるが大好きな本で囲まれた俺の部屋、どこも不思議なところはない、ただひとつ目の前に見知った男が立っていること以外は……。

「わからないんだがなぜ斉藤が俺の部屋にいるんだ？　一体何をしている？」

俺はすっきりとしたはずの頭がまだ夢の中にいるんじゃないかと思ってしまった。

「はぁ？　なに言ってんだ。昨日沙羅から連絡あったんじゃないのかよ」

こいつは一体何を言っているのだろう？　腕組みして頭傾げてるし嘘言っているようには見えんが、どうなっている？

「知らんのか？　メールで伝えとくって言ってたのに……。沙羅が忘れたのかな？」

斉藤は俺の様子からなにか察したらしい。メールなんてきていただろうか？不思議に思いながらも俺は机の上に無造作に放置されている携帯電話に手を伸ばした。

俺は普段使わないで買った当時のままのきれいな携帯電話に手を伸ばしメール覧を確認する。自分で言うのもなんだが相変わらず登録人数も受信ボックスもすっからかんだな……。これを見るとどうしようもなく切なくなってしまう。くるのは沙羅と美優とクーポンばかり……。せめて斉藤も持っていればな……。

おっと、そんなことを考えている時じゃないか。あくびで出てきた涙をぬぐって沙羅からのメールを探す。お、これか？　俺は見覚えのない沙羅からのメールを見つけた。早速中身を確認してみる。

『明日は文化祭よ、どうせあんたは文化祭のこともこのメールさえも体が忘れるでしょうからカッちゃんに迎えに行ってもらうから』

なんだこれ？

「今日は文化祭なのか？」

「はぁなに言ってんだ？　当たり前だろう。どうかしたのか？」

「いや、何でもない……」

沙羅の読み道理さ、読んだけど忘れたよ。開いてあったからおかしいと思ったんだ。俺はそのまま携帯を閉じた。
「それじゃケイもおきたことだしさっさと下いくか……って何してるんだお前は？」
「何ってお前は見てわからんのか？　見たままだ。二度寝だよ」
斉藤がうるさいが俺は眠いんだ、文化祭だが分解際だか知らんが俺にはどうでもいいんだよ……。ただ眠いそれだけだ。
「そんなこと俺が認めると思ってんのかよ！　おい、さっさと起きろよ！」
「だぁー……うるせぇよ……友達が親切心でいってやってんだからお前こそさっさと分解際とやらに行ってこいよ」
「どこが親切だ！　完全にお前の勝手だろうが！　大体なんだ分解際って……何を分解してんだよ！」
「そんなの文化祭を分解する祭りだろ……」
「それただの文化祭嫌いのテロだから！」
斉藤も朝から元気だ……。
「大体起きないと大変だぞ？　俺が起こしにこなかったらどうなっていたか……。お前びっくりして死ぬぞ？」
斉藤はなにやら神妙な言葉遣いで、耳元でささやく。なんだ……大変なことって？
「下で何が起きている……」
俺は薄目で斉藤を見る。なんだろう嬉しそうとも困ってそうにも見える。
「自分でたしかめな」
うむ、不安だ。こいつや沙羅が関わっていると言う事は何が起きても不思議ではない……。俺はしぶしぶ斉藤と共に制服に着替え一階へと降りて行った。

「あ、桂君おはようございます。一輝君もお疲れ様です。もうそろそろ朝ごはんが出来ますから待っていくださいね」
「こら桂、友達にあんまり迷惑かけるんじゃありませんよ。今日は文化祭なんでしょ？　しっかりしないと駄目でしょ」
「いやいや別に疲れるような事じゃないよ。それと俺なら別に迷惑でもないので気にしないでください」
　呆然とはこのことだ。何だこの状況は？　斉藤は分かる、いや全然分からないけど、まだ分かる。だが何だこれは？　なぜ俺の家に美優がいて朝飯を母さんと一緒に作っているのだろうか？
「おいちょっと待てや……」
「うわ、ちょっ、ちょっとなにするんだよ……」
　笑顔で食卓に着こうとする斉藤の首根っこをつかむ俺。聞きたい事が山ほどあるんだが？
「何だよいきなり、びっくりするじゃないか」
　斉藤はそういって襟を正している。
「どこが不思議なんだ？　捕まれても当然だろう？」
「やっぱり？」
　俺の戸惑いも関係ないかのように斉藤はおどけた。しばくぞ……。
「一体全体この家で何がおきているんだ？　ここはパラレルワールドなのか？」
　整ったばかりの斉藤の襟に掴みかかる。『やっぱりぃ？』じゃねぇよ！
「さぁ？　俺に聞かれてもなぁー俺も今朝会ったんだし。ケイ家の前で待ってたんだよ、俺が来たときにはもう居たから見たときは驚いたよ」
　はぁ？　なんじゃそりゃ？
「まぁどうせ俺もこれも沙羅だろうさ」
　斉藤はそう言って俺の手を払いまた襟を直し始める。沙羅か……納得いったぞ。
「ま、本人に聞いてみましょうや。あそうそう、俺が起こしに行か

なかったら当然美優ちゃんが起こしに行ってくれたから」
……そうか、それは確かに大変だ。斉藤お前が来てくれてよかったよ。俺は一人で深いため息をついた。
斉藤はそれだけ言って今度はしっかり椅子に座った。俺も斉藤の後に続いて自分の指定席へと腰を下ろす。斉藤と沙羅は昔からよく家には来ているのですでに指定席が存在していたりする。逆に斉藤と沙羅の家にも俺の指定席が存在している。
「さて、ご飯が出来ましたよー桂君どうぞー」
席に座ってすぐに料理が完成したらしく出来たての料理を俺の前に置いてくれる。
「あ、あぁありがとう……」
美優は微笑みながら満足そうにして斉藤にも料理を渡した。
「それじゃみんなもお料理も揃ったことですし、いただきましょうか」
美優と母さんが自分たちの分を持ってきて椅子に座る。美優は知ってか知らずか誰の指定席でもない場所に座った。隣なら沙羅なのに。
「うわーこりゃすごいな！　おばさん相変わらず料理上手いですねー」
斉藤が出てきた料理を見て歓喜の声を上げる。確かにいつもより確実に力が入ってるなこれは。
「そんなほめてもらえるなんてうれしいわー一輝君のお母さんも料理上手だから勝てるか分からないけどたくさん食べてね」
「いやいや、お袋と比べてるなんておばさんに失礼ですよ。こっちのほうが全然おいしいですって」
「いや、おばさんのほうが上手いだろ、母さんの料理なんて少しやれば出来る」
「桂、ひどいこと言うのね……」
母さんが少ししょんぼりとする。母さんも上手いけど斉藤の親ほどじゃないと思うがな。一番は沙羅のおばさんかな……。母さんも

ともと料理なんて向いてないんだから。

美優はそんな俺たちの日常会話をにこやかな顔で聞いていた。
「ところで美優、どうして君が俺の家に居るんだ？　俺の家じゃ学校の真逆じゃないか」
途轍もなくいまさらな質問だがちょうどいいタイミングだと思ったので出来るだけ自然に聞いてみる。会ったときから考えていたことなので態度がおかしくならなければいいのだが。
「あ、私ですか？　私はですね、なんだか楽しそうなので来ちゃいました」
なんとも答えになっていないような……。何だろうとても足りない説明だ……。
「えっと、もう少し詳しく教えてもらえないだろうか？」
少々困惑気味の俺だが相手が美優なのでしょうがない。最近分かったことだが美優は少し溜める癖があるようだ。だからこんなこともしばしばだ。
「そうですねー昨日沙羅ちゃんに一輝君が桂君の家に迎えに行くって事を聞きましてね。それで沙羅ちゃんと話して私も行くって話しになったんです。それで私もはるばる桂君を迎えに来たわけですよ」
はるばるご苦労さまです……。何がどうなって迎えに来る話になるのかまったくのなぞだが大体の話は理解した。当然のように沙羅絡みか……。
「なんで俺は知らなかったの？　連絡くれればよかったのに、そうすれば俺いろいろ準備してきたよ？　バズーカとか」
寝起きドッキリでもするつもりか！？　なんでバズーカなんか持ってるんだよ！
「それは見たかったですねー今度ぜひやりましょうよ！」
美優、少しやられる俺の身にもなってくれやしないだろうか？

美優はこいつらに影響受けすぎだな……。
「もちろんやろうか。あと水風船とかもいいよね」
「それもいいですねー」
「話がそれてるぞ」
こいつらはほうっておくと何時までもこんな話して悪知恵ばかり溜めるから気が抜けないな。修正修正っと。
「あ、すいません。『カッちゃんは携帯もってないから連絡がめんどくさいししなくていわよ。行けば分かる』とのことです」
美優ちゃん沙羅のまね上手いなー本物みたいだ……。ってそんな理由で話されなかった斉藤は哀れだな。
「そうか……あんにゃろー」
斉藤もご立腹だな。俺は心の中でざまぁみろとほくそ笑んだ。

その後俺たちは沙羅の愚痴や今日の意気込みを話しながら食事をして、いつもより少し時間に余裕を持って家を出た。
学校に着くまでに俺は明らかに登校風景が違うことに気がついた。いつもよりにぎやかだ、歩く学生はテンションが高く皆今日を楽しみにしているようだ。美優と斉藤もいつもにまして元気だし……。今からこんなんじゃ学校はどうなっているのやら……。俺のこの不安は見事的中するのであった。
「う、うぁ……」
驚愕！　俺はあんぐりと開いた口をふさぐことが出来なかった。なんだろうこれは？　いつものシンプルな校門のアーチは赤白緑に色取られ変な怪獣の絵とかが描いてあったり風船がついてたり広い校庭には無数の出店やでかい置物が大量に放置されているではないか！　ここはどこだ？　トマトでも投げ始める気か！？
自然と変な声が出た。この学校ってこんなに生徒いたのか？　影分身でもしたのではないだろうか？　そんなアホな事をかんがえて

しまうような人人人の海！　お前ら虫かよ！　なんだか途轍もなく先が思いやられる……。
「おーもう結構盛り上がってるなー」
「そうですねー今から楽しみです！」
俺とは対照的でこのヒューマンパラダイスを満喫できる二人がうらやましかった。
「な、なんでだ……。なぜだ斉藤！　開会式はまだだろう！？　なのに！　なぜこんな早くから人が集まってるんだ！　よ、酔ってしまう！」
なんだこの恐ろしい光景は！　人とはここまで増えるものなのか？
「落着きなさい……なんでこのくらいで慌てるかなーまだ準備で本番の一般客は入ってないって言うのに……」
な、なんだと！　まだ増えるのか！？　それでは人口密度が！　飽和量が！　地盤沈下が！
「とりあえず沙羅のところに行くぞ。ケイもそこで休め」
斉藤がため息をついて歩いていってしまう。
「ま、待てそんなスタスタ行ってしまうな！　は、早い……」
斉藤はあっという間に人ごみの中に姿を消してしまった。どうすればいいんだ……。
「桂君大丈夫ですか？　一輝君もちょっと酷いですねー」
戸惑っていると美優が顔を覗き込んできた。……そうだ美優がいるじゃないか！
「美優！　一緒に行こう！　さぁさぁ！　あ、でも先に行ってくれよ？　俺は後に続くから。おっと肩は掴ませてくれよな、はぐれたらどうなるか分からないから」
「分かりました、でも桂君は本当に人ごみが苦手なんですね」
美優のすべて理解したうえでのきれいな応答。あぁそうだよ！
俺はインドア派なんだ！　なんたって図書室クラブだぞ！　どう考えてもアウトドア派にはならん！　しかしこうも動揺するとさすがに恥ずかしい……。

「ぐぬぬ……そんなことないぞ……」
「それととっても強がりです。ほら早くつかまらないと一輝君みたいに置いて行っちゃいますよ」
精一杯いきがったがそれもたやすく美優に見破られてしまった。美優は悪戯っぽく笑って俺の前を歩き出した。いつか必ずこの屈辱は！
俺は美優の肩を掴みオドオドしながら歩くというなんとも恥ずかしい格好で人ごみを突破した。
その後なんとか俺と美優は先に行っていた斉藤に学校玄関で追いつき、俺は頭突きをして美優は説教をした。

「ケイそっちじゃないよ、こっち」
斉藤にそう呼び止められたのは俺が自分たちの教室に向かおうとしたところだった。
「なんでだ？　教室いかねぇのかよ」
「桂君は聞いていませんか？　沙羅ちゃんは教室ではなくて図書室に居ますよ」
美優が説明してくれたので俺たちは図書室へと向かうことに、が俺はひとつ引っかかることがあった。でもすぐ分かるからいいや。

図書室に入ると当然だが沙羅が居た。やつの指定席である椅子に座りのんきに本を読んでいた。
「おはよう沙羅ちゃん」
「おはよう沙羅蔵」
「おはよう美優」
「おはようカッちゃん、沙羅蔵って誰？」

斉藤と美優が挨拶をすると沙羅も挨拶を返す。　俺は言葉には出さず右手を軽く上げての挨拶。沙羅も軽くうなずく。よくそんなに元気でいられるな。俺は人ごみで疲れたんだ、とっとと椅子で休ませてもらうよ。

俺たちは次々に自分の指定席へと納まって行く。

「なぁ沙羅質問なんだが」

俺は椅子を出して座りながら沙羅に尋ねる。

「なによ、好きな食べ物ならお寿司で嫌いなものなら杉下桂よ」

「そんなことはいまさら聞かなくても分かっているから安心しろ。ちなみにお前は寿司の中でも海老が好きだ。俺が聞きたいのはそんなどうでもいいことではなく何で今日図書室が開いているかだ。休みのはずだろう？」

そのはずである。今日は文化祭で図書室は開いていないはずだ。先生がこの前言ってたはず。はず……さっきから知らないことが多すぎる。

「そうよー今日は図書室閉館の日です。でも開いています。これがあるから」

そう言って沙羅はポケットから鍵をひとつ取り出した。それは俺たちならすぐに分かる場所の鍵。そう図書室の鍵だ。

「……お前何時の間に合鍵なんて作ったんだ？　しかも本物そっくりじゃないか、俺にも作ってくれよ」

合鍵まで作れるとはなかなかやるな。しかしよく出来ている。あれがあればいつでもと図書室に入り放題だ。授業もサボり放題……普通に開いてるか……。

「んなわけないでしょ、本物よ本物！　星野先生に文化祭期間中借りたのよ。桂は知らないでしょうけど！」

あぁ知らない。なんで俺ばっかり知らされないのだ？

「桂君ねてましたから」

合点！

「あ、そうそう私は実行委員会の集会があるので一回このあたりで

失礼しますね」
図書室に来てそんなに時間はたっていないが美優はそう言って立ち上がった。
「あら、そうなの？　意外と大変なのね」
「残念だな。それじゃあ美優ちゃんいつ終わるの？」
沙羅は少し失礼だと思う。意外とって、そりゃ大変だろ。斉藤は当然といえば当然な質問。
「そうですね開会式が終わってからも視聴覚室に集合ですからその後ですね」
そういい残し美優は図書室を後にした。俺なら絶対実行委員なんてしない。
「それじゃ開会式までゆっくりするか」
俺はそう言って大あくびをした。沙羅に『汚い』とか言われたがそんなことかまわない。これからの戦いに備えて休息だ。
「先生は来ないの？」
俺が机に突っ伏し身近な本を読んでいると斉藤がそんなことをつぶやいた。俺は知らんし沙羅が答えるだろう。俺も気になるので耳を傾ける。
「先生は私もよく分からないけどなんか暇で気が向いたら、来てやるって言ってたわよ。とりあえず午前は来ないでしょうね」
「先生らしいな……どうせ寝てるんだろうな」
俺もそう思うよ。しかし先生来るのかもしれんのか。楽しみなような迷惑なような……。そんなことをだらだらと話していると時間になり俺たちは開会式が行われる体育館へと向かった。

「えー今日は皆さん楽しみにしていたでしょう。文化祭です。えーしかし皆さんはえー学生であると言う事をしっかり頭に入れてえー節度ある行動を、えー……」

体育館では禿げた頭を隠す気もなく大々的に披露しているなんか偉い人がどこでも聞いたことがありそうな話しを延々としていた。く、苦痛だ……。必殺の以下略！

お偉いさん方のつまらない話も終わり続いて生徒会長や実行委員会長などが挨拶をして、その後ダンス部などが芸を披露して開会式は意外と長かった。

ガキでもあるまいし何度も言われなくてもわかっとるわ。さっさと始めたまえよ。俺は先ほどから何度も聞いている言葉に飽き飽きだ……。

「えーそれでは皆さんしっかりとした意識の下で今日の文化祭を楽しんでください」

やっと終わったかと思うと俺は突如として動きだした人の濁流に飲み込まれた。な、なんだこれは！？　人が波のようだ！

「ぐわ！　やっば！　これ死ぬぞ！」

俺は流されずその場で踏ん張るのがやっとだった。こいつらそこまで楽しみなのかぁぁぁ！　あ、やばい流される！

「ケイ！　つかまれ！」

俺が死を覚悟した瞬間目の前に手が現れた、それに俺は飛びついた。まさに藁にもすがる思いだ。

「大丈夫かよ……死にそうな顔してたぞ」

はぁーっと息を吐くと目の前に巨大な男……。

「斉藤か……こういう時ばかりは役に立つなその巨体」

「うるさいな、別になりたくてなったんじゃないよ。変なこと言うと流すよ？」

すぐに黙った。流すって言葉のあやじゃないからな……。

「まぁこの流れだ、すぐに引くだろう」

「それもそうだね。ケイは近かったからいいけど沙羅は大丈夫かな？　遠くて見つからなかったんだよね……」

斉藤と杉下、確かに近いが沙羅は山本だ、後ろのほうなんだよなぁ……まぁ死にはしないか。

俺と斉藤は沙羅を探しあたりを捜索した。沙羅を見つけたのは人が疎らになったときだった。結構時間がたっていた。
「さ、沙羅！　大丈夫かよ！」
第一発見者は俺、沙羅は列から遠く離れた入り口付近で瀕死の状態で発見された。一体どこまで流されてんだよ！
「くっ！　あいつら絶対許さないんだから……何回踏まれたことか！」
沙羅は服についた汚れを払っていた。結構白いな。
「まぁまぁこれが文化祭の洗礼ってやつだよ」
そんな沙羅を見て斉藤が笑っていたがこんな洗礼いらねぇよ。沙羅以外にもだいぶ負傷者が出てたな。
「さてこれからどうするんだ？　このまま帰ってもばれないんじゃないか？」
「そうよ、ここに居たらいくつ命があっても足りないわ……」
「馬鹿なこと言ってないですることないならとりあえず美優ちゃん迎えに行くか」
結構本心なのだがまぁいいや。
「それもそうだなどこだっけ？」
「視聴覚室だよ！　本当にケイは少し人の話を聞きなよ！」
斉藤に怒られてしまった……。
「だるいカッちゃん連れてって……」
沙羅はそう言って斉藤の背中に納まってしまった。
「沙羅場所変われ俺も楽したい」
「だめよ。早いもの勝ちよ」
くそう……。
「お前らいい加減にしろ！」
斉藤の怒号が人気のうせた体育館に轟いた。

結局沙羅は俺の妨害と斉藤が拒否し自力で歩き晴れて全員徒歩になり職員棟一階にある視聴覚室へと向かった。
視聴覚室は体育館から意外と近いので意外とすぐに到着した。まだ終わってないのだろうか美優の姿は廊下になかった。その代わり不思議な光景があった。それは文化祭色に度派手に色とられている事ではなく、はたまた謎の着ぐるみが歩いていることでもない。
「こら！　それは僕の手帳だ！　カメラも返しやがれ！」
「いいや、これは証拠品として我々が没収させてもらう。貴様も文化祭くらいおとなしくしておれんのか」
「文化祭だから張り切るんだろうが！」
「そうやって根も葉もない嘘ばかり書いて、大変な時に迷惑なんだ！」
「嘘だと！？　僕は本当のことしか書かない主義だ！」
「ならばその言葉も偽りなのだな！」
「なにおう！」
俺たちの注目を集めたのはここの学生だと思われる人物が視聴覚室のまえで言い争いをしている光景だった。
「何だろうなこれは？」
ポツリとそんな言葉がでた。無視したいけど扉の前なんだもんなー……。
「結構な修羅場」
斉藤君的確な説明ありがとう。
「しかし面白い組み合わせね」
ぽかんとしていた沙羅が腕組みをしてそんなことを言った。
「なんだこいつらが珍しいのか？　確かに珍しいな、晴れの日に喧嘩とは」
「違うわよそれ組み合わせ関係ないじゃない、確かに珍しいけど」
「もしかして知り合いか？」
俺は今なお言い争いをする二人組みを見る。だめだ見覚えなんかないな。クラスメイトも怪しいのにこんなやつら知らんわ。

「知り合いねーうーん一方的に俺らが知ってるだけだよ」
「私は片方話したことあるわよ」
沙羅の交友関係はなぞが多いからな、誰とどこで知り合っていても不思議ではないが。有名な人物なのだろうか？
「へー沙羅知り合いなんだ、どっち？」
「あっちよ」
こいつらはこいつらで話を進めるし……。
「で！　誰だこいつらは？」
俺は面倒なことに関わるのは嫌いだが置いていていかれるのも嫌いだ。
「そうだねー知らない？　さっきも見たのに？」
「知らん」
「即答だね」
斉藤の質問に自身を持って答える。即答だが考えて分かるようなら俺も苦労しないのだ。
「そうだと思った。説明しましょう」
斉藤が一刺し指を立てて学者のようなポーズを取る。なんの真似だよ……。
「この二人組みは、ぐわ！」
隣に居た斉藤が突如視界から消えた。実際は後ろにさがっただけなのだが……。しかし斉藤はどうしたのだろう？　俺も不思議に思い後ろを振り返った。
「一輝君その先は私がしますよー？」
美優か……。しかしなぜ視聴覚室の中に居るはずの美優が俺たちの後ろに居るのだろうか？　斉藤は後ろから美優に目隠しをされたのだ。しかし美優は斉藤より小さいため斉藤はえびぞりになって後退したと言うわけか。
「あら、美優早いのね」
「そうですね今終わったところですよ」
あぁそうか、もう片方の出入り口から来たのか。俺は美優の後ろを見て気づく。教室には二つドアがあるものだしな、俺たちが二つ

のドアの間に居ただけのことだ。中に居る人からしたら扉の外で喧嘩しているほうからは出たくないのは当たり前だよな。
「美優ちゃんなのか？　ちょっともういいでしょ、離してよ腰が折れる！」
斉藤はいまだにエビゾリだ。つま先立ちの足はプルプルだな。面白い……。
「あ、そうでしたね、すいません」
美優は本当に今気づいた様子だ。ほんとかぁ？　しかも離さないってね。
「美優ちゃん積極的……がは！」
斉藤が変体でよかった。
「わざわざ迎えに来てくれなくてもこっちから行きましたよ」
「そうかもしれないけど私たちもすることないのよ」
「そうなんですかー」
沙羅と美優はたのしそーにしている。こいつらは話が進まなくて困る。
「で、美優でも斉藤でもいいけど説明は？」
聞かないと答えやしない。
「そうですね話がそれましたね。説明しましょう！」
「ぐは！」
美優は『説明』で斉藤を床に落とした。腰を抑えてもだえる斉藤はほうって置いて美優の説明でも聞くか。ところでその仕草は斉藤の真似か？
「皆さんから見て扉側、右側に立つ男の人は何を隠そうこの学校の副会長さんで実行委員会の会長さんであります！　名前は大原雅織さんっていいます」
わーっと手でパタパタする美優、楽しそう。
ふーむ、あの丸眼鏡がこの学校の副会長とはねーそういわれれば見たことないようなあるような……。
「結構朝礼とかで見てるわよ。開会式でも話してたし」

沙羅の余計な言葉に少し不愉快だ。
「副会長さんは入学してから連続学校で彼氏にしたい人トップスリー以内に入り続けるすごい人です。ちなみに『頼もしく引っ張ってくれそう』『誠実だから』『命令されたい』などの理由が多いようです」
結構どうでもいい情報だな。しかし最後の理由はどんな理由だ……。とりあえず有名人のようだ。ちなみに沙羅の知り合いじゃないほう。
「そうなのか、確かに偉そうな雰囲気だな」
「そうですね、雰囲気出てますよね。でも偉そうですけどいい人なんですよ？　いろいろ親切ですし」
そうか美優は実行委員会であっているのか。だから知ってるのか、納得。
「当たり前だけど実効委員だから知ってるわけじゃないわよ」
「心を読むな……」
「読みやすいのが悪い。さっきも言ったでしょうが」
沙羅め……いつか懲らしめてやる……。俺は沙羅の横顔を見ながら誓うのであった。
「そしてその副会長さんと喧嘩している小柄の女性は謎多き人物自称スーパージャーナリストさんです」
本日二回目の美優のパタパタである。はぁ？　すーぱーじゃーなりすとぉ？　なんだそれは一気に胡散臭くなったもんだ。俺は副会長と言い争う高校生にしては小柄でピーピーわめく少女に怪訝な目を向けた。
「ちなみに名前は大谷夏姫さんです。私もよくは分かりませんが私と同じ二年生ですよ。でもなにぶん掴みどころのないお方でしてね。神出鬼没、大胆不敵な不思議な人で『どこにでも湧いて散らかして去る』が座右の名らしいです。知ってる人は知っている新聞部の若き部長さんです。図書室クラブと同じで認可は受けていませんが活動を続けるゲリラ部の一つです。図書室クラブとは違い認可規定は

満たしているのに部活にならないのは、その活動が過激な内容だったりするからららしいです」
　こちらはとりあえずろくな人物ではないようだな。　えたいの知れない人物とかかわるのはごめんなんだよなぁ……。
「活動を認められないくらい過激な内容ってなんだよ」
　俺は目の前で喧嘩を続ける二人組を見て、あきれてため息をついた。まったくろくなやつが居ないんだなこの学校って。少なくとも数名スーパージャーナリストがはびっこてるんだろ？　真っ当な人間とはおもえんなぁ。
「基本的には学校新聞の作成、掲示板などへの展示ですが。内容はそのとき学校内での騒動や教員の秘密、テストの前には問題用紙などの過激なものをはじめ新入生への案内とか部活動紹介なんかも。あ、誰かと誰かが付き合ったとか、その日の購買お勧めメニューなんかも載ってますよ」
　ずいぶんと最初と最後の落差が大きいな……。なんでそんなの載せるんだよ、テストなんて大丈夫なのか？　それに誰々が付き合ったって中学生じゃあるまいし……。
「特に先生の秘密と購買メニューが人気です。購買はその日だけではなく先まで書いてあるので何がいいのかも一目両全なんですよ。でもどこがソースなんでしょうね？　普通分かりませんよ」
　美優がうれしそうに話し終える。美優もなかなかいろいろなことを知っているんだな……。俺なんか一個も知らんぞ。この学校の学生もこういうのが好きなんだな。いろいろ問題ありそうだけど。
「な、これでケイでも分かったろ？　二人ともお偉いさんだ。しかも敵同士」
　斉藤が腰をゴキゴキ鳴らしながら話し出す。
「だから珍しいのか……でも今は副会長が有利みたいだな」
　見ている限り副会長が優勢、カメラとか手帳を奪ったようだ。
「ジャーナリストがカメラと手帳取られるなんてうかつにもほどがあるだろ。しかも天敵の生徒会にだ。哀れだか間抜けだか……」

「そうなんだよね！　いつもはその辺抜かりなく行動しているはずなのにねぇ！　たまにこう言うミスするんだよねーほら馬鹿だから」
「うぁ！」
なんだこの突然俺の目と鼻の先に現れた男は！　下から！　下から出てきた！
「だだ、誰だあんた！　いきなり出てきやがって！」
驚いた俺は自分でも驚きの週敏なバックステップを披露した。いかん汗が……。俺以外のみんなも突然のことにぽかんっとしている。
「うんうんいい反応だ。だけど君、僕のことを知らないのはちょっといただけないなぁ」
突然現れた謎の男、長身で見た目から爽やかな雰囲気があふれ出しているこの男はそうか！　……分からん。考えてみたものの分かりそうにないな。
「すげぇー……こりゃまたびっくりだな」
「えぇ本当にびっくりね。登場もびっくりしたけどこんな人なの？」
「いつもとはだいぶ違うんですねー」
俺以外が驚きの声を上げる。みんな理解しているようだが俺にはまったくこいつのすごさがわからんが。
「うーん、こっちは分かってくれたみたいだね。分かってないのは君だけか……」
突如現れた男はそう言って俺を軽く指差した。初対面の人間に指をさすなど失礼だと思ったが今は簡便してやる。
「君、さっきから聞いてたけど色々俺たちのことに詳しいみたいだね。せっかくだから俺のこともこの子に説明してあげてよ。俺も一般生徒にどんな情報が行ってるのか知りたいし」
「え？　私ですか？」
「まぁいいじゃない二人が三人になっただけだよ、なぁに気兼ねなく言ってくれてかまわないよ」
「はぁそうですか」
男は俺の次に美優を指名した。多少驚いた様子の美優だがすぐに

男の指名を引き受けた。一体この無駄に陽気な男は誰なのだろう？
「えぇっとこちらのお方は副会長さんと同じくこの学校の生徒会でありそこでの一番の重役である生徒会長を務めてらっしゃる大谷孝平さんです。そしてまたまた入学してから彼氏にしたい人ランキングで常に一位か二位です。副会長さんに負けず劣らずすごい人で主な理由は『かっこいい』『一緒にいて飽きない』『副会長以上に頼れる』『笑顔が素敵』『たまに台詞をかむのがたまらない』などの理由が挙げられます。普段は完璧なところが多くてまじめな理想の生徒会長としても教員たちからも信頼の厚いかたです……ですがこのような一面もあるようです」
序盤、中盤は調子いいのに終盤だけ言葉が詰まる美優。俺も完璧まじめ人間が実はお茶目でしたーって言われたら驚くな。
「噛むのはほめられてもうれしくないんだけどなぁ……」
美優の話を聞いていた会長は苦笑いになった。
「まぁおおむねそのとおりだね。いいかい？　俺は誰にでも本性で話しかけるわけじゃないんだからなるべく言わないでくれよ」
会長は人差し指を唇に当てて秘密のゼスチャー。こいつ訳分からん。
「だったらいつもみたいにしてりゃいいじゃないですか。わざわざ俺たちにいわんでもいいでしょうに結構迷惑です」
何を考えているのか知らんが勝手に秘密をばらされてそれを言うなとはずいぶん勝手な人だな。
「ちょっと桂！」
沙羅が止めてくるが、先ほど驚かされたしずっとこいつのペースだ。正直気に食わん。
「うーん、その反応もいいねぇ自分で言うのもなんだけど俺はこれでも人を見る目はあるつもりだ。やり取りを先ほどから見ていて君たちに興味が湧いたね」
「そりゃどうもですね」
これはほめられているのだろうか？　先ほどのやり取りを思い返

すと馬鹿にされている気もする……。俺はぶっきら棒に返事を返した。
「まぁいいですよあなたがいくら興味を持とうと俺たちはもう行きますから。安心してください、あなたの性格については言いませんから」
俺はそう言ってその場を立ち去ろうとする、こんなわけの分からんやつに付き合っている暇はあるけど無い。大体俺たちはこいつらのことを知りに来たんじゃなくて美優を迎えにきたのだ。その美優が居るのだからもうここに居る必要もないと言う理屈だ。
「そう簡単に生徒会長たる俺が君たちを逃がすとでも？」
生徒会長はなにやら意味深な笑みを浮かべている。何か考えがあるとでもいいたげな表情だな……。いやいやながらだが何が起こるのかわからない、振り向くしかないじゃないか……。
「おや？　どうやら観念したようだね。それがいい、なんたって俺はその気になれば国だって動かせる力を！　うげ！」
生徒会長が両腕を天に広げた瞬間その頭に天罰が下った。いや、実際にはどこからか湧いた副会長が脳天チョップを繰り出しただけなのだが……。なかなか鋭い、音もいいな。
「お前にそんな権力あるわけ無いだろうが、大体さっきから後輩からかってなにをしている？」
一体いつの間に来たんですか？　と問いたくなるのが今は現状維持に限るな。勝手に話が進んでくれるのはありがたい。
「なんだ雅織、夏姫はどうしたんだい？」
たたかれた頭をさすりながら会長はたたかれたことなんて無かったかのように副会長に尋ねる。もしかしたら結構頻繁に叩かれてるのかもな。
「逃げられた、あいつ俺の顔引掻いてきやがった。カメラも手帳も取られた……くそ！　今度見つけたらとっちめてやる！」
そう握りこぶしを作り言う副会長の顔には無数の引掻き傷が出来て赤くなっていた。あの小娘は猫か？　沙羅でも引掻くなんて事し

ないぞ。と思ったら沙羅に睨まれた……。
「まぁまぁお手柔らかにね……」
「いいや！　あんなことばかりされると我々の仕事、もとい生徒たちにも迷惑がかかるだろう。何時までも好き勝手にさせるわけにはいかん」
　会長はなぜか苦笑いで副会長をなだめる。別に敵なんだからつぶすのに燃えて悪いのだろうか？
そんなやり取りをぽかんと見ていた俺たちに副会長が話しかけてきた。
「まぁいいそれより孝平こいつらは誰だ？　お前の友人か」
副会長はその鋭い目つきで俺たちを見渡した。これは敵意なのだろうか？　一瞬ドキリとする。
「彼らは俺のお友達だよ」
「はぁ！」
「あれ？　どうかした？」
「『どうかした？』じゃないだろ！　誰がどこでいつお前とお友達になった！？」
「誰って君たちと、どこでってここで、いつってついさっきじゃないか君熱でもあるのか」
　熱があるのはお前のほうだ！　だめだ本当に不思議そうにしてやがる……。
「ところで君たち名前はなんて言うの？　俺たちだけ知られてて俺らが知らないのは不公平ってもんだろ？　いいじゃないか減るもんじゃあるまいし」
　その理屈だとほとんどの生徒を覚えなくてはならないような気がするのだが……。
「まぁ名前くらいなら、俺は……」
　俺たちは各々自己紹介をしていく。完結に言うつもりが沙羅たちの妨害により予想外の情報を与えてしまった。俺にとっては言いたくない図書室クラブのことも話してしまった。

「桂君、沙羅君、一輝君、美優君だね。インプットしたよ。これからよろしく。しかし図書室クラブね、面白そうじゃないか今度覗かせてもらうよ」
「こちらこそよろしくです。が、こなくて結構です。出来れば一生結構です」
「つれないねぇー」
会長は笑いながら俺の肩をバシバシ叩いた。くっ！　痛い……。
「終わったか？　君たちもこんなやつと居てもろくなことにならん。それより文化祭を楽しんだらどうだ？」
「こんな奴とはずいぶんないい様だね俺だって傷つくぞ」
不服そうな会長を尻目に副会長は引掻かれた顔をさすりながら俺たちを見渡してくるその目は先ほどからか鋭く光っている。
「俺はこの子たちと遊んでくるから雅織は仕事がんばってね」
え！？　こいつまさかついてくるつもりなのか？
「何を馬鹿なことを言っている駄目に決まってるだろう、お前が誰をからかおうと知ったことではないが、今日はだめだ。俺にもお前にも仕事が山のようにあるんだ。いくらお前でも遊んでいる暇なんて無いぞ」
「そんなぁー後輩たちと親睦を深められるまたとない機会なんだぞ？」
「そんなの後でやればいいだろう。とにかく今日はおとなしくしておけ兄妹そろいに揃って騒がしいのではたまらんからな」
さすが副会長。会長の補佐が決まってるじゃないか。しかし会長には兄妹が居るのか……。こんな男だ兄妹も想像できるな。
「いやだ！　俺は遊ぶ！」
「うあ！　なにすんだ！　離れやがれ！」
「ケイなんか知らない人によく抱きつかれるよね」
「それ私のことですか？」
何を思ったのか会長は俺に……俺に！　抱きついてきやがった……。あんたそこまで遊びたいのか？　斉藤と美優も話してないで助

けてくれよ！
「……一体何をしている。幼児でもあるまいしお前は一応それでも生徒会長なんだぞ……もう少し自覚を持ってもらいたいものだ……」
うお！　副会長怒ってるし！　目がさっきよりも鋭いって！
「わ、分かった、分かったよ……」
会長もそれを察したようで俺から慌てて離れた。副会長も苦労してるんだな……。もしかしたら会長が普段しっかりしてるというのはこの人のおかげなんじゃ……。
「では我々はこのあたりで失礼しよう。高坂君仕事はしたまえよ。ほら行くぞ」
「いで！　あでででで……」
「はい分かりましたー」
副会長は逃げようとした会長を肘うちで止めそのまま引きずって消えていった。その時も会長は終始俺たちに助けを求めてきたが全員が無視という虚しい結果に終わった。
「あんな奴と関わるのはごめんだな」
「そうかな？　思ってたのとだいぶ違う人だったけどずいぶん楽しそうな人だと思ったけど」
「そうですよ。悪い人ではありませんよ。きっといい人です」
「いい人とかの問題かしら……騒がしいのは苦手だわ。まぁ面白そうな人物ではあるけどね」
斉藤や美優の考えより沙羅の方がしっくりくるがそれでも俺はあの手の人物は苦手だった……。
「じー……あいつら使えそうだな……」
俺たちはこの時逃げたはずの人間が窓の外、距離にして三四メートルの地点でこちらを伺う影に気づくことはもちろん無かった。気づいたとしてもどうすることも出来なかったろうけど……。

文化際とバックナンバー（2）

「さてと、美優はこれからどうするんだ？　どっか行かなきゃいかんのか？」

俺はみんなと特に何をするわけでもなく廊下を歩きながらどうするかを話していた。

「そうですね実行委員の仕事がありますが私は末端ですから模擬店の視察や学校内のパトロールが主な仕事となります。副会長さんや会長さんクラスになると忙しいようですが私たちは定期連絡をすればほとんど自由でも大丈夫なんですよ」

「そっかぁーじゃあ意外と暇なのね私たち……」

「そんなこと言うなよ大事な仕事だし遊べるんだからいいじゃないか。せっかくだ、楽しもうよ。お化け屋敷とかバンド演奏とかのイベントも多いみたいだよ」

沙羅は少々がっかりとした様子だったが俺も内心そんなものかと思っていた。うーんこうなってくると特にすることもないんだよな……。斉藤と美優はやりたいことあるようだしそれに付き合うのも悪くないかな……。そんなことを考えながら俺たちは歩くのをやめ人通りの少なめな渡り廊下から賑わう文化祭を先ほど模擬店で買った綿アメをかじりながら眺めていた。これと言ってしたいことがあるわけでもないので困ってしまったな。

「ちょっとお前たち！　暇してるみたいだな！　だったら僕に付き合えよ！」

俺はぼうっとしながら主に斉藤と美優の何をするかという議論に耳を傾けていたが突然背後から声がしたので俺たちはゆっくりと背後を振り返った。

そこには一枚パンダのパネルと中よさそうにあるく老夫婦が居ただけだった。

「最近のパネルはしゃべるのか。ずいぶん進化したんだな……」

「そうね。だけど何もパンダのパネルにしゃべらせなくてもいいわよね」
「でもかわいらしいです。私は好きですよ」
「そうかな……このパンダ妙に怖いと思うけど、なんで八頭身で二足歩行してるパンダなの？　着ぐるみだよねこう言うのって」
確かに……パンダにしてはでかいな、着ぐるみのパネル？　しかしなぜ普通のパンダではないのだろうか……俺たちの前にあるパンダは両手を広げて『さぁこの胸に飛び込んでおいで』と言わんばかりの立ち姿だった。悪いが美優には賛成しかねる。
「ちょっとどこ見てんだよ！　こっちだよこっち！　さっきから無礼な奴らだな！　このやろう！」
またパンダがしゃべった。高性能パンダはやっぱりすごいなっと感心しているとスネに衝撃が走った。しかし特に痛いわけでもなくただ衝撃が走っただけ。
「うわ！　いた！　何だよこいつスネになんか入れてやがるのか……」
ようやく気づいたのだが俺の目の前、脚の前にはなぜか足を押さえて涙目で足に息を吹きかけて蹲っている少女がいる。こいつかさっきから話しかけていたのは……。しかし蹴られたのは俺なんだけどなー。
「くそう、さっきから僕のことを馬鹿にしやがって！　変な態度だと許さないからな！」
現れた謎の少女は立ち上がっていまだ涙目で俺をだいぶしたから見上げていた。それと同時になぜこの少女に気がつかなかったのか理解した。この少女恐ろしく小さい。視界にも入らんわけだ。
「あれ、君新聞部の部長さんだよね、こんなところでどうしたのさ」
「いつの間に現れたんでしょう？」
声を出したのは斉藤だった、美優も驚いている。新聞部部長？うーんと俺は繭を顰めてうなってみて思い出した。確かに新聞部部長だ。先ほど副会長と喧嘩をしていた小柄な少女か……いや、少女

は間違っているのだろうか、一応年上なわけだしお姉さんか？　これも違う気がする。しかし小さいな。同じ年の美優と比べるとずいぶん発育に問題があるのではないか？　そんなことどうでもいいか、俺の気にすることではない。
「そうだ、僕こそが偉大な新聞部の部長である！　さぁ分かったなら崇めたまえ！」
そう言って小娘はまったく無い胸を張った。ずいぶんとえらそうな態度だな……。ここはひとつ懲らしめないとだな……。
「こら！　大人に向かってその態度はなんだ！　しっかりしないと駄目だろう」
俺は目の前に居る少女に副会長とまでは行かないがチョップをビッシっとお見舞いしてやった。これで少しは身の丈を知るだろう。おぉ効果的面涙目だ、心が痛むがこれも君のため……。
「桂、見えないけど私たちの先輩よ……」
「まぁ遠慮とか尊敬とかしにくい容姿だよねむしろ逆」
「とってもかわいらしいですよね」
まったくもって沙羅の言う通りなのだが斉藤と美優の言うこともその通りで、なんだか先輩とか目上の人物としての雰囲気がまったくない人だ。どちらかと言えば後輩とか子供にしか見えない。
「そろいも揃って僕のこと馬鹿にしやがって！　お前らのこと散々に書きまくってやるぞ！」
新聞部はそういいながらも涙目だった。この子はそんなに背のことを気にしているのだろうか？　しかしこんな小さな子を泣かせるようではいかんよなぁ。
「ほらこれやるから泣きやみな」
俺は半分くらい残っている綿アメを目の前で泣く少女に手渡した。出来る限りに笑顔で小動物に接するように……。大丈夫こわくない。
「綿アメくれるのか？」
「あぁお食べ」
「ありがとう……」

少女はぐすんとしならしかししっかりと綿アメを受け取った。うんこれでいい……。今日も一ついいことをしたなぁー……。
「って誰が綿アメでごまかされるかぁ！　僕は先輩だぞいい加減にしろよ！　子供じゃないんだ！」
「子供だろ！？」
「ふざけんな！」
ちっ！　駄目だったか。まぁ当然といえば当然。しかしこいつしっかり俺の綿アメ食べてるし……。
「ほへほひほはへはひほは？」
「食ってから話せ」
綿アメを口いっぱいにほおばりながらもごもごと話す新聞部。綿アメでここまでなるって逆にすごいな。新聞部はガツガツと綿アメをものすごい勢いで食べきり残った棒を俺に投げつけてきた。それを頭だけよけてかわす俺……ではなく顔面に直撃を受け先ほどより一層沈んだ気分になる。その間に新聞部は最後の綿アメをごくりと飲み込んだ。
「あーおいしかった」
新聞部は口を拭いながら満足そうにしている。本当幸せそうだな。
「それより大谷先輩、私たちに何か用ですか？」
満足そうな新聞部を見ていた沙羅が尋ねる。そう言えばそうだな何でこいつはここに居るんだ？
「ん、そうだな。危うく本題を忘れるところだった」
忘れんなよ。俺も忘れていたので心の中だけでツッコンだ。
「山本たちさっきから見てたけど暇そうじゃないか、そこで最初にも言ったけど僕につきえよ」
何言ってんだこの小動物は……付き合え？　命令？　元気よく言ってもイラっとくるな。
「ケイ駄目だよ」
「分かってる……」
「表情に出てるよ」

斉藤に止められなければまたチョップしてやるのに……。付き合いというのは時たま厄介だな。
「先輩事情がよく分かりません、少し詳しくお願いできますか？」
こういった対応には沙羅はむいている。先生はこれに驚いていて初めて会った時のやさしい山本に戻ってくれないかとたびたび頼んでいるほどだ。もちろん今や先生にそんな態度をとる必要も無いのだからやるわけが無い。
「うん、良いだろう。君たちには文化際中僕と一緒に新聞部の活動に協力してもらいたいのだ！」
元気よくても今イチ分からないなぁ。新聞部の活動？　なんだそれ。
「手伝えとはどう言うことですか？　具体的には何をしろと？」
沙羅は斉藤に右手をつかまれ動きを封じられている俺などを尻目に淡々と話を進めていく。美優はニコニコしながら新聞部を見つめている。
「そうだなしっかり話すと話が長くなっちまうな……まぁここでもいいか」
「だったら移動しましょうや。俺もこんなところで立ってるのも疲れますし。いいところがありますよ」
俺はそう言って図書室の方向を指差した。俺たちの居る渡り廊下はさっきより人通りが多くなってきていた、一般客が入ってきたため職員棟と学生棟をつなぐ渡り廊下は人が混むのだ。そして人ごみの中で長話が出来るほど俺は頑丈じゃない。
「そうなの？　じゃあそこに行こうか案内せい！」
またまた偉そうに新聞部は俺を指差した。ちなみに当たり前だが指差しなどされて何も感じない俺ではない。ここらでもう一発行っとくか……と思ったら今度は沙羅に手首を掴まれて何か悟ったように首を横に振った。分かったよ……みんなには敵わんな。
あいにく俺らの向かう図書室はここから近いし何より人が居ない。ゆっくり話をするならあそこ以上に適したところは無いだろう。

「出発進行！」
俺の気苦労など知らずに新聞部はこれまた元気よく指差した方向とは逆方向に歩き出した。こいつもしや馬鹿か……？

「うーん、やっぱりここは良いわねー落ち着けるし静かだしそして何より人が居ない！」
沙羅は図書室に入るなりそう言って気持ちよさそうに伸びをした。俺も同感だ、本のにおいが心地いい……。
「そうだね、やっぱり落ち着くねー」
斉藤も足早に自分の指定席について机に突っ伏しため息をついた。
「ちょっと待っててくださいね。私飲み物持ってきますね」
美優はそう言って図書管理人室の方へ歩いていく。
「助かるわ美優。熱めの紅茶ね」
「はい、いつものですね」
「俺はコーヒー。ミルクと砂糖も入れてねー」
「わかってますよ」
「桂君は何にします？」
「俺も斉藤と同じコーヒーでブラック」
「了解です」
「夏姫ちゃんは紅茶でいいですか？」
「え？　あ？　いいぞ？」
美優は注文を聞くとにこやかに図書管理人室へと消えて行った。
美優が自前のティーセットを持ってきたのは数日前のことである。放課後図書室に来たら先生と美優がおいしそうにカウンターで紅茶を飲んでいたのが始まりなのだ。はじめは本が大量に保存してある図書室で飲み物を飲むのはかなりどうかと思ったがこぼれたことは無いし何よりおいしいからな、皆すぐにとりこになった。ちなみにティーセットは図書管理人室で常時稼動である。主に先生がコーヒ

ーをがぶ飲みする。
　しかしこれにはさすがの新聞部も驚いたようだ。俺もはじめは驚いた。
「先輩、お話ってなんですか？　手伝えって言ってましたけど」
　準備中の美優以外全員が椅子に座ったところで沙羅が話を切り出す。
「そうだね、はじめに僕の目的なんだけど。僕たち新聞部は今回の文化祭を機会に部活動への昇進を狙っている！」
　ドーンと効果音がついて俺は固まった。
「新聞部って部活じゃないの？」
　俺は向かいに居る沙羅に尋ねた。部って言うくらいだからなぁー。
「話聞いてなかったの？　新聞部は今はねゲリラ部扱いよ」
　沙羅にため息をつかれてしまった。忘れてたんだから仕方ないじゃないか……。
「そうなんだ僕の新聞部は残念ながら今はゲリラ部という不毛な扱いなんだよ……僕は僕の新聞部が非公式のゲリラ部なんていわれて終わるなんてやなんだ！」
　新聞部は悔しそうな顔で立ちあがり机に両手をついた。奥歯をかみ締めるのが下の角度から見える。こいつ頭空っぽの元気で馬鹿なだけじゃないのかもしれんな……。
「あんたの気持ちは分かったが俺が手伝う義理はない」
「そんな……」
「ちょっとケイ少しひどいんじゃない？」
　斉藤の言うこともそうだ、こんな奴でも大変なのは分かったがそれで俺らが面倒な事をするわけじゃない。悪いがさっき会った見ず知らずの奴につきあうほど俺はお人よしではないのだ。
「義理ならあるわよ。とってもおっきなのが」
　そういったのは腕をくんで椅子に深く座った沙羅だった。義理だと……？
「一体何があるってんだ？　こいつとは初めて会ったんだぞ」

「そうね、だけど美優とは毎日会ってるでしょ」
美優？　なんのことだ？　俺は図書管理人室でうれしそうにコーヒーと紅茶を入れる美優を想像する。においを嗅げばほのかにコーヒーのいい匂いが漂ってくる。今や図書室クラブの一員俺たちの生活の一部に入る人物。それとこれとが何の関係があるのだろう。
「それがなんだってんだ、そんなもん義理でも何でも無いだろ」
「それがなっちゃうのね、美優が今ここに居るのは大谷先輩のおかげなのよ？　立派な借りじゃない」
沙羅が何を言っているのか分からん。美優がここに居るのが新聞部のおかげ？　どう言うことだ。
「美優とあった肝試しをした日あの時色々な情報をくれたのは大谷先輩よそれが無かったら美優とはあえなかったかも知れないじゃない。美優と出会う直接のきっかけにならなくても後押しをした一つであるのは確かよ」
そうか、胡散臭い会談話や教室に出る幽霊ってのはこいつが教えたのか……。確かにこいつなら夜の学校に居ても不思議じゃいな……。俺は少しの間考えざるをえなかった。数秒の間を置き俺は覚悟を決めた。
「……わかったよ。付き合えばいいんだろ。借りは返す。それだけだからな」
「素直じゃないんだから」
借りを作りっぱなしは趣味ではないし、ちょうど退屈してたところだ。暇つぶしにちょうどいいかなって思っただけだからな！
「あぁありがとう本当に助かる！　お前って意外といい奴なんだな！　山本も助かった！」
「それほどでもないですよ。桂はめんどくさがりやですが雑用程度には使えますよ」
以外とは余計だ新聞部……。そして沙羅もな！
「うわさをすればなんとやらね」
沙羅がそう言うと図書管理人室の扉が開き中から美優の姿が現れ

た。
「はーい、皆さんお茶が入りましたよー」
きりのいいところで美優がお盆に人数分のカップを乗せて歩いてくる。本当にタイミング良いよな……。俺たちはそれぞれ注文したものを受け取って行く相変わらずおいしそうだな。
「どうも、ありがとさん」
「いえいえ、ゆっくり召し上がってくださいね」
俺も美優からコーヒーを受け取りお礼を言う。一口飲むとすっきりとした苦味が口に広がり香ばしい匂いが鼻を抜けた。
「うまい……」
カップの中を見ながら思わずつぶやく。美優にも聞こえたらしくお盆を両手で胸の位置に抱えながらこちらを見てニコリと笑った。
「桂はほんと素直じゃないわねー」
沙羅に笑われたがあえて聞こえない振りをした。うーん、本格的に義理だな……。
「で、お前の目的も分かったが一体どうやるつもりだ？　何か方法でもあるのか？」
うれしそうにするのは良いがそれがなければどんなにがんばったって人が集まったってどうしようも無い。
「それは……一応あるんだけどね、ちょっと問題なのはそこなんだ、みんなに手伝いを願いたい理由……」
深刻な話は尽きないようだな……。俺も少し心しないといけないようだ。
「部活に昇進する方法はもうあってそれ自体はなんら分かりにくいことではないんだよ。たった一つだけなんだけどね……」
それが厄介事というわけか……。しかし一体どんな条件を出されたのだろうか？　部活を一つ作ってしまうようなことだ、やはりそれなりに難しいのではないだろうか。元気と行動力だけがとりえのような新聞部が人の助けを必要とする事とは一体なんなのだろうか。
「やることは簡単さ、この文化祭開催期間中の学校新聞を僕たちが

合法集団として作り続ける事。ただそれだけだ。それだけで僕の新聞部は列記とした公認部活動へと昇進できる」
新聞部はそれだけをきっぱりと言い切った。
「それは一体どう言うことになるんだ？　文化祭期間中作り続けるのがどうして大変なんだ？　いつもやってるんだろうが」
「そう言うわけにも行かないんだよ。確かにやることはいつもと大して変わりはしないが動きが違ってくるんだよ。今までの僕たちの活動じゃ決して合格することはかなわないだろうからな」
そう簡単にもいかないということか……。しかしそのくらい新聞部ならお茶の子さいさいと言うやつではないだろうか？
「むうー開催したから早速一枚目を持っていったのだがな渡したら『この調子じゃ合格へは遠いいぞ』って言われてな心底二枚目に困っていたところだ。一応出来てはいるのだがな……」
そういいながら新聞部は懐から二枚の紙を取り出した。どうやらこれが例のブツらしいな……。フッフッフ。
「あっケイが燃えてきた」
斉藤黙れよな。駄目超能力者め。
「これなんだけど……お前らどう思う？　僕は完璧だと思うのだが……どうも駄目なところがわからないんだよ」
そう言って新聞部が広げた紙には子供の落書きにしか見えないものが書いてあった。いや、もしかしたらこれは途轍もなく高度なもので凡人の俺には理解できないものなだけかもしれんない……。
「これはなんだ……何かの暗号か？」
紙の上にはこれでもかと散りばめられた文字や記号の後。それが一体何を意味するのかは俺には分からない。
「暗号？　何を言っているこれのどこが暗号だ。まったく失礼な奴だなお前は」
「え？　あ、はぁ……」
やはり常人には理解できないレベルというころだろうか……。
「大丈夫よ私も分からないから。しかし字汚いわね……どうやった

らこんなのになるのかしら……」
おろかにも一瞬納得してしまった自分が馬鹿だった……。沙羅も読めないとなるとこれは本格的に汚すぎる文字か……。これでは没をくらうのはあまりにも必然だぁー……。
「そうですねー目の付け所は面白いかも知れませんが少し内容がぐちゃぐちゃですね……あ、ここの漢字間違ってますよ」
「本当か？　あ、本当だ。助かったよ」
これ読める人なんて居るのだろうか……と考えていた時だ。汚く俺には全く読み取ることの出来ない新聞を見ながら俺たちの反応とは全く違う反応を見せたのは美優だった。新聞部の反応からしても美優はデマカセを言っているわけではないようだ……。一体どんな暗号解読能力だよ……。
「まさか……信じられない。これを読んだって言うの？」
「意外な才能だねー」
沙羅も驚きの表情を隠そうともしない。斉藤はなぜかうんうんっとうなずきながら美優を見ていた。俺も美優と新聞部の話を半ば呆然としながら見ていた。
美優の解読技術によりなんとか新聞の内容は把握することが出来た。解読と言ってもただ美優が読み上げていくだけなので見ている限り解読とは思えないのだが確実に解読だった。俺たちはそれを聞いて少しばかり首をかしげていた。なぜならそれははっきり言って大して面白い作品ではなかったからだ。内容は支離滅裂のまさに自由。己のためのみの書かれた一品だ。
「よくこんなものでやってこれたな……こんなの読む奴の思考が分からん……」
俺は美優の解読を聞きおえてこめかみを押さえてそうつぶやいた。こんなの書いてよく平気で居られるよ……。
「いや、時々俺も読んでたけどこんなんじゃなかったよ、確実に」
そうか、一体何が起きたというのだろうか……斉藤も分かってないみたいだし……。

「これは、誰が書いたんですか？　もしかして先輩ですか？」
沙羅がおそるおそる新聞部に尋ねる。沙羅も信じられないのだろう。
「いいや、もちろん僕が書いたぞ。新聞部の部長として最前線で戦わなくてはならないからな！」
なにと戦ってんだよ……。せいぜいお前が戦ってるのはこれを解読する物好きとだよ。新聞部はなんだか自慢げだし何にたいして自身を持っているのかもわからん。
「そっとしとくか……」
「それがいいんじゃない？」
「どうしようもないわよ……」
俺たちは早くもあきらめた。
「とりあえずこれを作りなおして再提出すればいいってわけだな？」
「そう言うことだ」
困ったな。新聞なんて何年ぶりだ？　部で作るような新聞が俺たちにどうにかなるのだろうか？。というか新聞部はこんなんで作り方知ってるのか？　激しく不安になる俺だった……。とりあえず美優とで新しい紙にでも書いてみるか……。

「えっとこれか……うーんどうなんだろうなこれは」
俺たちは美優に数分で新しく作ってもらった文化祭用新聞第二部を眺めていた。新しく書き換えて改めて思ったがこれはつまらないな……。これが二部か……と考えていたらふとした疑問に突き当たる。
「ちょっと新聞部、これを直すのは分かったが第一回は大丈夫だったのか？」
二回目がこれじゃ一回目はどうしたのだろう？
「これだが、一応通ったんだぞ。だから二部目も大丈夫だ」

「え！」
きっぱりとこれまた当然のように新聞部は答えた。俺は通ったという第一部にすぐに手を伸ばした。
確かにきれいな電子書体で内容もかなり改善されている。これは一体……。
「これは一体誰が書いたんだ？　駄目だって言われたんじゃなかったか？」
俺は第二部と第一部をすばやく両手に持ち見比べながら新聞部に尋ねた。どうしてこの二つを書いた人間が同じと思えようか！
「なに言ってんだ？　僕が書いたに決まってるだろうが」
「うぉう！」
今こいつに俺馬鹿にされなかったか？　この変人に。びっくりだ……。
「とりあえずこれを直してまた提出してＯＫもらえばいいんでしょ？」
俺と新聞部の様子に見かねてか斉藤がため息をついて話を進める。まぁこんないつまでも不毛な会話を続けるのもばからしいしな……。
「その通りだメガネ、分かったらはじめるぞ！」
新聞部も斉藤の意見に賛成らしく斉藤を元気よく指差した。メガネって斉藤のこと覚えてないのだろうか？
「メガネって……」
斉藤も少ししょんぼりしていた。もしかして俺も変な風に言われてしまうのだろうか？
「ま、そ言うことなんだったらさっさと終わらせるわよ」
「わかりましたー」
「よーしやるぞー！」
沙羅はそう言うと女子たちで新しく新聞を書き始めた。斉藤は新聞を横から覗き。たいして俺はこれには興味もないので目の前のコーヒーをぐいっと飲み干した。そんな今のところ見せ場のない男子は着々と仕事を進める女子たちを見守ることにした。こう言うこと

は俺には向いとらんからな。こんなこと言ったら沙羅には『そんなんだったら桂に向いてることは一つも無いわ』くらい言われてしまうだろうな……。
「できたわ」
「はや！」
俺がコーヒー二杯目を持ってきて斉藤と少し雑談したらこれか！
「いくらなんでも早いというか本当に出来たのか？　手抜きか？」
沙羅たちに限ってそんなことは無いと思ったが沙羅も俺と同じで面倒だったとか？
「してないわよ、馬鹿にしないで。桂とかカッちゃんみたいに仕事の遅いグウタラ駄目人間じゃないの」
「俺までとばっちりだよ。ケイの馬鹿」
沙羅と斉藤に睨まれた！　しかし沙羅の言葉には反論できな……るが余計なことはしなくてもよいだろう。
「元気出してください桂君。桂君も一輝君もグウタラ駄目人間なんかじゃないですよ。いいところいっぱいありますよ」
沙羅とは正反対に慰めてくれる美優。沙羅もこのくらい丸くなってくれたらなー……気持ち悪いな。変な妄想はするもんじゃない。
「美優ちゃんは優しいねーそれに比べてあの娘は一体いつからあんな口の悪く育ってしまったのか……俺は悲しいよ、おーいおいおい……」
「はいはいそうですねー大丈夫ですよー。沙羅ちゃん、ちょっと言いすぎですよー」
斉藤は泣き真似をしながら美優にすがりついている。美優も子供をあやすように斉藤の頭をなでる。おい斉藤お前分かってやってるな……。いつからお前はそこまで変体に成り下がってしまったんだ……。
「ってカッちゃん美優のどこにしがみついてるのよ！　馬鹿じゃないの！　早く離れなさいよ！　この変体！」
「おふ！　沙羅ごめん冗談だから！」

「冗談じゃすまないでしょうがー！」
「沙羅ちゃーん一輝くーんやめえくださーい仲良くですよー！」
おー斉藤が馬鹿するからまたまた面倒な追いかけっこが始まってしまったじゃないか。まぁがんばれ。俺には関係ないからな。俺は二杯目のコーヒーを半分ほど飲んだ。
「お前らいつもこんなんなのか……？」
一人取り残されている新聞部が俺に困った顔で尋ねてきた。
「こんなんです」
「そうなのか」
「よかったら混ざってきたらどうです？」
「それじゃそうするかな……おーい僕をほっとくなー！　しーごーとー！」
なんだ、やりたかったんじゃん。俺は残ったコーヒーを今度こそ飲み干した。

「でこれが完成したものですか」
椅子に座って完成した新聞を眺める俺たち。
「まぁそうね私たちは今のところ情報が不足すぎるのよ。先輩の手帳見せてもらっても読めないし美優に解読してもらってもたいしたもんでてこないし。今出来るのはこの程度よ」
「失礼だな僕が悪いんじゃなくて山本が悪いんだ！」
「どこがですか……」
「知らない！」
沙羅も苦労してるんだなー。しかしこの小娘は子供かよ……。
「ま、まぁ完成したならもう一度出さなきゃ駄目なんでしょ？　早く行こうよ。まだまだ次もあるんだし」
そう言ったのは一人だけ戦場でもくぐりぬけたかのような顔をした斉藤だ。こちらもこちらで大変だな。こちらは自業自得か……。

「そうだな……ところで新聞部これってどこに出してんだ？　やっぱ職員室」
完成してもどこにもっていくのか分からないのでは話にならい。確認とると言っていたし誰かにとってもらうのだろう。
「いや、生徒会室だ」
そうか生徒会室なのかてっきり先生に見せるのかと思ってしまった。そうか生徒会に見せるのか……。
「ってなにぃぃぃ！？　生徒会に見せるんかいな！　あえて生徒会かよ！」
「へぇーあの生徒会にね……」
「ずいぶん意外なとこだね……。さっき喧嘩してなかった？」
「実は中良いんですねー」
美優違うだろ！　なんで！？　さっき副会長『あんなゴミども神に誓ってつぶしてやる！』て言っていたじゃないか！
「な、なんだよ。べつに良いだろう。それが条件なんだから……」
新聞部はなにやらバツの悪そうな顔をした。
「それよりさっさと行くぞ！　僕は忙しいんだ！」
顔を少し赤くした新聞部は怒りながら立って歩き出してしまった。
「ちょっと先輩！」
「変わった人ですねー」
「ずいぶんね……」
「ただの変人だ」
「こらー！　早くきやがれー！」
翻弄されっぱなしな俺たちは入り口で怒鳴る新聞部の後にしぶしぶ続いて行った。

俺たちは新聞部の後に続き生徒会室の前へと来ていた。職員棟最上階に生徒会資質はある。生徒会室専用に作られたのだろうか扉に

生徒会室と書かれたプレートが埋めこめられている。
「しかし俺がこんなところに来る羽目になろうとは……」
俺は入り口に立ちしみじみとつぶやいた。出来れば学校生活で来たくないところなのだ。あと校長室とか怒られそうなめんどくさそうなところには大体行きたくない。
「別にお前が必要なわけじゃないから外で待っててもいいんだぞ。僕は行ってくるから」
一番前に居る新聞部が睨む。そうですかぁー。
「俺は面倒だしまたあの人たちにも会いたくないのでここに残ってまってます」
俺はそう言って後ろに下がり窓に背を預けた。また変な会長とかなんかに会いたくないからな。
「またケイはーせっかく生徒会室に入るいい機会なのにーあんまり入れないと思うよ」
斉藤、俺は珍しいからと言って藪なんて突きたくないんだよ。
「こんな奴ほっといて行きましょどうせ何言っても無駄だわ」
「それもそうだね」
「では少々お待を」
そう言って俺以外のメンバーは次々に生徒会室に足を踏み入れていった。俺は外でも眺めて待つかな……。窓を開けて人で賑わう校庭を見下ろしていた。
「せっかくの文化祭だって言うのに君は楽しもうとは思わないのかい？」
「面倒なんですよ。人ごみも苦手だし……」
「まぁ人それぞれだな……それよりあの子達は中に誰も居ないと考えなかったのかな？　会長だっていつでも居るわけじゃないのにね。まだ探してるかな？」
先ほどから何を言っているんだこいつは……俺はふと隣に視線を送った。
「よう、やっと気づいたか？」

そこには気持ちよさそうに風を浴びる生徒会長がにこやかに立っていた。
「カイチョウ……？」
「君はずいぶんロボットの真似が上手いんだね。こんど校内ロボットコンテストでも開いてみるか、優勝できるよ」
そんなくだらない大会はどうでもいい……何で会長が？　なかに居るはずじゃ……。あぁ駄目だったか……。
「あきらめたようだね。じゃ、仲良く入ろうか。生徒会室。なにより俺に会えてうれしいだろ？」
会長はすべておみとうしだったのだろうか？　……どこから見てた？
「会長」
「なんだい？」
「手、どけてもらっていいっすか」
会長は無言で俺の肩に回した左手を下げた。
「あら、外出中だったんですね」
「これから物色するところだったのに……残念ですね一輝くん」
「全くだ。これからと言うのに……。ケイも少しくらい時間稼ぎしてくれてもいいのにね」
「……」
中に入れば偉そうなでかい椅子に座った斉藤とそのよこで偉そうな机を物色している美優。何をしているんだ……これからって言いつつもうすでに物色してるじゃん。窓際に立ってる沙羅も何もしないでいるし。止めろよな……。しかし新聞部の様子おかしくないか？　俯いて上目遣いでこちらをチラチラと見ている。
「うーんやっぱり君たちとは縁があるようだね。生徒会室へようこそ」
会長は部屋に当たり前のように並ぶ馬鹿たちを見てなんとも爽やかに挨拶をした。
「そこ大事な書類とかあるからあんまりいじらないでほしいかな」

そう言うと会長は斉藤のほうに歩いていって『俺の席だから』と斉藤をどかしてため息をつきながら深く座った。斉藤たちが物色していた机はやはり会長のものだったか……配置的にそうだと思ったよ。そのあと俺たちは会長と適当な話を繰り広げた。

「君たちとの運命的な再会を喜んでいたいところだけど。やっぱり夏姫が居るってことはアレがらみなのかな？」

「会長がおっしゃるアレが何なのか分かりませんがたぶんソレです」

「アレとかソレとかわけわかんねぇよ」

斉藤のツッコミはほうっておいて会長は話が早いな。さすがなのだろうか？

「どうした夏姫、一丁前に緊張かい？　そんなことより次の原稿は出来たんだろうね？」

「う、うん……」

俺たちを見る会長の目とは違う、何か鋭いような目つき。そんな意外な目つきだからさっきから新聞部もこんなにしおらしいのか……。

「やっぱり見るのって会長だったんですね」

「ん、そうだね。俺以外見るやつなんて居ないから」

沙羅と話す会長が笑う。それにしたって会長が見ることじゃないような気がするが。ほうっておくか。

「ふー」

「ど、どうだった？」

沙羅たちが修正した新聞を見終えたのか会長は目を閉じて息を吐き出した。新聞部もさすがに不安そうだ。漫画家と編集者ってこんなんなのかなって思った。

「なかなかよくなっているね。これはこのまま預からせてもらうよ」

「よっしゃー！　やったね！」

満足そうな会長の顔、それを見て新聞部もうれしそうだ。よかったな新聞部。

「これで終わりじゃないぞ、まだまだ文化祭は続くだからお前は早

く取材に行って来い！　あとのことは俺がやっとくから遅刻なんてことはしてくれるなよ」
「うん分かった！　じゃ行ってくる！」
会長がキツイ事を言うがそれでも新聞部はうれしそうに生徒会室を走りながら出て行った。新聞部も会長もやけにうれしそうだな。しかしあんなに喜ぶなんて新聞部もまだまだ子供よな。俺たちも新聞部の後に続き帰ろうとして出口へ歩き出した。
「あ、君たちはちょっと待ってくれないか。少し話があるんだ」
呼び止めたのは会長だ、一体なんだと言うのだろう？
「暇つぶしでしたら帰りますよ」
「いやいやそんなんじゃないから……。頼みごとだよ君たちにしか出来ないんでね」
会長の顔には先ほどのうれしそうな表情はなく真剣な顔つきだった。この会長なんとも読めない奴だ……。
「頼みごとですか？」
沙羅が不思議そうに尋ねる。それもそうだ生徒会長殿なんかから頼みごとをされるような者ではないしなにより俺たちでなければならない理由を聞きたい。面倒ごとは嫌だとはさすがに言い出せなかったが……。
「なぁにちょっとした事なんだがね君たちはもう片足突っ込んでるけど改めて頼みたいのよ」
頭に腕を回し先ほどより深く座り俺たちを見つめる会長。大きな椅子がギシギシと音を立てる。
「これ君たちがやってくれたんでしょ？」
そう言って会長は俺たちが持ってきた原稿を指でつまんでヒラヒラと振る。
「そうですけど……全部じゃないですよ」
俺の肯定。確かにこれは沙羅たちが手伝ったものだ。
「やっぱりね、あいつがこんなの作れる訳無いもんな……」
会長は一度深いため息をついた。

「よく知ってるんですね夏姫ちゃんの事」
「あぁ、よーく知ってるよ。ところであいつの字誰が読めたの？苦労したでしょ？」
「それは私ですよ。そこまで苦労しなかったですけど。変わった字ですよね」
「……ありがとう」
美優がそんな会長を見てほほえむ。美優の言うとおりこれはなんと言うか呆れと言うかもっと優しさを感じる。一体こいつと新聞部は何だというのだろう。
「そんで本題だけど、これからもあいつの新聞の手伝いを頼まれてくれないだろうか？　気づいてると思うけどあいつだけじゃどうにもならないんだよ。この通り頼む！」
会長は拝むようにして俺たちに頭を下げた。その様子から必死さが伝わってくる。俺たちは話も理解できないので顔を合わせてアイコンタクトをして全員うなずいた。
「会長、話が読めません、詳しくお聞かせください。話はその後です」
俺はきっぱりと答えてやった。
「あいつの新聞いや、行動や態度からも分かってくれたと思うけどあいつ何にも出来んのだ……せいぜい周囲を疲れさせるくらいで……」
苦しそうな表情で会長は話し始めた。俺はこのあたりから理解した。この人は苦労人だと。
「ただやる気はあるんだ。空回ってるけど……がんばってるんだ、そこは分かってくれ！」
「はいはい分かりましたから話ずれてますよ」
なんであんたが熱くなるんだよ……。
「うむ、あいつと俺の約束は知っているか？」
会長の言う約束とはなんのことだろうか……。
「会長とのことかは分かりませんが文化際中まともに活動したら部

活にしてやるって奴ですか？」
「そうそうそれそれ」
どうやらあっていたようだ。約束というとこれくらいしか分からん。しかし会長との約束だったのか。確かこれのせいで新聞部は張り切ってるんだっけ？
「それを君たちに手伝ってもらいたい。理由としてはあいつの夢をかなえてやりたいからだ。新聞部を公式にしたいんだ」
会長の顔が一層真剣みをます。聞くだけだと馬鹿らしい理由かも知れないがそれを信じられるくらいの眼差しだった。俺はそれを馬鹿らしいが信じることにした。
「わけは分かりましたが会長、ちょっと回りくどくないですか？新聞部を公式にしたいならそうすれば良いじゃないですか。手伝うなら会長が。わざわざこんなことしなくてもいいんじゃないですか？」
俺の問いに会長は少し黙って唸った。数秒たった。
「今回の件で俺はあいつを手伝うわけには行かないんだよ。まぁこうして手伝ってるけど……。でもおおっぴらに手伝えない。それは俺が新聞部をつぶすべき生徒会長だからであり。そして何より手伝ったら意味が無いからだ。今回はどうしてもあいつにやらせたい……。新聞部は前部長が去ってあいつが部長になってからどんどん落ちている。言わずとも分かるかもしれないがあいつの手際が悪いせいだ。部員たちもやる気をなくし始めている。だから部員たちにも助けを求められない……あいつ一人なんだ。これは部になるための試練なんかじゃない、あいつの実力をつけ、部長としての尊厳も取り戻すためのあいつのための免許皆伝試験なんだ！　そのためにどうしても外部である君たちの力が必要なんだ！」
会長はなんとも苦しそうな顔で言い終えそして自嘲気味に笑った。事は思ったより大事なのかもしれん……。駄目だ実感わかねぇ。後ろからみた美優の姿が泣いていたが俺はそこまで感情的になれんな。沙羅と斉藤もなんだか感慨深そうな顔をしている。

「分かりました。私たちが全力で手伝わせてもらいます。もともと先輩には借りもあるのでやり遂げますよ」
沙羅がはっきりと言い切った。
「俺も手伝いますよ。出来る限りのことはしてみます！」
「私も力になれるか分かりませんがんばってみたいと思います。やってやりますよ！」
なんだか斉藤と美優もやる気満々だし……わかってたよお前らのお人よしが発動することくらい……。あぁ分かってたさ……。結局こうなるんだよね。全く面倒だ。
「分かりましたよ、やりますよ。ただそんなに期待されても嫌ですからね」
仕方ないこいつらがやると言ったんだ俺も付き合うさ。俺も人のこと言えないな。
「……みんなありがとう」
会長は改めて俺たちに頭を下げた。しかしおかしくないか？
「会長、最後に一つ聞きたいことがあります」
「なんだい？　何でも答えよう」
俺が聞くと会長は爽やかな笑みをうかべる。
「なんで新聞部ごときに生徒会長のあなたがそこまで肩入れするんですか？　つぶすべき対象じゃないんですか？」
俺の発言に会長は少し驚いた表情になった。俺は先ほどからこれが気になっていた。なぜ新聞部にここまで固執するのか、それが分からなければ俺は心から信用して働くことが出来ない。もちろん会長が真剣なのは分かるのだが……。
「それはね……」
会長が俯く。そしてすぐに顔を上げてにこやかに笑った。
「あいつが俺の妹だからだよ」

俺たちは先ほど生徒会室を出て廊下を歩いていた。
「いやーしかし意外だったね。あの正義の生徒会長とゲリラ部の新聞部の部長が兄妹とはねー」
斉藤が腕組みをして笑っている。
「そうですねー今思えばなんとなく似てますよね」
美優の言葉を聴いて頭の中で新聞部と会長を並べる。……目とかかな？
「考えてみれば苗字同じよね」
大谷孝平と大谷夏姫か……並んでみれば親子にも見える……。
「ところでさ、新聞部ってどこ行った？」
さっきから考えていた。俺たちより先に出て行った新聞部は一体どこに行ってしまったのだろうか？　ずいぶん元気よく出て行ったけど大丈夫だろうか……。
「……」
「わかんないねぇ……」
「迷子でしょうか？」
無言で目をそらす沙羅。笑顔が引きつっている斉藤。美優、迷子はないだろう？
ピンポンパンポーン―
どうしようか考えていると頭上のスピーカーからどこかで聞いたことのある音が流れてきた。
『迷子のお知らせです……』
俺たちは騒然とした。今さっきの美優の発言があたまをよぎる。
「まさかな……」
「まさかだよ」
「あんたたち馬鹿にしすぎよ」
「そうですよ。子供でもありませんし」
美優の言葉を聴いて俺たちはお互いの顔を見て笑いあった。
『杉下桂君、１６歳が迷子になっています。見かけたら迷子センターまでご連絡ください。大谷夏姫さんがお待ちです。あとメガネも

来い』
ピンポンパンポーン―
みんな笑顔が凍った。あの放送なんて言った？　俺が迷子？　……。
「なんで俺が迷子になってんだよ！　自分の失敗人に押し付けんじゃねぇー！　この年で迷子なんてしたかねぇんだよ！」
「なんで俺まで！？　しかもメガネって名前覚えてないのかよ！　なんでケイが覚えられて俺がメガネなんだよ！　あと放送係俺にも言葉遣い気を使えよ！　メガネだからって馬鹿にしてんのか！？」
「場所は分かったわ、さっさと行きましょ美優。桂とカッちゃんは恥ずかしいから離れてね」
「桂君一輝君。あんまり遠くに行っちゃ駄目ですよ」
頭上のスピーカに向かって激怒する俺と斉藤を置いて沙羅と美優は歩いて行ってしまった。くそ！　こんな恥ずかしい思いをしたのは久しぶりだ！
「斉藤行くぞ！」
「おう！　メガネの力思い知らせてやる！」
俺たちも走り出し沙羅たちをあっという間に通り過ぎ迷子が迷子を待つ迷子センターに向かった。メガネがどんな力を持っているのか全く分からないが。
「ちょっとあんたたち変なことしないでよね！」
後ろで沙羅が何か行ってきたがお構いなしだ！　行くぜ相棒！

「ふはははは！　どうだ、痛いだろぅ？」
悪そうに笑う斉藤。
「あだだだだだ……」
新聞部が痛みでうめき声を上げる。
「一輝君もうやめてください！　夏姫ちゃんがかわいそうですよ！」

「あだだだだ……」
そんな新聞部の様子を見るに耐えかねたのか美優が止めに入ってくる。だがそんなくらいでとまる俺たちではないわ！
「美優よ、甘いな。これは大人になるための試練なのだよ」
斉藤と同じように俺も悪そうに笑ってみる。以外に楽しい。
「そ、そんな……あんまりです！」
美優にはつらいかも知れないが俺だって心を鬼にしてるんだ……。
「ねぇ馬鹿なことしてないで早く次の新聞作りましょうよ。無限じゃないのよ、時間」
図書室の指定席で俺たちを冷めた目で見ていた沙羅がついに口を開いた。同時に俺たちの動きも止まる。
「美優も頭ぐりぐりされたくらいじゃどうにもならないから落ち着きなさいよ。カッちゃん全然力入れてないみたいだし。先輩も乗らないでください」
全員がスッと席に座る。さっきまで新聞部のこめかみをぐりぐりして悪そうに笑っていた斉藤も普通に笑っている。
「では、はじめましょ」
沙羅の合図と共に誰にでもなく全員が頭を下げた。
「これから第三部を作るけどあんた達一体何をすればいいと思う？」
どうするか……沙羅には悪いが面倒なことに積極的にはなれないの様子見させてもらうよ。
「そうですね。やっぱり書くことが無いことが問題だと思うのでとりあえずいろいろ回ってみるのがいいと思いますよ」
「そうだね。ちょっと情報が足りないよね。リアルタイムで書くんだからいやでも足で稼がないとなのかな？」
まぁそうなるよな。いまある情報、新聞部の手帳ははっきり言って使い物にならない。ならば斉藤や美優の言うとおり新しいものを持ってこなければな……。俺たちはこんな感じで話し合ってほかにもどこを取材するかとかどんな風に動けば良いのかなどを新聞部から教わったりした。

「そろそろ行かないか？　山本の言う通り時間そんなにあるわけじゃないぞ」
そう言って立ち上がろうとする新聞部。まだ話は終わってないのだが……。まぁいいか。
「とりあえず全員で集材してみて時間になったらここに集合でいいかしら？」
沙羅も何か言いたそうな表情だったがすぐに戻った。こいつもいい感じに適当な人間だからな。
「異議なし」
「わかりました」
斉藤と美優も了解した。俺も軽くうなずいておいた。
「じゃあいくぞ！」
新聞部はそう言って颯爽と図書室をあとにしていった。元気がいいのも困りものだな。
「まぁ俺たちも行くか、斉藤」
「やっぱり来たか。俺も同じ事を考えていたよ」
「話が早いな……」
新聞部は一人でも大丈夫だろうが俺は一人でこの人ごみの中に入るなんていやなので斉藤と行くとするかな。斉藤も同じ事を考えていたようでよかった。
「桂は美優とよ。カッちゃんは私」
ガクガク―ここにも話の早い奴が！　斉藤と俺はびっくりした顔で沙羅を見て停止する。
「な、何やってんのよ……当たり前でしょ？　あんたち二人にしたらなにしでかすか分からないじゃないの。力分担するわよ」
「二人の顔面白いですね。どうやってるんですか？」
「ほうっておきなさい……」
顔を引きつらせながらもしっかり言う事を言ってくるところはさすが沙羅。美優にも後で伝授しようかな。斉藤と俺の驚愕ハリケーン。

沙羅が言うには文化際にやる気があり、なおかつ人ごみにも抵抗のある美優と斉藤。基本的に人ごみが駄目な沙羅と俺。斉藤と俺が駄目となると俺と美優、沙羅と斉藤の組み合わせになるそうだ。はぁ面倒だ……。

「わかったよ……沙羅にはお見通しか。そんじゃ美優行こうか」

「はい！　桂君よろしくお願いしますね」

「はいよ。よろしく」

たぶんお願いするのは俺のほうだと思うのだが……美優は楽しそうだな。

「仲良くやりなさいよ。それじゃカッちゃん行くわよ」

「えー沙羅となのかよー美優ちゃんがよかったなー」

「うれしいこと言ってくれますね」

！　斉藤やめろ！　死ぬぞ！　にこやかななのは美優と斉藤だけだ。斉藤はすぐに歪むだろうな……。俺はちらりと沙羅を見る。顔が黒くなって見えない唯一赤く光る目が印象的だ。

「さーいーとー？」

「うっ！」

沙羅がゆらりと動いた。斉藤が一歩後退した。……逃げるか。

「美優行くぞ！」

「え？　きゃ！」

俺は美優の手をとって走り出す。こんなところに居たら死んでしまう。美優も初めは戸惑っていたがすぐに走ってくれた。その後廊下に出ても斉藤の叫び声がしばらく聞こえていた。

「さてどこから行こうか？」

俺たちは図書室をでて人で賑わう学生棟の中を歩いていた。ただでさいだだっぴろい学校だ無駄に広すぎて困ってしまう。第一俺にはしたいこともないのだ。

「そうですね色々ありますよ。パンフレット見ます？」
そう言って美優はどこからか大量のパンフレットをとりだした。
い、一体どこからその量が！　周りの人が一瞬ぎょっとした顔をした。
「い、いや、俺はいいや……美優が行きたいところで良いよ。
早くしまってくれないかな……。
「そうですか、じゃ夏姫ちゃんがくれた取材順に沿って行ってみましょか」
そんな便利なものがあるのか！？　一体いつの間にもらっていたんだ？
「桂君聞いてませんでしたから」
「……あ、そう」
最近の俺はぼうっとしていることが多いようだ。それもこれも全部文化際のせいだ。そんで美優にも心をよまれはじめたな……。
「まぁ、行こうか」
「はい！」
そうして俺と美優は取材の第一歩を踏み出した。
「すいませーん。新聞部です！」
俺は三年生の教室にいる男に声をかけた。別に誰でもよかったのだが近かったからな……。
「んーやっぱり来たな？　あれ会長妹じゃないのか？」
近づいてきた男は不思議そうに俺と美優を見た。新聞部は会長妹なんて呼ばれてるぞ。三年生には会長のほうが印象強いのだろう。
「夏姫ちゃんは別行動です。取材のアポがとってあったと思うのですがお時間大丈夫でしょうか？」
美優なんでなれた様子なんだ？
「うん大丈夫よ、なんでも聞いちゃって。ここじゃ何だし中入りなよ。面白いのやってんだ見て行ってくれよな」
男がそう言うと中から人が驚く声が聞こえた。それも一人などではない。もっとたくさんだ。その声を聞いた男は俺のほうを見てに

やりと笑った。額に汗が流れた。
「ようこそ我がダンス部へ」
男はそう言って俺たちを中に招きいれた。中に入ると度派手な装飾が施された部屋だった。入るとまた大きな歓声が聞こえる。教壇の方向を向くと目の前に炎が舞っていた。
「な、なんだこれは……」
俺はびっくりして呆然とする。教壇では上半身裸の男が火のついた棒を振り回していた。
「うわぁ！　ファイヤーダンスですか！？」
そんな俺を置いて美優は子供ものように目を輝かせた。おいおい、そんなんで良いのかよ実行委員会さんよ……火使ってるぜ？
「その通り！　我がダンス部ではファイヤーダンスを始め世界のダンスを披露しているのだ！」
男は美優の反応がよほどうれしかったのか『ふん』と鼻をならして自慢げに胸を張った。
「先輩こんなことして平気なんですか？　パンフレットには休憩所って書いてありますけど……大体ここクラス展示のスペースですよね？　ダンス部の部屋は別にあるはずじゃ……」
そう言うと男はいかにもな様子で戸惑った。そして十秒ほど経ってから。
「まぁ……気にするな。ほかでもやってることだ。部活発表のほうは時間おかなきゃいけないし待ち時間暇なんだよ。これも客寄せの手段だよ」
はぁ……まぁいか……。馬鹿が多いのは知ってたことだ。
「それじゃ取材始めましょうか」
「そうだね」
「うぁ……」
取材を始めようとする俺と男のことなどお構いなしに美優は教壇で繰り広げられるリンボーダンスに釘付けになっていた。しばらく見せといてあげるか……。男と苦笑いした。

「美優、俺は夢でもみているのだろうか？」
目の前にある光景が異様なものなので夢に居るのではないかと思ってしまう。
「違うと思いますよ。なんならつねってあげますよ？」
「いや遠慮しとく……」
「そうですか、残念です」
なにが残念なのか分からないが放っておく。

この光景に出会ったのはダンス部の取材を終えてから二つほど仕事をこなしてそろそろ図書室に帰る時だった。俺たちは今校庭にある特設ステージの前に居る。その特設ステージには大きく書かれた第七回大食い競争と書かれた看板があった。
『おーと！　これは早い早い！　斉藤選手猛スピードでチャンピオンを追い上げて行くぞー！』
特設ステージに居るヘンテコな服を着た男が司会者のようだ。出場者は六名。その中の三人がもうすでにリタイア同然のペースだ。残りの三人はチャンピオンと呼ばれた大柄で見るからに大食いな男子生徒。そして体は小さいながらも必死に獲物にかぶりつく女子生徒。その中間に位置しチャンピオンとほぼ同列に居るのが斉藤だった。事実女子生徒もがんばってはいるが斉藤とチャンピオンの一騎打ちと言って良いだろう。
唖然だ。なぜ斉藤はこんなところで何を食ってるんだ？
「カッちゃーん！　ガンバレー！　もうちょっとよー！」
「あ、あれ沙羅ちゃんじゃないですか？」
……あいつはあいつで何をしとるんだ？　美優が沙羅を指差す。

俺たちは後ろのほうに居るけど沙羅は最前列で斉藤を大声で応援していた。大勢居る人の仲でも異様な存在感だ。回りもそこそこ活気付いてうるさいがそれでも目立つんだから相当だ。
「私たちも行ってあげましょうよ！」
「……ここでいいんじゃないか？」
美優がうれしそうにピョコピョコ跳ねるがこの人ごみの中に入っていく勇気は俺には無いよ。
「もう、これだから桂君は……仲間ががんばってるんです、励ますのが仲間ってもんですよ！？」
美優君は少し本の読みすぎだ……。斉藤を思いやってくれるのはありがたいが。
「美優、人には向き不向きというのがあってだな……」
「桂君は腰が重すぎますよ！　ほら行きましょ？　沙羅ちゃんもがんばってます！」
「あ、ちょっと！　うげ！」
美優が俺の手をとると群集に向かって臆することなく突き進んでいった。どっかの誰かさんの腕がわき腹に刺さる。いてぇな！
「沙羅ちゃーん！」
「あ、美優！？　こっちこっち！」
美優が沙羅まで近づくと大声を上げる。それに沙羅も気づいて俺たちに手を振ってきた。お前すっかり文化際に馴染んでるな……。う！　気持ち悪い……。
「美優たちも来たのね。だけどよくこの人ごみで私のこと分かったわね。あら桂、顔色悪いわよ？　どうしたのよ」
「沙羅ちゃんだったらすぐ分かりますよ。目はいいんですよ？」
沙羅の隣に来ると俺は大きなため息をついた。美優と沙羅はうれしそうに会話を続けたが俺はそれどころではない。人人人の大海原の中に身をおいているのだ。気が気ではない。
「桂、本当に大丈夫？」
「大丈夫だ、少し放っておいてくれ……」

沙羅が心配そうに顔を覗き込んできたが強がってしまう。本当は肩でも掴みたい気分だ。だがそんなことこんなところで出来るわけ無いだろう！？

「桂、近い……」

「くっ……」

少し近づきすぎたか……。

「でも沙羅ちゃん一輝くんはなんでご飯なんて食べてるのですか？」

俺たちは特設ステージで死にもの狂いで食品に食らいつく斉藤に目をやる。お、チャンピオンと同じ量じゃないか。しかも表情から見るに斉藤方に分があるんじゃないか？

「一樹くーん！　がんばってくださーい！　後少しですよ！」

「そうよカッちゃん！　そんな奴さっさと抜かしちゃいなさーい！

勝たないと許さないんだからー！」

隣を見れば周りの目など全く気にしてない沙羅と美優が居た。沙羅は一体何を許さないと言うのだろうか？　斉藤も先ほどからこちらの様子に気づいているようで、沙羅と美優の激しい声援に苦しそうな顔をしながら一瞬顔を上げて答えた。

「こらーカッちゃん！　こっち向いてないでさっさと食えー！」

斉藤も報われないな……。あぁーあ溢したよ。

『おーとここでついに金子選手が脱落かぁー！？　残るは二人！斉藤選手とチャンピオンだけです！　若干チャンピオンが有利ですが表情は大変つらそうです！　量もほぼ同じのすさまじいデットヒートが続きます！　これは熱い！　今までに無い展開です！　おーっと調理班から連絡です！　ここにきてこちらの材料が底をつきかけています！　えぇいそんなこと関係ねぇぜ！　野郎共綺麗に皿まで食いつくしやがれー！』

三番手だった女子生徒がついに皿に顔面から突っ伏して動かなくなった。見ただけでも半端じゃない量だ、一体あの華奢な体のどこに入っているのか分からないが、健闘なのは確実だろう。そして司会者の言う通りそろそろ決着がつく様だ。観客たちの誰しもが熱く

立ち上がり斉藤たちの勝負に釘付けになり大きな声援が巻き上がっていた。しかし司会者のテンションが一番高い気がする。
「ぐおおおおお！」
「がああああああああ！」
斉藤とチャンピオンが亜互い一歩も譲らず雄たけびを上げる。その声と共に会場も一気に沸き立つ。おいおいお互い馬鹿野郎だな。
『おーっとここにきて両者まったく動かない！　これはどう言うことだぁー！　二人とも食べた量は全く同じです！　最後の一口が入らないー！　これを食べたほうが勝者です！　今決めました！』
タイムアップ間じかになって二人の動きが止まる。全身から汗が噴出して今にも倒れそうだ。誰もが息を呑む。時間が止まったかなような静かな戦場に二人の戦士が立ち尽くす。この後動いたほうが勝つ！　全く本当に馬鹿（最高）な奴だぜ……。
「斉藤！　まけんじゃねぇぞ！　みんな見てんだ気張りやがれぇ！」
「ケイ……」
身を乗り出して声を張り上げる。静かな会場に俺の声だけが響きわたる。呆然と立ち尽くす斉藤が驚いた顔で俺を見つめる。
「そうよカッちゃん！　最後はかっこよく終わりにしなさよ！　男でしょ！」
沙羅も俺に続いて声を上げる。斉藤がのどを鳴らすのがここからでも分かる。斉藤の腕がゆっくりと動き出す。その調子だ斉藤！
「一輝君がんばってください！　勝ったらメイドでも何でもやってあげますよ！」
え？　なにそれ……。美優何を言ってるんだ？　あれ！？　斉藤の目がものすごい光ってるけど！
「うぉぉぉおおおおお！」
斉藤の腕が天高く突き上げられる。それと同時にチャンピオンが崩れ落ちた。

「がは！　し、死ぬ！」
勝手に死にやがれ、馬鹿が。
「カッちゃんうるさいわよ。静かにしてよご飯が不味くなるわ」
沙羅は黙々と弁当を食べている。
「そんな沙羅ちゃんひどいですよー一輝くん宣伝のために体張ってくれたのに。はい、薬茶です」
美優はお盆に乗せてもってきたお茶にしてはやけに黒い液体を斉藤に手渡す。薬茶なんてものまであったのか……。一体どこで買ってくるんだ？
斉藤は今回大食い大会の取材をしに行ったらしい。そこで参加者の不足を聞き参加を決意したらしい。そこまでは斉藤の勝手なのだが斉藤の行動に感謝した司会者が新聞部の宣伝を引き受けてくれたと言うその人もずいぶんと暇人なんだな。しかし全くこいつは役に立つのかただ馬鹿なだけなのか……いや、本当に馬鹿でそれに同調してしまう馬鹿が多いだけのことか……。
「うげぇ美優ちゃん苦いよ……」
斉藤がしかめっ面をする。全く贅沢な奴だ。
「斉藤良薬は口に苦しだ。しっかり看病してもらえ」
「そうですよ、桂君の言う通りです。おとなしくしてくださいね」
「うへぇー……」
俺の発言に斉藤がこれまた苦虫を噛み潰したような顔をする。俺も沙羅と同様弁当を突きながら苦しそうな斉藤を見ていた。斉藤はあの勝負に見事勝利したのだ。激しい戦いの末手にした勝利は大量の観客により祝福された。だが当の斉藤はその後すぐにぶっ倒れて表彰式もままならなかった。そして今もこの調子だ。床に仰向けで寝転んでやがる。
「でもメガネ、なかなか面白いことしてくれたじゃないか。あの大会はチャンピヨンが強すぎて参加人数もギリギリであんまり人気の無かったイベントだからな。あんなに盛り上げてくれるなんて取材

よりいい仕事だぞ！　何より新聞部の宣伝までやってくれたらしいじゃないか。お前らも昼食ったら手伝えよ」
　そう言ったのは新聞部だ。新聞部はパンを片手に原稿にかじりついている。横から覗いてみれば相変わらず汚すぎて読めたもんじゃない。ふーこいつは勢いだけだな。
「はいはい。飯はゆっくり食うもんですよ」
「うるさいやい」
　この小娘は口が悪いな……。もう時刻はお昼時にもなり午後のスケジュールにかわりつつある。そんなもんで俺たちも当たり前のことだがお昼ご飯を食べていた。今日は文化際のせいで購買がないので弁当だ。もちろん中身は美優と母さんが作ったものだ。なので、そこそこのおいしさを誇る。沙羅はいつもどおりの弁当。美優は女の子らしくほんの少しサンドウィッチを食べて今は大食い大会で食べ過ぎて床で寝ている斉藤の看病をしている。新聞部はなんかパンかじりながら原稿作業……。

「えぇーこんなんなの俺のがんばり？」
　顔色の戻った斉藤が出来た新聞を見て落胆の声を上げる。俺たちの取材したメモを合わせて作り上げた原稿は沙羅をはじめた女子メンバーで完成されたものだ。若干一名ほど男みたいな奴が居たけど……。でもよく出来てると思うがな。
「なにか文句あるの？」
　沙羅が不機嫌そうに斉藤を睨む。斉藤は臆する様子もなく。
「いやさ、出来としては良いと思うんだけど。今イチ地味じゃない？　せっかく文化際なんだしもう少し派手じゃないと目に止まんないかと」
　出来た原稿を手に取り唸りながらそれを見る斉藤。そう言われてみると確かに色は黒の単色でいかにも普通の校内新聞だ。少し地味

かもしれんな。新聞部は抜きにして沙羅と美優の性格を考えるとこうなってしまうのは当たり前のことかもしれない。
「そんなこと……うーん、そうかしら？」
沙羅もどこか分かるところがあるらしく。頭をかしげる。
「僕もそれは思ってたぞ。でも派手に決めようとすると山本が怒るんだ」
「先輩は飛躍しすぎて派手とかそう言う領域じゃないんですよ……」
沙羅があきれてため息をついた。確かに沙羅の言う通りなのかもしれないな。新聞部は少しぶっ飛びすぎだ。
「まぁ堅物沙羅には派手に面白くしろなんて度台無理な話さ。このくらいが及第点ってとこでしょ」
「ぐぬぬー！　このメガネ……」
あぁ沙羅が怒る、怒ってしまう……。斉藤も恐れ知らずだな。もう少し言い方ってもんを考えろよな。なにより俺もむかつくし。
「でもそれじゃあどうすればいいんでしょうか？　一輝君はなにか手でもあるんですか？」
「そうよ！　何も無いのに偉そうにしちゃって失礼なのよ！　そこまで言うなら面白くしてみなさいよ！」
美優が斉藤に不安げな表情を向ける。沙羅の方の言い分は全くだが言い方がザコだ……。
「沙羅たちじゃ少しばかり地味だ。でも部長さんまで行くとぶっ飛びすぎだ。ならば誰が適任か……それは俺の他ならない！　あとケイ！」
斉藤が立ち上がる。自信満々のマジな顔だ。こいつは馬鹿か？
「ってなんで俺まで混ぜるんだよ！　お前一人でも良いだろ！？」
「ふん！　そこまで自信たっぷりに言うならやって見なさいよ。桂も手なんか抜いたらただじゃおかないんだからね！」
えぇー！　なんでそうなるんだよ……。斉藤本当にお前って奴は……。
「美優行きましょ！　綿アメ買ってあげる」

「本当ですか！？　行きます行きます！　あ、一輝君たちはがんばってくださいね」
沙羅は機嫌が悪くなったようで美優をつれて屋台散策に行ってしまった。しかしなぜ綿アメなんだ？　さっき食ったろ。
「僕の分の綿アメは？　はぁ……」
新聞部、綿アメ好きなのか？
「それより斉藤。なぜ俺を巻き込む。面倒だぞ」
沙羅たちが消えてった扉を見つめながら背後の斉藤に話かける。
「だって一人じゃ寂しいじゃん？　人肌が恋しいのよ」
「気持ち悪いこと言うんじゃねぇ」
「ははは。実際ケイにはこう言うの向いてると思うんだけどな。ほら覚えてる？　小学生のときクラスで新聞書いて発表するやつ。アレケイめんどくさがって適当にこなしてたけどなかなか面白かったよ」
「忘れた。昔の面倒ごとなんて覚えてる価値など無いからな。……最優秀者に言われてもうれしかないわ」
「それは沙羅が風邪で発表の日休んだから取れたの。五十嵐は別のクラスだったし。そんじゃはじめますかね……」
そう言うと斉藤は新しい紙を取りだしてさらさらと下書きを書いていく。
「山本とかは分かるんだがお前らに出来んの？　さっきの話も小学生のときだろ？」
新聞部が疑わしそうな顔で俺たちを見てくる。
「出来ますよ。確かにまじめな完成度の高い作品を作るなら沙羅のほうがむいてるでしょうけど。ふざけた文なら俺たちの右にでる奴はいませんよ」
斉藤は不思議なくらい揺るがない。括弧たる自身があるのだろう。新聞部はどうでもよさそうに
「なにカッコつけてんだよ。お前はただのラノベ読みで作る文も影響受けまくってるだけだろ。　なにがふざけた文ならだよ、ふざけ

た文しか書けないだけだろうが」
「あ、ラノベ馬鹿にしたな！？　変なのも多いけど完成度の高い面白いのだってあるんだぞ！　ラノベといって本を分けるのはよくないぞ！　ケイにも前貸したのがあったでしょ？　ちゃんと読んだよね？」
まだ読みきってない……。しまったな地雷を踏んでしまったな……分かってたのに。
「そんなことより早くやっちまうぞ」
「……まぁいいけど。ちゃんと後で感想聞かせてよね」
「分かった分かった」
俺もこの話題から逃げるように目の前にある紙に集中していく。
「こんなもんか……」
「そうだね。いやー結構よくなったと思うよ」
「いやいや本当によくなってるじゃないか。お前ら見かけによらずって奴だな」
最後のは余計だ。俺と斉藤は完成した原稿を前に大きくため息をつく。俺たちの作った原稿は基本的に沙羅たちの書いたものをほぼ内容は同じだがコマ割や言葉遣いはだいぶ修正されている。一見別物だ。
「ただいまー。はぁー疲れた……」
「ただいまです！」
ちょうどいいタイミングで沙羅たちが帰ってきた。元気な美優と対照的な沙羅。やはり大食い大会はマグレか……。
「沙羅ー出来たよー。むぐ！」
手を振る斉藤の顔面にビニール袋がヒットした。なぜか沙羅が投げた。
「痛いなー何するんだよ。ってこれ！」
「あげる。ホットドック食べたいって言ってたでしょ……」
どうやら中身はホットドックらしい。んーそんなことこいつ言ってたか？　沙羅もまめな奴だ。

「おう！　食べたかった！　ありがとね！　文化際と言ったらホットドックだよねーあとカキ氷とかーりんごアメとか！」
祭りと勘違いしてないか？　お前が思っているようなところでは決してないぞ。ここは甘い考えが通用するようなところじゃいからな……。
「はいはい後で買え。で、どれなのよ」
愚かな夢を見ている斉藤を放っておいて美優に出来た新聞を手渡す。沙羅はそれをまじまじと読んでいく。その隣でも美優が覗き込むようにして読んでいる。
「……はぁ、負けた……」
読み終えたのか沙羅がため息をつく。素直でよろしい！　いいものはいいとハッキリと認める。沙羅の高く評価できる数少ないところだ。
「一輝君すごいですねー面白いですよこれ。意外な才能ですね」
美優も驚いている。やっぱりそうか斉藤にこんなもんできると思わないよな普通。
「以外は余計だよ……でも沙羅たちが書いてくれたのが無かったら出来ない代物だよ。感謝してるよ」
「当たり前よ、使われなかったら私たちの努力を返してもらうわ」
斉藤は苦笑いで頭をかいていた。奴なりに照れているのだ。
「じゃあさっさと持ってくか。出来るだけ早く作ったほうが良いだろう」
「そうねさっさと終わらせて次の書くわよ」
沙羅がやる気になってしまった……いいことなのだろうが俺の理想のノンビリ文化際が崩壊して行く……。

「あはははは、面白いよ。斉藤君の話は聞いてるよ。ずいぶんがんばったらしいじゃないか」

会長は出来た原稿を見てもらっていた。この反応なら良いんじゃないか？
「もう大変でしたよ。取材に行ったら人数たりないから出てくれって。いきなりですよ？」
「そうかい、それは大変だったね。アレはチャンピヨンが強すぎて出る人が年々減っていてね。君が勝ってくれたから来年からまた盛り上がるといいのだけど。そんなことよりこれは良く出来ているよ、このまま預からせてもらうから。校内に張るのは俺のほうに任せてくれればいいから」
さすが会長と言ったところか、良く目を通している。原稿のほうも許可下りたしまた振り出しか……。
「それから夏姫」
それじゃあ帰ろうか。っと言うときに会長が新聞部を呼び止める。それは斉藤と話していた時の顔ではなく新聞部のときに見せる鋭いソレだった。
「な、なんだよ」
新聞部も強がっているようだがとまでっているのが良く分かる。
「これお前どのくらい関わった？」
会長は鋭い目線を新聞部に向ける。
「ぜ、全部に関わってるよ……僕だってちゃんとやってる……」
おびえた様子の新聞部の声は徐々に小さくなっていく。こんなくらい話は俺たちの居ないところで兄妹二人でやってくれりゃいいのにな。俺以外はみんなお人よしで感情移入しちゃうんだから簡便してくれよ。ほら沙羅の目が燃えてるよ。
「そうか？　確かにみんなは想像以上の働きをしてくれたみたいだけど。彼らはあくまでも夏姫のサポートで言い方悪いかも知れないけど部外者なんだよ。今は良いかも知れないけどずっとは無理なんだぞ。今回は良いけど次からはもっと活躍してくれ」
「……うん」
会長きつい事言うなぁー。確かに今回は俺らがやりすぎたかもし

れん。新聞部も完全に俯いちゃったよ。泣きそうだよ。シリアスだよ。
「まぁお前がやったって言うのは信じてるよ。記事の傾向とか根本的な癖が残ってるからな。ちゃんと見ててやるからしっかり働け。いいな？」
おぉっとここにきてまさかのフォローだ！　見事なまでのアメとムチだぁ！　その笑顔が眩しい！　そしてなにより……馬鹿らしい。
「うん……がんばる……」
新聞部が顔を下げたまま返事をする。横に居ると上目遣いで会長を見ているのがわかる。こいつ子供だな。会長も異様に扱い上手いなー。
「どうした何か言ったか？」
「な、なんでもない！　僕次行ってこなくちゃ！」
照れ隠しなのか新聞部は半分くらいパニックを起こしながら生徒会室をあわただしく出て行った。なんて分かりやすいやつだ。
「あんた全部分かってやったでしょ……面倒ですよできればやめていただきたい」
「……いいじゃん別に人前で言ったほうが効果的かと思ったんだよ」
確かにその通りだろう。実際沙羅たちも燃えてたし。まぁいいけど。
「そんじゃ話も終わったことですし俺たちも失礼しますよ。行こう」
「そうね。会長さん。言い方悪いけど優しいのね」
「いけるとこまで行ってみますよ。任せてくだせぇ」
「私もがんばります！」
そういい残して会長に背を向けて生徒会室を後にした。さて次の仕事が待ってるな……。面倒だ。
「全く本当に面白い子達だな」
さぁーて次はどこに行こうか。斉藤のアイディアはそこそこ面白いかも知れないな……。どんな風に書いてやろうか。
「ケイがニヤけてるー気持ちわるーい」

「放っておきなさいカッちゃん。どうせたいしたことなんか考えてないわよ。ミジンコとゾウリムシの違いくらいどうでもいいことだわ」

あんまりだぁ……。

文化際とバックナンバー（3）

場所は図書室。全員が入って椅子に座ったところだ。一度座ったのになぜか斉藤が立ち上がり二三回咳払いをする。なんだこいつ。

「第二百五十三回新聞制作会議開催です！」

そんなにやってねぇ……。って言いたいけど言うとまた付け上がるからな……。

「そんなにやってませんよー一輝君面白いですねー」

美優……。

「そこはスルーよ」

沙羅も分かってたみたい。

「いやいや。さすが美優ちゃん。いい反応だ。こいつらもうかまってくれないんだ」

似たようなことがあると毎回やるからだろ。今も思い出したようにやりだすし。

「そんなことよりはじめましょ。時間は無限じゃないわよ！」

張り切る沙羅により会議は幕を開けてた。まぁ会議と言ってもこれからする取材にかんしてくらいなんだけど。あとは基本的に雑談だな……。

「あぁそうだケイ言い忘れてた大事なことがあるんだ」

会議も終わりに近づいたころ斉藤がこれまた思い出したかの様に俺を見る。面倒ごとは簡便してほしいなー。

「なんだよ。いいことか？　悪いことか？」

「俺からしたらいいこと。ケイからしたら面倒事かも」

「じゃ遠慮しとく」

「そう言うなよ」

斉藤も分かってるならやめてくれりゃいいのにな。

「別に俺一人でもいいならケイにも頼まないんだけど。一人じゃ足りないんだよね。もう一人くらいほしいのよ」

俺じゃなくてもいいんじゃないか？
「ケイしか頼めるような奴がいないんだ！　頼む！」
斉藤に拝まれてしまった。うーん困ったな……。
「桂君とりあえず話だけでも聞いてあげたらどうですか？」
「美優ちゃんナイス！」
こいつの話ねぇ……どうせろくでもないことだろうな。
「まぁ話してみろよ。どうせろくでもないことなんだろうけどな」
「あはは……ひどいなぁ」
そう言いつつも冗談だと分かっている斉藤は笑っていた。ろくでもないことは確かだろうが。
「さっきの新聞で宣伝してたけどこの後のイベントで学生バンドの発表があるの知ってるよね、それで……」
ん？　こいつなんの話をしてるんだ？　学生バンド？
「ちょっと待て。なんだ学生バンドって俺はそんなの知らんぞ。宣伝なんてしたか？」
「なに言ってんだよ。さっきまで書いてたじゃないか？　……俺の分担だったけど知らないわけ無いよね？」
ならば知らんのだろう。
「うふふ。桂君は忘れん坊さんですね」
美優よ恥ずかしいから変なたとえはやめてくれ。
「はぁ……全く美優ちゃんの言う通りだよ。ケイは関心の無いこととか全然覚えようとしないから困っちゃうよ」
「余計なお世話だ。別にいいだろ面倒なんだから……」
「ほらまた面倒が始まったよ。そんなんだと本当に大切なことも見逃しちゃうよ？」
それこそ大きなお世話だ。俺にそんなに大切なことは無いからな。
「……まぁそんな下らんことはどうでもいいんだが話はなんだよ」
奴の話なんかに付き合っていたら日が暮れてしまう。とっとと話を進めよう。
「あぁそうだったね」

こいつ忘れてたのか？
「話はね、えっとコレのことなんだけど……」
そう言って斉藤は先ほど作った新聞のコピーを取り出して一箇所をトントンと指で叩く。そこには確かにバンドのことが宣伝されている。一応ほかのものより大きく宣伝されているようんだな。
「これから始まるイベントでこの学校の軽音楽部が何組か演奏するんだけどその裏方がなんか足りないらしい。大道芸部の後にやるんだけど何かの手違いで今日運ばれてくるはずの機材が遅れてたり飾りやらがまだ整ってないらしいのよ。それに前日苦労しすぎて今日休んじゃった人も何人かいるらしいから本当に大変な状況らしいよ。今から準備したくても大道芸部の発表があるから大した動きも出来ないんだってさ。そこで取材をさせてもらう交換条件でその手伝いを買って出たのさ。最近の高校生バンドなんかは人気があるからね、これを取材しない手は無いんだよ」
もっともらしいことを言ってはいるが多分こいつが一枚噛みたかっただけだ。交換条件なんて言ってはいるがこいつはむしろ自分から提案していったに違いない。馬鹿なのだろうか？　いや馬鹿なのだ。そんな風に考えていると顔にでも出ていたのだろうけど斉藤はそんなこと気にする様子もなくヘラヘラとした態度だ。
「そこでいくら俺が働き者で頑張り屋さんだといっても所詮一人なのよ、人数は多いほうがいいってもんだろう？　ってことでケイ手伝ってよー。なんかおごるからさ！」
おごられるくらいでそんな面倒な事をしたいいとは思わないな……。第一一人がいやならそんなこと引き受けんなよな。
「それは困りましたねー私も実行委員会の一員としてここは助力させてもらえませんか？」
……教室で火気を使うのを黙認した実行委員がいまさらそれらしい顔をしたところで……。いや、あれは本当に分かってなかったんだろうな。しかしなにはともあれ美優がやる気になってしまった。
「美優、新聞の取材のほうはどうするつもりだ？　俺たちがいなく

なったら沙羅と新聞部しかいなくなっちゃうじゃないか」
「そ、それは……」
コレには美優もたじろぐ。それでいい。この調子で俺も離脱を心見るかな。
「美優、何も桂はやらないなんて言ってる訳じゃないのよ」
と思ったら動いたのは沙羅だった。
「は？」
沙羅は何を言っているのだ？　もちろんそのつもりで言ったのだが……。
「では一体どう言うつもりで言ったんですか？」
美優は沙羅の言葉に不思議そうに頭をかしげる。どう言う意味も何もそのまんま止めようって意味だよ？
「桂はね美優は忙しいから俺たちに任せてくれ、って言ってるのよ。ほらよく本でもあるじゃない『ここでお前が死んでもらっては困る！　ここは俺に任せて先に行け！』とかって奴よ。桂はそれをやってるの」
一瞬沙羅が何を言っているのか分からなかった。俺の性格からしてそんなカッコイイ脇役みたいなことを言う俺ではないことは沙羅なら知っているはずだし明らかな罠だと分かったときにはもう遅かった。美優の瞳は子供のように輝いている。
「本当ですか！？　そんなこと言ってくれるなんて桂君カッコイイです！」
いやいやいや！　俺はそんなこと言ったつもりは断じてないぞ！
俺のそんな気持ちなどお構いなしに美優はきらきらとした目を向けてくる。
「み、美優、ちがう、ちがうから！」
「まさか現実に言われることがあるなんて夢にも思いませんでした」
駄目だ聞く耳もたってねぇ……。両手を胸の前で組みキラキラと目を輝かせる美優の背後で斉藤と沙羅が悪そうな顔で親指を立てていたのが印象的だ。こいつらしばき倒してやろうか！

「わかりました！　私も桂君と一輝君が抜けた穴を補えるよう不肖高坂美優！　これまでよりもがんばらせてもらいます！」
美優、君は全く分かってないよ……。
「いやね、美優。俺が言いたいのは……」
しかしここで折れてしまったら沙羅の思い通りの結果になってしまう。ここはなんとしても譲るわけにはいかない！
「桂君！　言わなくても分かります。桂君はあくまでもライバルとして素直じゃないんですよね！」
あぁもうめんどくせぇ……。
「……その通りだ我が宿敵よ。分かっているなら早く行け！」
「はい！　行ってきます！　かならず……必ず生きてくださいね！」
俺は目頭を押さえて搾り出すように声をだした。それと対照的に美優は驚くほどにテンション高く図書室を後にした。あんな美優を見るのはとても珍しいな。ほほえましいけどツライ。
「桂はあきらめ早いからね」
「そうね、楽ね」
「斉藤、本気でなんかおごれよ……」
「そりゃー何なりと。資金なら結構持ってますから」
「暇らな見に行ってあげるわ」
「そのときは美優ちゃんもよろしくね」
「うーん勝手に来ると思うけど言っておくわ」
「……面倒だな……」

「こんな服を着なくちゃならない時点でめんどくさい」
「そんなこと言わないの。一応コレ着てれば関係者として入れるんだからつべこべ言わずについて来い」
体育館に行くにあたって俺たちは関係者であることを示す文化際Tシャツを着ている。クラス別にも作っているところもあるが今回

来ているのは発表関係者を示すための服だ。もちろん本来俺が持っているはずの無いものでこれは斉藤がきっちり二着もってきていた。なんて目ざとい奴だ。服のデザインとしては女子が作ったのだろうかピンクの生地に英語でなんか書いてあるシャツだ。こっぱずかしいったらありゃしない。しかし斉藤は全く気にした様子はない。だから俺も気にした様子は出来ない。気ぐるみだっているんだ変なんかじゃないさ。

「こんにちわーっす！　先輩援軍呼んで来ましたー！」

体育館に入ると近場にいた俺たちと同じ服を着ている女の人を発見した。どうやら関係者らしい。斉藤はその人に元気良くはなしかけた。

「ん？　おぉ斉藤か。良く来たな。援軍ってそいつか？」

女の先輩は美優より長い髪を揺らしながらくるりと振り返る。目つきは沙羅よりきついかもしれない。先輩は鹿沼美江と名乗った。三年生らしい。それに合わせて俺も軽い自己紹介をする。

「まぁ専門的な知識なんていらないけど一応丁寧に扱ってくれればいいから。君たちが思っているより忙しいからな。がんばってくれ」

一応軽音楽部の発表なのでこの人も楽器が出来るのだろうがそれは聞くに値しないと思った。

「ところで俺たちは何をすればいいんですか？　手違いで機材が来てないとかって聞きましたけど」

することが分からなければただの邪魔だ。聞くこと聞いてさっさと終わらせてしまいたいところだ。

「そうなんだよ、話が早いな。困ったことにウチにもアホが一人いてね間違えやがったんだ。機材はまだ来てなんだ。でもそろそろくころだからそれを持ってきてほしい。私も含めて発表する奴等にはギリギリまで練習させたいから、そんなに人員は裂けない。なにぶんでかいからね、人手がほしいのさ」

そう言うことか。周りを見ればまだ準備が出来てないのか俺と同じ服を着た数名があわただしく動いている。何があったらこんなに

ギリギリまで準備する羽目になってしまったのだろう。アホと言われて一瞬美優を思い出したことは墓まで持っていこう。
「今大道芸部の連中が準備してるからまだ大丈夫なんだけど、それでも準備が完了するのは早いに越したことはないからな。さっき連絡があってそろそろつくころだと思うんだけど……」
午後のしょっぱなが大道芸なので特設ステージの幕は閉められたままだ、幕の後ろから人の声が聞こえるから準備でもしているのだろう。
「機材は裏玄関に運ばれてくるはずだからその辺まで行ってもらうよ」
「了解っす」
裏玄関か……ここが正面玄関側だから間逆だな。しかもこの人ごみのなかでかい機材運べってか。面倒だな。
「なんだ、いやそうな顔してるな。斉藤こいつ大丈夫か？」
む、顔に出てしまったか。しかし面と向かって失礼だな。先輩は俺の顔を見て全くの真顔でそう言った。一二年早く生まれたからって偉そうにすんじゃねぇーぞ！　……馬鹿なことを考えてしまった。
「大丈夫っすよ。こいつはコレがデフォルトですから。仕事はきっちりこなしますよ」
「まぁそうで無くては困るけどね。悪気はないから気にするなよ」
斉藤がフォローしてくれる。先輩はずいぶんスッキリとした性格らしい。好きなタイプではある。
「別に気になんかしませんよ。それよりさっさと済ましちゃいましょう。時間もそこまであるわけじゃないんですよね？　なんてったって華の文化際ですからやることは山ほどあります」
「そうだな、その通りだ。なかなか面白い奴だな。気に入った」
先輩はそう言うとケラケラと笑った。
「それはどうも」
さて行くとしようか。コレが終わったら少し休みたいな。
この後先輩から先に裏玄関に一人行っていること、その人にわから

ないことは聞けば良いこと、あとは短い雑談などをして斉藤とその場を後にした。

「しかしケイが華の文化際なんて言うと思わなかったよ。やっぱり楽しくなってきたの？」

隣を歩く斉藤がニヤニヤとした笑みを浮かべながら聞いてくる。

「そんなんじゃいぞ。あそこはああ言ったほうが良いと思っただけだ」

「そうですかーざんねんです」

どうでもいいように斉藤はそう言うと頭の後ろで腕を組み屋台を眺め始めた。実際斉藤の言っていることもあっているのだがそんなの言うもんじゃない。

いくら裏玄関が間逆だといっても所詮学校ないだそろそろ近づいてきた。

「えっと機材はまだ来てないみたいだね……」

斉藤は裏玄関についてあたりを見渡した。このあたりはさすがに出店も出ていないがちらほらと休んでいる人が見える。

「んまぁいいんじゃね。ずっとここにいるべぇよ」

「さすがにそれは先輩に殺されるだろ……」

殺されるかどうかは知らないが、怒られはするだろうな。

「ふと思ったんだが誰かいるんだよな？　軽音楽の人」

「あーそうだったね。どこだろね。名前も知らないや」

「それじゃだめじゃん」

「まったくですね」

「めんどくさいな……」

俺と斉藤は一度多いなため息をついて明後日の方向を向いた。

「あー来ちまった」

「ほら、仕事だよ頑張らないと」

裏玄関に入ってきた軽トラックに斉藤はほとんど無いシャツの袖をさらにまくりやる気十分だ。俺は袖をまくらず斉藤の後ろをノロノロとついていった。軽トラックには……結構荷物乗ってるな。
「ん？　あれってもしかしたら係りの人かな？」
数歩歩いた斉藤の動きがぴたりと止まる。斉藤の目線には軽トラックに向かってフラフラと一人の女子生徒が近寄っていった。斉藤が関係者ではないかといったのはなかなか優秀な解釈だ。俺には不審者にしか見えない。
「まぁ一応関係者かもしれんし不審者ならそれはそれで話さなきゃならないだろうな」
「そうだね。行ってみようか」
俺と斉藤が話している間に例の女子生徒はトラックから降りてきた一般人にしか見えないおっさんと話していた。いい加減本物なのか疑いたくなってきた。
「すいませーん。軽音楽部のかたですかね」
斉藤がスタスタと近づいていき背後から女子生徒に話しかける。こう言うとき本当に斉藤はらくだ。
「ひゃあ！　なな、なんですか！？」
うぉう！　びっくりしたー……。斉藤も思いもよらない反応に戸惑っている様子で『なにかしたかな？』みたいな視線を俺に送ってくる。そんなこと知るかよと返しておいた。
「い、いやいきなりすいませんね、俺たち軽音楽部の手伝いできた斉藤とこっちが杉下ってもんです。軽音楽部の方でいいですか？」
斉藤は戸惑いながらも自分と俺を指差して自己紹介をした。斉藤らしくないほどの丁寧さだ。予想外な相手に多少緊張しているのだろう。
「あ、はいそうです。先輩から聞いてます。大塚っていいますよろしくお願いします」
メガネをかけた大塚と名乗った生徒はどうやら俺たちと同じ一年らしい。なにがそんなに怖いのか分からないが常時何かにおびえて

いるような感じだ。俺たちは適当に話をした。
「それじゃコレに乗ってるアンプとか持ってもらっても良いですかね」
大塚さんはそう言うと印象通りにもたもたした感じでトラックにかかったブルーシートを剥がし始めた。俺と斉藤は見るに見かねて手伝ことにした。剥がしてるときに斉藤にアンプってなんだって聞いたら『スピーカみたいなもんだ』って教えてくれた。
「でも思ってたほどでもなかったね。大きくはあるけどそこまでじゃないし」
「そうだな、でも結構量はあるぞ。スピーカー以外にも色々あるみたいだし」
「でも三人もいるから大丈夫だよ」
俺たちは人で賑わう会場をでかいスピーカーを台車に乗せて横断していた。大塚も俺たちが同い年だと分かるといくらか砕けた話し方になった。
「あ、先輩！　もって来ましたよー」
特設ステージに近づくと何やら書類を手にしている鹿沼先輩を発見し声をかけた。先輩のほうも気づいていたらしくこちらに向かって早く来いのゼスチャーをした。
「お疲れさん、どうやら大塚とも会えたみたいだね。斉藤たちが行った後教えるの忘れてたの思い出して心配だったんだ」
先輩は本当に安堵した様子だ。俺たちはそこまで信用無いのだろうか？　まぁ見ず知らずの俺たちにあっても気持ち悪いが。
「別に俺たちは平気ですよー後二往復くらいすれば全部運べるんじゃないですかね」
俺が考えていたことを斉藤がすんなりと言ってしまう。別に良いだろなくったって。
「いや、斉藤たちじゃなくて大塚が、だ。一人じゃなにしでかすか不安で仕方ない。お前らがいて本当に助かったんだ」
大塚のことでしたか……ってそんなにいやならほかの人にやらせ

りゃ良いんじゃないかな？
「ひどいですよ私だって荷物運びくらい出来ます！」
先輩との会話を横で聞いていた大塚が反論する。
「なに？　お前は荷物もろくに運べなかったじゃないか。転んで壊すわどこ運んだか分からなくなるわでまともに出来たためしが無いだろう。今回だって『ミスは取り戻します』とか言って一人でやろうとしやがって。運ばれるこっちの身にもなれってんだ！」
先輩はなにやらスイッチが入ってしまったらしく大塚に説教を始めてしまった。あぁコレが遅れたのって大塚のせいなんだ。なんかすごい納得。横を見ると斉藤も俺と同じ様な表情をしていた。説教をされる大塚は放っておいて俺と斉藤はほかの係りの人に聞いてスピーカーを運び一回目を完了した。
「はぁー私って本当に何しても駄目なんだよね……何をやっても失敗ばかりで先輩たちに迷惑かけっぱなし……」
この中に俺たちも入っているのか気になる。俺たちは二週目の運搬中。今度は垂れ幕や衣装。なんか良く分からない飾りみたいのが多い。斉藤に聞いたら『知らん』って言われた。そんな斉藤と大塚は運びながらおしゃべりばかりだ。
「そんな気にすること無いって、誰だって失敗くらいするし。やる気はあるんでしょ？　だったらどうにかなるよ」
俺は黙って運ぶことにしているが斉藤と大塚は意気投合したのか斉藤が大塚の愚痴を聞いていた。斉藤の部屋って所か……違うか。
「そりゃやる気はあるけど……やっぱりなかなか上手くいかないんだよね」
大塚はそれなりに悩んでいるようだ。斉藤もいやな顔せずに聞いている。俺は……面倒だ露天観察モードに移項します。あ、沙羅発見。なんだろう美優の姿が見えないけど。あぁーいた。なんて買い物の量だよ……。あれを一人で
「それでー今度獅子舞でもやってみようかと思ってるんだよね」
「そりゃいい案だね。ぜひとも俺も呼んでほしい」

お前らはお前らで全体の想像できない会話をするんじゃない。
「そろそろ着くぞ」
斉藤の馬鹿話を聞いてるうちにあっという間に会場についてしまった。少し聞いてたけど全く分からない内容だった。野外に設置されている特設会場にはもう大道芸部の司会者が上っていてオープニングが始まっているようだ。会場の前には人だかりが出来ている。
「ありゃりゃ。じゃコレどこに置くの？」
斉藤は会場前で止まる。前回は先輩がいたけど今回はどこかに行ってしまったのだろうあたりには見当たらない。
「そうだね、衣装も多いからそっちは部室かな。杉下君のはここでいいよ」
俺はそう言われて持っていた荷物をどさりと床に置く。そこまで重くは無いが持っているのも面倒な重さだ。
「そっか、じゃ俺が部室まで運ぶよ、箱は二個でいいんでしょ。このくらい軽い軽い」
斉藤はそう言うと大塚が持っていた衣装や小道具の入った箱と自分の箱を合わせて抱えるようにして持ち上げた。重くは無いだろうがかさばるから動きにくそう。
「まぁ後は小物だったしケイと大塚さんでどうにかなるっしょ。一度軽音楽部の部室って入ってみたかったんだよね」
こいつはそれが本心だな。良くそこまでなんにでも興味を持てるものだ。疲れないのだろうか？　疲れないんだな。
「分かったけど無理しちゃ駄目だよ。こんな人の多いところで転んだら迷惑になるからね」
「おいおい俺はどうでも良いのかよ……」
「二人とも馬鹿やってないでさっさと行くぞ」
コントは置いといて今は仕事だ。大道芸部の発表が始まってしまったからには重要度の高いものは運んでしまっているとしても早く準備が整うのはいいことだろう。
「はいはい、じゃ置いたらこの辺にいるから探してね」

「分かったよ、さっさと行け」
斉藤はそうして校舎のほうに消えて行った。
「では杉下君行きますか」
「行きましょうか」
残された俺と大塚はそんな感じでまた来た道を戻って行った。早くおわんねーかな……。
二人で沈黙というのはやはりきついものがあって俺たちは特に運ぶ最中はすることが無いので適当に軽音楽部のことを肴にしていた。
「それで今回は三年生と上手い二年生の発表なんだよね。私たち一年生は裏方で準備とか来年のために見学するってわけ。楽しいですよ？」
まぁ楽しくなきゃ部活なんてやってらんないけどな。
「へーそうなんだ。てっきり大塚さんも演奏するのかと思った。来年大変そうだな」
最初は間を保つために適当に話していたけど話してるうちになんだか面白くなってきたので俺は普通に会話している。バンドの裏話とか面白いぞ。
「まぁがんばりますよーそろそろですね」
話しているとあっという間だったが俺たちはもう会場の前についていた。舞台では二人組みの大道芸部がディアブロ危なっかしく披露していた。本当に危なっかしいなぁー……あっ！　落とした！
「あ、あぁそうだな、じゃコレで最後だ任せるぞ」
「はいコレで任務完了ですよ。私は出ませんけど軽音楽部の演奏聴いてね！」
大塚はなぜか敬礼をして舞台裏へ荷物を持って消えていった。斉藤も待たなきゃいけないし大道芸には少々興味がある。演奏もついでに聴いてやらないこともない。
「全くあいつは何してるんだ？　持ってくところ逆だぞ……」
そう言ったのはいつの間にか俺の背後に立って頭をかいている先輩。服装が変わっているからこの後発表でもするのだろう。先輩の

隣にはこれまたヘンテコな服装をした男子生徒や女子生徒の姿が見えるがその人たちは俺なんかに目もくれずにスタスタとステージ裏に入っていく。
「そうなんですか？　それってやばいんじゃないですかね」
もって行くところが違うなら俺の努力も水の泡って奴だ。中身は大したことなさそうな小物だったけど……それは先輩も思っていることなのか大して焦った様子はない。
「まだまだ出来の悪い奴さ、音楽の筋は良いけどほかのことが点で駄目でね。私はもうステージに入るよそろそろ出番なんでね」
「そうですか。では頑張ってくださいね」
「なんて適当な応援かね」
先輩はケラケラと笑いながらステージ裏へと入っていった。先輩は最後に振り返らずに『会場の最前列、特等席を用意しておいたから暇なら見てけ』と言って姿を消した。荷物を間違えた大塚は怒られるのかな？

「ケイここにいたのかー準備万端だね席とっておいてくれたの？」
「あら本当だわ、桂にしては気がきくじゃない」
「まぁな」
俺が最前列で突っ立っていると横から沙羅と斉藤がやってきた。俺一人なのに数人分のスペースを取っていると周りの視線が痛かったから来てくれてホッとした。このままこなかったら帰ろうかと思ったよ。
「桂君一輝君私も仕事頑張りましたよ！　約束通り応援に来ましたよ」
この子は一体いつまで勘違いしてるんだ？
「そうかご苦労さま。しかし美優、その荷物はなんだ？」
俺は美優をねぎらいながらその手に持つ袋に注目した。先ほど見

かけたときより増えているではないか……もしかしたら。
「これですか？　これはですねー私は手伝えなかったので沙羅ちゃんと一緒に桂君と一輝君がすきそうなものを選んできたんですよーどれも美味しいですよ」
やっぱりか……別にいやなわけではなくむしろうれしいのだがそんなに食べるきはしない。なんてったってさっき昼食ったから。
「ありがとう、もらっていいかな？　おぉ綿アメあんじゃん」
「もう綿アメははずせませんから」
主に新聞部がな。俺はそこまで好きではないが新聞部が美味しそうに食べていたところを思い出すと無性に食べたくなる。これなら大して腹も膨れんしいいか。
「じゃ綿アメもらうわ。ほら斉藤、お好み焼きだぞ」
俺は綿アメを受け取り斉藤に善意でお好み焼きを渡した。善意だ。
「はぁ？　なんでお好み焼きなんだよ、食えねぇよそんなもの……」
斉藤気づいたか。
「一輝君嫌ですか……？　私変なもの買ってきちゃいましたか……」
美優が斉藤をウルウルと見つめる。斉藤の喉がゴクリと音を立てた。
「い、いや！　いやだな美優ちゃん！　冗談だよ冗談！　ちょうどお好み焼きが食べたかったところだよ、ありがとう」
「本当ですか？　ならたくさんありますからいっぱい食べてくださいね」
「う、うん！」
斉藤もうれしそうにお好み焼きを受け取った。やっぱりいいことした後は気分がいいな。
「桂も酷いわね……」
隣にいた沙羅が俺を冷たい目で見てきた。まぁ冗談だよ。
「ケイ……何の恨みがあってこんなことを……」
「斉藤、手伝い楽しかったよ」
「その程度でコレかよ……」

斉藤は今日大食い大会の分、沙羅からもらった分、屋台で買い食いした分。良く食べる奴だ。このくらいいけるだろうよ。
「さて皆さんそろそろ演奏のほうが始まるみたいですよ」
斉藤の苦労など知らず美優は開いていく幕を指さしてうれしそうに声を上げた。斉藤がその横で涙を浮かべながらお好み焼きを食べ始めたのを確認してから俺も
綿アメの袋を開けてステージに現れた四人組のバンドマンたちに目を向けた。やっぱり綿アメはこんなもんか。俺は口の中に広がる甘ったるい味に顔をしかめた。

「うーんやっぱりいいね文化際。バンドも見なきゃ損だよね」
「最初の人たちは酷かったわね、最後の人たちは良く出来てたと思うけど」
「最後のって鹿沼先輩たちのやつだね、確かに初めはどうなるかと思ったけど最後はしっかり締めてくれてよかったよ」
「へーあの人は鹿沼さんって言うんですか。上手でしたねー手とか不思議な動きをしてましたよ」
「そんなのいいから手伝ってくれよな」
俺たちは今度もいつも通り図書室で新聞を書く作業をしていた。と言ってもまだまだ完成はしていないし、出すにも前回との間隔が早すぎる。時間に余裕があるわけではないがやばい時間でもない。何より俺たちは今題材不足に悩んでいるのだ。しかしそんな最中だが俺たちは特に焦る気配もなく図書室でいつものように話をしていた。どこからか湧いた新聞部が今新聞の形を考えている。主にどう配置するかとか。俺はといえば美優の入れてくれたコーヒーと屋台ものでノンビリとしていた。あぁもうずっとこうしていたい……。
コンコン―
「失礼するよ」

ノンビリとした空間に突然ノックの音がして誰かが図書室へ入ってくる。唯一の入り口である扉には閉館の札が下げてあるはずだし俺たち以外に入ろうとする者はいないはずである。それでも入ってくるのだから大したものだ、開いてなかったら変な人だぞ。
「あれ？　誰でしょう……」
美優が不思議そうに頭をかしげる。俺もほかのやつもみんな扉の方向を向いた。
「おーいたいた、やっぱり斉藤ここにいたのか」
図書室にはあまり来ないのだろう。入ると入り口のあたりでキョロキョロとあたりを見渡して数秒後席に座っている俺たちに気づいた。その人物は右手にビニール袋を持ってこちらに向かって歩いてきた。まぁこっちに来なかったらどこに行くんだって話だ。
「あれ鹿沼先輩じゃないですか、良く分かりましたね」
斉藤がなぜか俺の隣に座った先輩にさほど驚いた様子もなく話かける。
「そうだな、どこにいるか分からなかったが人に聞いたのでな、そこまでかからなかった」
先輩はそう言うと一息ついて椅子に深く腰掛けた。姿勢はあまりよくないようだ。
「鹿沼さん、何か飲みますか？　コーヒーと紅茶くらいならご用意しますけど。どちらがよろしいですかね」
そんな先輩を見て美優が立ち上がる。しかし本当に気が効く子だな。
「ん？　ここはそんなものが出るのか。そうだな……紅茶でもいただこうか。頼めるかな？」
「はい、紅茶ですね、一生懸命淹れますよ。少々待ってくださいね。みなさんにも新しいものを持ってきますね」
「ありがとね、美優」
「ありがとー美優ちゃん」
「頼んだぞ！」

「助かる……」
先輩は少し驚いた様子だったけどすぐににこやかになった。美優のことも気にならずこの場にすっかりじんでしまっている。俺は空いてしまったカップを美優に渡して椅子にもたれかかった。人数分のカップを持った美優は管理人室へと入っていった。新聞部は鹿沼先輩などどうでもいいようで一人新聞の構成を考えている。
「だけど先輩、こんなところまで何の用事ですか？　あ、別に嫌がってるわけじゃないっすよ？」
「分かってるさ、ちょいと野暮用でね、まぁそれは後回しにしてさっきは助かったよ、お前らのおかげでいい演奏ができた。初めは見苦しいものを見せたけどな」
先輩も分かってましたか。
「でも先輩は素敵でしたよ」
あ、沙羅が外面だよ。なんか完璧ににこやかなのが逆に不自然なんだよな。普通の人にはわからないらしいけど。
「そう言ってもらえると頑張ったかいがあったな、私は今年卒業で文化際ではもう出来ないけど来年も見てやってくれ。それとこれ」
先輩は尋ねてきたときから持っていたビニール袋を机においてそのなかから何かを取り出した。どうやら食べもらしい。
「これは挨拶程度だ、食ってくれ。私が言うのもなんだが旨いぞ。きっと紅茶にも合う」
先輩が取り出したのはどうやらケーキのようだ。たしかに旨そうだ。
「みなさんお茶が入りましたよー」
「お、噂をすればなんとやらだ」
先輩の目線の先には美優がいる美優もちょうどいいタイミングで準備が出来たようだ。各々自分のものを取っていく。配り終わると美優も席についた。
「うわーこれケーキですか？　鹿沼さんが持ってきてくれたんですか？」

「うん、うん、そうだよ、喜んでくれてこっちも持ってきたかいがあったよ」
机のものに気づいた美優がうれしそうな声を上げる。先輩もその反応がうれしそうだ。
「さぁ人数は分からなかったから多めに持ってきた。余裕はあるぞ、食べてくれ」
先輩は気を良くしたのかケーキを勧めてくる。人の好意は黙って受け取れってね。屋台のベトベトと濃いものばかり食べていたから甘いものが欲しいし。俺もタッパーに入ったケーキに手を伸ばす。
「そんじゃいただきますわ」
「甘いものは疲れたときに良いんだよね」
「カッちゃんも先輩も欲張りすぎよ、もうちょっと落ち着いて食べなさいよ」
「そうですよ二人とも、せっかくのケーキです味わいましょうよ」
斉藤は馬鹿だからしょうがないんだ。俺は心の中でため息をつきながらも目の前のケーキにフォークを突き立てた。鹿沼先輩はそれを先ほどと変わらない顔で見ていた。いいなぁこのノンビリとした空気。
「うん、うまいな……」
俺は一口食べてつぶやいた。今日はオーソドックスなものからゲテモノまで色々食べたけどやっぱりこういったものはよいものだ。それは俺だけじゃないようで沙羅たちも一口食べて満足そうに笑顔を浮かべた。
「ところで先輩」
「ん？　なんだ？」
斉藤の問いに新聞部が反応する。いやお前じゃないだろ。
「いえ、大谷先輩じゃなくて鹿沼先輩ですよ……」
「あ、そう」
新聞部はそれっきりまたケーキを食うのに集中してしまった。ケーキを食べる新聞部の様子はお子様と言うにふさわしいな。ガツガ

ツとそんな感じだ。
「で、私になんのようだ？」
先輩は苦笑いで斉藤に尋ねる。
「まぁケーキももらって落ち着きましたし、そろそろ先輩が来た理由を教えてもらいたいんですけど。こんなところまで来てなんかありました？」
斉藤はそういいながらもケーキを食べていた。どこも落ち着いていないだろう。しかし俺もこの人がわざわざこんなところまで手土産を持ってきた理由が聞きた。先輩は何のためにここまで来たのだろう？
「いやね、さきの演奏のときとっても助かったからね、悪いんだけどまた手伝って欲しいんだ」
なんだそう言うことか、俺はてっきりまた手伝いでも……。
「えっ？」
今なんて言った？　手伝い？
「だから手伝いだよ手伝い」
先輩は俺の反応を見てもう一度復唱する。やっぱり聞き間違いではないようだ。うーんなんだろう……。
「へー手伝いですか、それならそうと早く言ってくれればいいのにですよ。手伝いって何ですか？」
俺とは正反対な斉藤の反応、まったく動揺してないそれが当然かのようだ。俺には驚きだというのに……。
「それがな私のクラスの展示でカフェをしているんだが、ちょいと私は用事があって行けないんだ、だから少しの間私の代わりにそこで働いて欲しいんだよ。なぁに別に難しいことじゃないさ。客から注文とってケーキ運ぶだけさ。な、いいだろ？　頼むよ！」
先輩は手を合わせて頭を下げてしまった。うーん部活のほうも忙しいのだろう少しくらいなら手伝ってもいいかもしれんが……。
「うーん、それは私たちもかまいませんけど、やることがあるんですよね……ねぇ先輩？」
沙羅も俺と同じ用に思ったのだろう手伝う気でいるようだが様子

が変だ。こいつ何かたくらんでやがるな……。
「ん？　あぁあるね仕事。ネタがなくて困ってる」
新聞部が何も分かってないような顔で返事をする。こいつに探り合いとかは絶対に向いてないと思った。
「鹿沼先輩、私たち今校内新聞作ってるのはカッちゃんから聞いてますよね？　それで今回もそこの出店を取材させてもらいたいんですよ。そのくらいいいでしょう？」
あぁそう言う事か……つまり沙羅は仕事をする条件に新聞のねたにさせろと、まぁいい考えだと思う。そのくらいなら別にいいなじゃないかな。
「んー……まぁいいかな？」
なんだろう一瞬先輩の顔が歪んだような……。
「おーやったーこれで埋まるぞー！」
新聞部はそんなことおかまいなしで子供のようにはしゃいでいる。いや子供か。
「あんただね、この学校で新聞作ってるのは？」
先輩は喜ぶ新聞部を見なつめる。
「ん？　そうだけどなんだ？」
こいつは俺たち後輩だけならず先輩にもこんな態度なのか……。しかし先輩はそんなこと待ったく気にした様子はなく続ける。
「新聞読んでるよ、ずいぶんと頑張ってるじゃないか、私たちのこともちゃんと書けていてよかったよ。でも意外だな、ああ言うのも書けたんだな、私は普段のやつが好きだったがこう言うのも悪くはないな」
「そうだろー？　僕は何でも出来るぞ」
新聞部お前は一つのことしか出来ないと思われてたんだぞ？
「ウェイターかー一回やってみたかったんだよねー」
斉藤も乗り気のようだし。ウェイターか……少々の興味はなくはない。
「いや、お前らはいらん。男子じゃなくて女子が欲しいのだ。ウェ

イターなんているかよ、欲しいのはウェイトレスだ」
な……そうですか……なんか一気にテンション下がった……。先輩は手を真顔で横に振って違うのゼスチャー。斉藤も固まってる。
「えっ？　私たちですか？　カッちゃんたちでもいいじゃないですか」
おいおい沙羅その反応はもとから自分はやる気なかったってことか？　俺たちにやらせる気だったのかぁ？
「そうですね私は一向に構いませんよ？　人生で一度くらいウェイトレスをやってみたいですし。一緒にやりましょうよ沙羅ちゃん！」
沙羅とは対照的に美優はどうもやる気になっているようだ。なんにでも興味を持てるのは才能だよな。
「うーん、美優もいるならいいけど……私は多分そう言うの向いてないと思うわよ？」
何をおっしゃいますかこの人は……。
「全然無理じゃないだろ、むしろスゲー向いてると思うけど？　なぁ斉藤」
「そうだねー沙羅は出来ると思ううよ。美優ちゃんなんか今でも出来てるし確実に戦力になるでしょ」
確かに美優は今でも俺たちのウェイトレスみたいなもんだよな……。おっといけない沙羅の説得だった。
「あんまり知らない人と話したりするの苦手だし……」
「だからそんなこと気にするなよ、いつもやってるだろ？　外面良くするのは得意だろ」
「あんた外面って失礼なこと言ってくれんじゃない……。まぁいいわ適当にやってみるわよ」
「やったー！　頑張りましょうね沙羅ちゃん！」
俺の言葉に少々不機嫌な沙羅だが何とか仕事を引き受けてくれた。美優もうれしそうで何よりだ。
「ところで新聞部はどうするんだ。やるか？」
よろこぶ沙羅と美優を見ていた新聞部に尋ねる。こいつも一応は

女子だからな。
「いや、僕は仕事あるし、お前らだけに任せるのも不安だ。でも一緒に行って取材はしてくるよ」
「そうか、じゃそっちは任せた」
新聞部はそう言うと取材のための支度を始める。カメラとか手帳とか、別に大したものじゃないけど。手帳に関しては俺たちからしたらただのゴミだし……。
「よしきまり！　じゃ早速だけど案内するよ、こっちだ！」
先輩はそう言うと沙羅と美優を連れて図書室から出て行ってしまった。
「あぁーいいなぁー美優ちゃんと沙羅。俺もしてみたかったなー」
まぁそう言うなよ。今思ったけど俺が一番接客なんて向いてないんじゃないのだろうか？
「俺たちには仕事があるだろう？　そっちを終わらせなくちゃいけないし全員は元々いけないだろ」
「そうなんだけどね……暇になったら覗きにでも行くか？」
「そうだなそのくらいしてもいいだろう」
斉藤はため息をつきながらだが出かける支度を始めた。さて俺もいつまでもノンビリしていられないな……そろそろ文化際の初日も終わりを告げるはずだ。俺は腕のデジタル時計がそろそろ二時半になりそうなことに気づいた。文化際は四時半までだから確実に時間は進んでいる。俺が働く新聞も今回が最後だろう。実際はあと二部作るのだが最後は明日の宣伝なので大して書くことは無いのだ。
「さて今日の最後のお仕事だ……」
俺はそうつぶやいてカップに少しだけ残っていたコーヒーを飲みほした。
「ふーやっと落ち着いて動けるってもんだよな」

俺からしたら動いていることがすでに落ち着いていないのだがそれでも今日の運動量からすれば落ち着いていた。場所は職員棟で体育館で明日行われる演劇部の講演への取材。そう俺たちが少し前に借りて着た衣装を使った演劇だ。今回の劇は長いらしく二日間の連続講演は出来なかったらしい。そのため講演としては二日目の目玉にもなっているそうだ。今日講演がないので演劇部の人たちは遊びほうけているらしい。

「うん、そうだねー俺も沙羅といるときは大して遊べなくて困ったよ」

斉藤も斉藤で苦労しているようだ。俺も美優と……楽しかったよ。

「あいつは面倒なやつだからなー将来はうるさい母親にでもなりそうだよな」

「あはは、俺あいつの子供だけにはなりたくねー」

だよなー怖い教育ママとかになりそう。

「んー？　ここかな？」

俺と斉藤は一つの教室の前で止まった。どうやらこの中に取材相手がいるようだ。演劇部だからファイアーダンスはしてないだろうな。

「失礼しますよーあが！」

「どした！？」

俺はしまっていたドアを開いた。それと同時にとても強い光に目をそらす。後ろにいた斉藤には分からなかったのか俺を心配する声が聞こえる。い、一体何が起きたんだ？

「あーごめん！　邪魔が入っちゃったからもう一回撮らせてもらえるかな。そうそうそのまま動かないでねー君たち入るならさっさと入ってくれないか？」

どこかからか男の声が聞こえた。誰かと話しているようだ。俺と斉藤は何がなんだか分からないまま教室に入って行く。ドアを閉じて入って行くと何度か強い光が瞬いた。うん、分かったけど何してんだ？

「はい、ありがとね。後で現像して渡すから待っててねー」
男がそう言うと二人組みの男女が更衣室と思われるカーテンの奥に姿を消した。ほかの部屋も改造は酷かったがここもそこそこ改造してあるらしい。

「どうもこんにちは新聞部です。今回は演劇部の明日行う講演の取材に来ました……なんで撮影会なんかやってるんですか？」
「衣装の数も半端ないですねーアニメとかのもあるじゃないですか」
そうなのか斉藤？　俺にはどれも普通の衣装に見えるのだが……。
「なんでって言われると暇だったからアニメ研究会と合同で衣装の貸し出しをしてたまでだよ。今までのもあるし今回のために作った物も多いから量には自信あるよ、もちろん質にもこだわってる」
そうなのか……。俺と斉藤が踏み入れた教室には衣装かけに大量の衣装がかけられ撮影用なのか白い背景なんかも用意してあって明るくするための証明まである。とても手が込んでいるようだ。この学校暇人多すぎだろ……。
「なんたって趣味で作ってるだけのにそれで着せたり貸し出したりするだけで儲けるんだからたまらないよね」
「え？　先輩金取ってるんですか……？　飲食以外で金取るのは確か……」
演劇部の人間が単なる趣味であったことにも驚きだが。文化際での飲食以外での営業は禁止されているはずである。なんでこの学校の馬鹿どもはそんなに規則を守らないのだろうか？　教室で平気で火とか使うし……。
「まぁほかでもやってることだよ。演劇部は部費が少ないからねこういった場所で稼がないとやっていけないんだよ。服の材料も買えないんだ」
服が作れなくて困るのはあんたぐらいだろう……。しかし全く動

じないな。
「でも、このことを生徒会にでもしゃべったら……考えておけよ」
動じないばかりか釘までさすかこの先輩は。副会長にでも抜き打ちされて捕まってしまえ。
「それもそうですねほかもやってますから、別に俺たちが言うことはありませんよ。一応ですから気にしないでください。それより取材させてもらってもいいですかね」
実際は言うのもめんどくさいだけだがこう言っておけばいいだろう。
「ところで先輩、一回いくらっすかね？」
「お？　そうだな、一回五百円でやってるんだが君たちは特別に四百円でいいよ」
馬鹿か斉藤……まさかやるつもりなのか？　しかも五百円って高すぎだろ……まけてもたけぇ。
「じゃ終わったら二人分お願いしますー！」
馬鹿だった……しかも俺まで勝手に入ってるし……。
「はい毎度ありー！」
さっさと帰りたい……。
「取材はじめますよ……」
俺はなんでこんな役回りばかりなんだ？

「はい、撮れたぞー」
「ありがとうございまーす」
一瞬光が出たと思ったらすでに終わっていたようだ。俺が入ったときに眩しかったのもコレだ。だけど照明あるのにフラッシュ必要なのかな？　いらないじゃないのか？　この人写真は本業じゃないみたいだし……まぁいいけど。
「それじゃまた着替えたところと同じところで着替えちゃって」

「はーい」
「わかりました……」

「取材ありがとうございました、俺たちはそろそろ失礼しますね」
「ん、しっかりしたやつ書いてくれないと現像してやらねぇからな。まぁ記事はどうでもいいが明日は暇なら友達連れて見に来いや、俺の小道具が見所よ。きっと満足できる。それとお前らの部長さんにもよろしく言っといてくれよ」
「そりゃ行きますよー楽しみにしてますよ、先輩！」
「はっはっは！　これは役者連中には頑張ってもらわんとこまるな」
こんな感じで俺は疲れて、斉藤は元気になって演劇部への取材を終えた。今回何個か取材したけどまともなほうを数えたほうが早いな……。みんなはしゃぎすぎ……。
「斉藤、あとはどこだっけ？」
演劇部を後にした俺は次の仕事のことを考えていた。あるなら早めに終わらせたいからだ。ないならないで休みたい。
「うーん、コレで終わりかな？　あとは部長さんがやってくれてるみたいだから俺たちはこれからフリーだよ」
そうか……やっと俺は自由の身になったのだな。今まで辛かったが良く頑張ってきたものだ。
「じゃあ俺たちはそろそろ図書室に帰るか」
俺はそう言って図書室がある方向に歩き出す。
「え？　ケイ沙羅達のところ行かなくていいの？」
そういえばそんなこともあったな……。
「あー……どうしようか……」
沙羅と美優をからかいに行くのはいいのだが俺はそろそろエネルギー切れなんだよなー。
「俺はパス。図書室で寝る。それに……」

そっちのほうが楽そうだしな。そして何より……。
「俺あいつらがどこにいるか知らないし」
カフェなので多分この校舎内のどこかにいるのだろうが探すのが面倒だ。その理由で俺はパス。
「……あ、そうだったね。先輩教えてくれなかったね」
斉藤も今気づいたらしい。
「でも、俺面白そうだしいろんなところ覗きながら探してみるよ。美優ちゃんのウェイトレス姿は見たいし、沙羅のウェイトレスはレアでしょ」
まぁ斉藤の言うこともっともだが俺はそんなことするなら寝かせてもらうよ。図書室にいれば新聞部も来るだろうし、手伝いをしてもいいな。
「そうか、じゃ頑張ってくれ。面白かったら後で教えてくれ」
「りょーかい。じゃまたねー」
俺と斉藤はそうして分かれた。帰ってる途中に遊んでいる鹿沼先輩を見かけたけど仕事はどうしたのだろう？

「俺も行けばよかったかな……」
後悔先に立たずとは良く言ったものだ。俺は図書室で新聞部と二人きり。はっきり言って暇だった。もちろん暇つぶしで読書してもいいが残念ながら今はその気分ではない。
「暇なら手伝えよー」
「手伝ってるだろ……」
読書するでもないなら俺は暇つぶしとして新聞部の手伝いをするさ。だって暇なんだもん。
「美優に訳してもらったって事は新聞部も店に行って来たんだろ？取材もしたんだよな」
「したぞー？」

俺と新聞部は二人きりの空間で作業しながら話始める。ちなみに俺は新聞部が書いたメモではなく美優が訳したメモを見ている。新聞部の文字など読めたものではない。

「どんな感じだったんだ。二人とも出来てた？」

美優はもうすでにウェイトレスのようなことはやっているから心配ないのだが沙羅はああ見えてかなり人見知りするので心配だ。沙羅は知らない人にはかなり壁作るからなーよそよそしいのもそのそいなんだが……。

「高坂は良く出来てたぞ、完璧だとか客が喜んでた。山本はなんかずっと怒ってた。たまにミスしてたらしいし。でも客は喜んでた」

そうかーやっぱり美優は心配要らないなー沙羅が怒ってたって事は……なんだろうそんなに酷い店なのか？　もしくは照れ隠しか……いやわからんな……。

「店はななんか明るくていい雰囲気だったぞ」

店はいいのか……だったら心配要らないな……ってなんで俺はあいつらの心配なんかしてるんだ。

「まぁこれは俺たちで仕上げちまうか」

「そうしないと困っちゃうぞ」

俺たちは再び制作作業へと戻って行った。斉藤はどこ行ったんだろうなー遊んでるのか……。

文化際とバックナンバー（4）

「あれ……？　ほかの人たちは？　君たちはいつも一緒だと思ってたよ」

意外な人物の驚いた顔を見た気がする。

「ほかのやつらは遊んでますよ。　会長は忙しいとか言っておきながら一人が多いですよね」

「まぁ書類が多いしねー……でも君のタイミングがいいだけだよ、俺もずっと一人でここにいるわけじゃない」

事実斉藤は一度先ほど先輩にもらったケーキとは別の種類を持ってきて常時爆笑しながら一瞬のうちに帰って行った。俺と新聞部は呆然とするしかなかった。そしてそのまま斉藤をはじめ沙羅も美優も帰ってきていない。そうしていつも間にか新聞が完成して俺と新聞部の二人で生徒会室に出向くことになってしまった。

「うーん、まあ文化際だしね、そうしてもらってもかまわないけど……新聞が出来なかったらどうしてくれる……」

最後のほうはなぜか会長がつぶやくように言ったため俺は聞くことが出来なかった。なに言ったんだ？　まぁいいや。

「会長それでコレが次の新聞です」

俺は結局俺と新聞部と二人で作った新聞を会長に手渡した。

「ありがとね。どれどれ……」

会長はまじまじと新聞を見つめる。俺が半分作っているからなのか結構緊張する。

「アレだよね、アレ」

会長が新聞を読みながら意味不明な言葉をつぶやいてくる。アレってなんだ？　そして会長はふと顔を上げる。

「毎回書く人の癖がすごい出てるよね。一回目はまじめで二回目はふざけてて今回は夏姫の癖が強く出てる。コレってアレだろ一回目はあの女の子たちで二回目は斉藤君で三回目は多分夏姫の文そのま

んま使った君の作品だよね？」
「おぉー良く見てますね、その通りですよ」
「いやぁほめてもらって光栄だよ。しかし見てて面白いねコレ」
会長はそう言ってまた新聞に目を向けた。会長の言ったことは完全に合っている。俺は面倒だったので美優が訳した新聞部の文をほぼそのまま使って仕上げた。
「……毎回違う感じが味わえてそこが注目点にもなるしね」
会長それって安定してなくて駄目なんじゃ？　会長はずっとそれに気づいていたのだろう。俺はいま気づいた。
「まぁ出来は良いし、コレのほとんどが夏姫がやったって言うなら……夏姫、ずいぶんはじめたころから上達したないい感じだよ」
「うひゃ！」
俺の後ろでなぜか隠れるように立っていた新聞部の顔から蒸気が上がり一瞬で真っ赤になった。振り返らなければよかった……。そんなにうれしいか新聞部。
「それで上達したって言うと初めはどれだけヘタだったんですか？」
言った瞬間後ろに立っていた新聞部が俺の足を思いっきり踏んできているが大して痛くない。
「あははー見る？」
「ぜひ」
会長が自分の机をあけようとする。
「やめろ！　出すな！」
会長が引き抜く仕草をしたところでようやく新聞部が止めに入る。少し遅いぞ。
「……まぁ後が怖いから止めとくか」
会長は何もなかったかの様に椅子に座りなおす。一体何が怖いのかは聞かないでおこう。しかし会長はずいぶんとしっかり新聞を管理しているらしい。バックナンバーまで迷いなく引き抜くとは。
「今日の分はあと一枚だよね。まぁイベントスケジュールの復唱みたいなもんだから労も少ないか。じゃ適当に頑張ってくれたまえ。

な、夏姫？」
「うるさいな！　言われなくてもやってやるよ！　僕をなめるなよ！　フン！」
照れ隠しなのだろう、新聞部は生徒会室を出て行ってしまった。
「まったくまだまだ子供だな……」
「会長の言い方が悪いんじゃないですかね」
「そうかなー？」
十中八九そうだろうが。イマイチ会長と新聞部の関係が分からん……。
「じゃあ俺も行きますね。まだすることもあるみたいですから」
「まだまだ未熟なやつだけどよろしく頼むよ」
「まぁ出来るだけの事はしますよ」
俺は文化際が始まったときより少しだけ静かになった校庭を眺めながら図書室へ向かう廊下を歩いた。

「えへへへへへー」
気まずい。と言うよりうざったい。
「新聞部、その変なにやけを止めろ。読書に集中できん」
俺は呼んでいた本を下げて正面で最後の新聞を書いている新聞部に目を向ける。先ほどの会長の言葉がそれほどうれしかったのかそれとも帰りに買ってやった綿アメがそんなにうまかったのか、とりあえず理由はどんなものでもかまわないが目の前でずっと薄ら笑いをされていると気が散って仕方ないのだ。
「あぁ悪い悪い。気をつけるよ……えへへへへ」
駄目だこりゃ……。俺は自分で淹れたそんなにおいしくないコーヒーを一口飲んで読書をあきらめた。俺は集中できないのならなるべく本は読まない主義だ。
「ところで新聞部」

「あ？　なんだ？」
俺はここで読書をあきらめた代わりにふとした疑問をぶつけることにした。
「新聞部はなんで新聞部なんだ？」
「はぁ？　そんなの知るかよ。お前が勝手にそう呼んでるだけだろ」
……いやそうじゃなくて……。あきれて一度ため息を吐く。
「先輩は何で新聞部をやってるんですか？　て聞いてんだよ」
本気で馬鹿にしてきている新聞部の顔に紛らわしいことを言った自分が悪いと分かりつつイッラっとした。
「あぁそっちか、紛らわしい言い方するなよなー」
「失礼しました」
反省なんか絶対にしないけどとりあえず頭を下げた。
「うーん……あんまり言いたくないなー……」
そう言った新聞部の顔は本当に気まずそうだ。しかしそんなに深い理由でもあることなのだろうか？　部活なんて好きだからとか知り合いがいるからだとかその程度の理由しか俺には思いつかないが……。
「まぁ言いたくないなら無理して教えてくれる必要もないさ、誰にでもそう言うのは一つや二つあるもんだ」
どうして新聞部がこんなことをしているのか多少の興味があったことは本当だが人の心に土足で入って行くほど俺は無神経ではないのだ。
「言えないことでもないが……お前は知りたいのか？」
新聞部は俺を見ないで新聞を書いている。下を向いてしまったのでその表情は読み取れない。声だけならいつもと変わらないのだが……。
「俺は気になったことは全部知りたいと思う人間だ」
教えてくれるならそれに越したことはない。分からないことでムズムズとした感覚に陥るのは苦手だ。
「知らないことを知る努力の出来るやつには見えないけどなー」

確かにそれも当たっている。俺は知らないことは知りたいが知ることに多大な労力が伴うと気にならなくなってしまうのだ。多大な労力とは……まぁ人それぞれではないだろうか？　とりあえず笑ってごまかした。

「そうだなーお前や山本たちには今回世話になったしな……まぁ教えてやらんこともない……」

言葉は偉そうだがしゃべり方にはいつもの覇気はあまり見えない。言いたくなきゃ言わなけりゃいいものを……。まぁ自分の秘密を誰かに話して少し楽になりたいと思うのは人として当たり前のことかもしれん。俺はないが、分からなくはないと言うことだ。

「そうだな……」

新聞部は頭の中で整理でもしているのか黙ってしまった。ここは気長に待つとしようではないか。時間はたっぷりあるのだから……。

「別に昔から新聞が書きたかった訳でも新聞部に知り合いが居たからでもないんだがな。ただ自分だけの力で何かしてみたかったんだ……」

新聞部は照れ隠しなのかそれともただ器用なのか分からないが新聞部はサラサラとペンを進めながら話し出した。

「僕がこの学校に入学した時の新聞部はもちろん部活としてなんて認められてなくて今と同じゲリラ部としての活動だったよ。人数も今と違って三年生がたった二人と二年生が一人でやってたんだ。でもな、その人たちが作る新聞がとっても面白くて、『新聞部を公式に部活にする』って言ってたその人たちが魅力的だった……」

紅茶を飲むために一瞬あげた新聞部の目はどこか昔を懐かしむような遠いところを見ていた。

「書いてある内容なんてたいしたことはないんだ。学校でその日起きた出来事が書いてあったりしただけのやつなんだけど、すっごく自由で僕もその先輩たちみたいにやってみたいと思って入部したんだ」

紅茶のカップを一口飲んでおいた新聞部は出会ってから今までの

馬鹿みたいな新聞部の面影はない。あるのはあの新聞部とは思えないような大人びた雰囲気。
「お前は兄妹いるか？」
兄妹？　話が急にそれたので少しびっくりした。兄妹が話しに関係してくるのだろうか？　新聞部が兄妹と言うと会長の話なのだろうか。会長と新聞部は実の兄妹らしいからな、似てないけど。
「いや、俺は一人っ子だ。上にも下にも兄妹は居ない」
新聞部の表情は分からない、一体この質問に何の意味があるのかも俺にはまだ理解することが出来ない。
「出来の悪い兄貴を持つのは辛いと言っていたやつが居たが僕は出来のよすぎる兄を持つのも辛いと思うぞ……」
出来のいい兄……やはり新聞部が言っているのは会長のことだろう。てかほかに兄貴なんて浮かばないからな。
「あの人は昔から何でも出来たよ。そりゃ生徒会長なんて中学からで二回目だ、ほかにも勉強もトップクラスでスポーツも色々教えてもらったもんだ。でもそんな完璧超人みたいなあの人と違って僕は何にも出来なかった……。会長なんてもちろんやったことはないし、なりそうになったこともない。勉強なんて下から数えたほうが早いし唯一運動神経は平均よりチョイ高めだ。あの人に勝てるものなんて何一つありはしなかったんだよ。それのせいで周りの人からは良く比べられたよ、『なんで兄貴は出来るのに妹は出来ないんだ』……ってね。特に大人は酷かった」
兄妹故のコンプレックスと言うやつか……。真の意味で理解することは出来ないが俺もいくつか思い当たる節がある。だけど新聞部のように密接ではない。そんな差別を受けたから新聞部は過激な内容のものばかり作るのだろうか？
「僕も色々頑張ってはみてはみたんだけど、どれも駄目だった。兄貴の後ろ姿ばっかり追って切羽詰まってたし、今考えればあんな状態で何かが出来るわけないんだよ。そんな時に見た自由で何にも囚われない新聞部が魅力的に見えて、それに入ろうと思うのは必然か

もね。生き方変えるって言うのに不思議とためらいはなかったよ」
新聞部は小さくクスリと笑ってまた新聞を書き始める。
「周りからは結構反対されたけど先輩たちが守ってくれてね、なんとかこうして新聞部の部長なんて偉そうな役職についてるわけさ。僕の年は僕しか入部希望者は居なかったから。僕以外に入部希望者がいたら、きっとその人が部長だっただろうね……」
その時新聞部が当時の新聞部に出会ってなければ今の新聞部は居ないのだろうか？　そう考えると少々沙羅たちが悲しむな……。
「でもなー、問題は二年の先輩が卒業して僕が新部長になった時だったよ。活動の甲斐あって新入部員も増えてきて、昔先輩たちと話した新聞部が公式に部活動になれる条件を満たしたんだ。だけど情けないことに僕がミスを連発したり部の連中とすれ違って……部になる機会を逃しちまった。今じゃ部長だって言うのに情けないったらありゃしない。でもさ、そんな時だよ。またなんだ……」
今までの新聞部はなんだか何かを懐かしむような感じだったが今の新聞部には何か怒りにも悲しみにも近い感情がこめられているように思えた。
「ある日僕が部室に行くとな、あの人が居たんだ。その日はじめたばかりなのにもう僕よりも上手くてほかの部員からもちやほやされて僕を見て笑ったんだ。『手伝いに来てやったぞ』……って！」
俺はその時の様子を想像してみた。新聞部はどんな気持ちだったろうか……。
「初めてあの人と喧嘩をしたよ……。その時まで溜まってたものが堰を切ったようにあふれだした、今では悪いことをしたって後悔してるよ。あの人はただ僕のことを考えてくれてただけだったのに……あぁでも今は仲良くやってるよちゃんと謝ったしね、雨降って地固まるってやつだな！　僕はいい子だからな！　あの人も話し合ってあまり目立って手伝わないって言ってくれたし、でも絶対何か手伝うって聞かないところがすごいよな。それからさ、僕の目標は自分の力で新聞部を部にすることになったのは……まぁお前らに手伝

ってもらってる時点でまだまだ未熟だけどな。僕は好きに生きてる、今は満足してるよ」
笑った新聞部の顔が下手糞で少しは沙羅を見習ったらどうだ？
って思った。ずっと前から分かってたことだ、こいつには嘘はつけないしつけば分かるのだ。
「無理して笑わなくてもいいんじゃないか……」
俺にいくら嘘をついたってかまわない。だけどこいつには……いや、俺の友人には自分に嘘なんてついてほしくない。
「……別に無理なんかしてないさ、僕は今の状況で満足してるし目標だってあるんだから」
新聞部は嫌そうに目線をそらす。
「いや、お前は新聞部が部活になればそれでいいのか？」
逃がしはしない。これは新聞部のことなで今やらなければならないことだと思うから。
「なに言ってるんだよ……いいに決まってるだろ、それが先輩たちとの夢なんだから」
「それは単なる言い訳だろう？　お前はただ……誰かに認められたかったんじゃないのか？　新聞部にいるのも派手なものばかり作るのも会長と違うことばかりするのも会長と違うんだ、私は私なんだって言いたかったからだろう」
俺からすればそれは沙羅や斉藤、美優に先生。誰かに認められるから人は胸を張って生きていける。新聞部にはそういった存在が居なかったのだろうか？　いや、居たはずである。少なくても一人は。
「部になることは確かに大切な先輩たちとの夢かもしれんが俺には部活でなかったとしても大して問題はないんじゃないかと思うぞ。問題なのはいかに新聞部らしく活動しているのか、じゃないだろうか。俺は新聞部が変な考えで大切なことを見失っているように思える」
例えいくら新聞部が正規の部になったってそれが新聞部らしくなかったら、それでも先輩たちは喜ぶだろうか？　それこそ先輩たちは

悲しむんじゃないか？

「新聞書いてるとき思わなかったか？　こんな周りを考えた新聞書いてそれが新聞部らしいのか？　新聞部言ってたな。『僕が書くのは山本たちが駄目って言うんだ』ってさ、新聞を書くにあたって技術を学ぶのは結構なことさ。でも新聞部が書きたいことを書かないで誰かが書いたのを作る……それって本当に新聞部の新聞なのか？」

確かに新聞部の記者としても技術はまだまだ未熟で直すところも多いだろう。しかし新聞部らしい新聞を書くのが駄目なわけではない。それは立派な個性なのだから。

「こんな新聞部が本当に書きたいことを書いてない新聞を書いて、それで部になって本当に新聞部はいいのか？　満足なのか？　会長がさっきの新聞見て言ってたよな。『コレは夏姫の癖が出てていい感じだ』って。会長は全部分かってたんじゃないのか？」

会長は全部お見通しだったのかもな。あの人はなんだか全部知っていて、だけどあの人だから動けなかったような気がする。だから部外者の俺たちなんかを頼ったんではないだろうか？

「本当に必要なのは出来のいい上手に作った新聞なんかじゃない。お前の書きたいものを書きたいように書いた新聞部の新聞だろ。少なくとも斉藤や鹿沼先輩は今の新聞ではなくて昔の、新聞部の新聞が好きだって言ってたじゃないか。ついでに言えば俺もコレより噂に聞くド派手な新聞のほうが読んでみたい。お前は一人で認められてない人間なんかじゃない。みんな見てる少なくとも絶対に俺たちは見てる……。なんかこんなの俺の柄じゃねぇんだけどな。沙羅が居たら馬鹿にされそうだ」

言いたいことは言ったつもりだ。何度も言うがこんなの俺の柄じゃないな……。背中がムズムズしてやがる。

「馬鹿になんかしないさ……なんか見透かされたみたいでむかつくけどな」

それでも新聞部の顔は先ほどより少しばかりスッキリとして見えた。

「まぁお前はお前らしく書けばいいのじゃないのか……ってだけだ。なんか自分で言ってこそばゆいんだが」
俺は照れ隠しに頭をかいて姿勢を変える振りをして顔を背けた。
「誰だってそうなるだろうね、良く言えたもんだ。それに言うならちゃんと最後まで決めて欲しいね」
笑いの入った新聞部の声。
「わ、笑うなよな……」
笑いたいのはこっちの方だが。多分今俺は顔が赤くなっているだろう。
「スマンスマン。でもありがとな、なんだか大切なことに気づけた気がしたよ。なんだ僕はまだ昔から切羽詰まって自分が見えなかったようだね……」
「……なぁに気にすることはないだろうよ。まだ初日が終わっただけだ、まだ一日あるし明日また頑張ればいい。明日駄目でもまたどっかで頑張ればいい」
俺からすれば新聞部が部活になろうがゲリラのままだろうが関係ないのだから気長に待つことにしよう。
「そうだな……その通りだな……」
新聞部も分かってくれたみたいだし。良かった良かった。
「じゃ、頑張るためにも綿アメが食いたいな！　僕に恥をかかせた罪で綿アメ買って来い！」
「はぁ！？　そんなの自分で買って来いよ、俺は本が読みたいの！」
「そんなこと知らないよ、僕が食べたいの！　さっさと買って来い！　さもないとお前のこと好き勝手に書きまくってやるからな！」
「それは困ったなぁー……しゃーない買って来てやるからちゃんと新聞進めておけよ」
「当たり前だ馬鹿野郎」
「じゃ行ってくらぁ……」
はっきり言えばこっぱずかしくってこの空間に居たくなかったから新聞部の発言はとってもナイスだった。俺は重い腰を上げてどこ

にあるのかも知れない綿アメの屋台を探して屋台が集まる校庭に繰り出した。

「げっ！」
「げってなんですかげって……」
綿アメを買って図書室に帰る途中なぜか用事があって沙羅たちに仕事を任せているはずの鹿沼先輩とその友人と見られる女子生徒数人とであった。出会ったとたん失礼極まりないが先輩は何かゴキブリでも見るような目を俺に向けてきた。
「い、いやー……こんなところで会うなんて奇遇だねー」
目線を泳がせ額に汗をたらして見るからに怪しげな先輩。
「なにか隠し事でもあるんですか？」
「うっ！」
何もそこまで分かりやすい反応しなくてもいいものを……。
「何かやましいことがあるんですね？」
先輩の顔をジッと見つめる。先輩はさらに目を泳がせる。
「ねぇねぇこの子ってもしかしてさっきの子の知り合いなの？」
「えっ？　そうだけど……」
先輩の友人と見られる生徒が先輩に聞いている。さっきの子？
それは沙羅と美優のことだろうか？
「沙羅と美優がどうかしたんですか？　……まさか迷惑でもかけてるんじゃないですか？」
あまり想像できないが沙羅と美優が失敗して怒られているところを想像してしまった。沙羅はいいけど美優はほどほどにして欲しい……。
「うんん、ちゃんと仕事してくれてるよあの子達。今じゃお店のナンバーツーとナンバーワンだもんね」
先輩ではなくほかの人が答えてくれる。なんだナンバーワンツー

って……ランキングか？　まぁ上位なのはいいことだ。しかし沙羅たちは一体何をしているのだ？
「……先輩、沙羅たちは今……っていねぇ……」
先ほどまで先輩が居たところを見ると一人分のスペースを空けたまま綺麗に姿を消していた。恐るべき先輩。
「まぁ沙羅たちなら心配いらないだろう……先輩も居ないですし俺もこれで失礼します」
「うん、じゃねー」
俺はそうして二人分の綿アメを手にぶら下げながらその場を後にした。かえる途中三年生の窓からお盆が飛んでいたが特に気にすることなく帰った。

「あーもうやってらんないわ！」
「まぁまぁ楽しかったじゃないですか」
「そりゃ美優はかわいいしよく働けてたけどもう私は絶対にやりたくないわ」
「沙羅も結構さまになってたよ。ほかのお客さんから人気もあったし。しかし沙羅のツンうが！」
「黙りなさい！」
沙羅たちが帰って来たのは数分前で言ってしまえば今さっきだ。入ってきたとたんにこの調子。なにがなんだか分からない。
「お前ら少し落ち着けよ……斉藤何かあったのか？」
沙羅に顔面を強打され鼻を押さえている斉藤に尋ねる。斉藤くらいしかまともなやつが居ないのが問題だ。
「うん、何かあったんだウベシ！」
「カッちゃんうっさいわよ！」
「わぁーすばらしいコークスクリューですね」
美優関心してる場合か？　斉藤もさすがに死んでしまう。

「ま、まぁ……あれだな、わざわざ言いたくないことを言う必要もないよな……」
斉藤だけならまだいいが、いつ俺にまで飛び火してくるか分からないので早々にこの話は打ち上げたほうがいいだろう。なんでここまで沙羅が怒るのか気になるがそれは美優にでも聞くとしよう。
「ところで桂君、夏姫ちゃんはどこに行ったんですか？　取材ですかね」
まだギャーギャーと喚いている沙羅と斉藤を無視して美優が尋ねてくる。
「新聞部は会長のところに最後の新聞届けに行ったよ。そのうち帰ってくるんじゃないか？　帰ってこなくても問題ないだろうし」
「えー帰ってこないのは駄目ですよーまた綿アメ一緒に食べたいですよー」
机に突っ伏して残念そうな美優。この子は新聞部をずいぶんと気に入ったようだ。
「夏姫ちゃん小さくてかわいいですよねー……子供みたいで」
子供として見てたのか。
「それじゃあ俺たちもどっか行くか？」
沙羅と戦闘中の斉藤の提案だが……うーむ、どうしたものか。しかし斉藤はよく沙羅の攻撃をかわしてるなー半分かわして半分ヒットか。
「ぐはっ！」
「私はもうここから出たくないわ。それにそろそろ終わる時間じゃないかしら？」
斉藤の顔面に上靴の跡をしっかりと刻みこんだ沙羅が乱れた髪を手で直しながら近寄ってくる。もちろん斉藤はゴキブリのような頑丈さでもう立ち上がろうとしている。
「でもさ、せっかく終わりに近づいて人も減ってきたんだから今がチャンスじゃない？」
斉藤も負けてはいない。たしかに斉藤の言う通り終了に近づくに

つれ会場内はだんだんと空いてきている。
「でも、どうせ出店なんかも終わり始めてるんじゃないかしら？どうせだったら明日行くことにするわ。それに私は何より疲れたの。それなのにまた外で遊ぶなんて面倒だわ」
だったら斉藤なんかとじゃれてないで椅子にでも座ってろよ……それが一番無駄な動きだったろ。
「明日とか絶対嘘だろ……それで明日は別の言い訳するんだからひでぇよな」
それについては斉藤に同意する。俺もこいつは明日またこんな風に言って逃げるだろう。
「まぁ俺もそう思うけど、俺も今は疲れたから休みたい。沙羅が嘘でなければ俺も明日じゃ駄目か？」
沙羅とは違って俺は本心だ。
「私も桂君と沙羅ちゃんがそうしたいならそれでもかまいませんよ。今日は十分楽しめましたから。それに何事も無理はいけません」
「美優ちゃんまでー……まぁいっか。俺も疲れた、今日一日だけでどれだけ走り回ったことか」
満足そうに笑う美優を見て斉藤もあきらめたようだ。
「ですから沙羅ちゃん、桂君……」
「なぁに？」
「なんだ」
「明日は今日よりみんなでたくさん回りましょね！」
はぁーまだまだ俺たちの旅は先は長そうだ……。
「分かったよ、明日はみんなでどっか行くとしようか」
「さすがケイ、分かってるねー」
「楽しみにしてますね！」
「ちょっとなんで桂が決めてるのよ、会長は私なんだからね！？」
そうして俺たちは外にいたほうが静かなんじゃないかと思うくらい騒がしくすごした。まぁ結局はここで終わるのだな……。いや、終わりはしないのだったな、まだまだ先は長いのだから、今はまだ

始まったばかりなのかも知れない……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7331v/

図書室クラブ！

2011年10月9日13時53分発行